

コロニア文学 第4号

1967年5月

コロニア文学会

SAO PAULO





創作

- 移民が抵抗を失った時(50枚)……………山里アウグスト  
つめた い 雨(27枚)……………星野良江  
玉 葱(22枚)……………伊那 宏  
啄 木 鳥(20枚)……………蓼科 冨智雄  
手紙 ・ 続移民(27枚)……………川原 奈美  
CASTIGO(懲罰)(50枚)……………藪崎 正寿  
ある開拓者の死 (27枚)  
旧作再録・三……………西岡 国雄

《特集2》私の終戦

当時の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・浅見 哲之助  
激昂と混乱の中で・・・・・・・・・・・・・・・・安良田 济  
失われた友情・・・・・・・・・・・・・・・・・・清水 卜斉  
悲憤と反撥・・・・・・・・・・・・・・・・・・小清水 礼子  
私と終戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤 忠雄

評論

ブラジル文化と文学(文化)・・・・・・・・井関 讓治  
芸術とは何か(美術)・・・・・・・・・・高岡 由也  
移民への肉迫(コロニア文学)・・・・玉井 礼一郎

詩・短歌・俳句・川柳

詩

曇り日・・・・・・・・・・・・・・・・・・永田 泰三  
少女よ模様を綴れ、・・・・・・狩海 亘  
女達は大笑い・・・・・・・・・・・・・・狩海 亘  
昼ははだしで、外一篇・・・・・・横田 恭平  
よわ音・・・・・・・・・・・・・・・・・・可児 三平  
日々・・・・・・・・・・・・・・・・・・小石 茂行

母……………由井 幸男

花の中に……………長谷 春子

### 短歌

円かなる声… 小笠原富枝

無花果の枝… 川原比露思

廃屋出でて… 陣内しのぶ

空中溺死… 木村 正和

白銀すすき… 南条由喜夫

遠蛙… 森重 扶美

風化の岩… 小笠原正好

力こめて… 河原 奈美

### 俳句

終着駅… 長谷川清水

寺の蟬… 小笠原夕虹

近詠… 目黒はるえ

王冠樹… 間島稻花水

短いサイア… 佐藤 文六

俳句について……………石川 芳園

### 川柳

郷愁……………芳賀 裸人



愛憎…………… 安藤 魔門

クリスマス… 堀田栄光花

紀行

水郷の旅…………… まや・あきら

奥パラナの旅…………… 増田恒河

ブエノスの夜…………… 水本すみ子

「三島由紀夫」について(研究)…………… 水野 林

「恋文」から「CASTIGO」まで(研究)…………… 妹尾 三郎

随筆

栗(くり)…………… 山本 峰雄

きりぎりすの鳴いていた路…………… さわ・たけお

生きていた諺…………… 添田 香積

展望

コロニア短歌の郷愁性と郷土性…………… 酒井 繁一

コロニア詩壇の行方…………… 米沢 幹夫

コロニア川柳の現状と批判…………… 安村 玉泉

地方短信

選後感

ロンドリーナの文学活動…………… 森谷 風男

バストスの文学動静…………… 森重 扶美

リンス地方の文学活動…… 小石 茂行

選后感

選后感…… 清谷 益次

感想…… 藪崎 正寿

選后感…… 妹尾 三郎

▼ お知らせとお願い

▼ コロニア文学会員募集

▼ 新入会員名簿

▼ コロニア文学作品募集

▼ パウリスタ文学賞作品募集

▼ 後記………T・



★表紙……若林和男   ★扉カッタ……沖中正男   ★目次カッタ……沖

中正男

★カッタ…… 高岡由也・半田知雄・沖中正男・吉留要・田中重  
人

# 創作

移民が抵抗を失った時

(50枚)

山里アウグスト



何をしゃべっているかわからないが、表通りの商店街でしきりに賑やかな話声がある。笑いまじりのかんだかい女の声が特に響いてくるが、それも何をいつているのかさっぱりわからない。うつらうつらしながら、そうした声を聞くのはこちよいいものだった。と、うすぼんやり開いた目に、とつぜん見なれない茅ぶきの屋根裏が映った。一瞬のうちに、彼はたちまち現実の前にひっぱりだされた。(そうだ、おれはブラジルに来ているんだ)。京都の下宿で寝ているような気持ちで聞いていた話声は、知人と話して

いる叔父たちの声だった。彼は叔父の知人の物置小屋で目をさまし、土間にアサ袋をしいてその上に夜具を置いて寝ている自分が急に情けなくなつた。

(ブラジルくんだりまで来て、はじめからこれじゃ…)

一昨日サントス港に上陸し、その日のうちにサンパウロまでやってきてすぐ汽車を乗りかえてマリリアと呼ぶ田舎町へたどりついた。そこから荷物といっしよにトラックにゆられて、この山奥についたのは昨夜の十時過ぎ。移民船や汽車やトラックの旅を続けてきて、昨夜は気がゆるんでぐっすり眠ってしまった。

物置小屋はかなりあれていた。パウ・ア・ピッケの壁は練り土が落ちて、あちこちに穴や大きなひびが開いているので、彼はひどく自尊心を傷つけられた。移民としてブラジルへ渡って、こんな最低の待遇を受けようとは思っていなかったからだ。ひどいじめさと孤独感が同時に襲ってきた。

かたわらに積んである荷物を取って、すぐにでも日本へ飛んでもどりたい気持ちがわいた。そんなもやもやした気持ちで悩んでいると、壁の穴からさしこむ陽光が彼の青白い、神経質の細面を照らしはじめた。現実のするどい剣のような陽光をさけて、頭からすっぽりふとんをかぶった。すると、思わず涙がするすると滑りおちた。胎児のように体をまげていると、やがて骨のふしぶしが痛みはじめ、とうとう我慢しきれずにふとんをはねのけた。

小屋の中で餌を拾っていた鶏が飛びあがって、けたたましい声をあげながら外へ逃げていった。

九時過ぎであった。まばゆい太陽があたりの丘陵を照りつけ、赤い大地から早くもかげろうが立ちのぼっていた。叔父や従兄たちは、母屋で知人から棉花や落花生の作り方、それに相場のことなどを聞いていた。井戸端へまわると、白髪はかなりめだつ叔母が前歯の一本かけた知人の細君と朝餉の仕度をしながら、息をつく間も惜しむかのようにしゃべっていた。先刻うつらうつらしながら聞いたかんだかい女の声は、その細君の声だった。

「お疲れでしょう」

一本かけた前歯を覗かせ、愛嬌えくぼを浮かべて細君はいたわりの言葉をかけてくれた。彼はそっけない挨拶を返し、放しがいの鶏や小豚が物欲しそうに井戸端をうろうろしているのを見て、胸が悪くなるような不潔感をおぼえた。それに涙をたらした子供たちも、泥の塊りのように思われた。

彼はことごとく失望を感じた。移民生活がこんなに汚く、原始的であるとは想像もしなかった。ブラジルは外国だから、日本の田舎よりはるかに文化生活をしているものと思いきや、あたりの風景も単調で、平凡そのもの、絵はがきや写真で見たスイスのような田園風景は、どこにも見あたらない。ただ、果しなく続いた大丘陵と空だけの、気が遠くなるようなだるいようなブラジルの風景には、すぐうんざりさせられた。この国の気のぬけたような風景によく似合う一本の巨木が、井戸端から百メートルほどの所に立っていた。そばへ寄って見あげると、その太い幹にはとげのようなものがいっぱいについて、虚空に躍る裸の枝にはぼ

つぼつまっしろい花がついていた。(これが中国社会史の時に聞いた木棉かも知れんな)そんなものを見ても、すぐ興味をうしなつた。深い悲哀をおぼえながら、巨木のむこうへ続いているくぼみの雑木林をぼんやり眺めまわした。そのしげみの間から煙にくすんだ茅ぶきの屋根が覗いていた。ふと、そのあばら屋に住む人間の顔が見たいという好奇心にかられ、彼は雑木林の小径を降りていった。細い丸木を組みあわせ、その空間に練り土をぬりこんで造られた壁は、彼が昨夜寝た物置小屋よりも荒れていた。せまい庭先に見えるあたりまで近づくと、思わず足がすくんだ。(まさか……)

彼は自分の目を疑うように、しばらく動きもせずとその庭先に転がっている赤土まみれの二つの塊りをじつと見つめた。病的に腹のふくれあがった三つ四つのちぢれ毛の子供が、小豚を抱くようにして寝ているのだ。

(人間の子と豚の仔が……)

彼は呆然となった。今しがた、叔父の知人の井戸端をうろろしている小豚を見て、はげしい不潔感をおぼえたところだ。やがて、彼の目は異様な光りをおび、叔父たちにこの信じられない光景を告げにもどった。するとすでに十年近くも移民生活をしている知人が、こけた頬をくずして笑った。

「驚くことないよ。奴らカボクロといってね、黒人やインディアンの血のまざった動物みたいな人間なんだ。読み書きはもちろん、自分の年令さえ知らないんだ。第一、枚らはほとんど戸籍にのって

おらんからね」

— 〇 —

(とんでもない国へ来てしまった)彼は後悔した。ほかの移民は金もうけにブラジルへ渡っていくが、自分だけはある理想をもとめに行く。そんな強い自負心を抱いてきただけに、現実からうけたショックも大きかった。京都帝国大学の哲学科に籍をおき、未来の哲学者をゆめみていた彼だ。特にニーチェの永劫回帰思想に共鳴しその研究に熱中していた。ところが、卒業を後半年にひかえて、前途をはばむ出来事が幾つか起った。第一にベルリンへ研究論文の完成にいった恩師が急性肺炎でぽっくり死んだこと、第二に父親が事業不振で自殺したこと、そして第三に兄が行方をくらまして彼の学資をすつかり断ってしまったこと。しかし、彼はひるまなかつた。これらの不幸を乗りこえて、ニー・チェのいう「超人」の境地に達しようと努力した。あらゆる不幸を自分の運命としてうけとり、その運命にさからわずにむしろ自分からその中に飛びこむ。自分を捨てることによって自分の主体へ帰り、そして人間の最高の理想であるところの「超人」の心境に到達できると信じていた。彼が移民の群に身を投じたのは、そうした理想的な願いをもっていたからだ。ところが彼のもっていたものは、単なる理論に過ぎなかつた。現実にはぶつかると、その思想は根底からぐらついてしまったのだ。

(とても超人にはなれん)

運命に従順でありたいと願いながら、サンパウロ州の奥地での原始的な生活を前にして、彼は早くも自分の運命に対して反逆心を起すのだった。

叔父一家は、自由移民としてブラジルへ渡ってきた。だから、契約移民のようにある期間コーヒー園で働かねばならないという束縛からは、彼もまぬかれた。しかし、毎日、陽のあがらないうちに起こされ、三キロメートルの山奥へはいつて土地の開拓をしなければならぬ。大陸の一日はながすぎるほどながい。ただ機械的に日課を果しているに過ぎないが、味気ないつらい明け暮れだった。はじめて握る鋤や斧の柄に掌をすりむかれ、生傷がじりじり痛んだ。だが、その痛みだけが、彼に生きていることを感じさせた。大陸のはげしい陽にさらけだされて、なまじろい神経質の顔がこんがり焼けはじめた。仕事を終えてかえる道すがら、異郷のほたるがすうすう飛びかよう。草むらの虫の音も、日本のと同じ音色で鳴いている。郷愁もわいたが、疲れの方が重くのかかってくる。はじめは深い感動をもって仰ぎみた南十字星も、やがては帰り道をほのかに照らす単なる一群の星に過ぎなくなつた。仮住居にしている知人の物置小屋へもどつてくると、汚れた体を洗うことすら億劫をおぼえ、叔母の用意した夕食をかきこむとすぐ眠ってしまう。最初はカンテラのほそい光りを頼りに日本からもってきた哲学書のページをめくっていたが、それもいつしかめんどろになつた。今では、起きて食べて、働いて帰ることだけをくりかえす毎日だった。

(まるで土人の生活だ。こんな生活……)

郷愁がつのる頃、自分のみじめさもひしひしと身にしみはじめた。同窓の学友たちはそれぞれ学士号を貰って、いま頃は実社会で活躍しているだろう。自分一人だけが蛮地のような南米大陸のまんなかに取りのこされている。叫んでもわめいても、誰も応えてくれない。一人で夜具の中でほろほろと涙をこぼすよりほか仕方がない。実際、彼は孤独だった。一しよに仕事している従兄たちに救いをもとめても、福井県の片田舎で育って小学校しか出ていない者と話しがあうはずがない。従兄たちは自分らに課せられた仕事を黙々とやり、たくましい体格をもちながち自分らの運命にすっかり服従しきっているようによく働く。運命にさからわず、運命そのものの中に生きてゆこうとした自分の頭だけの理論よりも、実際において学問のない従兄たちの方が運命のままに生きているように思われた。

(こいつら、ほんとうに阿呆なんだな)

最初はそんなふうを考え、軽蔑の目で土方みたいに角張った顔をしている従兄たちを見ていたが、今では従兄たちの生活態度がうらやましくなっている。すると、運命に反抗している自分が一層みじめに感じられてならなかった。学友たちに取りのこされ、従兄たちに置きざりにされている自分の救いを、彼はけん命に見いだそうとあがいた。

「なんだね、お前は。ケトウの家ばかり覗いて。そんなにおもし

ろいのかね」

しわの多い目尻にげんそうな笑いを浮べて叔父が聞いたのは、無理もないことだった。それほど、彼は熱心にカボクロと呼ばれる土着民の生活を観察していたのだ。子供を豚といっしょに寝かすみじめな人びとを見ることによつて、彼は自分のみじめさをわずかばかり慰めているとは誰も気づかない。知人の雇っている二家族と、叔父が山伐りをさせている一家族の生活を、彼は飽かず眺めていた。生まれた時から身にはぼろだけをまとい、はだしで暮し、栄養失調と蛔虫に犯され、あばら屋の土間に寝起しているカボクロ。無知で衛生観念が乏しく、朝起きても顔を洗わず、身につけた衣類は汗と垢で朽ちはてるまで洗濯をしない。迷信深く、虫をおこさせないようにと行って、子供に砂糖きびで造ったアルコール度のきついピング酒を飲ましたり、ニコチンで黒くかたまつた縄タバコを吸わせたりする。だから幼児の死亡率が高く、三家族からすでに七名の子供が死んでる。金があれば使いはたすまで仕事をしないし、偏食してもピング酒だけは絶対にかかさないう。彼は知人やその細君からカボクロに関することをいろいろ聞き、自分の目でも観察してまわつた。カボクロの生活のみじめさ存在のむなしさにくらべれば自分の現状の方がはるかに幸せだ、と思うと幾らか心が慰さむのだった。ところが、彼にはなぜ自分が大陸のまんなかで原始的な生活を送らねばならないか、ということに対する答えも必要だった。

（金をもうけるまで我慢するんだ。金さえもうかれば、もつとすば

らしい所へいつて人間らしい暮しをするんだ)

金もうけに目標が置かれて、ことは簡単にかたずいた。しかし、もう一つ重大な問題が残されていた。

(女が欲しい…)

すでに異性を知っている二十六の若い肉体は、押えようのない力で相手をもとめた。恩師の死で人生のはかなさに心がうつろになった時、京都の島原や大阪の飛田などの遊廊にいりびたりして学資を使い果たしたこともある。その過去の日々がたまらなくなつかしかった。自分の抱いた女たちの面影を想いうかべ、その一人一人の肌のぬくもりが感じられるような気がして、ふとんの中で興奮したりする。とにかく、無性に女の肌が恋しかった。しかし彼のまわりには、カボクロの女たちを除いて女と称する者は三人しかいない。叔母と、知人の細君とその娘。知人の娘はまだ五つの子供だ。叔母は自分の母親のような存在だ。結局、自分のセックスの対象になる女は知人の細君だけだった。その知人の細君にむかって、彼のすさまじい情欲が噴火のようにほとばしりはじめた。日焼けしているが、両頬に愛嬌たつぷりの深いえくぼのうかぶ三十女の熟しきった肉体は魅惑的なまるみをおび、妖しい体臭を発散させる。一本かけた前歯すら気にならないほど相手が美しく見えた。女体をむさぼるように盗み見る彼の胸から、心臓が飛び出すほど躍った。幾度も夜闇にまぎれて、息を殺しながらふるふる小屋の壁のわれめから湯気と煙に包まれた女のしろい肌を覗きみた。全身をさかまく血潮が、いきなりふるふる小屋へ飛びこんでいっ

て女を抱きしめたい衝動をおぼえさせたりした。また、興奮のあまりに精液をふる小屋の壁に射ちこむこともしばしばある。夜、知人がその細君のしろい肉体を抱いている場面を想像すると、殺意をとまなうほどの嫉妬を感じる。彼の悩みは次第に深刻になっていった。

その日、知人は食糧のしきれに朝早くマリリアの町へ出かけていった。

彼はこの日を待っていたのだ。かねての計画通り、頭痛をうったえて寝ていた。昼食の仕度ができれば、叔母はそれをもって叔父たちの働いている開墾地へ行く。後に残るのは、自分と知人の細君と幼ない二人の子供だけ。

絶好のチャンスだ。さて、どんなふう知人の細君を口説くかなどと考えているうちに胸がむやみに高なった。叔母が出ていくのが待ちどおしくいらだたしさをおぼえた。それに、仮病をよそおうのはつらいものだった。

やがて、薬や食事のことをあれこれと注意してから、叔母は弁当をさげて再生林の中へ消えていった。すると、彼の胸がはげしく乱打した。母屋の方へ行こうか、どうしようかと思いまよつていくところへ、知人の細君が自分のいる物置小屋の方へやってくる気配がした。彼はあわてて、またふとんの中へもぐりこんだ。

「どんな具合いかね」

そういいながら、例の愛嬌たつぷりのえくぼを浮べて女が入ってきた。そして大胆にも彼の夜具の端に腰をおろし、少しごつごつ

した掌を彼の額にあてて熱の具合をはかった。もちろん、熱が高  
いはずもない。しかし、彼にとってはまったく予期していなかつ  
たことで、すっかりとまどつた。三カ月もこの物置小屋に住んで  
いるが、今までかつてしめさなかつた親しさだ。彼は息苦しさを  
感じながら女の言葉を聞いた。前歯が一本かけていても、女の姿  
がなんともいえないほど美しく見えた。幾度も覗きみたしろい肌  
の女が、自分の手のとどく所にいるのが不思議な気がした。その  
ふつくらとした胸のふくらみや腰へながれているやわらかな線を  
盗み見ているうちに、はげしい情欲がどつとほとばしりだ。彼  
は不意に相手の首へ腕をのばした。女はこばまずに、むしろそう  
なることを期待していたかのように自分から唇を寄せてきた。

「好きよ…好きよ…」

女はあえぐようにそういった。彼は渾身の力をこめて相手をふと  
んの上に倒した。ぱつとめくられたスカートの下からまっしろい  
太ももが現われると、彼は飢えた野獣が獲物を襲う時のように  
なった。



彼の心にくすぶっていた問題は一応かたずき、本能の欲求も知  
人の細君によって満せられていた。開墾地の家も出来あがり、彼  
は叔父一家とそこへ移転した。畠もいつしか綿の緑におおわれ、  
やがてぼたん雪のような花がさいた。赤い大地からうみだされた  
しろい綿の美しさに、希望のようなものが心の底で燃えはじめた。  
そして、彼もよく働くようになった。

青じろかった顔は銅色になり、神経質の細面がたくましい開拓者の容貌に変わった。一年の月日のうちに、大陸の赤い大地と灼熱の太陽が早くも彼の風貌にいちじるしい変化をもたらしたのだ。ところが、容貌はそこらのカボクロに似通いはじめていたが、内面には自分が日本人であるという誇りを強く意識していた。日本から遠い南米大陸に投げだされて棄民のような生活を送っている彼にとつては、この優越感は心をささえる大切なものだった。この優越感は一動力にもなり刺戟にもなった。その反面、あせりをおぼえさせることもあった。一日も早く金をもうけて、無知な群像のうごめくブラジルをひきはらって日本へ帰りたいたいというあせりだった。

綿の収穫がおえた頃、彼の心はふたたび乱れだした。日本へすぐもどれないにしても、ひとまず低俗なカボクロの住む農村からぬけだしたい気持ちにかられた。叔父や従兄たちの容貌があまりにもカボクロと似ているので彼は自分の顔の変化が気になった。日本人の容貌をたもちたいという願いから、毎朝ひげを剃り、髪をていねいにくしけずった。陽に焼けないように頬かむりもしてみたが、叔父たちにからかわれたばかりでなく、暑くてとても我慢できなかった。そして一年をたってみると、自分も土着民と見違えられるようになってしまった。顔を鏡に映して溜息をもらすこともあった。もう一つ、彼をわずらわしていたものは、知人の細君だった。女は妊娠していた。その相手から時おり「あんたの子よ」とささやかれる。

前に腹を大きくつきだした女のむくんだ顔を見ると、ヘビの出るような思いをした。こんな女と関係していたと思うと自己嫌悪におちいるのだった。

周囲のカボクロにたいする軽蔑と、女にたいする嫌悪感が次第につのりこの土地に住むことがたえられなくなったのだ。

天長節がやってきた。この日は敬意を表してみんな仕事を休んだ。知人の家へ遊びに行った叔父が、夕方ゆううつな表情で帰ってきた。

「えらいことが起こった」

ごま塩頭を振りながら手に握っている二、三部の新聞を高くさしあげた。

庭先でうずらのわなを作っていた彼は、道具をそこらに投げすてふんだくるように新聞を叔父の手から取った。サンパウロで発刊されているその邦字新聞の大きな見出しが二・二六事件を報じていたのだ。心臓のあたりにするどい痛みを感じながら、彼は息をとめてそのニュースを読んだ。読むにつれて膝のあたりから全身にふるえが伝わって、その場にへたばりそうになった。日本から遠くはかれた地球の裏面で、しかも二カ月もすでにおくれて読むこのニュースが、実際に自分の上にふりかかっている事件であるかのように感じられた。それほど、彼は自分が日本人であることを強く意識し、日本を自分の心の中で生かしていたのだ。異国の大陸の果てに投げだされている彼にとっては、日本はあこがれの理想郷であり、なつかしい母の懐であり自分の生命の一部でも

あった。南米の空のもとで無名の一青年が日本の前途を案じてみたところで仕方がないけれども、祖国のことが気になってじつとしておれなかった。不安定な情勢下であえぐ日本が自分の存在を必要としているように思われすぐにでも飛んで帰りたかった。

「叔父さん、おれサンパウロへ出て働こうと思うんだけど…」

その晩彼は自分の決心をうちあげた。ほの暗いランプをかこんで夕食後のお茶をすすりながら、みんなしばらく深い沈黙におちこんだ。白髪のみめだつ叔母は早くも涙ぐみ途方にくれたように夫と甥を見くらべていた。叔父は別に驚いた様子も見せず、少しやつれた顎をもぐもぐ動かして、静かにいった。

「お前はそうするがいい。大学までいったんだから、百姓でくすぶっているのは惜しい。綿を売った利益をわけてやるから、サンパウロへ行って頑張れよ」

話は早かった。翌日ニコントスの現金を貰って、古トランクに着がえと数冊の本をねじこんで叔父たちに別れを告げた。知人の細君に見つかるのを恐れて、かなりのまわり道をして、彼はマリアの町へむかってとことこ歩いた。



サンパウロへ出て直ちに自分の限界にぶつかった。ブラジル語を知らないという限界だ。ブラジル語を知らなければ、とてもこの国の社会にわりこんでいけない。たとえ日本で大学に通ったにしても、なんの役にもたたないのだ。そんなことを痛切に感じたが、一日や二日で言葉をならうこともできないので、まず仕事を

探さねばならないと考えた。日本人街と呼ばれているコンセリエイロ・フルタード街の安下宿を根城にして、さつそく仕事を求めてあるいた。

百二十万の人口をもつ都市としては、サンパウロはほとんど活気がなかった。四年前の政治動乱のわざわいが、いまだにたたっていたのだ。その動乱は、一九三〇年に南リオ・グランデ州のヴァルガス州統領が武力でもってワシントン・ルイス大統領を追放し、ブラジルの政権をとった事件から起ったのだ。このヴァルガスの行為はブラジルの憲法に違反するものと一九三三年にサンパウロ州がいわゆる護憲革命を起したところが、同盟州に裏切られて目的をはたさなかった。サンパウロ州の反乱を鎮圧した勢いでヴァルガスは正式のブラジル大統領に就任し、独裁政治への基盤を築きはじめた。この革命の後、サンパウロ州は連邦政府から危険視され、ことごとくに継子扱いをうけていた。そのしこりは根深く、そのためにサンパウロもあまり活気がなかったのだ。

ブラジル語がはなせないので、結局サンパウロの中に出てくるせまい日本社会の範囲内で仕事をみつけなければならぬ。この日本社会はビルディングの陽のあたらない所にはえた苔のような存在だった。大都会の中で息をひそめ、限られたせまい範囲内でかすかに生きのびている社会で、ブラジル人社会と幾らかのつながりをもつ職業は野菜売りや洗濯屋だけに過ぎない。この陽かげの社会を彼は幾日も歩きつづけた。ある邦字新聞に記者募

集の広告がのっていたので、勇んでいってみると給料はそこらの洗濯屋の奉公人なみ。とにかく自分にむいた職場がなかった。野菜売りや洗濯屋になるには、大学に通っていたという自尊心が承知しない。彼は失望した。就職口を探す元気をうしない、安下宿の寝台にころがってぼんやりと汚い天井を見つめている幾日が続いた。孤独感に襲われてやたらに過去がなつかしくなった。楽しかった学生時代も郷愁をそそり、自分が嫌悪をおぼえた知人の細君も恋しい人となった。止めどない過去の思い出をたどっているうちに、ふとブラジルの農村のなまなましい第一印象がよみがえった。煙ですすけたあばら屋の庭先で、病的に腹の出張ったカボクロの幼児が赤土まみれの仔豚と寄りそって寝ていた光景が、眼前で見ているような鮮かさで浮んだのだ。土の塊りのようにころがされた豚の仔と人間の子。しばらく考えているうちに彼は思わず心の中で叫んだ。

(そうだ！)

ブラジル語をあまり知らなくても、かなりの事業のできる所は農村よりほかにない。社会機構の複雑な都会では、東洋人の容貌をもち、ブラジル語をこなしえない日本人のわりこむ余地はほとんどないが、無知なカボクロしか住んでいない農村社会では日本人は思うままに入って事業ができる。

(都会で安月給を取るよりも、田舎へ行ってカボクロたちを使って大事業をやろう。そうすれば日本へ早く帰れる)

幾日ぶりかで彼はその細面に晴ればれとした笑いを浮かべた。

彼は大事業家をゆめみはじめた。日本人のいない所へ飛びこんでいって大勢の土着民を使って仕事をする計画をたてた。彼はノルテ駅でセントラル鉄道の外列車に乗り、終着駅のモジ・ダス・クルゼスの町で降りた。

この町の周囲では大勢の日本人が野菜作りをしていることを聞いて、彼はさらに奥地へは行っていった。そして、チエテ河の水源地に近いサレゾーポリスと呼ぶ部落にたどりついた。あまり大きくない、むきだし煉瓦の教会をかこんでわずかばかりの人家の集っているこの部落は古い歴史をもっているが、もちろん彼はそんなことに関心を寄せなかった。

部落に到着したその日のうちに、彼はこの界限一の大地主ジョオン・ピールスを訪れた。青黒くそびえたつ海岸山脈から恐竜の背中のように連らなつた山々の間にひろがるせまい平地にピールスの家があつた。帝政時代のタイパ造りの壁は風雨にうたれてかなりいたんでいた。家のまわりにはアバカーテ樹がこんもりとおおいしげり、庭先には三抱えもあるフィゲイラの老樹がうつそうとした枝を四方にのばしていた。庭には牛や馬の糞がたれっぱなしで、尿の臭いがふんぷんと漂っていた。声をかけると、暗い家の中からおっとせいひげの小柄な男が現われた。ジョオン・ピールスだった。相手のみすぼらしい姿を見て彼は内心あきれかえつた。

(これがこの辺で数千アルケールスの土地をもっている大地主か)

ピーレスは意外な異人の訪問者に目をぱちくりさせていたが、彼のおぼつかないブラジル語を聞いて相手が何をいわんとしているかをすぐ察した。

話はきわめて簡単にかたずいた。一コントで、欲しいだけの土地を二カ年借りる約束がかわされたのだ。契約書も領収証も取りかわさずにたた口約束でことは決った。相手を信頼したというよりも、ピーレスは書類にサインさえ出来ない文盲だったからだ。思わぬ金を握ってピーレスはすっかり気嫌をよくし、小柄に似あわない声を出して喜んだ。

「おい、ジュラシー、ピンガをもつてこい」

おっとせいひげを上下に動かしながら、ピーレスは家の中へむかってどなった。ほどなくピンガ酒の瓶をかかえた少女がおずおず戸口から姿を現わした。つややかな黒髪が肩のあたりまでたれ、暗褐色の大きな瞳が輝いていて、こんがりやけた顔の輪廓もよくととのっている少女だった。彼は少女の野生的な美しさに胸が怪しくおどるのをおぼえた。しかし、少女がはだしで牛糞を踏んで歩くのを見てすっかり幻滅を感じた。

(事業を手びろくやって、思う存分もうけてやるぞ。ここにはカボクロが大勢いるからどんな大事業でもできる)

彼は張りきっていた。ピーレスの広大な土地を見てあるくだけで、自分がすでに大事業家になったような気分を味わった。Aという字さえ書けないピーレスさえ数千アルケールの土地をもっているのだから、自分の学問と知識をもってあたれば、わけなく

大事業家になれる。そんな考えを抱いたにしても、決して無謀とはいえない。しかし、それは彼の誤算でもあった。ブラジルの田舎には、普通の常識では考えられないことが多い。文盲で無知なピーレスが広大な土地を所有しているのは、ブラジルの歴史がはじまった頃から先祖代々伝わってきたからであり、ピーレスがみずからの能力で獲得したものではない。それから、土地のカボクロたちを使うむずかしさも計算にいれていなかった。

彼は茶わんをふせたような再生林の山の所を選んだ。近くに小川も流れており、大陸の背骨のように横たわっている海岸山脈の雄大な姿も見事で日本の風景と似通ったところがあつた。彼が最初に見たサンパウロ州の奥地の平凡な風景とはまったく違つていた。さつそく山伐りをはじめた。日給一ミルで五人のカボクロを雇つた。栄養失調と蛔虫におかされたやせぎすのカボクロたちだつた。仕事をはじめた日から、彼はこの人びとに失望させられた。日給稼ぎなので、土着民は無駄に時間をつぶすことしか考えない。一本の木をゆつくり伐りたおすと、斧をおいて縄タバコをけずり、それをほごしてとうもろこしの皮に巻いて火をつけ、ぶかぶか吸うまでには三十分をついやす。それから掌にペツと唾をかけて斧を取りあげ、また一本を伐りたおすと今度は小川へ水を飲みに行つてなかなかもどつてこない。もたもたしているうちに昼食どきになつてしまふ。午後もやはり同じことのくりかえしだつた。やれ火を貸せだの、やれ大便だ、小便だ、といっているうちにち夕暮れになつてしまふ。彼はいらだつておぼつかないブラ

ジル語でがみがみ文句をいいはじめたが、カボクロたちは身におぼえのないことをいわれているように、きよとんとした面持ちで聞いていた。そしてタバコをつくること、水を飲むこと、大小便をすることは同じようにくりかえされた。

（この野蛮人どもめつ。仕事をしないなら賃金をへらしてやる）賃金をへらすと、誰も仕事にこなくなつた。彼は一人で憤慨して仕事場を歩きまわつた。遠い祖先の代からのなまけ者であるインジオの血を濃厚にうけついでいるカボクロだ。それに、無知からの栄養失調と蛔虫におかされて仕事をする気力をもっていないことを、彼は計算にいれていなかった。

新しく五人のカボクロを雇つたが、これらも太陽ばかりを仰ぎみて、タバコと水と小便の時間つぶしをくりかえす連中だつた。賃金は、前に雇つていた者よりも二百レイスやすかつたが、仕事の能率には全然かわりがなかつた。結局、カボクロには一ミルを払つても、二ミルまたはそれ以上を払つてやっても、仕事は同じようにしかないことを彼ははじめて知つた。

彼はカボクロたちに手本をしめすつもりで、みんなにまじつて一生けんめいに働いてみせた。すると土着民たちは斧をおいて「ジャポネースはよく働く」と感心しながら彼の働きぶりを見物するのだつた。まったく手のほどこしようがなかつた。カボクロを大勢使つて大事業を起す計画は、この現実の前でいき止りになつてしまつた。一種のあきらめが彼の内部にわきはじめた。自分自身しか頼れないので、彼は一人でけん命に働いた。

「ゼーは少し頭がおかしいのでねえか。署長の時計みたいに働いてよ。よう体がもつでねえか」

「そおよ、そおよ。おれたちブラジレイロにや、とてもあんな真似は出来ねえ」

「ジャポネースは時計みてえに出来ているかも知れねえだよ」

平凡に明け暮れるこの片田舎で、どこへ行っても彼の働きぶりが噂にのぼるのだった。彼はカボクロたちから、いつしか「ゼー」という名で呼ばれていた。

— ○ —

この界限で大学の門をくぐったのは、彼一人しかない。近くのサレゾーポリスの部落長や警察署長すら、小学校も出ていない。学校の女教師も開業医もあやしげな証書しかもっていない。こうした環境の中で、彼は優越感にひたっていた。時おり、学生時代にあこがれたニーチェの「超人」の境地に達したような錯覚すら起した。しかし、彼の優越感はながくは続かなかつた。周囲の人がびとがあまりにも程度が低くすぎるので、一人角力をとっているように、優越感を抱く張りあい全然なかつたからだ。無知で、無能で、なまけ者のカボクロたちを軽蔑してみても仕方がない。そんな寛大な気持になると、急激にブラジルの田舎の生活にとけこみはじめた。

茅ぶき小屋の土間に住むことがあたりまえのことになった。ブラジル人が常食にしている塩味つけの豆料理も、マンジョツカの芋や粉もうまいと思うようになった。それに、毎朝コーヒーを飲む

ようになり、臓腑を焼くようなピンガ酒も飲みはじめ、ニコチンで黒くかたまつた縄タバコをけずって吸うようになった。そして、はだしで歩くようになったばかりでなく、ピーレスの一人娘ジュラシーの美しさに心が動きはじめていた。

彼の開墾地には豆やとうもろこしが蒔かれ、マンジョツカや砂糖きびが植えられた。数万年以来、一度も耕作されたことのない赤紫の大地に秘められていた力を吸いとって作物はぐんぐんのびていった。その成長を楽しみながら、彼は副業として近所のカボクロから木炭の焼き方を習った。雄大な海岸山脈を背景に、たそがれの空へゆらゆらと立ちのぼる炭焼きがまの煙は、詩情ゆたかな眺めだった。詩の一つや二つをつくる心のゆとりが出来た頃、収穫期がやってきた。すばらしい豊作だった。豆が十俵、とおもろこしが六俵とれた。ところが、彼ははたと壁につきあつた。これらの品物をさばく市場が近くにない。はじめて自分の計画のおろかさを知って、彼はすっかり気を落してしまった。サレゾーポリスの部落でさんざん働ぶみされてとおもろこしだけは売れたが、豆は買手がつかなかった。

仕方なしに高い運搬費を払って、五十キロメートル離れたモジ・ダス・クルゼスの町へ豆を売りにいった。しかし、人口わずか八千の田舎町には活気がなく、投げ売りで二百ミルの金しか握ることができなかつた。

(二年でこれだけか。これじゃとても日本へ帰れない)

底しれぬ闇の中へ吸いこまれていくような悲哀感に襲われた。

やけにピンガ酒を飲み、その日は町で遊んでから帰ることにした。市場に近い、日本人のうすぎたない宿屋で久しぶりに日本食らしいものを食べているうちに、その宿屋の娘を見てはげしいセックスの欲求をおぼえた。ぽてぽてとふとった娘の白いふくらはぎが彼の血潮を騒がせた。奥地で知人の細君と関係してからこれまで女を抱いていない。もう一年近くたっているのだ。

(この町には女郎屋があるという。よし、今晚ケトウの女を抱いてやれ)

新しい冒険だった。やけもあつたが、考えただけで全身が緊張して、膝のあたりがふるえた。夕食をすましてしばらく寝台にころがっていたが、やがて決心したように同室の円顔の日系青年に遊廓のことをたずねた。相手はにやにやしながらくどいほどでいねいに道順を教えてから、自分もたまらなくなつて一緒に行くといいだした。ほの暗い街燈にのびちぢみする影をひきながら、二人はしきりに女の話をかわした。町の共同墓地へむかう大通りから右の方へはいつていくと、せまい道に面して妖しげな赤や青い電氣をともした古い平家が軒を並べていた。そこへ足を踏みいれたとたん、暗がりからまつしろい歯を見せた黒人女が飛びだしてきて、強烈な体臭もろともに彼に抱きついた。彼が鳥肌をたてて黒人女をつきとばすと、円顔の青年は腹をかかえて笑った。金髪の女がしきりに往来する男たちの腕をひっぱっていた。赤毛の女も見えた。と、一軒の家から飛びだしてきた半黒の女が、むこうへ逃げていく男の後姿へヒステリックな声で悪口を浴びせはじめ

た。彼は胆をつぶした。日本の遊廓とはまったく違ふ雰囲気だった。客ひき婆さんはおらず、女たちがめいめい勝手に男を部屋へひっぱりこむ。氣にいらぬ客なら、外へほうり出してしまふ。円顔の青年は先輩氣取りでそんなことを彼に説明した。そして、なじみ女のいる家の前までくると、円顔の青年は軽く会釈して彼を置いてきぼりにした。安っぽい香水と小便の臭いが漂っている中を、彼はあちこちする男たちにまじって野良犬のようにうろろ歩いた。なかなか決心がつかなかったのだ。遊廓街のつきあたりまできた時、とつぜん小麦色の肌をした眸の黒い女が彼の首ったまにしがみついた。

「ねえ、混血児をこしらえましょうよ」

あまつたるい声よりも、女の乳房のやわらかな感触がすっかり彼をとりこにした。人なつっこい笑いを浮べた女にひっぱられて、せまい部屋へは行っていった。古い調度品がところせまく置かれていた。ふと見ると、寝台の頭の所にキリストの十字架の処刑像がかけてあった。奇妙な氣持ちに取りつかれているうちに、女は忽ちすつ裸になって彼にしがみついてきた。

目的はわかりきっているが、あまりにも露骨な行為なので、砂をかむような味気なさをおぼえた。

夕もやが立ちこめはじめる頃まで、彼は小屋の戸口の所にうづくまって足の指先にはいつているビツショ・デ・ペーを、ナイフの鋭い先でほじくっていた。蚤の種類だが、よく足と爪の間に喰

いこんでまるい膜を張り、その中に無数の卵をうむ。彼は根気よく一つ一つをほじくりだし、破れた膜からこぼれでるしろい卵を爪先でぱちぱちと押しつぶした。この頃ではこれも楽しみの一つとなっている。ビツシヨを取りだしたあとには、生肉をむきだしただ小さま穴がぽっかり開いたが、はだしで歩きなれているのでそんな傷は平気だった。

（今夜こそは…）

一年前から幾度も考えたことを、その晩もくりかえした。ピーレスの娘ジュラシーに恋をうちあけることだ。一年前、モジ・ダス・クルゼスの遊廓で異人女を抱いた。機械的な交渉だったが、それによって彼はブラジル大陸に根をおろしたのだ。あの日、彼はジュラシーにあげるつもりで町の市場から色とりどりのガラス玉をちりばめた首飾りを買ってきた。ところが相手がまだ十四才だと聞いて、すっかり気ぬけした。首飾りはそのまましまっておいた。彼は時期がくるのを待った。この一年のうちに、乙女は成長した。ふつくらと盛りあがった胸、ほそくひきしまった腰、すんなりとのびた脚の線は実に美しかった。肩のあたりでたわむれる黒髪が、輪廓のよくととのった顔をいつそうひきたて、ゆめみる暗褐の大きな眸は男たちの心を騒がせる。この地方第一の大地主の一人娘は、この地方第一の美女だった。土地の若者たちはジュラシーを競った。この美しい乙女をめとる者は、とりもなおさず数千アルケールレスという広大な土地の相続人となれるからだ。殺傷事件も、すでに幾つか起きた。もちろん、そうした危険をおか

してまで、ジュラシーに近づく決心は彼にはなかった。だが、野生的な清純さをもつ乙女を自分のものにした願いは強かった。この頃、多少の危険にぶつかってもかまわないような覚悟が次第にかたまっていた。

その晩、彼もピーレス家に招かれていた。事故で牛が死んだので、その肉でシユラスコをし、ついでにダンス会もやるということだった。ビツショをほじくってから、手さぐりでひげを剃り、大分くたびれた背広を着て久しぶりに靴をはいた。勢いをつけるためにピングを一口飲み、首飾りを新聞紙にくるんでポケットにいった。夜気はつめたかった。それでも、小川のほとりで蛙がしきりに鳴いていた。

（日本は今ごろ夏だがな……）

夜道を歩きながら、そんなことを考えた。だが、自分とはまったく関係のない国のことを想い出したように、なつかしさすら感じなかった。それよりも、ジュラシーに首飾りをわたすことの方が切実な問題であった。星明りにほのじろく浮んだ森の道を急ぎながら、恋をうちあける言葉をあれこれと選んでいるうちにピーレス家についてしまった。すでに大勢の人びとがつめかけていた。シユラスコの用意が出来るまでに、すでに露天ダンス会がはじめられていた。唇の部厚い黒人の弾くアコーデオンにあわせて、大勢の男女が楽しそうに踊っていた。娘たちは頬紅をまるくつけ、はにかみながら若者たちの視線をうけとめていた。くるくる廻る踊りの輪の中から、牛馬の尿の臭いまじりの埃りがもうもうと立

ちのぼっていた。誰もそんなことを気にとめない。ただむちゅうで踊りつづけた。踊りの輪をとりまいて、物欲しそうな顔をしたやせ犬のような老人たちがそここにたむろして、ふるまい酒がまわされるのを待っていた。

彼はフイゲイラの老樹に寄りかかって、飽かずにダンスを眺めた。時おり、ポケットから縄タバコを取りだしてけずり、とおもろこしの皮にくるんで吸った。彼の視線はジュラシーだけを追っていた。うす空色のワンピースを着て、黒髪に真紅のダリアをつけている乙女の姿は、幻想的な美しさをもっていた。じつと乙女の姿を見ているうちに、くるくる踊っている相手の視線とぶつかった。一瞬のうちだったが、二人の視線は火華を散らすほどのはげしさでからみあった。彼の胸はにわかにならじはじめた。落ちつきを取りもどさないうちに曲が終わり、ジュラシーがはにかみながらおずおず寄ってきた。

「ゼー、わたしと踊ってくれない」

返事のかわりに、彼はのどのあたりに止った塊りをごくんと飲みこんでうなずいた。サンバが響きわたった。ジュラシーがあまりにも大胆に体をくつつけてきたので、彼の足取りはすっかり乱れた。乙女の乳房のぬくもりが彼の体にしみとおった。

(ジュラシーはおれに気があるんだ)

そう思うと、にわかに興奮しはじめ、相手のほそい腰をぎゅっと抱きしめた。乙女も腕に力をこめ、頬をすりよせてきた。真紅のダリアが、二人の頭の間で押しつぶされた。周囲のカボクロたち

は、あつけに取られて二人を眺めていた。彼は乙女にポケットの首飾りをさぐらせて「これは君にあげようと思って買ってきたんだ」とささやいた。乙女はすっかり感動してサンバの激情よりもはげしく燃えあがって、怒涛のように彼の胸にぶつかっていった。

— ○ —

「おい、おめえ知ってるけえ。ゼーがよ、新しい家を造ってることよ」「うんにゃ、新しい家ん中でよ、ジュラシーとうんとあれをやらかすでねえか。ふふん」

「古い家ん中で暴れたら屋根が落ちらあ」

彼とジュラシーの噂さは、部落でもちきりだった。土地で第一の美女を日本人に取られて、殺傷沙汰まで起した連中が指をくわえてひっこんだことは不思議ではない。同じ土着民に取られるなら承知しないが、異人種になら仕方がないとあきらめたからだ。

彼は世間のざわめきを知っていた。みんなが自分をうらやましがっていることを意識し得意だった。自分が軽蔑したことのあるカボクロの娘をめとることに、今の彼にはほとんど不自然さや矛盾を感じなかった。自分が日本人であるという意識がしなびてしまったからだ。民族意識ばかりでなく、自分があこがれたニーチェ哲学も、今の彼にはもはや関係のない事柄だった。彼の住んでいるカボクロの世界では、高度の学問も、優れた知識も無用の長物にひとしい。この土地で目的といえ、ながい時間をどうしてつぶすか、ということだけだ。この目的に達するには、すべての知性をかなぐりすててカボクロ並の水準にさがるよりほか方法

がない。彼の自己保存の本能が自然にそれをなしとげていた。

八月は不吉な月としてカボクロたちが嫌うので、彼とジュラシーの結婚は九月の下旬に決められた。土地の習慣にしたがってサレゾーポリスのカトリック教会で神前結婚をすることになって、いるが、その前に彼は洗礼式をうけねばならなかった。洗礼をうけてカトリック信者の仲間入りをしないと、神父が祝福をあたえてくれないからだ。洗礼をうける前日も、ジュラシーがやってきた。

「ゼー、わたし何をもってきたか、あてて」

暗褐の眸がいたずらっぽく笑い、後へまわした両手に何か重そうなものをおくしていた。

「重そうだから、かぼちゃだ」

「違ったら」

「そんなら、マモンだ」

「違う違う、ほーら、タツよ」

ジュラシーは重そうに甲羅の動物をさしだした。かたい爪で土の中をぐんぐん掘って、蟻やみみずを喰うタツの肉は格別うまい。彼は早くも食欲を感じ、もっていた鍬を投げだした。二人ははしゃぎながら、畠から一息に小川のほとりまで走りおりた。そしてタツをほうりだすと、何時ものように抱きあって互いに唇をはげしく吸いあった。やがて、興奮をおさえきれず、どちらからとなく新築の家へ入っていった。がさがさ鳴る草の敷ぶとんの上からみあって倒れると、彼はむちゅうで乙女の太ももの所をさ

ぐった。あらあらしい呼吸をつきながらのたうちまわっているうちに全身が汗でべっとりぬれた。二人は婚約をしない前からすでに肉体関係をかわしていたのだ。十五才とはいえ、ジュラシーの体はすっかり成熟していた。

ブラジルの気候や生活環境は、女を早く熟させる。教養を身につける必要がないので、早くから異性を求める。相手が見つかるとういっしか肉体関係を結ぶのが自然のなりゆきとされているのだ。

はげしいとなみを終えると、ジュラシーは何事もなかったように小川のほとりへ行き、慣れたナイフさばきで無雑作にタツの甲羅をはぎとった。

取りだした臓物を灌木のしげみめがけて投げすて、血のしたたる肉を流れて洗った。血にそまつた水が、みるみる押しながされていった。

ちようどその頃、遠いヨーロッパではドイツ軍が一举にポーランドへなだれこみ、砲火に血しぶきをちらしていた。九月一日、この不吉な金曜日に第二次大戦の幕が切っておとされたのだ。

— ○ —

コップのピンガ酒をぐっと飲みはして、彼はまたも店のシリア人の話をぼんやり聞いた。突然変異のふくろうのような顔をしたシリア人は、今朝モジ・ダス・クルゼスの町で聞いてきたニュースをもったいぶった口調でカボクロたちに話していた。熱と創作もはいつていた。

「ドイツが負けてムツソリニが殺されたので、ジャポンもとうとう

降参したのじゃ。この戦争は、ブラジル軍が参加したから連合軍が勝利を得たんじゃよ。ブラジルの兵隊は強いなのって、向う所に敵なしじゃった」ふくろうの出来そこないのような顔に七変化の表情がおもしろくて、カボクロたちはシリア人のうそまじりのニュースを聞いていた。日本の敗走の話も出たが誰もそこにいる彼の方をふりかえらなかつた。カボクロたちにとっては、彼らはもはや日本人ではなくて、先祖代々からこの土地に住んでいる仲間だった。実際、彼はみんなと同じような容貌をしており、ピంగా酒を飲んで仕事をなまけているのだ。ジユラシーと結婚して、六年の間に五人の子供が生まれた。舅ジョオン・ピーレスが昨年の暮れにピంగా酒中毒で死んだので、彼が数千アルケレスの広大な土地の主となった。だが彼もまた舅と同じように無気力な人間になっていた。十年あまりカボクロの世界だけで暮し、カボクロの女をめとつたので彼も急速度にカボクロ化してしまったのだ。毎日そこらをしよんぼりと歩きまわり、時どき思いだしたように炭を焼いてみたり、猫の額ほどの畠を耕してマンジョツカを植えるだけが彼の生活のすべてだった。数千アルケレスの大地主である意識も、世間にたいする抵抗も、生活にたいする反応も何も感じなくなっていた。

シリア人から日本の敗戦の話聞いても、川向うの火事を眺めている気分だった。十年前の天長節に二・二六事件のニュースを読んで驚いた彼とは、まったくの別人になっていた。奥地で別れたきり叔父たちとも文通をしていないし、日本の兄たちともすつ

かり縁が切れている。この頃、サレゾーポリスの部落の周辺にも数家族の日本人が住みついて農業をいとなんでいるが、彼は誰とも交際していない。日本語を話すのもそろそろおぼつかなくなっていた。髪はのびすぎて耳をおおい、肌は底まで銅色になっており、目はぼんやりと宙に浮いて動かない。これがひとむかし前京都帝国大学の哲学科にいた秀才とは、誰も想像できないほどだ。すべてをあきらめ抵抗をうしなってしまった移民のなれのはてだ。

シリア人の店の前につないでおいたやせ馬に乗って、彼はとどこ家路をたどった。十年前、大事業家をゆめみて眺めた雄大な海岸山脈の頂に雲がひくくたれ、雨のきざしを見せていた。壁のくずれおちかかっている家へもどり、庭先で馬を離してから大儀そうにしきいの所に腰をおろした。

うつそうとおおいしげったフイゲイラの老樹の下で、渼たらしの子供たちが馬糞の投げあいをしてはしゃいでいた。近頃やつとはいまわるようになった四番目の子供が、牛馬の糞尿まじりの埃りの中を裸ではいまわっていることさえ、平気で眺めていた。数匹の放しがいの小豚がそこらを走りまわり、そのうちの一匹がはいまわっている子供の口に鼻を押しあてた。それを見て、彼は一人で笑いだした。日本から来た当時、奥地でカボクロの子供が小豚と寝ているのを見て、飛びあがるほど驚いたことを想いだしたのだ。彼はポケットから縄タバコを取りだしてけずりながら、低い声でつぶやいた。

「あの頃、おれはほんとうに無知だったなあー」

つめたい雨 (27枚)

星野 良江



もう、やんだかと思うと又降り出す。降り出してから、かれこれ一週間になるであろうか。破損した樋から落ちる雨だれの音は、あきらめの悪い女の愚痴を聴いている様で実にゆううつである。あじけない灰色の壁に銀製のキリストの像が鈍く光っている。世界地図の様な天井のしみを見つめて暮らす療養者にとっては別に雨が降ろうが槍が降ろうが何のさしさわりもない様なものであるが、こう永く降られると部屋中が陰湿で、かけている毛布さえかびが生える様だ。「早く天気になってほしいものだ。そうすれば重い頭痛も肋膜炎の痛みも退くであろう」斯ういう天候になると四年前に患った湿性肋膜炎のあとが痛むのである。私は痛む右側を下に

して体の位置を替えてみる。体を動かす度に油気のなくなった手足の関節が、まるで枯枝を折る様な音をたてる。いくら体の向きを替えてみたとして、いやな痛みは減りはしない。私は掌で胸をさすってみる。洗濯板の様に露わに出た肋骨の上に、置き忘れられた様に乳首だけがひつついている。悪化の一途をたどっていた私の病状が死線ぎりぎりのところで停止した。恰も急坂を転げ落ちていく小石が、何かにひっかかり止った様に。それは医師に内しよで買って貰って貰って試験的に服用した新薬が、幸いにも下痢に効果があった。

週に一度回診に来る老人の医師はあまりにも頼りなかった。下痢をしていると言えば、薬局室にあるアモストラ・グラチスの下痢止の薬を気休めにくれるだけであつたから私達は彼に相談せず薬を買った。

給料だけを貰うためにこの病棟に老体を運んでいる老医に私達は「へっぽこさん」という渾名をつけていた。聴診器を首にぶら下げ、よぼよぼと病室を歩く姿はいかにも頼りなかった。

下痢が止つたので抵抗力が多少ついたのがもしれない。これらの養生次第で治るかもしれない希望がもてる様になった。だがこれから何年、この硬いわら蒲団の上に安静療法を続けなければならぬのである。開け放しの窓から街路樹の緑葉がぬれて静かにゆれている。

ぴんと張られた電線に雨の滴が首飾のガラス玉の様に並んで光っている。

突然舞い降りてきた雀の群が滴を振り落とし八釜しく囀り出した。

時々風の吹き具合によって丘下の町から陽気なカルナバルの音楽が真近く聴える。そうだ昨日からカルナバルが始まっているのだ。

そういえばこの病棟の担当尼、イルマン・ジェニーの姿もみえない。カルナバルには修道院に行くといっていた。威張りくさった黒い娘の看護婦も親の家に帰ったのか、注射に来る姿を見なかった。健康な人達が羨しい。人間という者は実に勝手な者で、健康である間は、金のない不自由や不運を嘆き悲しんでいるが、こうして病の床に倒れてみると、しみじみと健康の有雉さ、金銭には代えられない尊さを思い知らされるのである。「ああ野原を思いきり走り廻ってみたい」私は子供の頃走り廻った学校の運動場や、六郷川の岸で遊んだ日を懐しく想い出し、兎の糞の様な乳首を淋しくつまんでみた。二十八才といえば女盛りの年頃であるのに、どうして私だけがこんな目に合うのだろう。私は悪いことをした憶えもないのに、神様は不公平だと思う。友人の松子さんは人妻でありながら幾人かの男と交渉をもち裕福に暮している。それでも天罰はあたらないではないか。「ああ矛盾だらけの世の中だ。私にはシンデレラの様な幸福は来ないものか」

誰かがニュームの痰壺を落したらしい音で私は現実を引きもどされた。

マドレに許可を貰って帰えつてもよかったが、この雨では誰も行く者もない。アルモツサまでにはまだ三時間もある。正午から面

会の時間だが、この雨では家族の者も来てはくれまい。私はあまり期待しないことにした。

あまり楽しみにして来てくれないとがっかりするから。

「ラララララア、ラアツ、ララ……」

鼻唄まじりにB大部屋の患者、黒人娘のシーダが踊り乍ら私達の部屋に入ってきた。肺患者とはどうしても思えない程よく肥った娘である。

「サロンに踊りにいくのよ、ララララー」

「ふん、誰といくのさ」

小使婆さんのマリアがコップから首をのばして怒鳴った。

「きまつているじゃないか、ジットとよ。下の町のサロンに行く様に約束したのさ」

「シーダ、安静にしていなと喀血するよ。この間医者に言われたのを忘れたのかい？」

「ふん、大きな世話だよ。今日カルナルバルじゃないか。半日くらい踊ったからって喀血はしやしないよ。マリア、お前は私のことを嫉妬しているのかい」

「ベスタ、私はね、若いお前が喀血したら可哀想だと思ったから注意してやったんだ。勝手にしやがれ、黒人娘」

マリアは疱疹の頬をゆがめて首を引っ込め、乱暴な音をたてて食器類を片付けだした。

五十を幾らか出たくらいのバイア生れのマリアは凄く乱暴な口をきく女である。新しい入院患者は第一番にこの女の口汚い罵言

に憤慨する。だが馴れるにしたがって彼女の気心が解り、誰も負けてはおらず遠慮なく悪口を言い返してやるのだ。マリアはそれが嬉しいらしい。まり投げの様に悪口をやり取りすることが楽しい様だ。ひどく気が強そうだが、その半面優しいところもあつた。患者の間では彼女のことを「ビラ・ラッタ」という渾名で呼んでいた。がらがらと八釜しいのと、氏素性の解らぬ野犬。日本でいうなら、どこの馬の骨か解らぬ奴—の意味もふくまれている。隣の養老院から廻されて来た天涯孤独の老女である。養老院の意地悪婆の中で暮すより、このサナトリオで病人相手に怒鳴り散らして働く方が気楽でいいと言う。「ビラ・ラッタ」とは適切な名をつけたものである。

風に乗って流れてくるサンバの曲に、シーダは興奮して、着ていた寝間着を脱ぎすて乳あてとズロースだけになった。そして腰をくねらせ、寝台と寝台の間の長い通路を踊って歩く。時ならぬシーダの狂態に呆れ果てた面持ちで、寝ていた患者達は声もなく眺めていた。エロチックなシーダの裸踊りも、所詮やり場のない悲しみをカモフラージュしているに過ぎないのであろう。誰の子だが解らない父なし子のシーダ、やけに無茶な行動をとる十七才の黒人娘が哀れでもある。女中をしている母親はめつたに尋ねては来ないので、シーダは果物を買う小遣いにも困っていた。

私より元気な大野さんは安静の時間が終わるとテラスに出て外気を吸いに行く。そのすきをねらつてシーダは大野さんの果物を盗みに来るのである。私がとがめると平然として「ドナ・マリア

は腐る程フルタを持っているくせに、人が一つ欲しいから呉れと  
いってもくれないのだもの。腐らせて捨てるより私が食べてやる  
のだ」といってリンゴをかじりながら何処へか行ってしまふ。大  
野さんは沢山の果物を皿に盛り枕元の小卓の上に置いておく。小  
卓の下に棚があるのに、わざわざ上に出し自慢気に見せびらかせ  
ておくらしいのである。殺風景な病室に赤や黄、紫の葡萄の色の  
取り合わせが美しく人目を引き、シーダでなくとも一つ欲しくな  
るほどである。物を乞われたなら同病のよしみとして分け与える  
のが人情であるが、大野さんは絶対にそういうことはしない。

「下等階級の人間達には親切や同情は禁物である。自己を守ること  
が最も大切なこと。私はここで養生している身であるから、人の  
ことなど構ってなどいられない」というのが彼女の固い信条で  
あった。なまじ同情心のある私には、筋金入りの大野さんの心臓  
の強さには歯も立たない。A大部屋の息者達も無言のうちに大野  
さんに反感をもっていた。「ポンヅーラ」と彼女等は陰で私語き  
合っていた。

安静の時間が終り朝食の鐘が鳴った。マリアがふちの欠けた皿  
にスープを入れ、一人一人に配って歩く。皿の中には黄色いとろ  
りとしたフバのスープが入っていた。一口飲むとフバが口にざら  
つく。私は流し込む様にして塩気の薄いスープを飲み込む。「あゝ  
味噌汁がたべたい、青葱を浮かした美味しい味噌汁」何気なく過  
して来た日常の味噌汁が、やたらと恋しくなる。大野さんは味の  
素を振り込んでフバのスープを美味しくそうに飲んでいる。味の素

を入れれば多少は味がよくなるかもしれないが私にはない。

「少し下さい」というのも、軽蔑される様でいやである。私は大野さんの味の素の瓶を横眼で見乍ら、今頃家族の者達が私のいない食卓を囲んで食事をしていることと思ひ、佇しい気持で私はざらざらのスープを飲み終えた。すると斜め向うのエズメラルダという茶目気の多い黒人女が、しゃがれた声で小使婆のマリアを呼んだ。再発したエズメラルダは起き上がる力もなく仰臥したまま胸に皿を置き匙で少しずつスープを口に運んでいた。

「マリア、私の頼んでおいた鶏のカンジャはまだ出来ないのかい」  
マリアは忙し気にスープのおかわりや飯を盛った皿を渡して歩いている。

「やかましいっ、黙ってスープを飲んでいろ」  
何回もコップを往復しながらマリアはいらだった声で怒鳴る。

「ねエまだなのかい、早くおくれよ」  
「ききわけのない黒ん坊だ。まだ料理場の方から持ってこないのだよ」

マリアは不平を言い乍らコップの奥にある料理場に入っていた。

「そら出来たよ。さっさと食わんかい」

エズメラルダはフォークで鍋の中を掻き廻し

「マリア、一羽分の鶏の肉が、たったこれだけしかないの？」

「そんなこと知るものか。料理場の尼に聞いて来い」

「マリア、ここには白いさ、身も、ももの肉も入っていないよ。首

のところと羽根のところ、骨と皮ばかりじゃないか。私のありたけの金で買って貰った鶏の肉がこれだけなんて……」

エズメラルダは両眼から涙をこぼしながら雑炊の様なカンジャを匙ですくい口に入れた。

「うまいか？」

マリアは傍に立って聞いた。エズメラルダは頷き、

「今のスープより美味しい」と言った。

「エズメラルダ、肉のないのはな、お前がゴルジエタをやらないから、料理係の誰かが取ったのだよ、誰かがっ」

マリアは「誰かが」というところをこと更大声で言った。

エズメラルダの全財産をはたいて買った鶏肉が、骨と皮ばかりではあまりにも気の毒だ。

「病人の食べる物まで取り上げるなんて人間じゃない、鬼だわ」

私は憤慨して大野さんに言った。

「また始まった、貴女がここで一人で怒ってみたところで仕方がないじゃないですか。泥棒みたいな人間の集まりの中ですもの頼む方がバカをみるだけですよ」

大野さんは硬いビフを千切り乍ら美味しそうにフエジョンとマシヨカ粉のかかった油飯を食べていた。私はランジャを二つに切り、その汁を吸いながら、不平の出る心を押え食事をした。三度の食事から寝る所まで無料で与えて貰い乍ら、不平を言うのは虫が良すぎる、感謝せねばならぬと自分を戒める。だが、あまりにも悲しいことが多すぎる。

食事の終わった汚れた皿をマリアが集めて持っていく。匙とフォークは自分の物なので洗面所へ行って洗うのである。

私がニューウムの水入れに水を満たし匙とフォークをもって洗面所から出てきたとき、マリアが頓狂な声を上げた。

「あれっ、エズメラルダが死んでいるよ、匙をもったまま」

胸の上に雑炊の様な鶏のカンジヤの入った皿を左手で持ち、匙を握ったまま静かにこと切れていた。幼児が玩具を持って眠った様な安らかな死顔であった。ミナス州の奥地から来たエズメラルダには二人の子供がいるという。肉の沢山入ったカンジヤも食べず死んでいった母親のことを、二人の子供が知ったならどんなに悲しむことであろうか。私は人ごととは思えず胸が痛む。まもなくマリアの知らせで半気狂のシツカが足を引きずりながら、黒く汚れた担架をかかえて病室に入ってきた。白いレンソを被り、破れた前掛の下でちやらちやらと小銭の音をさせていた。顔は長く厚い唇はだらしなくあき眼は細くたれ下っている。マリアと違ってシツカは大人しい性質の女である。

シツカはもう一人の相棒の婆さん呼び、二人で死骸を乱暴に落とす様に担架に乗せシツカが先になって出ていった。恰も芥を捨てる様に、一掬の憐みの情もなかった。それが職業であればあたりまえのことかもしれない。私が感傷的になりすぎているのであろう。

死骸が片付けられ、しみだらけのわら蒲団だけが寝台に残された。空いた寝台は歯が抜けた様に淋しい。シーダとジツタが小卓

の中の遺品を取り出しわら蒲団の上に並べる。草の実で出来たロザリオ、鏡、櫛、身分証明書、鉛筆、手帳、家族の写真等々。シーダが黒い革のハンドバッグを出しさかさにして振る。中から白と黒のプラスチック製の犬の玩具がころがり落ちた。小犬の足裏に磁石がはりつけてあり、二つを寄せると四本の足が吸いつく。シーダは面白がって紙の上に一つを載せ下からもう一つの小犬を前後左右に動かすと、上の小犬が独りで動く様に見えるのである。

「これ私のにきめた」

シーダはすっかり気に入って自分の寝台にもどり腰かけて、その犬の玩具に興じていた。

「ふん、碌な物持っていやしない」

ジッタはとかげの様な眼をして小卓の棚の中をのぞき、出した品物を投げ入れた。判断力を失なった様なこの二人は「感情そのまを直ぐ行動に移す。結果がどうなろうと、そんなことには頓着はない。刹那刹那に己の欲望が満たされればそれでいいのだ。

狭い家庭の限界の中で暮してきた私には、この施設のサナトリオの療養生活は、別の世界に放り出された様な心細さと、息が止まりそうな愕きの連続であった。悲しい事実が平然と茶飯事の如く繰り返えされている。それに順応していくには、大野さんの様に心臓に筋金を入れ、無神経になる様、努力しなければ到底長くいられる所ではない。

雨が降る故か面会者は殆んどなかった。心待ちにしている家族の来訪のないことは、見捨てられた様な侘しさを感ずる。

大野さんのところへ二人の娘が訪れてきた。健康と若さを部屋中にまき散らし、姉妹は一週間の家庭の些細な出来ごとまで母親に語り、怒ったり笑ったり楽しそうに語り合っている。

私は彼女達に背を向け、果てしない饒舌を聴いていた。話の内容は道楽者らしい父親の行状に愚痴を母親に訴えていた。

夕方に近い頃、意外な来訪者があつた。マツト・グロツソ州境に近い田舎町に住む従兄が尋ねて来てくれたのである。日焼けした黒い顔に白い歯をみせて握手をした。姉妹のない私はこの従兄には、実の兄の様に甘えよく喧嘩もした。

「珍しいこと。いつサンパウロに出てきたの、たんちゃん」

「うん、こんど××銀行の支店長になつてね。本部に用事が出来たものだから寄つたのだよ。それも友人の藤川君の所に寄つたら、君がサナトリオに入っていると聴いたので驚いて来たわけさ。君の家の方にはまだ行っていないのだ」私は嬉しさと悲しさが同時にこみ上げて涙がこぼれた。人目がなければ、私は彼にすがりついて思い切り泣いてみたかった。耐えて来た幾多の悲しみや苦しさを聴いて貰い、そしてやさしくなぐさめてほしかった。

「凄く痩せたものだなあ。だが君の眼は張りがあつて快復できる眼つきだ。

病気に負けず元気を出して頑張るのだよ。いいかい、よんこ」彼は呼びなれた少女時代の私の名を言った。頼子と呼ばず、彼はいつも私を「よんこ」と言っていたが、ある時、私の夫謙次が彼に「いくら従兄でも人の妻君を「よんこ」と呼んでくれるな」と、

氣六力敷氣に注意したことがあつた。それ以来従兄は「よんこ」を口にしなくなつたが、今呼ばれてみると植民地で過した少女時代が懐しく胸にこみ上げてくる。私は今でも彼を「たんちゃん」と呼び他人行儀に保さんとはいえなかつた。

「たんちゃんのお母さんの病氣はどんな具合なの。手紙も上げないでいたけれど」腸閉塞とかいう厄介な病氣に罹つて寝ていた、蒼白い顔の伯母を想い出しながら私は尋ねた。

「うん、有難う。元気でいるよ」

彼は言葉少なく答えた。私は従兄の沈んだ言い方に伯母の容態が思わしくないことを直観したが、それ以上聞くのを止めた。

思い出した様に彼は黒い鞆を開け、四角い紙包を私の前に置き「これは藤川君からの見舞、ことづかつてきた。君によろしくと言つてたよ」

「藤川さんはどうして私がここに居ることを知つたのかしら」私は誰にも知らさず此所に来たつもりであるが、知人達の間にもう私の噂が伝わっているらしかった。

「そりゃあすぐ解るさ、日本人コロニアの社会は狭いもの。特に好意を感じていた女性に対しては……」

「あら変ないい方ね。私何も藤川さんと疚しい交渉などなかつたはずよ」

「どうだったかなあーあやしいものだ。藤川君は「よんこ」が好きだと僕に洩らしたことがある。今でも忘れかねている口振りだったよ」

「まあ、そうだったの、何だか信じられないわ。でも彼結婚しているんでしょ」

「そう、子供が一人あると言ってた。妻君の実家は大きな珈琲園を沢山持つてるそうだ」

結婚をして一子の父親でありながら、どうしてこの取るにたりない、つまらぬ女の私を何時までも想い続けてくれるのであろうか。彼の胸の裡に私の像がどんな風に焼きついているとこののであろう。おそらく彼は、現実の私とは大凡かけ離れた、美しく理想化された私であるのかもしれない。

過ぎ去った青春の日は、虹の様に儂く美しい思い出として彼の裡に蔵されているのであろう。今でも私を忘れかねている彼の古風な心情に、私は切なく動悸をたかぶらせた。いつになく興奮した私は愚しい問を發して従兄を戸惑せたり、他愛のないことをしゃべった。

やがて面会時間の終了の鐘が暮色のただよう療院に鳴り響いた。少数の面会客は賑やかな別れの言葉を残し雨の降る中を帰って行く。

饒舌に過ぎた私は咳が烈しくで、ひどく疲れを憶えた。枕を低くし横になり、両手で上気した頬を押えると、こめかみの打つ脈音が高く伝わってくる。眼を閉じ従兄の残した言葉を反すうする。今頃になってから藤川のことを従兄が口に出したのが怨めしくもあった。

あの当時にそのことを聞いていたならば、私の運命も違った道

をたどっていたであろう。だが何もかも終ってしまったことなのだ。従兄がよけいなことを言わなければ、忘却の彼方に押しやっ  
てしまった人を想い返すこともなく、波立つ気持も起こらな  
かったであろうに、私は物静かな藤川の瞳を想い出し溜息をした。  
「ちよつと頼子さん、どうしたの。気分でも悪くなったの」

大野さんは自分の紙包をがさがさ音をたてて開けながら問う。

「えゝ、一寸疲れたものですから」

「さっきの人、貴女の誰？ 一寸美男子じゃないの。昔の恋人かし  
ら、随分仲よく話していたわね」

大野さんの詮索癖が始まったのである。男性さえ見たら変に推測  
する、下劣を大野さんを私は軽蔑した。

「そんな風にみえて」

「ねえ、そうでしょう。白状しなさい」

「恋人かもしれないわ、私の好きな人だもの」

私は大野さんをからかいたくなって思わせぶりに答えた。

「そうだと思つたわ。どう、私の直感は一ぺんで当るでしょう。薄  
幸の恋人を見舞に來た訳ね。ロマンチックだわ」

大野さんは勝手なことを想像していった。

「おいしい、皆スープを飲むか。いらぬ者は早く知らせてくれ」

マリアが部屋の入口に立ってがなり立てる。日曜日の夕食は御  
飯はなくスープだけである。それは息者達が面會に來た人達から  
食物を貰い、不味い食事をしないことから夕飯が廃止されたのだ。  
大野さんは娘が作って來たらしいのり巻を頬ばっていた。私は

水っぽいパンの浮いたスープを飲み終え、従兄が置いていった藤川の「見舞」と書いてある包を開いてみた。

それは美しい花の絵模様の菓子箱であった。ふと見るとその下に箱と同じ大きさの本があった。表紙には「結核の完全治療法」と金文字でしるされてあった。ぱらぱらと頁をめくると折りたたんだ便箋がはさんである。

私は人のしまい忘れた物を読むのは、はしたない行為だと思いつつ開いて見た。だがそこには私あての名がはつきりと書いてあった。

手紙には、私の病気を知って驚いたことや見舞の言葉が書いてあった。

最後の方に自分も肺が悪く、妻子を田舎の実家にあずけ、独身時代にかえったつもりで自宅で養生している。一カ月に一回は専門医に気胸して貰っている。それに現代の薬学が発達しているから新薬もあり結核も恐い病気ではなくなったから、貴女もこの本を読んで自分の病状にあった療法をされたい、と細かく几帳面な文体でしたゝめてあった。私は彼が病気でいるのを初めて知った。従兄は藤川が病気であることを私には言わなかったが……。藤川の妻は従兄と同じ町に住んでいるはずであるから知らぬことはないと思う。藤川の文面には一行も浮わつたことは書いてないが、本を送って寄こしたことは、やはり私に対する彼のつつましい愛情の表現の様に感じられる。私はほのぼのとする温いものを感じながら、うす暗い電気の光をたよりに始めの頁から消燈の時

間まで熱心に読んだ。

消燈の時間が来ても、丘下の町へ踊りに行ったシーダの姿は見えない。

彼女の寝台だけが平に白々と闇に浮いてみえた。夜番のシツカが便器をがちやがちや鳴らし乍ら、洗面所に立てない患者のベツト下に置いて歩く。今夜は陽気に昔のカルナバルの歌を調子はズレに唄っていた。

「シツカえらく陽気だね。何か嬉しいことがあったの」

私の隣に便器を置きに来たシツカに尋ねた。

「うん、今日マリードがね、面会に来てくれた」

「ふーん、あんたのマリード死んだのではなかったの」

「死んだけど私のところへ来るのだよ。どうしてだろうかあんた知ってる」

「私には解らないわ」

「私も」

相手にすると際限のないシツカのおしゃべりに私は黙ってしまふ。日曜日になると、新しい服に着かえてシツカはテラスの入口に立って独言を言う。人の眼には見えぬが、シツカは楽しげに笑ったり、声を低め、手の表情よろしく夕方まで立っているのである。

私は昂ぶった気持が容易におさまらず眠れなかった。様々なこと柄が次々と想い出され、益々頭が冴えてしまった。どのくらい時間が過ぎた頃であろう、シーダが忍び足で部屋に入ってきた。

全身ぬれているらしく寝巻に着がえ、床にぬぎすてている服が、ぬれ雑布を投る様な音がした。しばらくしてからシーダは烈しい咳を何回もしていた。

翌朝は明るく陽さえ射し、清々しい日であった。洗面をすませた私は寝台に座り、窓から見える庭園のバラの花を眺めていた。

突然シーダが烈しい咳をしたかと思うと、いきなり起き上り、痰入を取り口にもつていく。喀血したのである。真赤な血が白いコルシヤの上に飛び散る。たちまち鮮血は小さな痰入れに一杯になり、ジツタが慌てて便器を受けてやった。

「あゝ、ママエ……」

シーダは口の廻りを赤く汚して母親を呼ぶ。ごぼごぼと鮮血は白い瀬戸引きの便器に溜っていく。私はその姿を呆然となす術も知らず見ていた。急を聞いて軽患者の病棟の看護婦が来る。直に止血注射をし静かに寝かされた。

「だから言わぬことじゃない。馬鹿みたいに雨の中を踊りに行くからだ。」

お前のママエが聴いたら何と行って泣く、パリヤサ奴」

マリアは前掛けで手を拭き乍ら出て来るなりシーダに怒鳴った。B部屋の息者達も驚いて多勢集まってきた。すると大野さんが「あのね、この間シーダが、死んだエズメラルダから取った玩具の小犬、そら白と黒の磁石のある玩具、あれをね取ったものはきつと死ぬのですよ。今まで私が見ていたが、あれを持った者は、かならず死んでいるわ」

死魔のついた玩具だと、気味の悪いことを大野さんはいう。私はシーダの喀血を見て気持が悪くなった。恰も自分が喀血したようにぐったりとなりベットに入ってしまった。熱が出ている様だ。睡眠不足と昨日の興奮が禍いらしい。自重して養生しよう。私には三人の子供が待っているのだ。

今までのような自暴自棄の気持をあらため、もつと自分を大切に充実した生き方をしよう。「早く治らなければいけないのだわ」私は眼を閉じて何回も繰り返えた。

(終)

玉葱 (22枚)

伊那宏



作

創

玉葱  
(22枚)

伊那宏

何の飾り気もない小さな窓。それが私の生き甲斐なの。そこには誰も知らない私の秘密があるんです。

私の家は、この大都会の、俗にいう場末と呼ばれるある一角にあります。

石畳の街路に面して立ち並ぶ家々は古くて、二、三軒のバールがあるくらいで、他に店というものはなく、さりとして住宅街などと高尚な呼び方をされるほど、上品な街などでもなく、要するに下層階級の人間共が、何となく集って形成している、文化に乏しい貧しい街なのです。

でも私はこの街が好き。「住めば都」といわれても否定はしなくても、でも他に好きな原因があるんです。

第一この騒音の塊りみたいな都会の中で、自動車も通らずそれほど静かがある場所があるでしょか。それに、いくら古びたとはいえ、街路には樹が並んで、それが春になれば若々しい黄緑の葉が芽吹いて、何ともいわれぬ情緒もあるし、でも、それよりも何よりも、もつともつと素適なことがあります。

古びた私の家の街路に面した小さな窓。それがあつかりに私の生活は、貧しいながらも毎日々々幸せに満ち溢れているのです。

これから、貴女だけに、その私の小さな秘密を告白するわ。でも、誰にもいわないでちょうだい。

貴女も御存じのように、私の家には病身の母がいるばかりで、

とつても侘しい生活なんです。収入といえは、私がある会社の下請けでやってる縫い物だけで、二人を糊口するのが精いっぱい。たまにセントロへ出て映画を見たり、レストランへ入ったり、本屋さんで好きな本を買ったりなんて夢にも考えられないくらいなの。そりや時には、ふっとたまんなく、こんな生活から抜け出て、思いきり贅沢に暮してみたいなんて欲望を持ったこともあるけど、考えてみればお母さんなんか私よりももつともつと淋しい。いえ、そうでなくても日本から来て、何十年過ぎて、お父さんが死んだ今となつては、誰一人とて身内も居ず、残したものといえは、私という娘一人だけなんだから。毎日々々床に臥しているお母さんの生活を思えば、これっぽちも贅沢をいえる身ではないんです。

「和子、お母さんのことなんか心配せずに、シネマでも見て来なさいよ」なんてか細い声で私を見つめながらいうお母さんを見ると、何だか知らないけれど、お母さんがいとうしくていとうしくて、慌てて部屋に駆け込んで、しばらく眼がしらを拭い、そうして何でもないように出て来て、笑いながら、私、シネマなんか見るよりも、縫い物をしている方がずっと楽しくて安心しておれるんですって言うてやるの。するとお母さんは「そうって領づいて、「でも無理はいけないよ。一番いけないよ」なんて少し涙ぐみながらいうんですもの、私もう一度部屋の中へ駆け込んで、それきり出て行かずそのままミシンを踏むんです。

ああ、何だか悲しい生活ね、私たちって。

お母さん、もう余り長いのではないんじゃないかしら、なんて

ふと思うこともあるけれど、でもそんなこと考えたらますますやりきれなくなってしまうって、もう死ぬよりほかなくなってしまうような恐ろしい気持ちにとらわれます。

いつころからだったかしら。ミシンの手を止めて、窓から真向いにあるもうかなりさびたボール、といつてもメーザが五つ六つ並んでいて、この辺りの住人がよくたむろしている光景を、何気なく見つけているうちに、私は一つのことを発見したんです。

だいたいこの辺の男達は、よれよれの服を着た労働者ばかりなのですが、その男は、服の着こなしも上品で、この辺りに住むにふさわしくないハンサムな青年でした。その男がほとんど毎日午後から夕方まで、そのボールの、しかも光りのとどかないような薄暗い奥のメーザに座って、一本のビールを飲んでいっているのです。

はじめのうち大して気にも止めていなかったんですが、それが毎日のように目の中へ入って来ると、何だか、自分の友達のような心易い気分になって、そうして、いつかしら私には、その男の姿を見るのが一つの楽しみにさえなってきたんです。

上品ななりをして、たった一本のビールで半日を過ごしているなんて、よっぽど退屈しているか淋しいのかどちらかなんですもの。気のせいかどうか、そういえば彼の表情に何かしら淋しい影があって、自分の境遇を思うにつけ、次第にその男、いえ「その方」と呼ぶようにするわ。私はその方に好意を持つようになってしまいました。

仕事の合間に、私はその方のことを考えるのが楽しくて仕方が

ありませんでした。お金持ちの家の坊っちゃんかしら？ それにしてはこんな場末のさびれたバーへ毎日足を運ぶなんて粹狂にも程が過ぎるし、何かの目的があるにしてはいつこうに立つ気配もなく落ち着いてビール一本をもてあそんでいるし、きつとこんな貧しい雰囲気が好きなのね。

彼は独り者かしら？ それとも恋人でもお持ちかしら？ 本を読むことが好きなような方ね。何だか額が秀いでて学者肌のようにだし、数学のむずかしい問題なんかすらすと解いて、そうして偉らぶりもせず、相変らず淋しそうな顔してビールを飲んでいらつしやるような方に見えるわ。能有る膺は爪を隠すってお母さんがよくいうけど、あの方はまるで自分の才能をおくびにも出さず、陰気な場所へ平気で通っているのね、きつと。

小をな窓の中からあの方を見つめ、私はいろいろな想像をめぐらししました。そうして、笑わないで下さいね、とうとう私はあの方を愛しはじめていることに気づいたのです。

片想い。それも一度として話を交わしたことのない方を、お可笑しいかしら。こんな恋の仕方。でもこんな恋もあるってことを貴女に教えてあげたかったの。こんな恋だって恋の楽しさに変りはないのよ。むしろこんな恋ほど純粹だと思っんです。

このことはお母さんにも内証。でもお母さんは敏感ね。「和子は近頃楽しそうね。何かいいことでもあるのかい」ですって。騙すなんてことはいけないことだけど、いくらやさしくって淋しそうにしているお母さんにだって、こんな秘密なら持っていてさし

つかえないと思うんです。だから私、フフツと笑って、そうしてそのまま台所へ入って、ミカンとバナナを皿に載せて来て、「りんごが食べられるといいんだけど、なかなか買えなくて」って、お母さんをはぐらかしてしまいました。

お母さんに私が恋する女に見えたのかしら。見えたっていい。どうせ女は恋する動物だもの、当り前よ。でも相手がどんな人かは、まさかお母さんにも想像出来ないでしょう。フフ、楽しいことね、秘密って。

あの方は相変らず来ます。でも、私はあの方がボールへ入る姿も、ボールから出て来る姿も見たことはないのです。きっと、私に食事の後かたづけをしている時に来て、そうして、夕食の仕度をしている時に帰ってしまうのね。すばやい。まるで私の目を盗んで入ったり出たりしてるみたい。

朝、カフェーをこしらえてお母さんのところへ持って行ったら、朝、和子はもう十九になったんだねえ」

いやにしんみりした口調で言うんですもの、私どうしたのかと思つて、カフェーの盆を手にしたままじつとお母さんの顔を見つめていました。

「ねえ、和子」にっこり笑って少し間をおいてから、「お前いい人がいたらお母さんに遠慮なく結婚してもいいんだよ」何のことかと思つたら、そんな話でした。でも私にはお母さんの心配よくわかるんです。病身でありながら年頃の娘をかかえてる母娘生活。どうにもならないことは、私もお母さんも日頃覚悟していること

でした。

「和子に幸せになってもらわなくては、お母さん死んでも死にきれませんよ」

にっこり笑ってお母さんが言いました。冗談でしょうけど、私も、「ええ。幸せになってお母さんを安心させてお父さんのおそばに行かせてさし上げます」っておどけて言いました。でも心の中では、お母さんが丈夫になるまで和子は結婚しないつもりです……。

貧しいながらも、和子は幸せ者だとつくづく思うのです。

あの方は、やはり相変らず来て、誰それと話を交わすでもなく、淋しそうに時には悲しそうに（私にはそう見えるんです）そして、やはり相変らずビール一本を飲んでいのです。私には彼の気持が一つ一つ解かるような気がして、そうして、今何を考えているのかも手にとるように解ってしまうのです。あの方きつとお母さんを亡くされたのです。だから悲しみに耐えられず、こんなところへ来て気をまざらわしているのに違いない。お母さんは美しくやさしい人だったと思います。母の愛情を失った痕跡があの方の表情に漂っているもの。なんて勝手に勝手に決めて、でもきつと私の判断は当たっているはず。昔から私はか（・）ん（・）がいいってお父さんもお母さんもおっしやってたもの。いつだったかお母さんが「目をつむってごらん。そして私の持っているものを何だか当てるってごらん」って言ったから、しばらく考えて「ジャブチカーバ」って答えたら、お母さん驚いて「よく解ったのね。見てたんでしよう」とちよつと笑って、それからお父さんと呼んで三人で

その小さな黒い木の実を食べたことがありました。

ジャブチカーバをつまみながら「か（・）ん（・）の良い子は早死にするっていうけど、和子のかんはまぐれ当りだから安心ね」などと笑いながら話した頃は、まだ私達の家はささやかな幸せに満ちていたのですが、お父さんが「癌」という恐ろしい病気で亡くなってからは、少しばかりあった貯えもあらかたお父さんの病気につきこんで、それから、私とお母さんの侘しい生活になってしまったんです。お父さんが亡くなってその打撃がひどかったのか、しばらくしてからお母さんも持病の心臓が悪くなって、とうとう明日への希望もないような悲しい今の生活になってしまったのです。お父さんも、お母さんもブラジルへなんか来ない方がよかったのよね。そしたらもつと今より良い暮らしになっていたと思うんだけど。

でも、今さらこんなこと言ってみてもはじまらない。もつともつとお母さんを大切に、少しでも楽しい日々が送れれば……と、このごろそんなことばかり思うんです。

どうも話が家のことばかりになって……でも私、あの方のことを忘れておるわけではありません。あの方は相変らず来ていて、そうして、私も相変らずミシンを踏む合間に、小さな窓からなつかしくあの方の姿を拝見しておるといいう日が続いていることをお知らせしておかなくちゃ。時にはミシンを踏みながら「あの方の赤ちゃんを生んでみたい」なんてとほうもないことを考えて、思わず顔を赤らめたり、でも、女が恋をする目的は、結局、無意識で

しようが、愛する人の子供を生むということにあるのじゃないかしら。愛する人の子供を生んでこそ初めて、女は恋の勝利、愛の勝利を実感で受けとめ、そうして、それを生きるための絶対的希望として安心することが出来るんです。フフ、いっぱしの哲学者ぶっちゃって生意気な和子ね。

でも不思議なことがあるんです。今まで気はついていたけど、少しも気にならなかったことですが、私、あの方が、ボールへ入って行く姿も、ボールから出て来る姿も一度として見たことがないばかりか、あの方が立っている、もしくはボールの中を歩いているそんな姿を、今まで一度として見たことがないって、夕飯のおかずに入れるバターニンヤを刻みながらふと気になり出したんです。

お可笑なこと、そんなことが気になるなんて。でも愛する方のすべてを知りたいっていうことは、愛する者の本能に近い欲望ではないかしら。こんな話があるんです。ある恋人同志が結婚した。ところが一週間もしないうちに二人は別居を始めた。その理由は、女の背中に大きな痣があつて、それを男の方は少しも知らなかったからですって。それを事前に知っておけばどうにか方法もあつたでしょうけど、悪いのは勿論女の方にあると思うんです。だって男の方はそりゃ男なんですもの、時には動物の本能をあらわして、女の身体を抱いてみたかったに違いありませんが、私は、女が男の欲求を拒み続けて、そうしてとうとう男を騙して結婚までこぎつけて行ったと想像しているんです。女が悪かったのよ。だ

いたい昔から女は悪者とされているんですもの。日本語に「悪女」って言葉はあっても、「悪男」って言葉はないんだぞなんて、お父さんが酒を召し上がるとよく言っていたことを思い出すわ。それに、悪魔はこの国でも女の姿が多いんです。私自身の心のどこかにも、きつと悪魔的要素が潜んでいるかも知れません。それがちろちろ鎌首をもたげないように用心しなくちゃ。

とにかく私は、あの方が現われる姿を一度ほんとに一度だけでいい、見届けておきたいと考えました。すらつとしたきつとスタイルのいい方に決っているでしょうけど、でも、どんなズボンをはき、どんな色の靴を履いているかしら。服はいつでも白系統のものを着ているから、ズボンだつてきつと同系統色を愛用なさっているはず。でも靴は黒いものが一番似合うのじゃないかしら。茶色なんてのは中年向きだし、白っぽいものなんか何か重心が無いようで、服装全体のバランスを崩してしまうから私は嫌い。

きつとあの方は黒い靴をお履きになっているに違いない。私のかんは当っているんだから…なんてバタチンニヤを刻みながら、楽しく想像していたら、ちよつと手元が狂つて、人さし指のさきを切ってしまった。あつと叫んであわてて手を引つ込めたら、切りかけのバタチンニヤが床の上へころがって、でもそんなのにかまっていられず、急いで包帯を取りに行ったら「まあ騒々しいこと、どうしたの和子」って、お母さんに気付かれてしまいました。一人で秘密を楽しんでいるから、きつと神さまが懲しめて痛い目に合わせ、お母さんにそれとなく教えたのではないかしら。

たいした傷ではなかったけれど、私の指の包帯を見たらお母さんは心配して「お薬はつけたかい」って言ったから「大したことないからちよつと結んでおけばすぐ治るわ」と答えると「そんないい加減なこといけません。いくら小さな傷でもよく手当てしておかないといけませんよ」ちよつと厳しい口調になって、そうしてむつくりと床の上へ起き上がって「薬の箱を持ってきなさい。お母さんがやってあげます」

もうかなり以前のことですけど、お父さんが足に小さな傷をつけて、それをそのままにしておいたら、化膿して熱を出し「慌てて医者の治療を受けて治ったには治ったけど「破傷風」とやらいふ病気のなりかけで、今少し手当てを遅らせていたら命取りになったということをも、もう何回もお母さんから聞かされていりたから、叱かるようなお母さんの言いつけに、私は素直に従いました。

これも一種の「恋の傷」かしら。

そんなことがあって二、三日、どういうものかあの方はボールへ姿を見せませんでした。何か病気でもしたのかしら。そんな不吉な予感が私を襲いました。

でも、四日目頃、いつもと変りないあの方の姿を、薄暗いバルの奥に見つけて、私の心の中は突然ぱつと電気が灯されたように明るくなり、思わず「ビーバ！」なんて小さく口の中で叫んで、それから、お可笑なことその日一日私は脇目もふらずに一生懸命ミシンを踏み、遅れていた子供服五着を仕上げてしまいました。

小さな窓の中の私の秘密は、ぎつとこんなことなの。ほんとに楽しい浮き浮きするような毎日の連続でした。でも、この話はまだまだ続くはずだったのに、私が馬鹿げた欲望を出したため、この楽しい毎日に終止符を打つはめになってしまったんです。貴女にこのことお話しするのほんとに悲しいことなんだけど、でも、結末のない話ほどつまらないものはないから、ついでにおしまいまで話してしまいます。

馬鹿気た私の欲望ってのは、さつき言ったようにあの方の現れる姿を見るっていうことだったの。

二、三日あの方が休んで、四日目に現われて私を安心させた次の日の夕方でした。ミシンの仕事を終わって、そろそろ夕飯の仕事をしなくちゃと思いつながら、窓からしばらくあの方を見つめているうちにふとあの方が出て行く姿を見てやろうと思いついたの。十分、二十分過ぎても、あの方は立ち上がろうとしません。仕事を終ったこの辺りの男連中が、三々五々とボールへ集まって来はじめ、もう殆どその連中の影であの方の姿が見えなくなってしまっても、私は気付かれないようにひっそりとあの方の現れるのを待っていました。

三十分。

あの方が現れました。

でも、その姿を見たときたん私は、頭の上から大きな石が落ちて来て、私をぺしゃんこにしたような強いショックを受けたのです。ああ、何ということでしょう。何という神のいたずらでしょう。

何という運命の皮肉さでしょう。

あの方は、あの方は小人だったのです。いえ、上半身は並の人と少し違って違いはないのに、下半身はまるで短かく、周囲で喋りとはしている男達の半分くらいの背丈しかなかったのです。一人前の上半身を支えて、その短かい足がよちよちと人垣をかき分け往来へ現われて来て……ああ。

悲しみなんていうもんではありません。驚きなんてもんでもないんです。

絶望なんてすつと通り過ぎて恐怖だけが残りました。恐ろしさのあまり急いで窓を閉め、部屋を飛び出して台所へ行き、私は無我夢中で米を洗い、鍋に水を入れてフオゴンに火をつけ、そうして玉葱を刻みはじめていました。何を料理するなんてことは少しも考えず、ただただ玉葱を刻んでいたんです。刻みながら「間抜け！ 間抜け！」って、口の中で繰り返して言ううちに涙がぼろぼろこぼれてどうしても止まらず、それが玉葱の臭いが目にするからだとは知ってはいたのですが、とうとうほんとに悲しくなつて、玉葱も何もほっぴり出して、おいおい声を出して泣いてしまいました。「どうしたの和子」ってお母さんの声があったのに返事もせず、今度は声を押し殺して泣きました。

「何を泣いているんだい、和子」

もう一度お母さんの声がしたと思ったら、直ぐに姿を現わして「悲しいことでもあったの、話してごらん、聞いてあげますよ」

今まで一度として聞いたことのないやさしいお母さんの言葉に

一層悲しくなつて、又声を出して、そうして泣きながら「玉葱を刻んでいたら…涙が出て来て…ふとお父さんのことを思い出したら…悲しくなつて悲しくなつて…」

泣きじゃくりながらこんな嘘を平氣でお母さんに話しました。

「馬鹿だねえ」

苦笑しながら力弱くお母さんは言つて、でもお母さんには私の言葉が嘘だと解つた様子でした。

その晩、私の作つた玉葱の味噌汁をすいながらお母さんが

「玉葱に泣かされるなんて、和子もいよいよ弱虫になつたのねえ」  
恥かしかつた。ほんとに恥かしく、それを隠そうとして「涙のまざつた味噌汁つて初めてね。美味しいでしょ、お母さん」つて言つたら「一人前の女になつた和子の味がするものねえ」

やっぱりお母さんは私の心を見抜いていらしたのね。明日から強く生きねば…。二人だけのささやかな夕飯を食べながら、私はつくづくそう思いました。

(終)

蓼科 冴智雄

(ちえっ！)——少年は軽く舌打ちふた。少年は拾った右手の小石をぎゅっと強く握締めて、急速な勢いで彼の視界から逃れて行く茶色の大きな犬の後姿を見ていた。前にひどく棒で叩かれた事のあつるその犬は少年を見るが早いかもう逃げていた。(犬は叩かれる何の理由も落度も少年に対し持ち合せていなかった。)少年は(へっ)と唾を吐きながら右手の小石を力一杯道に叩き付けた。

それから彼は眼前でラランジヤの葉の小さな切片を忙しそうに運ぶ隊商達——サウーバを足で踏みつけながら轢き潰し始めた。少年は執拗にその行為を繰り返した。彼の表情は唯、硬く冷たくすつかり苦り切っていた。しかしその中に微かに淋しい影があつた。

心年ははふと足を休めて眼を上た。少年より少し年下の半黒の男の子は前方の道の真中に佇む彼を発見すると、今来た許りの道を大急ぎで引返し始めた。少年はそれを見ながら露骨な憎悪を顔に表した。少年は小さくはあつたが強く吐き出す様に言った。

(バカヤロウ！)

それは半黒の男の子に対する罵声であると同時に自嘲でもあつた。少年は自から足早に遠去かる男の子を冷たい視線で追っていた。

少年の性格ががらりと変ったのは母が死んでからだった。母の突然の病死を境にして少年は依怙地で怒りぽい暗い性格になっていった。彼は一周忌後迎えた新しい母にどうする事も出来ぬ異和感を抱いていた。

継母は悪い人ではなかったが無頓着で大様で不器用で生母と全く対照的な性格の持ち主だった。

仕事、仕事で日を送り二十を越してしまつた彼女は生母とは比較にならぬ程教養も低かった。そして牛の様な彼女の神経は少年に唯嫌悪感丈を与えた。

彼の父は大工だった。請負仕事で家を明ける事が多く、その上生来口数の少ないむつりした父に少年は物心ついてからずつとどうしても心から打ち解ける事が出来なかつた。少年が父としての感覚を得るのはナタールと彼の誕生日だった。その両日父は毎年必ず贈物をして呉れたからである。

少年の良き話し相手であり、指導者であつた母を失つてから彼の心に孤独の穴がぽっかりあいた。そして誰もその孤独の穴を埋めて呉れないと知つた時かち少年の心は荒んでいった。彼は生き物を殺し、傷つける事に異常な熱意を示すようになった。そして女の子まで苛めて泣かせ、男の子とは直ぐ喧嘩をした。

少年は既に来てから半年たつた現在も新しい母を決して「ママイ」と呼ばず「小母さん」と呼んでいた。流石の彼女も（小母さん）と呼ばれた時はいつも哀しみと淋しさを瞳に表した。

少年は思い出していた。始めての対面の場面が彼の脳裡に苦々しい思い出となって甦えつつくる。父はちよつと俯きながら低い声で少年に言った。

「おまえ、この人が新しいお母さんだ。これから（ママイ）って呼ぶんだ。いいな！」

「……………」

「私が今度はお母さん、ママイって呼んでね、いいこと？」

「……………」

「おまえ、母さんなんだよ、この人は」

「……………」

少年には何の感動もなかった。彼の心は不安と困惑で一杯だった。

日毎に塞ぎ込み陰気になる少年に父は言い様のない淋しさと焦りを感じていた。父は打ち解けようとすればする程頑なな穀の中に閉じ籠っていく少年に対しどうする事も出来ずにいた。

ある日、ふと父は（少年を博物館へ連れて行ったら）——と言う考えに気付いた。彼は三年前妻と少年とを連れ博物館へ行った時の様子を昨日の事の様に思い出していた。彼は少年がすっかり有項天になりはしやぎ廻り我を忘れていた様子を鮮明に思い出していた。（亡き妻が眼を細めて子供の喜ぶ様を見ていた。……………）

「ねえー、これなあに？」

「マシヤード、インジオが使ったの」

「インジオ丈じゃない、日本人も、ずつとずつと昔の人達が使つ

「ただよ」

「やあー、パイの方が良く知ってるよ」

「まあ、今日はパイの肩持つのね」

父が少年に（次の日曜日には博物館へ行こう）と切り出した時、彼の顔には何の感慨も浮ばなかった。少年は唯怪訝な顔で父をじっと見詰めていた。反応のない少年に父は重ねて少し強く言った。

「どうだ！行こうじゃないか。いいだろう？」

「……………」

「どうだい？」

「うん……………」

少年は傍で継物をしている継母の横顔をちらっと見てからぼつんと言った。

結局、博物館へは父と少年丈で行く事になった。継母は（あの子の気持ちを私が壊したらいけないわ）と言って自から辞退したからであった。

オニブスの中も、電車の中でも父子に何等の感情の交流した話合いはなかつた。父はすっかり押し黙って車外の景色許りに見入る少年から重苦しい疎外感を感じ取った。そして彼は父子と言う密接な関係にありながら子供の固い壁を破って打ち解ける事の出来ぬ自分に或る種の菌痒さを感じていた。こうした事態を氷解さ

せるには遜った勇氣―子供と同一線上に立つ勇氣が必要な事も彼には十分わかっていた。

しかし実行するとなるとなかなか容易ではなかった。親としての座、父としての高座から見下している限り子供は反撥する丈なのだ。

電車に乗り移ってから三十分位たった時、父は少年に色々聞いてみた。

家に居る時より相手を受け入れ易い状態にあるのではないかと考えたからである。

「なあ、お前、今の母さん嫌いかい？」

「……」

「パイはね、怒りはしない。好きでも嫌いでもいいんだ。でも嫌いだったらどんなところが嫌いか言ってくらん」

「……」

「誰も神様じゃないから自分で気付かぬ悪い点を持っているのさ。でも誰かが気付かせてやれば大抵の事は直せるもんだ」

「……………」

博物館の中でも父が期待した少年の変化は起きなかった。化石も動物の骨格標本も土器や石器も少年に何の感動も与えなかった。少年は相変らず無表情だった。

しかし、鳥類の剥製が並べてある部屋に入った少年は突然そこに立ち止まってしまったのである。少年は他の鳥の標本に眼もくれず、啄木鳥の剥製ばかり見つめていた。

P i c a p a u — a m a r e l o , P i c a p a u — c i n  
z e n t o

P i c p a u — d o u r a d o , P i c a p a u — v e r  
d e , P i c a p u — c a r i j o

少年が特にじつと見詰めているのは p i c a p a u — d o u r  
a d o だった。父は唯、呆然として少年の様子を見ていた。父に  
は何故少年がこの鳥に心を惹かれるのか理解出来なかった。少年  
は深い物思いに沈みをがら尚も啄木鳥を見ていた。

今少年の心を満しているのは亡き母への強烈で鮮明な思い出の  
数々だった。彼の脳裏には笑みかけ、話しかけ、そして歌う母の  
姿が次々と浮んだ。

少年は啄木鳥に関して母が話して呉れた童話や詩を思い出して何  
度も涙ぐみそうになった。静かに込み上げて来る懐しさと切なさ  
の入れ混じったやるせない感情を少年は傍の父を意識してじつと  
抑えていた。

母が少女の頃作ったと言う啄木鳥の詩は少年を殆ど嗚咽寸前の  
感情に迄追い込んでいた。

少年は何回も聞かされたこの詩を完全に暗記していた。この稚  
拙な詩は今、少年の心を虜にしていた。少年の心の中には静かに  
吟誦する母の姿があった。少年の耳には優しく語りかける母の声  
があった。

耳を澄してごらん

ほら、聞えるでしょう

トンツー、トンツー、トントン

あれは森の通信士

耳を澄してごらん

ほら、今日も休まずに

電報を打ち続けている

働き者の啄木鳥

少年はそこに亡き母への強力な「思い出の絆」を発見した。少年は何とかして啄木鳥の剥製を自分の部屋の亡き母の写真の前にいつも飾って置きたいと思った。

少年は毎日啄木鳥の事許り考えていた。少年は憑かれた様に、どうしたら啄木鳥が手に入るかを考え込んでいた。

父は、食事中にも急に手を休め、焦点のない視線を遠くに向けてながら考え込む少年の様子を、理解する事が出来なかった。彼は父として、余りに子供に接する機会が少な過ぎた事を、今更ながら後悔していた。今迄全く妻委せであり、子供の教育について、少しの自信も持ち合せぬ事が、彼を父として非常に不安で心細い者にしていった。

少年の心は相変らず孤独だった。友達も、犬や猫さえも彼には寄り付かなかった。少年はますます救い難い孤独の淵に沈んで

行った。

少年は、友や家畜さえ自分から遠去かろうとする事について、自分自身が起因する事に気付かなかつた。少年の僻みは段々強くなっていった。少年の心が孤独に傾けば傾く程、啄木鳥を入手したい気持は強くなるのだった。

継母と少年は依然として平行線を辿っていた。継母の心の接点を見い出す努力はずっと続けられていた。彼女の心からの努力にも頑な少年の心にいつも「否」と言う反応しか示さなかつた。時として、彼の表情には冷笑や嘲りさえ浮かんだ。継母の少年に対する態度は、一にも二にも、三にも唯奉仕のみだった。それは優しい乳母が御曹司を扱う態度に似ていた。

継母が少年の許可なしに隣りの幼児にプラスチックの壊れ掛けたカミニヨンの玩具をやった時から、二人の間に気不味い空気が停滞し始めた。少年にとつて、その壊れ掛けた玩具は、今は亡き母が買って呉れた大切な思い出の一つであつた。継母には、少年のその心情が理解出来なかつたのである。隣りの幼児がそれを欲つた時、継母の眼には、何の役にも立たぬ壊れ掛けた一つの幼稚な玩具として映つたのであつた。彼女は、今更ながら妻として、母としての自己の立場の難しさを痛切に感じるのだった。

博物館へ行ってから十日余りたったある日、少年の顔には珍しい会心の笑が浮んだ。―そうだ！あのアレモンのベエーリョに付いて行くんだ！―

少年はそつと呟いていた。彼は、月に二回決まつて猟に行くド

イツ人の老人を知っていた。

この老人は、大の日本人びいきで、今でも昂然とアメリカ人やイタリア人を口汚なく罵った。

老人は、いつも少年に会うと口癖の様に言った。

「おい、今度戦争する時はなあ、裏切りのイタリア人ぬきでやるんだ。

ヤンキーなんかドイツと日本語で沢山だ。それにしても日本はドイツより後まで戦ったんだからなあ。偉いよ、本当に日本は。」  
少年は、この老人が決まって月の第一、第三日曜日に狩に行く事を思い出していた。そして、今日から二日後が第三日曜日である事に気付いて「しめた！」と小さい叫び声を上げた。

少年は、こっそりと近道して家から見えぬ曲り角で老人のぼろジープを待っていた。

空は雲が少く、朝から良く晴れそいた。少年の耳には、今朝は小鳥達の囀りが快よく響いた。

少年は、父母に隠れて持ち出した猟銃を大事そうに撫で廻した。ずっしりした銃の重みと、両親に内緒であることが、少年を今迄味った事のない興奮感で一杯にした。ぼろジープの重そうをエンジンの音が遠くから朝の空気を震わせるのを聞き付けると、彼は何と言って老人に頼むかを考え始めた。老人のジープが視界に入ると、少年は「どうぞ、連れて行って呉れますように」と切なる願い―祈るような願いを込めてゆるやかに右手を振り続けた。

老人は少年の願いを聞き終わると同時に、大声で言った。

「おいっ！パイやママイのリセンサはあるかい？」

そして澄んだ瞳で暫く少年を注視した。少年は、返事の替りに首を縦に二度振って見せた。

それはちよつと気不味くはにかんだ仕草だった。しかし真剣な願いだった。

「うーん、ちよつと怪しいなあ？ まあいい、連れてってやろう」

少年は、この言葉でほつと安堵した。老人は微笑みながら少し少年を揶揄するように言った。

「ところで……鉄砲の撃ち方は知ってるだろうな。筒先は獲物の方へ向けるんだぞ！」 「少年は銃身を軽く叩いてから、右腕をV字型に引き付けて見せた。老人は言った。

「ふん、危ねえもんだ」

少年はこの老人とは何の蟠りもなく話し、素直に笑う事が出来た。それは老人が異人種であると言う事を差し引いてもなお、実父以上に父性的な要素を持っていたからである。少年は、老人の持つ明るさ、叡智、大らかさ、温い思い遣や等の中に、閉された自分の心を素直に開く事が出来たのである。

道は段々狭くなり、原始林の手前で終わっていた。老人は、後部の座席のポインター種の犬に呼び掛けながら少年に言った。

「いいかい、この犬とはもう十年近くの付き合いだ。お互いに助けたり助けられたりした間柄さ。おい、余り奥へ行くなよ。とこ

ろでお前は何が目的だい？」

「目的……？」

「そう、目的」

「うーん………」

「考える事はないだろう、獲物さ、日当はオンサかい、それとも鹿かね」

「ピイツカパウだよ」

「ピイツカパウ？」

少年は、ちよつと顔を赤らめ俯いた。少年は、啄木鳥と母の關係について説明しなくなかった。

しかし老人は、それ以上何も聞かなかつた。

「まあいいさ、どうせ剥製でも作るんだろ、奴の肉は少ないからなあ。

この辺には沢山居るわ。いいな、余り奥へ行くんじゃないぞ、ジープの

見える範囲だぞ。もつとも、……迷つてもこいつが嗅ぎ出して呉れるがな。

儂はちよつと奥へ行くぞ。」

それから老人は、少年の猟銃を注意深く手に取つて眺め廻した。そして誰に言うともなく呟いた。

「ふうむ、こいつは悪くねえ、……」

最後に老人は言った。

「お前が使うには惜しい代物だ。まあいいや、お前儂の見ている

前で装填してみる！」少年は笑みを含んだ視線をちらつと老人に投げてから、自信たつぷりにやってのけた。

「よし、分った。」

老人は短くきつぱり言うのと頬笑んだ。

老人は口笛を吹いて犬を呼ぶと原始林の奥へ入って行った。始めて見る原始林に、少年はちよつと心細くなった。カノアを作る事が出来そうな巨木があちらこちらにあった。所々にパルミットが生え、厚く散り敷いた落葉はどこも湿っていた。少年は銃を構えながら、そろそろと原始林へ入って行った。名も知らぬ大木に蔓が絡み付き、繁り合った樹枝は太陽を遮っていた。

少年は耳を澄した。しかし何処にも啄木鳥の木をつつく音は聞えなかった。遙か原始林の奥から、老人の犬を呼ぶ口笛が聞えた丈だった。少年は老人の注意を無視して少し奥の方へ分け入った。少年は遂に枯れ朽ちて幹丈になった大木に啄木鳥が止まったのを発見した。少年は、用心深くそろりそろりと葉陰を利用し、根元に近寄って行った。遠くで老人の銃声が続けて二発聞えた。間もなく啄木鳥は、鋭い脚の爪と尾羽で身体を支えながら、コツコツと木の表面をつつき始めた。少年は今、丁度啄木鳥の真下にいた。少年は微かに震える両腕をゆっくり伸ばし、銃口を上方に向けながら葉陰からそつと狙った。狙いにくい、少年は、静かに少し大木から離れ、狙い直した。啄木鳥は逃げない。唯無心についている。少年は人差指に力を込め引き金を引いた。爆音が森全体を震わし、獲物は二、三メートル向うに吹き飛んだ。少年は、

嘴もなければ脚もなく、胸の当りから中の肉が飛び出して鮮血が吹き散っている啄木鳥を見ていた。少年は、これが今迄樹間を飛び廻り木をつつついていた啄木鳥だと思うと、妙に濟まない様な又、嫌な気特になった。少年は、暫く茫然として死骸を見詰めていた。

その時だった。直ぐ近くの木からコツコツと別の啄木鳥が仕事を始めた。

少年は、はつとして気を取り直すと静かに啄木鳥のいる樹下に近寄って行った。少年は、木陰からじつと狙いを定めた。啄木鳥は逃げようともしない。

少年の頭の中に、先刻の啄木鳥の死にざまが鮮明に浮かび上った。少年はふと銃口を下げた。しかし思い直すと、直ぐ又狙いを付けた。

啄木鳥は逃げようともせず、一生懸命木をつつつき続けている。少年は又一瞬ためらった。「何故啄木鳥は逃げないのだろうか？」少年は堪えられなくなって狙いながら木陰から出た。でも啄木鳥は逃げない。啄木鳥は全然逃げる様子も見せず、無心に木をつつつき続けていた。少年は眼がぼうとかすんで来た。

「逃げない、何故逃げないのだ！」

少年は心の中で叫んだ。

「俺から、俺から逃げていかない！」

少年は突然力なく銃口を下げた。少年は引き金を引く気力を完全に失っていた。

（皆、俺から遠去かって行くのに、何故？ 何故、何故逃げんだ！）

直ぐ近くで、老人の犬を呼ぶ声が聞えた。老人は、そこに足元に銃を投げ出し茫然としている少年を見た。

「おい、どうした！ オンサでも取り逃がしたのか！」

「……………」

しかし、老人は直ぐはつとなつた。少年の両眼には、うつすらと涙が浮んでいたからである。老人は、ひどく場違いの冗談を心から悔いた。

老人は、少年の深い疑問に極めて平凡な答えを避けた。それは「此所は山奥で動物や鳥達が銃や人間の恐しきを知らぬのだ」と言う答えだった。

老人はいつもより四十キロ以上奥へ来ていたのだった。

老人は静かに少年に言った。「お前の心は、本当はとつても優しいのさ。」

神様がお前を試したんだよ。心の優しい者からは誰も逃げて行かない。優しく親切にすれば皆寄つて来るんだ」

この事があってから少年は継母を「ママイ」と呼ぶ様になった。

（終）

手紙 続”移植”

第三回

27枚

川原 奈美



その年の夏は特に暑さが厳しくて、縫物する手を幾度となく洗いに立たねばならないほどでした。脂汗の滲んだ手で他人様の新しい衣裳を扱うのははばかられる事でしたし、指先を爽にする方が能率的でもありました。

縫賃をたかく致しましたので、良い客種が揃い、勢い高度な裁縫技術を求められるのですから、私も意欲的な仕事をする様になりました。それに、気をつけていると、お客様同士のおしゃべりの中から、流行とか、或る種のテクニクなど、少からず示唆を受けました。彼女達のおしゃれ談義の中から、すばしこくヒントを拾いあげ、それを、彼女達の衣裳の中に活用していく私の悪知恵には気もつかないで、仕立の良さを素直に喜ばれたりする場合、私

は盗作に似たうしろめたい襷を、心の中に、たたき込むことになるのですが、然し、そうした小さな良心を私は無視することにしておりました。

縫賃を高くしました効果は、仕事以外の儲け物もありました。女中職や既製服店の売り子では得られなかった、優雅な会話を聞くことも出来ましたし、此の国の良家の生活様式を窺い知ることが出来ましたのも、妾宅の他を見ていない私には、願ってもない勉強でありました。

十一月の中頃から、どつと仕事が多くなり夜もろくに眠れない日が幾日も続きました。鮮烈な色彩、染料の甘酸っぱい匂いを放つ布地の中に埋まって、極端に神経を使うのですから、時には、めまいがするくらい疲れを覚える日もありました。そして、ミシンの前に坐ったまま、真昼の夢をみることもありました。「目眩むばかり美々しい布地の中に坐っていると思っていたのに、目醒めてみたら、私は相変らず妾宅の床を磨いていた」

奇妙な事ですけれども、そうした不安が、キラツと眼前をかすめたりもしたのです。

シルバーノの本宅の急変を、リンダが報せに来ましたのは、そんな日が幾日も続いた或る朝でした。そう、十二月十二、三日だったでしょうが、未だ薄暗い中で、私はドリアンの埋葬をしておりました。初め、お洗濯をしようとしたのですが、熟し落ちたドリアンの実の強烈な匂が鼻についてしかたがなかったものですから、穴を掘って埋める事にしたのです。母屋の老夫婦も、私も」

未だドリアンの臭気になじめなくて熟れ落ちた実の始末に困っていたのでした。

” あんまり古木になってしまつて、伐り倒すのも怖くてね。木の精のたたりで、じいさんでも、ぽっくり死なれたら大変だから”。

いつかこぼしていた、おばあさんの言葉を思い浮べながら、木の下闇の中で、鋏を振つておりました。ふと、誰か人の気配を感じて家の方を窺つてみましたら、玄関の前に人影が見え、遠慮げに手を叩いているのでした。

佇っていたのはリンダでした。リンダのその様子と言つたら……焦躁しきつた顔から、瞳だけがギラギラと光っているのを見ました瞬間、「殺される！！」と恐怖が私の眼前を突走りました。あの時、何故私はそんな恐怖に駆られたものか……リンダに殺される理由を、私は自ら認める何物もありはしませんでしたのに……、あの時の恐怖感は、今思い出しても不愉快なものです。

” ドーナ・スエリが死んだよ” と、リンダは言いました。今度は別の驚きと、殺意を感じた極度の緊張から解放された気の弛みとで、崩折れそうになる軀を、鋏の柄に支えられてリンダの次の言葉を待ちました。

” ゆうべ八時頃まで何も変つた様子はなかったのに、十二時頃、アルベルトが行つて見た時には、もう死んでいた。心臓麻痺だよね………一時前だった。本宅の使いの者が、シルバーノを探しに

来たのは……シルバーノは私の家にはもう五晩も寄りつかないのに”

リンダの眼が無遠慮に、私の瞳の中をさぐるので、私は腹を立てて言いました。

”農場でしょ”

”農場に五晩も泊る筈はない”

”それなら、何処に泊ってるの？ 私の家を疑っているのなら、中にはいって、嗅ぎまわしなさい！！”

私は自分でびっくりする程、強気になっておりました。リンダは急にしおれた貌になって、頭を下げる様にして言うのでした。

”ユミ、本宅に行ってみておくれ、たのむから、シルバーノが帰っているか、どうか、昨夜まで何処に泊っていたのか、私は一刻も早く知りたいのだよ。たのむから、本宅へ行ってみておくれ”

何と身勝手な、破廉恥な言葉ではありませんか。汚物をいきなり耳の穴から投げ込まれた様な憤りに震えている私に、憶面もなく、本宅行きの事を、リンダは繰返し頼むのでした。憤怒が喉もとでひしめくばかりで、リンダに飛びついて行く言葉にならないのを、私ははがゆがりながら、以前、シルバーノが刺された時の事をまざと、思い浮かべたのでした。「シルバーノが若し死ぬようだったら、遺族の者が出て来る前に、取れる物を取って妾宅を出なければ損だ」と、非情で愚劣な計算をしたリンダの心情を怒り軽蔑しながら、彼女に頼まれて病院へ行った私。シルバーノの生

命に危険がないことを、おめおめと、リンダに知らせに行った私。五十コントスの礼金を受取ってしまったって、共犯者意識に長い間繋がられていた私。

今又、何をリンダは、たくらもうとしているのか………やつと、私の怒りが声になってリンダに飛び付きました。

「行きますよ、今すぐ行きますよ 〃

「え！？ 行ってくれる？ ……ユミは何時でも私の味方だ、ありがとう、ユミ 〃

私は突然笑い出しました。おもしろくも無いのに、奇妙な声が出たのでした。

「お礼を言うには当たりませんよ。私は、ドーナ・スエリーを拝みに行くのだから………ドーナ・スエリーには、謝罪しなければならぬ事があるから………」

リンダを玄関に佇たせたまま、私は裏口から家に這入りました。大急ぎで着がえをする間、リンダは何かわめいておりました。寝室の小窓を閉めに行った私の目の前を、何気なく立ち去る人影を見ました。母屋のおじいさんの後姿だとはすぐわかりましたが、シルバーノをリンダから奪ったと罵られている自分の事を恥じ入ったり弁解しようと考え余裕も、其の時の私にはありませんでした。リンダの声に怒りをあほられるばかりでした。

かなり急なFアベニードを、ひどく気負った歩調で登りつめ、未だ鉄扉を閉ざした、商店街の空虚さが眼につくと、私も急に気負立っていたものが崩れ去って、空しく、侘びしくなってくるの

でした。リンダに対する怒りも、ドーナ・スエリーに謝る心も、意外と、影薄いものであったようです。いつか私は、シルバーノの悲しみを思いやっております。妾をたくわえて、病妻を顧なかつた男の悔。息絶えた妻と、衆人環視の中で対面しなければならぬ夫の苦痛。そんな事を想像しているうちに、悲痛なシルバーノの心が、直截に私の心に伝って来る思いになったのでした。

S病院で、ほう帯の隙間からじっと私を見上げていたあの瞳。元使用人にすぎない異邦人の私にふと見せたあの眼差し。あれは、財を積む事と、妾をたくわえる事にも満足している下劣な男の眼差しではなかつた。妾宅での四年間、一度も見せた事のない厳しい孤独を眼差しにうたれた時の私は、彼の過去に人間不信に陥ちねばならない愛の裏切りがあつたのではないかと思ひ……(その事で、私は、初恋の青年が、親がすすめる美人娘との結婚へと、私から後退りして行つた、日本での事を思い浮かべ、その打撃が意外に執拗に、其の後の私に作用している事と、思い比べることにもなつたのですが)此の男に、今一度、優雅で真摯な愛情生活に戻らせて上げる女性はいないものかと思つたりしたことを、思い浮かべながら、とぼとぼと歩いておりました。

それは、何か私を悲しみの中に甘やかすものがありました。すると悲しみに奢っている自分を嘲笑うように、「私はシルバーノの妾宅の女中をしながら、リンダに代つて八代目の妾になれぬこともない。」と心秘かに思つてみたり、二十六才の肉体を奢つて女臭

い媚態を、シルバーノの前に漂わせた娼婦的なあのしぐさを思い浮かべるのでした。シルバーノの贈り物を受けた時の、「貰い物に対する負い目など感じる必要はない。異国の空で、女一人で生活するには、シルバーノ如き男を或る程度利用するくらいの非情さは、女が生きる為の智慧ではないか、」とうそぶいた不遜な私……。

その罪を、私は今、スエリー夫人に謝りに行こうとしているのではないかと、戒しめるのでした。

道はくだり坂になり、まだ人気のない住宅街を歩く私の頬にポロポロ涙がこぼれ落ちました。それは然し死んだ人を悼む涙でもなく、流罪の涙でもありませんでした。

流罪の心を抱いて、しよんぼりと歩いている、自分のそのあわれさに、涙をこぼしていたのでした。

私と言う女は、愛憎の念に徹することが出来ないばかりか、流罪の意識からも、するりと身をかかわして、自己愛の場所だけで、涙をこぼすみすぼらしい人間であることを、其の時、つくづくと思いついたのでありました。

シルバーノの本宅は、深い植込みの奥に、森閑と閉ざされておりました。

心怯んで、門前に佇っている私の額にほろりと露がこぼれました。見覚えのある鳳凰樹の枝が、門の外まで伸び茂っていて、朱色の花房が緑葉の隙間から見上げることができました。何と成長の激しい樹だろうと驚き、何年か前一度此の門をくぐった時に見た泰

山木の花を探しました。遠慮を知らず伸び繁る鳳凰樹の枝垂れた梢に圧えられながら、泰山木は白い花をつけておりました。白く可憐なその花は、それでも、真直に空を見上げて咲いておりました。私は額の露を拭き心をはげまして玄関までの敷石道を歩きましました。

ドーナ・スエリーは豪華な部屋の真中で、純白の布で被われた寝台に、ふかぶかと眠っております。十五年もの苦渋に満ちた生命から解脱したドーナ・スエリーの死貌は、気品に満ちているようでした。私は、何も言えず、目を閉じて合掌したまま、しばらくは頭を上げることが出来ませんでした。厳粛な、没我の中から醒めて、家内を見回わしましたが、其処にいる人々の中にシルバーノは見当たりませんでした。

誰も、私を訝しがりはしませんでしたが、長くはいたたまれない心持ちがして、私が立ち去ろうと思った時でした、ドカドカツと、足音がして、部屋の入口にシルバーノが現われました。汗とポエラと機械油の匂をひいてシルバーノは私の横をすりぬけ、死の床へ駆け寄りました。棒立ちになって、妻の死顔を見おろしていましたが、朽ち木が落ちる様ないたましさを見せて、シルバーノは、膝を落としました。夫人の頭をかき抱き、額に頬に、狂おしくベレーゼを浴びせるのでしたが、やがて力尽きたように、シルバーノは、夫人の胸の上に頭をすり付けてしまいました。ポエラだらけの大きな背が波うち震え、押し殺した唸き声が洩れるのを、他の人々は、息をひそめて見守るばかりでした。

シルバーノの頭は、永久に、あの胸の上から離れないのではないかと、私は思いました。「マトグロッソのフアゼンダから三時間足らずで飛ばして来たのだから……普通なら五時間は、いくら急いでもかかる遠さなのに……」と言う声を背で聞きながら私はその部屋からのがれ出たのでした。

門の外にはどろんこになったジープが乗り捨ててありました。ジープを降りた処に、パイヤ帽子が踏みつぶされているのが、あわれでした。シルバーノの心の痛みを、踏みつぶされた帽子にありありと見た思いがしたのでした。

自分の家に帰り着くや、息つく間もなく、仕事をしなければなりません。正午までに仕上げる約束の卒業衣裳のボタンを付けようと、している処に、リンダが再度訪ねて来ました。知らぬ顔で、私はボタン付けをしておりました。見向いてもやらない私に、言いたいほうだいの事を、リンダは言うのでした。「家にも帰らないで、道を歩きながら、由美が戻るのを待っていた。」と言いましたが、そんなこと、私に関係のない話しです。

私は、最後のボタンを手に取りました。

「もう長いこと、自分をかまってくれない男のことを思うのも馬鹿げているが、やっぱり知りたい。彼がゆうべ何処に泊っていたかを知りたい。ユミ、教えてくれ……ユミ、言えないのか。わかっているよ。シルバーノはゆうべユミと一緒にだった。シルバーノは暗いうちに農場へ行った。ユミは彼を送り出した後で、あの木の下で何かしていた。…ね……そうだろう？ …だから「農場で

しよう」などと、ほん音をはいた。それにちがいない……。」  
私はボタンを付け終った糸を切りました。私の手には鋭い先とがりの鋏がありました。「イケナイ！！……」と心が叫んだ時、最早鋏を投げつける手の動きは静止出来ないところまで進んでおりました。叫び声のかたまりが私に飛びついて来ました。椅子もろ共突き転ばされた時、何かにしたたか後頭部を撲たれ、やがてスーツと消えてゆく心持ちになったのを、かすかに私は感じたのでした。

見慣れない部屋で私は目をさしました。朝なのか夕方なのか時間の見当がつきません。「此の忙がしさに、昼寝をして、」と、ふと思いかけたのですが、リンダに鋏を投げつけた記憶がすぐよみがえりました。傷ついたのはリンダの筈なのに、あれから、どうなったのだろう……私は肩から胸に、きつく繋がれているのに気付きました。身動きをすると左の肩にキリキリと痛みを感じました。

染み一つない薄灰色の天井を凝視ながら、記憶をたぐりました。リンダへの憤怒は言葉などではもう間に合わなかった。握っていた鋏を、リンダめがけて投げつけたのだったが、リンダは、かすり傷もうけなかったのか。私は手応えのなかった、あの瞬間の事を思出すことが出来ました。

意気地なしの私、「イケナイ！」なんて、怯んだ心。それはもう耐え難い屈辱となって、身動きも出来なくなっている私を、情容赦もなく、いためつけるのでした。

何一つとして、まともな事の出来ない自分。初恋の青年に別の縁談が始まると、身をもって対決する真剣さを持たないで、後退りした私。道夫との結婚にも徒労ばかり積み重ねた私。学生時代、バレーボールの選手で鍛えられた腕でありながら、目の前にいるリンダに傷をつけることをし得なかった私。こんな中途半端を人間なんか、殺されてしまえばよかった。全く歯を喰いしぼる思いでした。

母屋のおばあさんが来て、早く醒たことをしきりに喜んでくれました。

「よかった、よかった、大した傷じゃないですよ。でも死んだ様にぐったりとなってしまわれたので……私もうひどう心配しましたけど……脳震蕩とかドトルは言いなさった。肩の傷は心配することはないそうだから……でも治療した後が少しは痛むでしょ？ まあ、心配せんと眠っていなさい。二三日眠っていたら、何も彼もなおりますよ……」と私に眠れと言いながら、おばあさんは、なかなか話しやめませんでした。

「大方、あんな事になるだろうと、おじいさんと二人で、案じていたのですよ。妾なんかになる女子は、怖い根性持ちだから、カッとなったら何をしでかすかわからない。でも鉄でよかった。弾を喰って死んだ人の話を蔑つても私等は知つとりますけに」

時刻を訊ねたら、「もう夕方の六時ですよ」と言っておばあさんは窓のカーテンをしぼってくれました。窓枠で区切られた紺青の空に、白い雲が流れ寄って来るのが見えました。

私はしきりに母が恋しくなりました。日ごろ母親をなつかしがる感傷をつとめて疎外していたのでしたが、やっぱり肉親はなつかしいものです。

次の朝九時頃、おばあさんは、リンダ失踪の報せを持って来ました。

“あの女子はどうしとるだろうって、今朝早くに、おじいさんが見に行きなさったら、あなた、もう逃げ出した後でしたと……私等、ゆうべ、何やら、あの女子が逃げ出すような気がしたのでしたが……まっぽしでした。

女中だけが、がらんとした部屋で、ぼんやり腰掛けとったそうですよ。給料は、シルバーノから貰えとリンダが言ったので、シルバーノが来るのを待っている、と言ったそうですよ。……そうそう、あなたの家での事など、女中は知ってはいない様子だったそうですよ。「ドーナ・スエリーが死んだので、何か恐しくなったのだろう」と、女中は、うちのおじいさんに言ったそうだからね”

女中が知っていようと、いなかろうと、私はそんな事、どうでもよいのでした。

リンダが息荒らげて失踪の荷造りをしている頃、シルバーノは、悲痛な心で、妻との最後の刻を惜しんでいたでありましたよの………リンダに追撃をかける者のいないのが残念でたまりませんでした。

シルバーノは、リンダの失踪を何時知るだろうか………知った場合、シルバーノはどんな心持ちになるだろうか。リンダ失踪の直

接原因が、私の負傷入院である事など、夢にも思いはしないだろうと、考えめぐらせているうちに、私は、自分がひどくみじめに思えるのでした。心が飢え萎びていくのでした。

病院での三日はしかし殆ど眠っていたようなものでした。うとうとと、夜となく昼となく、頼りない眠りに陥ちるのでした。

退院する時、院長はだまつて私の肩をたたいてくれました。金色に光る柔毛の深い腕でしたが、太い掌は温くやわらかでした。明るい茶色の瞳が笑っていました。あれは、案外早く癒えたことを祝福してくれる微笑とは異っていた様です。一人の男性を中にして、傷つきたおれた女心の本質を見ぬいた哀憐の笑みではなかったかと、それを思うと、今でも恥入る心持ちになるのですが……。

家に帰り着きましたら最早休養などと、甘えてはかれませんでした。クリスマスを楽しむ華やかな布地が、鋏を入れられるのを待ちうけておりました。鋏を見るのさえ苦痛でしたが、その苦痛にも、未だ癒えきらない肩の傷の痛みにも私は耐えていかねばなりませんでした。「お金儲けをしなくては。」「婦人服店を持つまでは。」念仏を称える様にして、ミシンを踏みました。

ドーナ・スエリーの一週間目のミサに、心惹かれるままに、カトリック寺院に這入って見ました。礼拝の様式もわからなくて、仏式の合掌をしてから、そっとシルバーノの姿を目で探してみました。一きわ背の高いシルバーノの後姿は祭壇のすぐ下に見えませんでした。

ガツチリとしていた肩を落として、うなだれている男の後姿はあわれそのものに見えました。私は合掌の中で、ドーナ・スエリーの霊に語りかけておりました。

「貴女が昔、結婚以前にシルバーノに捧げたであろう愛に、最も近い愛情が、今私の胸の中で育ちつつあるのを、私は、阻止しようとは思いません。」

その年も明け正月は雨の降り続きでした。縫物に一段落がついたのと、シルバーノも姿を見せない事などで、何かしら私は意気消沈しておりました。今年程、お正月を侘びしいと思った事はなかった様に思い、それは生活に多少のゆとりが出来た気の弛みから来るものだと思うことにして、侘しがっておりました。そんな折、日本からの手紙が届きました。珍しく部厚い母の手紙でした。常の通り、私を案じてくれる母の心が滲んでいる文面を読んでいくうち、花岡道夫と言う文字が私の目を驚かせました。道夫は私の元の夫だった男です。別れて七年、未練もなにもない男の事ですけれども、彼の動静がわかってみれば心の動揺がなかった訳ではありません。

そして、道夫のことはともあれ、日本の御両親に対しては、責任の一半が私にもある様で、俄に気重くなってしまうものでした。

母の手紙と申しますのは、次の通りなのですが……。

十二月も最早半を過ぎました。由美をブラジルに行かせてし

まっつて七回目の師走です。今年はとりわけ寒さが厳しいですが、何辺に反対だと聞いているブラジルの方はどうですか、寒さには平気で、夏やせをしたり、夏風邪をひいたりしていた由美を、常夏の国へ行かせてしまった事を、私は一年一年悔を新たにしているのです。「いつも元気で金儲けが忙がしい」とばかり書いてくれる手紙の裏側での由美の心が、母の私には痛い程わかるのです。病気をしても、悲しい事があっても、手紙には書いてくれない由美の心が、時には恨めしくもなるのです。……先頃新聞で読んだ事ですが、日本に残されていた娘さんが（娘と言つても、もう六十才位になった人です）ブラジルの病母を飛行機に乗つて見舞に行つた、と書いてありました。由美が若し病気をしても、私は飛行機で、見に行く事が出来るでしょうか、今更の様に、父親に早く死なれた母娘の哀れさが身に泌みるのです。由美の事が心配で心配で眠れない夜は、あの娘は若いのだから。至つて健康な子だったから。と、無理に安心しようと力めるのです。どうか、病気になるらない様に、悲しい事には近寄らない様に心掛けてください。

帰つて来て貰うのが一番有難いものだけれど此の前の手紙で由美ちゃんが言っていた言葉に、「縫物のお客様が多くなり、預金も出来るようになって、日本から移し植えられた苗が、いろいろな悪条件の下から、ようやく白根をおろし始めた様な今日此の頃」とあつたのを思い出し、かみしめて見ると、あなたが自発的に帰つて来る気になるまで、だまつて待つてゐるほか、致し方のな

い非力な母親です。

大体、由美ちゃんを花岡家の嫁にやったと言うのが、私のあやまちでした。正直言つてあの時には、早く長女を縁づけたい一心でした。父親もいない家庭に、婚期間近の四人の娘を抱えた、愚な母が犯した禍誤でした。

母としての、真の愛情をあゝの時の私は取り落としておつたのです。間違いは其処から始つたのです。驚かないでください。道夫さんは殺人未遂で、警察のお尋ね者になっているそうです。その様な事件を起こす男に、由美を嫁入らせた母を、由美ちゃん許しておくれ。若しかしたら、由美ちゃんは知っていたかもしれないけれども……（花岡の実家へ問合わせがあつたそうです。道夫さんの両親が私方に来られて、由美ちゃんの方から、何か便りがなかつたかと訊ねておられた。道夫さんのお父様がおっしゃるには、「私に責任があります、手に負えない子こそ親の目の届く処に置かねばならなかつたのに、頼る者のいない外国へでも行かせたら、考え直して真面目な人間になってくれるかも知れない、と身勝手な望みをかけて旅に出してしまつたのだが、それは浅はかな親心でした。由美子さんが別れて行かれた事も、今となつてみれば、せめてもの安堵です。殺人未遂犯の妻では、もうもうどなたにも申し訳けがない事ですから」と由美ちゃんを嫁に望んだ昔の事を、改めて、謝罪されたのですが、由美ちゃん、花岡の御両親にしろ、私にしろ、悪かれと願つたのでもないのに、悔いても悔いても足らない間違いを、愚な親はしてしまふものです。

ほんとうは、こんなつらい手紙を書きたくはなかったのだけれど、思い迷っているうちに昨夜夢をみました。怖い夢でした。道夫さんに殺されようとした女が、由美ちゃん、あなただった。ああ、私は、こんな事を書いて由美ちゃんを怖がらせるのではないかしら……：由美ちゃん、怖しがないで、道夫さんから、そんな目にあわされないように気をつけて欲しいと願うのは無理な事でしょうか。

折角一生懸命に自分の生活をたてようとしている由美に、こんな手紙を書くのは、つらくて、つらくてたまらないのだけれど：由美ちゃんの無事を祈る私の心を、汲み取ってください。

「悪い苗でも、ブラジルの新しい土地に移し植えたら、若しかしたら立派に育ってくれるかも知れない。そうなる事ばかり願っていたのですが」道夫さんのお父様は、そう言って嘆いておられました。だが、由美ちゃんは良い苗だった。あわてふためいて移し植えることしか考えなかった私の愚さの為に、由美は嵐に、雨に、旱魃に、いためつけられどおしだった。それでも、あなたは「ようやく白根をおろし始めた」と言う便りを送ってくれました。

由美ちゃん、どうぞ、どうぞ今後は尚一段と気をつけておくれ。怖れないで用心をしておくれ。根をおろした苗に花が咲き、実を結ぶように、しっかりしっかり気をつけておくれ。

由美ちゃんに、たった一人のお正月を過ごさせる母を、由美ちゃん恨まないでください。

十二月十六日夜

母

以上、母からの手紙の全文でした。私が負傷しましたのは十二月十三日、母が夢をみたのは十五日、ちようど私が退院した日に当たります。夢のしらせ等本気で考える気にもなれませんでした。が、何かしら母と娘の血の繋がりと云うものを考えさせられました。

「根をおろしかけた苗を大切にしてお花を咲かせ、実を結ばせるように」と手紙にありますけれど、之は容易なことでは……と、窓外に放した眼が、モンステラの葉にとまりました。自分の運を賭ける心持ちで移し植えた松は、とうとう根付きませんでした、さほど期待もかけないで植えたモンステラは、衰えることを知らず、休むことをせず、ひたすら上を向いて伸びていくのでした。「道夫のことは心配いりませんよ。どちらも未練がなかったのですから……殺しに行こうなどと言う激しい愛情を道夫は私にもつたためしはないのですから」と母へ語りました。

玄関の屋根に手をかけるまで伸び上がったモンステラの葉の、あの面白いさけ目から、白く光っている雲の流動を見ながら、実際、道夫の事は、母が気苦労しているのが滑稽に見える程、私は平気でした。

(手紙の章終り) 未完

CASTIGO

(51枚)

藪崎 正寿



州農務局秘書三課 a 一級公務員、一〇三号俸、俸給の多寡では一応課長待遇と言える。だが、私のこの地位は、二十四年勤続という年功と、公務員身分保障規制とによって辛ろじて保たれているものだということは認めないわけにいかない。全くの閑職だった。日に三つ四つ、さして重要とも思えない書類に判コを押す以外は、五種を下らない新聞(この国のジョルナルは平日版でも裕

に五十ページはあるのだ)の隅から隅まで、売家貸間の広告欄から、尋ねびとならぬ、尋ねいぬ、尋ねねこの欄に至るまで丹念に目を通し、左右六箇所もついている机の抽出を六度も七度も開けたり閉めたりし、要するに、私の役所での苦心と言ったら、いかに所定の時間をすごすか、という点に尽きた。

農学校を出ただけの学歴で、歴代のどの長官の側近につながる機会も持たず、また教父とか他の姻戚関係でひ(・)き(・)のようなものも持たず、そのように平凡な公務員が奥地の分署勤務を勤めるだけ勤めあげてしまうと、なまじ年功がついているだけに処遇は却って厄介になる。定まった部署は与えられず、しかし給与だけ課長待遇相応の一〇三号俸というのは、或いは窮余の人事だったと言えなくもない。が、私が日日無聊になやんでいるからと言って、それで不平不満を募らせている、と想像を加えられるのは当たらない。どんな人事にしろ、肯定するだけの辛棒強さというものは、私ほどの年数役所勤めをつづけていれば身についている。

それより、実は最も困惑したのはこのポストをあてがわれて以来、一段と増した毎日の暇の処理法だった。

由来、この国の官公吏の勤務日数及び時間量は民間会社のそれと比較して著しく軽少だと言われている。たしかに一般より、例えば登庁時刻は遅く、逆に、退庁時刻は早く、休日も決して少ない。

もちろん、私には妻子もあり、ささやかな庭ながら庭の付いた

家もあり、普通ならその程度の余暇の

使いみちに困る、などという手はないのだが、実は、その家を家内が気に入っておらず、転居を希望するふうがあった。それで例えば、私が小庭の手入れに精出したりすることは、家内の平素からの不満を徒らに刺激する結果に及びかねない。そんな暇に、なぜもつと増しな邸宅を手に入れる才覚でも働らかせないのか、と或いは家内は考えないものでもない。仮りに、それをあからさまに口にするにしろ、しないにしろ、少くとも家内を挑撥、する惧れのある行為は、その望みの成就に於て、私の能力が貧弱なのを自認するだけに厳につつしまなければならぬ。

そして子供たちだが……子供は、父親より母親にしたしむというのが通念のようで、だから、一向に不思議はないのだが私の家もその例外ではなかった。この傾向は、子らの成長と共に益ます昂じるように感じられる。

殊に近頃では、例えば友達らしい若者が遊びにきてるとき、私の子供である彼、或いは彼女らは父親である私が顔を覗かすことを歡ばない、と言うより、むしろ拒否する。口に出しはしないが、その目その顔いろには、たしかにそうした気持が窺える。うっかり、ゆきあわせてギゴチナクなる私に対して、やはりギゴチナクばつ悪そうにする彼、或いは彼女らを見ると、寂寥とか不快感とかより、却って子らが可哀そうになる。

それやこれやで、私が必要以上に早い時刻家を出、帰宅も何となくゆつくりしながらちになっていたのは事実だった。その古本屋

に入ってみる気になったのも、そんな途上でのことだった。

州政庁の建つ場所から、日系人の多く集まるT街界限までは距離のうえだけなら何ほどのものでもなかった。が、その中間に交通の激しい二つの大通りと二つの広場とがはだかり、それがひとに実際以上のへだたりを与えていた。二つの大通りと二つの広場とを、その混雑を縫ってよこぎるのは、意外に手間どることであり億劫にはちがいがなかった。

私は随分と久しくT街に行っていないかった。

最後にそこを通ったのが、一体いつごろのことだったか、憶い出すのも困難なくらい遠退いていた。

食卓に、最も日本人的味覚の物、納豆とか豆腐とかこんにやくとか、竹輪とかたくあんとか佃煮とかを、望むならどうしてもT街にあしを向けなければならなかっただろうが、私の家の者にはそれらの食品に対する嗜好が無かった。味噌醤油などの調味料を用いることもなかった。したがって、どうしてもそこに行かなければならない、という用向も実のところ無かった。

その朝、私がT街に足を踏み入れたのは、バスの故障で途中下車した所が偶然そのあたりだった、というにすぎない。全く、それ以外の理由は無かった。ともかく、私は歩道ぎわに片寄せられたバスからゆっくり降り立った。同方向に向うバスはつながるようにきたから乗り継ぐのにぞうさはなかったが、唯、後部扉から入って、直ぐまた前部扉の降り口に通りぬけなければならぬことを思うと面倒だった。大した距離ではなかった。私は徒歩で行

く方をえらび、そして、どうせ歩くのなら排気ガスのみなぎるバス通りは避けようと、角を曲った。

太い街路樹の並ぶ横通りを少しすすみ、やがて縦通りに折れると、両側に日本文字の看板が目立った。そこが丁街であるのを、私は思い出した。

鎧戸をあげたばかりの豆腐屋から、うすあまい香と生温たかい湯気がただよい、漬物屋や雑貨屋の店先からもそれぞれの匂が這い出していた。日本人街そのものの臭いと言ってもいいその匂を、私は少しの嫌悪もなく嗅いだ。いや、ひどくなつかしいものとしてひとつひとつ嗅ぎわけながらすすんだ、と言ってもいい。そして、一軒の古本屋を見たのだった。

吸われるように足が店内に向いた。かなり深い奥行の両側の壁一面の棚を順に見てまわる間、ふしぎな寛ぎと愉しさがあつた。馴染みの場所に身を置いたときの気易さ、と言った感じに似ていた。天井に近い上段に迫いやられたかたちで並ぶ古びた本の中には、たしかに私の記憶につながるものも見えた。

それらの不鮮明な背文字をくびが痛くなるほど見上げた。私はめずらしく人なつかしい気持になって、奥の台の内側にいる主人へ向って話しかけた。

「あのあたりの本、もう、三十年にもなりますかな、随分と熱中して読んだものです」 私は腕を高くかかげて指差した。

主人が手にしていた新聞を置いた。そのとき厚い眼鏡のレンズ

が反射した。私より少し若い年齢かと思われた。

「その頃は、では未だ日本だったので……」

「いや、ワタシは当国生れです。日本人移民第二世代、つまり二世ですな。」

本は親父が持ってきてきていたのを、手あたり次第に読みちらしたわけです。」

主人が眼鏡のつるに手を遣った。見直すような上目遣いをした。そんな身振りも店主としての愛想の内にはちがいない、と思いつながら、しかし悪い気持はしなかった。

危惧したほどにもなく、すらすらと毛糸玉がほぐれるように舌に乗って出る自分の日本語に、こども染みた満足を覚えていた。私は多弁になった。

幾冊かの本を一一指で差し、ほとんど、ひとりで半時間の余も喋った。

その日、役所に着いて、なお暫く心は遠いところに飛んだ。私の裡で俄かに目覚めた、その意識を“感動”と呼ぶのは誇張の気味があつて躊らわれるが、しかし、それには心を浸すしずかな波のような高まりがあり、やはり感動と名付けていいかも知れなかった。炎を挙げて燃えさかる烈しさではなかったにしろ、燠のつたえるたしかな余熱がとどまった。自分の日本語が語学として久々にたしかめられた、という意味合いだけではないはずだった。それは“日本人街の臭”をひとつひとつつかしいものとして嗅ぎわけたときからつづくものであり、多分、意外に深いところに

根ざす充足感にちがいがなかった。それは謔かな歓びとなり、私をやわらげ、ときほぐし、あたためた。

四十年前、珈琲園主の邸脇きにあつた小学校にあがる頃まで、私はこの国のことばを外国人のようになししか解さなかつた。

裸足で原野を駆けまわり、鈴蛇に怖じず、油炒りの飯と豆汁とをこの国の人間の味覚で食うようになった後も、その食卓には漬物と味噌汁の碗とが久しく並んだ。小学校を修え、家の農耕の手伝いに明け暮れた数年間は言うまでもなく、やがて郡役場のある町の農学校で学ぶことになつてからも、私の思考の基調は日本語の語感によつた。この傾向は、卒業後農務局に奉職した当時でも未だ全く無くなつてはいなかつた。

……日本語が自分の裡で、その位置を失つて行くのはいつ頃からのことだろう、と私は机の隅に新聞を片寄せながら考える。それは、徐々に移行してきたのだろうか、それとも、一気に蒸発でもするようになつたのだろうか。そこに、「戦争」を挟んだ永い日日がたしかによこたわつていた。

そして、この二十年、家の内と外とを問わず、私の唇から日本語が音声を以つて語られたことはなかつたと言つていい。日本語はひとりきりの書斎の中で、稀に読み返えす本の中の文字の形象と意味とだけでつながつた。

このように、日本語が話し言葉として私の日常から失われて行く以前に、ほぼ戦争の時期に重なる両親の死歿と、私自身の妻帯とがある。戦争の頃、日本語の使用はこの国で禁忌されたし、日

系書店はそれ以前に閉鎖されている。個人の蔵書さえ屢々押収の対象となった。古本屋で本の観賞どころか、豆腐、たくあん、佃煮どころか、日系人街そのものが強制立退令で壊滅し、現在のT街は戦後復旧したものだ。

そうした崩壊のときに佇って、私は全く別な“生き方”を模索した。そして、その切り替えにひどい見当外れはしてこなかった、と信じるのだが……。

だが、その次ぎの朝もそのまた次ぎの朝も、私は途中のバス停で降り、T街に回りみちして古本屋に寄った。しかし、それにしてもそこで日本語の本を眺めまわるときの、ときどき棚から抜きとって手摺れのしている背文字に掌を触れたり、ページを開らいてみたりするときの、静謐な自足の感情はやはり不思議なものだった。

そこでは私の裡のくらい、穴ぼこのように喪われた部分が確実に埋められて行った。また、そこでは罅割れた河床にふたたび走り始める細い流れの音を聞いた。修復されて行っているのは、私の精神の故郷とよんでいいものかも知れなかった。主人と交す話に身が入って思わぬ刻をすごすことがあった。

日本語による対話自体たのしみの一つに数えられた。更に一つ、私を気さくな客として振舞わせる理由があった。それは、そのように店に魅かれ、店に並ぶ本に魅かれながら、結局唯の一冊にして決して買わないだろうということを、最初の日から妙に予感していたからだ。それは確信的と言ってもいいほどで、しかも依然

として私は店に魅かれたから、そのための気兼ねと言うか、サアヴイスのような気持があったのだ。

戸を開けて間のない時刻の店内には、たいてい全く客がいないか、いたにしても極く少数だった。主人は奥の台の内側にいつも同じ姿勢で新聞をひらいている。近づいて行きながら、挨拶の言葉と一緒に私は片手を挙げ、ぐっと砕けた口調で「また、すこし見せて貰いますよ」と、ことわる。もちろん笑顔を添えることも忘れない。それに対する主人の愛想も悪くない。いや、非常に好かった、と言えなくもない。と言うのは、これは私の観察だが、主人は、買わない客の示す気兼ねの色に対し、客以上に気兼ねをしてみよう気質らしいのだ。少くとも私はそのように印象した。

私は話の折りおりに、一人の医科大学生の息子と高校と中学との二人の娘を持つ、一〇三号俸公務員の父親なる立場の容易ならざる点を誇張し、滑稽めかして語った。それが、買わないことのも最も無難な言い訳にもなるからだ。同時に、欲しい本は山ほど並んでいるのだが、と言いつし、在庫の貧弱ならざる点を認める阿諛の操作もぬかりなくつけ加えた。要するに、私は買わないなら買わないなりの「心得」といったものを持ち、そして多分主人は、そうした客に対する「心遣い」から一層愛想よくなり、その遣り取りが一見親しみを帯びるのにそれほどの日数もかからなかった。

「ブラジルにやってきて十年になりますが、一向にことばを覚えられなくて、」

主人はまばたきを重ねながら言った。

「……ところで、日本人がこの国に移住して憶え込む単語の第一に、日常の挨拶語や食品名を別にする、例の『GARANTIDO』があるというのは定説ですね。あなたに向ってブラジル語の講釈めいた解説もちよつと気がひけますが、この語は元来、『保証付の』と言ったほどの形容詞であるわけでしょう。ところで、日本人がこの語を用いる場合の意図というか眼目は『間違いない』とか、『大丈夫のことか』『確実のことか』と念を押すためで、つまり専ら“確かめ”の用語のつもりなのです。が、確かめの語としてなら、実はもつと遙かに適語の『CERTIO』という形容詞だつてあるので、『GARANTIDO』の誤用は、その強すぎるニュアンスのためた、却つて斜視の滑稽感というか、駄目押し馬鹿念というか、意図からははみでた妙な効果を生んで、聞き手を苦笑させてしまうのです。現今ではそれは既に日本人一般の代名詞ほどにも高名になつて、『OH GARANTIDO』と呼び懸られる始末です。この万更無知からとばかりも言えない語の転訛が、なぜ、日系移民の間に連綿と引き継がれ行われてきたのか。このあまりにも肩肘張つた感じの、強すぎる響きの、それゆえに斜視的効果さえ派生する”語”をなぜ第一番の語彙として濫発するのか、そこにも、わたしは”移民”というものに影のようについてまわる不安の念、抛り所ない心細さ、を看とるわけです。こんなふうに一応わきまえたようなことを言っているわたしにしてから、いざ、という段になると『CERTIO』ではど

うも十分でないような心許ないような気がしてしまつて、やはり『GARRANTIDO』が飛びだす態たらくなのだから、こいつはよほど根の深いものです。」

主人はそれを沈痛な面持で言つたのではなかつた。むしろ始終かるい語り口だつた。が、私の裡にはそれさえ黙過できない反撥があつた。

「おたくは来られて十年だ、と言うのですな。で、おたくが『GARRANTIDO』を日に三回ほど使用される、としてです。八年前に来られた方、五年前、三年前、そして昨日今日来られた方は、おたくのその当時よりもこの語の使用度が低くなつていないのですか。この語の使用回数は移住歴の浅い人ほど、逆に低下する。おたくの言われる”移民というものに付いて回る不安の影”も薄くなる。こういう傾向を、その斜線は譬え緩漫な度であるにしても、辿つていゝるのではないですか。ワタシの両親は五十年前の移民だからおたくどころか、その五倍も、ひよつとしたら十倍も頻発したことだろうと思ひますな。ところが、その息子であるワタシとなると、もう、その語を移民のように使いはしない。ワタシとその語との関係は、最も適切な場合、適当な度数だけの関りです。そして、日系移民とこの語との関係もそんな具合に、移民と環境と両方の変遷の中で、次第に正常へとすすんでいゝるのではないですか」

一言毎にもどかしさが昂じて幾度もぶらじる語になりかけた。どうも、巧く言い尽せないが、移民と言語との関係をこの主人の

ようにゆがめて見る態度は感心できなかった。

私の考えに抛れば、“移民”はこの国でそれほど特殊でも異質でもなかった。生活におろす根の深淺の差にすぎなかった。この国のように混血のすさまじく進行しているところでは、移民とか、二世とか言ってもそれは少しも決定的な釘づけの条件ではなく、結局それぞれの生活に打ち込まれる時間の量の相違にすぎなかった。

「それはそうでしょうがね……」

と主人が余裕をもたせた口調で言った。

「……『GARANTIDO』という語が濫発されなくなるからと言つて、それで、最早この“語”に斜傾しないではいられなかった移民の内面の問題まで解消した、とするのはどういふものでしょう。”移民と環境との両方の変遷”にしても、そこに要する時間に就いてわたしは樂觀主義者になりかねるのです。『GARANTIDO』に於て見た移民の、この国のことばとこの国とに対する斜視性、滑稽でもあれば悲惨でもありする、その喰い違いは未だほかにも数多くあつて、それは移民と共に永くつづいて行くだろう、と思うのです。が、この問題はこのくらいにして置きたいです。

とにかく、こんな難しい話になると思つて始めたのではないのです。本題があるのですよ。……」

そのとき、本を買う若い客が近づいてきた。主人がそれを手早く包み、包装紙の上で計算して代金を受け取った。

主人の口調がやわらいで本来の主人としての顔に戻ったところで、私も、一向に買わないながらそれなりの客としての顔に返り、そこで、主人はちよつと笑い声をあげ、私はどうぞ、と途切れた話のつづきを促がした。

「……それは移民とことばとか、疎外とか、いうようなしちむつかしい四角張った事ではなく、極くかるい失敗談と言ったほどのものなんです。さて、『GARANTIDOO』はもう棚上げということにして、その次ぎか次ぎくらいに早く憶える”語”に『EUNAO ENTENDO A PORTUGUEZA』がありますね。実はさつきのもこれの枕のつもりだったわけです。あなたに向って翻訳を付けるといふのは全く気のひける話ですが、これの意は、『私ハぶらじる語ヲ解シマセン』ということでしょう。I・DONT・UNDERSTAND・ENGLISH、と言った、ところですか。実はそれでこの間、ちよつとした経験をしまして、孝え込まされたのですよ。

ご承知のように、このあたりは都心に隣接している場所柄、募金、物乞いの類が多い。身体障害者保護団体とか、結核療養所とか、癌センター、精神病院関係等など、寄附帖を持ったのが立つづけに幾組も現われる日があります。中には、NAOとかSINとかの簡単な否定語肯定語だけでは、とうてい捌ききれそうもないのが入ってくる。ひどく入りくんだ前置を長々と述る手合なんかです。そうなれば双方の時間の経済も考えて、早めに『EU・NAO・ENTENDO・A・PORTUGUEZA』です。

相手の言うことにわたしの理解が及ばない、という限りで、これは無責任を空恍けでも言い逃れでもまい。この間の場合がまさしくそうでした。しかし、その男、蝶ネクタイなんかきちんと結んで、帽子の鍔もぴんと張ったなかなかの服装の男でしたが、憤慨しましてね、要するに語法と言い、発音と言い申し分なさすぎたらしいのです。「そんなにうまいじゃないか」と言うわけです。もう、どう言いわけしても、しどろもどろに支離滅裂になればなるほど、”下手の真似をしている”というわけです。益ます憤激させるだけでした。そうなる黙ってしまふより仕方がない。足音荒く出て行く男の後姿に肩をすくめて置くより仕方がない。

『私ハぶらじる語ヲ解シマセン』というブラジル語だけ知らぬ間に上達していたなんて……わらっちゃいましたね。判りますか、このわたしのわらっちゃったという気持が。わらうより仕方がなかったから、というこのわたしの気持が。……」

極くかるい失敗談どころか、結構深刻がっているのではないかと私は興ざめた。

要するに、古本屋の主人は感傷過多の人間にちがいなかった。移民には、物の考え方、受けとり方に特有の基調と言ったものがたしかにある。彼らの発想は常に彼らだけの承知する”大前提”の上でおこなわれ勝だ。いつも私を反撥させたのは、それだった。

私の両親が元もと移民なのだし、私はその両親の息子として生れたのだから、精神構造の上で共通項があることは疑えなかった。

それゆえの反撥だったと言えるかも知れなかった。私の少年時代はさまざまな移民的桎梏との苦闘と脱出の中にすぎた、と規定出来なくもない。

それにしても移民は、この国の中での所属の仕方に就いて、つまり、その出自と位置とに就いて、こだわりすぎるということはないだろうか。常住坐臥、滑っても転んでもそれらの総ての起因を”移民の条件”の内に見出し、”移民意識”を強める。意識の過剰と言うほかない。

一体、a国に住むa国人が、そのa国人であることを生涯の中で幾度意識するだろうか。”ここはブラジルで、そして、移民は移民であつて、ブラジル人ではない。”

よろしい。それは判っている。しかし、それも承知の上で、私は、彼らの決して”移民”の枠を越えることのない、その畸形な思考のパターン、その神経的な反応の姿勢が納得出来ないのだ。

移民が泥棒に見舞われたとする。”ブラジルに来たためだ”と考える。

詐欺に遭ったとする、”移民になってきたためだ”と考える。病気を患う、親をなくす、児をなくす、それもこれも、”移民にをつた身の上のためだ”と考える。それが私を苛立たせ遣り切れない気持ちに追い込むのだ。

不当に自己をおとしめ、いためつけているようで、実は一かわ剥げば野放図を甘えかも知れなかった。

ある日、

私はそれを古本屋の主人へ言った。すると、唇の端だけで皮肉にわらって、「移民の姿勢がゆがんでいる、という点はわたしも認めます。だがここにも原因と結果との顛倒があるので、ゆがむ理由なしにゆがんでいるということと、ゆがむ理由あつて、ゆがまずにいられないということとは、たいした相違がありますからね。わたしにはそいつがテコでも動かをい岩盤のように見えるので、あなたのように言い切れませんね。

この問題は、例えば、黄色い皮膚はそれ自体で際立つのではなく、白い皮膚の中で、一層黄色なのだ、というふうに考えられませんか。移民の、うるさいほどの自意識過剰は、取巻かれた条件の中での、極く自然な条件反射というふうに考えられませんか。

わたしの今住んでいる場所は、サン・パウロのいわば下町と言った、至極気の置けない連中ばかりの区域ですがね、七年以上ひとつところに住まっついて、それで、個有名詞で呼ばれるということは、まず無いですよ。

「OH・JAPONEZ」

と言ったあんばいです。日本人がその辺でわたしの家一軒というのではないのですがね。十分の一か、それ以上、百戸に十二、三戸もの割合いで日系の家族が住んでいる一劃なのですがね。が、あたりのブラジル人の目に映るわれわれは、おしなべて『JAP ONEZ』というわけです。

わたしがバナナの皮を踏んづけて転ぶ、雑貨店のジオアキンもその向いのBARの口オザもその脇に靴磨きの台を据えてしやが

んでいるジオゼも買物袋をさげた通りすがりの内儀さんも、起きあがって尻の辺のほこりを払うわたしに目を向ける。が、その目に映るわたしは「わたし」なんてものじゃなくて、つまり『JAPONNEZ』日本人一般というわけです。そんな視線に遇って、それを毛でふいたほどにも感じないで、いなす、ことの出来るときがあるとしたら、それは慣れへの、習性へ向つての、特攻的急降下の果だけのように見えるのです。」

……だが、それも簡単なことではないはずだ、と言うように主人は唇の端でわらった。

この古本屋の主人は巧みに喋った、と言えるだろう。しかし一場のお喋りというにすぎないだろう。この種の饒舌を私は以前にもよく聞いた。その昔も今も、それを饒舌としてしか認めない態度は一貫している。

移民は……、移民のことを何も彼も判っている、と言い張るつもりはないが、……頬当をつけられた曳き馬に似てはいはしまいか、と思うのだ。悔恨や反省や逡巡や、要するに、そうした立ちどまる思考の姿勢は決して曳き馬にふさわしいものでない。頬当をつけられた以上、前方の視野だけを信じるのが最も真実だ、と言えないだろうか。

私の両親も『OH・JAPONNEZ』と呼ばれて生きた。おそらく両親の個有名詞が目色髪の色異なる隣人によって、はじめて正確に口ずさまれたのは、それぞれの埋葬の日の墓標によってだったかも知れない。それさえ、YがIに転訛したローマ字綴り

で刻まれていたのだが……。

そして、私もやはり"OH・JAPONEZ"と久しく呼ばれた。そればかりか、戦争期の最中、まったく理不尽な話だが、"OH・QUINTA・COLUNA"（ナチス独逸の組織したスパイ部隊、第五列の直訳語）とさえ呼ばれたものだ。もちろん、呼ぶ側の無知と更に、故意に目を閉いだ誤解とによるものだが、私はその悪ふざけにもしばらく耐えなければならなかった。しかし、それらはみな詰らないことだ。どんなふうと呼ばれたか、という完了形の中の自分に対してより、どんなふうと呼ばれるか、という次ぎの自分の方へ私は常に心を向けた。それは幾分辛棒の要ることになりがなかった。が、その呼び懸けは事実たしかに変わったし、現に今、私はそれを遥かな過去のこととして眺めている。

移民は元もと振りかえらずにはいられない"故国"を持っていたから、私と同日には論じられないだろう。が、とにかく私には振りかえってみる"故国"も無かったから、頬当の閉遮皮は少しも気にならなかつた。現に目で見ることの出来る視野だけを視野とし、そこからはみでる部分に心を費すことはなかつた。そうしたところに心を患わずなどは馬鹿げた詰らないことでしかなかつた。それが"一世タイプ"というものなのだ、と私は信じている。

ある日、

この考えを洩らすと、古本屋の主人は俄かに店主としての日頃の嗜みも忘れたふうになり、強い語勢を以って、私に質し返した。

「では、そういうあなたは、こどもの時分も、戦争のつづいた幾年かの間も、閑すぎると言っておられる今日此頃も、これまでに一度も、ご自分の裡の“二世”に就いて心をめぐらされたことはないのですか。その背後にさかのぼってつづく、移民の来歴、常に少数者でありつづける者の運命に就いて、心を傾けられたことはないのですか。」

私の言うところから、その程度のものしか汲みとらず、そして、このような物言いぶりをする相手なら、返辞は騎虎の勢というものだった。

「そう、信じていますな」

「ほお」

主人は既に充分に戦鬪的な目で二度三度、すくいあげるように私を見た。

「この国の幾千万人中で、以上でも以下でもない一人の“個そのもの”として、生きておいでになれることを微塵を疑わないのですか」

「疑いませんな」

「と、すると稀有のしあわせの方、ということなのでしょうかね。ところで、わたしにも当国生れのいわゆる二世のこどもと、それから差し詰め“一世半”とでも言わなければならない日本生れで当国育ちというこどもと、両方おりますが、このこどもたちのまえにわたしは、きつと土下座して、両手をついて、ブラジルに連れてきたこと、ブラジルで生んだことを、詫びなければならない

日が何時かくる、そんな予感がしきりにしますね。

実は先日、日系の、主に学生ばかりでつくられているPクラブ、ご存知ですね、そのPクラブから加入の勧めを受けまして、すると、それへの諾否が既にむつかしい問題になるのですね。わたしにも当のこどもにも、決断というものが下せないわけです。もちろん、目下学業の方が忙しくて、折角クラブ員になっても施設を利用する機会は少いだらう、という事情もありはします。が、それなら答は”否”と出るかというところでむない。

この優柔不断は実はPクラブに対する牽引と反撥との等値を持って余すところに抛っているのです。同じ色の皮膚と顔付とを持った集団の中に這入って行く場合の謚ぎと躊いとが等しい強さだ、と言うことなのです。牽引に身を任せるのは大きな外界を残して線をひいてしまうことでしょうし、反撥を野放しにすれば、第一自身がこの国のひろさの中で霧みたいに消滅してしまいそうです。これはうちの一世半の方の場合ですが、二世となると、事は更に面倒になりそうな予感がする。つまり牽引にしる反撥にしる、それは二世の裡の”日本人”が行うわけですが、その”日本人”は同じ一人の二世の裡の”ブラジル人”と分ちがたく縊り合わされた一本の綱なのですから。

一世半の方の場合には”日本”をどう処遇するかが問題になるが、二世の場合は”日本”と”ブラジル”とのダブルなのですから。

わたしがこんな話を誰彼の見境いもなしにするのでないことは、どうぞ分ってください。

このところブラジルにもちよつと日本ブームと言った風潮があつて、しぜん日系移民たちも何となく自信めいたものを取り戻してきております。

日系人を核とする集中運動みたいな気配もかなり強く窺えます。そうしたときに、集中にも拡散にもふんぎりがつけられないでいる、わたしたち親子の不決断は、多分に物笑いになる懼れのあることも承知しております。

あなただからこそその本音なのです。」

語調が落ち着いてきた。くすぐつたいような言葉を挟んだ。が、それにしてもそのまえの誇張された物言いぶりは持て扱いかねた。一体、私はどう言ったらよかつただろう。例えば”それらはみな詰らないことです”などと答えようものなら、また、さっきのよういきりたたせてしまふだろうし、とにかく、氣拙さを蒸し返すのは気がすすまなかつた。

「で、いずれはお引揚げのつもりなのですか」

私なりに慎重に当り障りのない言葉を選んだ。

「しばらく、そんなことを考えたこともあります。しかし、帰国はとても古本屋風情には……。」自嘲のようなわらいを口辺に浮べた。

そのとき、ネクタイをゆるく結んだ老人の客が選んだ本を持って寄ってきた。主人がそれを手早く包み、包装紙の上で計算をして代金を受け取った。

「帰国」は面倒を往復にするに過ぎませんよ。この国ですごした時間の永さだけ日本は遠くなつて、それを修復するのには同じだけの永さの時間が要りますよ。わたしの家の場合、それが十年です。この十年という歲月ばかりは取り返しがつかないのです」

「この国で住みとおすつもりなら……」と私は考え考え言った。

「……この国のことばの中に、日本風呂にでもつかれるようにとつぷりとつかつてみたら、どうでしょうかな。また別の感じの日が始まるかも知れないですな。一つの社会を成り立たせる要因は一つの言語だと言つてもいいので、ことばにはその一つ一つにどつしりとした目方があつて、案外、生活の据りをよくするかも知れないですからな」

「それは……同じことばを以つて話し、同じことばの意味を以つて感じたら、たしかに、この国での日本人の暮し心地もちがったものになるだろう、ということとは考えます」

主人が気味の悪いくらい滑らかな声で同意した。

「まさか、その人間のことばの表現能力だけを理解能力の全部、思考能力の全部と速断しはしないにしても、例えば、非常に稚拙なことばの表現だけを通して、その相手の裡の未顕の知性を測定することは、やはりむづかしいでしょうからな」

私は更にまえの言葉を補足した。

「その通りです、言語の懸隔が感覚の懸隔でもあるように混同されるときは怖いですね。人間はそういうとき酷い仕打を実に平然と加えることがありますからね。社会の契約の第一歩が”同じこと

ばを持つことだ”というのは全くです。」

主人が益ます低く滑る声で言った。

どうやら、私たちは買わないなら買わないなりにその心得を忘れない私と、そうした客に対して嗜み十分と思われる店主との正常の関係に立ちかえったかに見えた。しかし、それで気をゆるめたのが早計だったことは忽ち思い知らされる。主人が言葉を継いだ。

「ところで、この国の人間と同じに、この国のことばを持つ困難は言わないとして、未だ後に人種の問題は依然として残されておりますね。同じ言語を持たない相手に酷く振舞うそれ以上に、同じ色の皮膚を持たない相手に、人間は往々残酷になりやすいのではないですか。当の行為者の自覚さえなしに行われる残酷の結果の受難者が、戦時の頃には移民の中に随分あった、と聞くのですが……」

私には主人の真意のあるところが判らなくなつて、黙った。

そのとき、児を抱いた女客が寄つてきて、主人が言われた雑誌を包み、包装紙の上で計算して代金を受取った。

私は瀬踏みをするように言った。

「移民の将来の判断に、稀な非常の場合だけを公式とするのは反対ですな」

「いや、わたしが訊ねたいと思うのも、その折り折りの現象ではなく、そのように”あらわす”もの”あらわれる”ものの奥にひそむもの、例えば、その種族的意識とか、その牽引と反撥とか言っ

たものに就いてですよ」

「では、ワタシの方こそ逆に訊ねますが、おたくはこの国で日系人に同化が行われるのを、どの程度に必然と考えられるのです。もちろん、ここで言う同化は、言語や文化面に限らない、”混血”も含めてのことですが……」それがよく判らないので、そのことも知りたい一つなのですよ」

主人の言葉付きがまた気味の悪い滑らかさを纏った。私は相手の目まぐるしい変化には、もう一切構わない誓いを立てた。

「いいですか、仮に、ここでは物を考える場合の時間の単位を、十代ではなく百代の目盛りでやってみましょう。つまり、二十年三十年の尺度でなく、二百年三百年の尺度で考えてみましょう。いったい、三百年後のブラジルで、日系人はやはり現在の人口比率、百五十分の一を持続させて行っているだろうか。円の中に小さな円を描いて、その線をうすれさせないために永遠になぞって行くだろうか。スープの中のおぼろのように、それ自身で他を弾きつづけて行くだろうか。どう思いますか」

「それが、わたしにはよく判らないのですよ」

主人が猫のような柔順さをつづけた。

「実は、ワタシにも判っていない……」

私はそう言つて馬鹿のように笑った。

「……これは一種の予言になりますからな。誰にも判らない、というのが本当ですな。それに、何しろ事は同化される方だけの問題でなく、むしろ、する方に一層問題があるかも知れないですから

な。これは移民と移民を取巻く一へいの関係のもとに決定されるはずの事項です。この国を水槽に譬えて、その中に黄色いあぶら一滴として浮ぶ場合と、黄色は黄色ながら、ひとしずくの水滴として滴って忽ち解けて消える場合と、二様の仮定を立ててみますか。黄色の水の滴りはあまりに少い容積の嘆きをとどめるかも知れません。じぶんの黄色を与えたのに、その黄色は跡形もなく、水槽の水は元のままの無色でしまっている。これは少数者が少数者であることをやめる過程でいつも味わう苦渋です。だが、それなり、何時までも水に混じることのないあぶらとして、その異質の張力を持って余し浮かびつづけることはあぶらの“幸”だろうか。三百年後にも百五十分の一の少数者の位置を保つとしたら、それは日系人の“幸”だろうか。実は、この場合の方がよほど問題だ、と思うのですな。三百年の後まで少数者が少数者のままでいるとしたら、それはこの国が、この国の多数者が、“そう、望んだから”と言ってもいいのではないか。どうやら、北米の日系人の場合にもそんな傾向が窺われるような気もするのですが」

「この国にそうした気配はありませんか。また、いずれか一方の親を日系に持った混血児の往く手に特殊の条件が付いて回る、というような懼れはありませんか」

「無いのですな、それは全然無いのですな」 調子づいているのが自分で判った。

「それだと安心です、でなければ混血が完成されるまでの幾代も幾代もの後継者が生け贄ということになりますから」

主人がふしぎなくらいしずまりかえった口調を保った。

「その点は、全く逆なのですな。それと平均的に見て、日系人とブラジル人（ここで言うブラジル人とは人口比率の上で六〇パーセント近くを占める白人を指すのですが）との混血児は、その姿から言って平均的日系人、平均的ブラジル人より優れているのですな。むすめなら、より美しいむすめが生れるということなのですな。わたくしごとで何ですが、ワタシの二人の娘などがたしかにそうなのです。親の口から言うのは実に何なのですが、つれて歩くと随分の人が目をそばだたせるほど……」

私はたしかに調子に乗っていた。手ぶり身ぶりまで知らず知らず大きくなった。が、その半面で、そういう娘らと連立って歩くことも絶えて久しいのを、刃物に触れた感じで想いだした。何処へでもよろこんでくつついてきたのは小学校の頃か中学の下級生ぐらいまでだった……。

古本屋の主人が言った。

「そうでしたか、奥さんはこちらの方で、ではないか、とは薄うす考えておりましたが……で、これは、わたし自身一世半や二世のこどもを持つからこそ押して訊ねるのですが、ご家庭で日系人としてのこだわりを感じられる場合、事柄、それは全くありませんか」

「あるはずがないではありませんか……」

大きな声になりそうなのを極力おさえた。

「……生れた子たちが優れていて、その子たちは日系人の父親と伯

系の母親とを持ったからこそ生れたのだ、としたら夫婦仲だって悪いはずがないではありませんか」

「そうすると、黄色のひとしづくが既に水槽に滴った以上、それはひろがって解けて消える方向にこそ、移民のしあわせはある、ということになりますかね。そこで、わたし自身一世半や二世の子どもを持つからこそ考えずにいられないことなのですが、それについて、家ではたわむれに”雨天の歩行者理論”と名付けているのですが、濡れることが判り切っているからと言って、帽子も新聞紙も被らず、殊更に水溜りをひろってじゃぶじゃぶ歩いて行くのが、つまり、どうせ濡れるなら早く濡れてしまおうという態度が本当か、逆に、あちらの軒下こちらの木蔭と、飛石づたいに出来るだけ濡れる運命を遅らす態度が本当か、例によって、結論は一向に出ないのですがね。どうでしょう。逸速くひとりだけじゃぬれになってしまった者に、後悔はないでしょうかね」

主人の目がいつかのときのように私を掬いあげた。低いなめらかな声は隙を窺う手だてだったのにちがいない。獲物の所在をつきとめた狩人の露骨な目の光をそこに見た。

「雨でずぶぬれになった者のことは知りませんが、ワタシ自身に悔いはありませんな。一人の大学生の息子と、二人の美しい娘と、そして家内とにワタシは全く満足しておりますな。」

私は命運の尽きた城に踏みとどまる城主のように昂然と答えた。

「いや、お気を悪くされては困るのです。わたし自身一世半や二世の子どもを持つからなのです。それで、最初の異種族婚をする日

系人や、二分の一、四分の一、日系人である幾世代かの者の身上に無関心でいることが出来ないのです。そこでは過程的な“何か”に耐えて行かなければならない運命が待つように思われてならないのです……」

「何か、というのは一体何なのですか」

そう、居丈高な姿勢に転じた私に対峙して主人もひとしく胸をそらせた。

「何か、とは例えば、あなたの場合ですよ。」

私はすっかり齒をむきだした主人を、そこに見た。

「あなたは、登庁まえと退庁後の余暇を持て余す、とこぼしておられる。

あなたは州農務局秘書三課 a 一級公務員、一〇三号俸という、現行最賃の十倍もの給料をとっておられるのに、暮し向きの楽でないことを洩しておられる。このところ、毎日欠かさずわたしの店にこられて、こられるのは幾らこられても差し支えありませんが、時間すごしをしておられるのを、それとなく見ておりますと、本もお好きはお好きなのだろうが、それより、つまりお宅にあつての居心地の方に問題がありはしないか、と失礼ながら、そんな想像を働かせたくなる。少くともあなたほどの収入をお持ちで、夫人が日系であつたのなら……」

主人の視線がちらちら、私の上着のゆるんで垂れているボタンに流し目された。私は真実膽の煮える思いで、(この、肝の煮える、という言葉は一人子である私に腹を立てたときの母親の口癖だっ

た)手を旗のようにふって遮った。

暇を持って余す、ということも、家計が必らずしも有り余る裕りを持たない、ということも、それらは悉く私自らの口から多分に座興と言ったほどの軽さで語られたものにすぎない。その論拠は総て私が相手に預けた武器なのだ。それを、こんな折、こんなふうに逆用する卑劣さ、というものは、言いようもない。私は喉元のところにラムネ玉のように詰っている言葉を、(この、ラムネ玉、という形容は気短かだった父親の怒りのさまを批評する場合の母親の口癖だった)一気に抜くように吐き出した。

「それこそ、下司の感繰りというやつではないですか。例えば、家計のことにしても不手際と冗費とを既定の事実として、その前提で物を言っておられるが、当のワタシならびに家内が、それを不手際とも冗費とも考えていない、としたらそれを理由にワタシの思惑をあれこれ付度すること自体論外となるのではないですか。また、一般通念か何か知りませんが、いわゆる、日系女性との比較に於て、おそらく、家内がより多い回数美容院にかよい、より多く衣料、化粧品に支出し、洗濯屋の上得意となっていることは事実でしょう。その分、他の支出面に圧力となるということ、これも事実か知れない。が、それゆえに、一般通念上の日系女性との比較に於て、より手入れの行き届いた肌と若わかしさと、しなやかな手とを保つとしたら、それが家内の本来の望みであり、ワタシの満足するところでもあるのだ、としたらそこには後悔する何物も見出しようがない。重ねて言いますが、ワタシは全く満足

しておりますな。偶たま、お宅の店を見かけて、古いなじみの本に接したよろこびを語りはしたが、あのお喋りにもワタシの誇張癖は入っているのです、言葉の額面通りで受取られているとしたら笑止の沙汰（この、笑止の沙汰、は父親が屢々口にした言葉だった）というものですな。ワタシにとって、日本語の本は少年の頃の遊び場に転っていた小石か貝殻を見付けたほどの意味なのですな。ちよつと立ちどまつて見下す、というくらいが精ぜいでその証拠にワタシは遂に一冊も購めなかった。それに就いては、買わない客の辞令のつもりで道化たことを言いはした。しかし、買わなかった理由は、実は唯それだけのことにすぎない……」

私のまえに、主人の皮肉な微笑が絶えずあった。そして、一層がまんならなかったのは、その目が優越者の寛容で酔って見えたことだった。嗜みありげな店主どころか、買わない客である私に對して常づね見下す感情をひそめてきていたのにちがひなかった。この断定を総て正しい、とするのではない。そのとき、私の心の平衡はよく保たれていたとは言ひ難い。しかし、仮にそのためにどんな過ちが冒されているとしても、主人が私に用いた卑劣な手段と較べれば物の数ではないはずだった。

登庁し、机について新聞をひろげても、しばらく、活字は切れ断れに飛ぶばかりだった。あの主人に言わせるなら、私が遂に買わない客で終始したのは、偏えに財布の輕少と家内に対する氣兼とに原因を帰すのだろう。

同様の筆法で、子供との疎隔感も、更に、現在の閑職も、悉く皮膚の色の違和と少数者の問題に結びつけるのだろう。だが、それこそ、乞食のような少数者根性というものではないか、と私は歯噛みする心で憶いだした。

しかも、そいつは無恥な思い上りの精神まで具えて、この国より他に国を持たない私を見下している！。

私は二センチ余りの糸の端に辛うじてくつついて揺れている上着のボタンを見つめて目を眩ませた。そのめくるめく渦の中に一へいの黒い数字を読みとって、傍の受話器を引き寄せた。

州財務局税務部委託販売税課に、家内の一等下の弟が昨年来勤務している。

回転盤の数字に人差指を当てながら、私はどすぐろい凱歌を挙げた。

私は一瞬の中にT街へ翔け、古本屋の主人の面前に自分を立たせてみた。

十分に余裕を具えたわらいを自分に湛えさせた。一語一語、焦せらず迫らず落着いて、刻む口調を自分にとらせた。

『商品の移動に伴って、必らず、売手側、即ち商店が履行しなければならぬ法規がみるはずですが、おたくはそれをご存知ないようですな』

そう言ってみせただけで、主人の顔いろには不安のかげが掃くだろう。

が、強いて気付かないふりを粧い、そんな目いろを向けて寄こす

だろう。

『公正領収証のことです、五百クルゼイロス以上の商品販売に於て、必らず、その品物に添えて手渡さなければならぬノッタ・フイスカルのことを言っているのです。お分りになったでしょうな。おたくは、それを現にワタシの見ているところで、一度も履行した例がありませんな』

主人の眼差しは、既に主人自身を裏切つて氣遣わしげなまばたきを見せるだろう。私は追い計をかけてやろう。

『或いは、これもご存知ないのかも知れませんが、現州政府の代になつてから、販売税に関する遺漏、脱落は殊のほか厳しい容赦ない罰則を以つて臨まれております。所得、営業、固定資産など、他どの税種の場合よりも重罰主義が適用され、普通税率の数百倍の追徴課税に始まり体刑まで規定されております』

望むなら、いちいち第何条何項と挙げて聞かせてやつてもいいわけだ。

主人の“優越者”はもう完全に影をひそめ、その日は追い詰められた小動物のように血走つてきているだろう。私は齒を見せてわらい、止どめを刺すようにつけ加えてやろう。

『こうした不正商人の摘発奨励策として、訴人には褒賞金のような制度も設けられてあつて、それは、追徴課税金額を基準とし、その何パーセントか何十パーセントか、ということも聞いておりますな』

だが、そこまで相手を窮地に追い込んで眺めたとき、私の裡に

意外に快哉の声はあがらなかつた。却って、受話器を掴んでいる手の力が、やや萎えた。手の力を失わせ、躊躇らせる私の裡のもの、……背中から狙い撃したようなあの卑劣さから見れば何でもありはしない。それ以前に、あの主人のたくらみがあるのだ。私は自分を鼓舞することに努めた。役所で、長官の側近から万年洩れているような自分にしても、古本屋相手の逆転くらいは一挙手一投足だ、ということは見せて置いてやらなければならない。

決して憐れまれるような私でないことを、むしろ充分に憎まれるほど強い私であることを、『CASTIGO』（懲しめ）に於て私の仮借ないことを、見せて置かなければならない、一度は……。

杭を打ち込むように、私はその言葉を繰り返し自分の心に打ち込んだ。

くろく、つめたく、すべすべした手触りの受話器が生温たかく汗ばんでいた。細くくびれたその握りのあたりを、それが古本屋の頭でもあるかのように掴みつづけていた。

ある開拓者の死

(27枚)

西岡国雄

旧作再録・その三

ある開拓者の死

(27枚)



西岡国雄

一、黒人カメララーダ

「何、仕事が欲しい」

大助は威嚇するように太い声で叫んだ。彼の前にはバイヤーノらしい黒光りのする顔の男と、その妻であろう腹のひどく大きな女

とが肩をすぼめるように立っていた。かたわらの地上には彼等の全財産を詰め込んであるアロース・サツコ一つと、痩せて猿のような面で白眼ばかり大きい幼児がきよときよとと大助を見ながら坐っていた。

「よく働きさえすれば、使ってやってもいい。まあ、二、三日働いてみる。サツコは此方へ置いとくんだ」

そういつて小柄な大助は、足早に家裏の方へ歩き出した。この黒い家族が裏のミーリヨ小舎へ着いたか着かぬ間に、大助のどら声は又ひびいた。

「急いでカフェザールへ行くんだ」

六尺近い黒い男がエンシャードをかついで大助の後から裏山に登って行く。雲一つない空に、午下りの太陽がきらきらと瞳にしみる……。

もうすっかり暮れたコーヒー園を、四人ばかりのカマラーダが重く疲れきった足を引きずるように下りてくる。身も心も乾燥しになりそうな終日の炎暑と闘ってきたこの勇士達には、夜こそ極楽世界であるのだ。望みといえば空き腹を満たすことと、ぐっすり寝こむことの他にはない。だが彼等はこの二つが恵まれているのみで充分満足していた。それぞれ、空ききった胃袋に夕餉を想像しては、口中に貯ってくる唾液をごくぐり飲み込みつつ帰って来た。

日本人の若者達と今日来た黒い男の四人は、井戸端でぶるぶると顔を洗い、汗でぼさぼさになったカミーザでぬぐって、前後し

てカンテラの光がゆらぐ薄暗い食堂へ入って来た。今こそ楽しい夕餉が始まるうとして居るのだ。四人のカマラーダに大助、それに「似た者夫婦」といわぬばかりの小柄な妻と拾才ばかりの男の児の七人がメーザに着いた。その時、彼の今日来た黒の女が食堂の窓から眼ばかり光るクビを出した。突如、大助のどら声が破裂する。

「この乞食奴が、出てうせろい。働かぬ者が飯を食うという法があるか」

カンテラの光が大きく揺れて、食堂がざわめきだした。つと立ち上った黒い男は形相物すごく、小男の大助をねめつけて、

「つうつう……」

腹の底から絞り出すようなうめき声を発した。緊張した他のカマラーダ達は、起こらんとする風雲に身がまえをした。けれども弱き者はカマラーダであった。一端怒り心頭に徹した黒い男も、支配者の前には頭をさげねばならないのか、結んだコブシをそつと解く弱さであった。妻は小舎へ逃げ帰って泣きじゃくっている。可哀そうに、彼女も今日一日食にはぐれているのだ。これから此処を出て何処へ行くのか。身重な妻を連れて願ってみよう、頼んでみよう。こう思った黒い男は、崩れるように又腰を落した。

この様子に、他の人々もほつと一息ついたのであったが、飯がノドを通るはずがなかった。この地主は、今迄も厳しい男とは思っていたが、こんな鬼だとは知らなかった。世の中にこのような人間が又とあるだろうか。そう思いながら、あたかも自分が叱られ

たように俯向いていた。

「パトロン、彼女も今日一日なんにも口にしなかったのです。そ、そしてもう臨月になっており、仕事はできず、可哀そうな奴なんです。ど、どうか、ウン・プラットの飯を食わせてやって下さい。明日からうんと働いて恩がえしはしますから……」

「だめだ、だめだ。俺の処じゃ、働かない奴には飯を食わせないことに定めてあるんだ」

そういつて大助は、ボルソからなにがしの白銅貨をつまみ出し、メーザへ投げ出した。悲痛な面持ちで起ち上った黒い男は、その錢に目もくれず尻に敷いていた破れシャペウをつかむと、こそこそと舎外へ出て行つた。

裏の小舎へ行つたらしい音が聞こえていたが、やがて哀れなバイアーノの家族は、子を抱き、サツコを背負い闇の中へ消えて行つてしまった。

## 二、ラランジャを売る

あくる日 — からつと晴れて昨夜の出来事など遠い過去の夢のように拭われた日和 — カマラーダがカルピに出た後、大助は唯一人、母屋近くにあるテレーロ拡張の煉瓦を一枚々々重ねていた。

— 馬鹿たれ奴が……。人情だなんかと女々しい考えを起こしてこの浮世が渡れるものか。俺は泣き事をいう人間は、ずんと虫が

好かねえの　大きな凶体して、あのさまあ何でえ……。それに若い奴等も生意気だ。

ゆうべはどうとう飯も食わんで帰ったりしやがって……。糞面白くもね。――

やはり気にかかるのか、昨夜の出来事を思い綴っているのである。

× × ×

百五十アルケールを所有して、この植民地一の地主である彼の家は、赤土の極く粗末なもので、裏手はバナナの林、前の方はラランジャの伸びきった樹に囲まれ、一面に雑草が生い繁って、子供達が怖ろしがるような屋敷だった。小女の妻がアルモッサの仕度をしているのか、コジーニャから細々と煙が立ち上っている。家の横の藪道から瞳の青い子供が――それは山向うに見えるコロニアに見かける――三、四人が、

「ボン。ジイア」

そういつて大助の傍へやって来て、

「ラランジャをこれだけお呉れ」

一番丈の高いのが一ミル貨を差出した。

大助は無精気に立ち上って、棒を与えて子供らにとらした。

黄金色のラランジャがポタリポタリと雑草の上に落ちていくのをじつと見ていた大助が

「これこれ、もう沢山だ。そんなに落しちやいけねえよ。ウン、

ドイストレイス、……」

子供がもってきたサツコへ声高く数えて入れるのであった。

### 三、放浪

金子大助―金子は名に相応しいが、『あの小間助に大助とはよかつた』と植民地の人々が陰口する程小柄な大助は、十四年前このノロエステの奥のK植民地に入植したのであった。

ブラジルへ来て三年ばかり聖市で大工をやり、厘に厘を積む式で小金を蓄え、この植民地では最上等の土地を百五十アルケールス八コントスで買い込んで入った草分けであった。

その当時の奮闘振りは大助がもつとも得意に回想するところのもので、ピングアでも飲めば平常とは全く異つたゆるみのある笑顔で、誰れかれの差別なく物語るのであった。

ある日の夕餉の後で、若いカマラーダを前にして、過去の半生を語り出した。

―俺だつて大した人間じゃねえ。

俺の生まれ故郷は北海道なんだ。親達は元を質せば会津の藩士だったが、明治維新の落城を前にして、スタコラ、エゾ地南部へ落ちのびた程の腰抜け武士よ。

その地では百姓に落ちぶれ、粟を作つて細々と暮しを立てていたのだが、俺はその三男に生まれたんだ。

何？ 大助つて名をどうしてつけたかつて？ ……馬鹿にするな

よ……アハハ……こいつは親父がやっぱり俺と同じように小男で人に馬鹿にされたから、この俺が大助になるようにつけたんだろくな。十七の秋に室蘭で大工の弟子入りをやったが、何よ、——その……その娘つ子という奴と初恋とかちゅうやつに落ちたんだ。それが知れた時、親方の奴、赤うなつて怒りよつた。

その晩そこを飛び出したきり……あれがハタチの時だったから——佐様——二十八カ年ばかり故郷へは足を入れずさ。東京で二カ年遊び、

『いっそ遊びついでに外国を見てやれ』そういう簡単な考えで満州へ渡り……あすこでも、大分道楽をやったなあ。今度はうんと遠い所へ行ってみようという気が起き、ペルー移民の間にもぐつて南米へ渡つて来たんだ。

ペルーのリマ市で散髪屋の弟子になりすまして、毛唐の頭をチヨキンチヨキンさあ……。若い時は仕方のないもんで、ペルーにも落ち着くことはできず、あれからチリーへ入り、今度は硝石山の人夫かせぎだ。

一体俺という人間は、特別小男に仕立て上っているの、何処へ行つても、おいチビチビと可愛がられて生活に不自由することあなかつた。

チリーからアルゼンチンへ……。ブエノス・アイレスの郊外にも二年位も住んでおったか？ それからブラジルが日本人向きだと聞いたもんだから、もう矢も楯もたまらずにさあ、サンパウロに来てしもうた。考えると、今から十七年もの昔さあ。

俺もその時にや三十を越しておったから、流石に考えたなあ。何時までも放浪しとったんじや、仕様がな。これっ位で道楽は切り上げようと…。まあ、これまでが俺の歴史の上巻という処だよ。ハツハハ…。

そう話して、大助はピンガを口へもっていった。カンテラの光は窓からの涼風に細々とゆらいだ。

若い者達はメーザにもたれて、大助の小さい赤黒い顔を見つめながら、聞いていた話がとぎれたのでほっと深い息をついた。

大助はまた続けた。

―人間も悟ると偉いもんだ。昨日という日まで道楽三昧で暮して来た俺のようなヤクザモンでも、素真面目になることができるからなあ。

幸い大工仕事が少々いけたので、サンパウロじゃあ直ちに仕事にありつけた。そこでも親方に可愛がられて、金は割に貯った。他の奴等が、

『宵越しの金は使わねえ…』という職人氣質で、湯水のようにパツパツと使い遊んでしまうのを外目に見てさあ、始末をして行くなあ、まんざら淋しいもんじゃなかつたよ…。今に見てろ、という気があつたから、奴等をせせら笑ってやる予猶さえあつた。…何？ 奥さん、かかあかい？ そうだ、その時分、あいつは耕地で前の亭主が病氣になり、サンタ・カーザへ入院していたが、親方の家へ女中に来ている内に亭主は亡くなり、寄辺のない独り

身を毎日泣き暮しとったのだ。それを親方の胆入りで一緒になつたんさア。

ところで、ある日のことだ。知ってる男から土地を買わねえかというんだ。俺は北海道で土地で儲けた人間を沢山知つとったんで、将来はどうしても土地持ちでなくちゃと考えておつた時だつたんで、すぐ乗り気になつた。その男は色々、パウダーリョがどうの、ペロボンがどうの、地味の良い事を並べ立てておつたつけ。『地権はどうだ』と俺が訊いたら、ドットール・ペードロがゴベルノが払下げたのを買受けたんだから確実なもんだと云つたので、俺も買う気になつた。……が、今考えてみりや空恐ろしいことさ。マツパ見ただけで皆目解らねえ土地を買うというんだから。

こうして苦心して貯めと八コントス何がしを全部払い込んで手に入れたのがこの百と五十アルケーレスの地所さア……。こう語る大助の顔は、次第に愉快そうに輝いて見えてきた。カシテラの灯は石油がきれたのか、今にも消えそうな瞬くような燈だった。

大助は立ち上るなり、フツと吹き消して、ほう、ええ月夜じゃあねえか、と誘いながら窓外を見た。

青白い異国の月光が、みんなの赤銅色の面を照らしている。

一人の男はこくりこくりと船漕をやっている。熱心なもう一人の若者が話をうながすように、

「貴方はそれでよくその地所のよいことが解りましたね」

「どこの何兵衛だつて、こればかりや全く気紛れさア」

だが、大助は微笑を含んで

—その知り合いという奴が何処をかうかとマップを拡げるから、『何処だつて、そんなことが解るもんか。まあ、売り出しの一番手前が良からうな』唯そういつて決めただけなんだ。全くこいつだけや運だったよ。

考えてみれば今から十四年も前のことだ。いよいよ入植するという段取りになつて……その時分は、今サンパウロにいる正坊も生まれておつた。

かかあと三人がソロカバナ線の汽車に乗り込んだ時にや、流石に南米中を股にかけ廻つた俺も、一寸心細かつたよ。

汽車は終日、瘦地ばかりのカンポを走り続けるのに、何だか地獄の里へでも運び去られるような気がしたよ。翌々日の夕方、〇〇町まで辿りついた。今でこそ此処もすっかり拓け切つたが、あの時分は〇〇町迄しか鉄道が来ていなかったもんだ。

〇〇町には地主の住宅があつて、その晩はその物置小屋へ泊つた。

一寸ばかり残つとつた錢で米と豆を一背負いと塩やマッチを買い込んで 次の日がいよいよ入植と定めた。〇〇町からは四十キロからあるんだが 路というにや勿体ないように、両側の草樹が蔽いかぶさつて、カロツサでも容易のことでは通れやしない。

四十キロという路が全部密林の中で、薄暗いトンネルのような処を俺が兵糧をうんとこさ背負い、フォイセやマツシヤードやエシヤードを手にはぶら下げて先に立ち、かかあが正坊を負うて、

鍋、塩、マツチの包みを下げて後から続いて来た。

自慢じゃないが、涙が霽れてきた。幸い三十キロも行った処にイタリアーノがおつて、豚の放し飼いをやっていたので、その日はそこに泊めてもらったが……。あの時ほど人懐かしい思いをしたことあなかつた。

そのイタリアーノも地獄で仏に会ったように悦んで、豚肉で御馳走してくれたが、実際山奥で絶えて人に会わんときゃ、誰も彼も皆兄弟のような気がするものだ。

処で、自分の土地に一步を踏み込んだのは、今のリンニヤ辺だった。

あの鉄道線がその当時の路でな。百五十アルケールスの地主様と成って自分の地所へ来てみたものの、この広い区域だ。『成程俺の土地や広いな』と感心したが、手のつけようがない。『こりや早まった』と思つたが後の祭りさ。作物をとつた処で、運搬もできねえ。仕方はない。少しずつ山を伐つて豚、鶏でも飼いつつ、浮世を忘れた気で汽車でも開通するのを待とう、とかかあと話し合つて椰子の割木小屋を造つて、親子三人、山の仙人生活を始めたんだ。

夜が更けてきたが、大助は更に打切ろうとはしないで、

— 考えてみりや人間の身体という奴は、弱いようで強いもんだ。俺が今日でも若いもんになんだけ働くのも、あの時分の体験があるからだよ。かかあもよく働いた。ワラジも解かずに寝たこと

が幾日も幾日もあった。

北海道の熊　―　俺達の顔が正にそのとおりだった。今じゃ一包のマツチを一月にペルデしているが、あの時分は始め買って入った一包が三カ年、汽車が開通する迄あった。小屋の中央へトッコを一つ半埋めにした奴へ火をつけて置くと、六日も七日も燃え続けとった。それに石油一滴使うではなし、マツチの要るよなことはなかった。

入植が九月だったから、十二月にミーリオや豆、バタタの収穫があるようになる迄、食い物といえば米、豆、塩に菜っ葉位のものであった。翌る年、イタリー人からもらった豚が仔を産む、鶏がビッショにやられながらも殖えていったから、心強かった。別に汽車のつく迄待つ気じゃなかったが、少しでもカフエーを蒔いて置かんことにや、草分けの価値がない。後から楽に這入って来る奴と同じじゃ残念だからな。

オンサの吼えるのも耳障りなのは初めの間だけだ。少し経つと、あれが聞かれぬと却って淋しい位よ。

幸い、病気ひとつするでなし、今日迄暮して来たが、植民地の奴等が俺のことを運が好いなどというが、決して運じゃねえ。

人間は努力だ。ふんばりさえすりゃあ、俺のようなヤクザモンでも可成り成功できるんじや。

ああ、長いこと話し込んだが、さあさあ、寝た寝た。明日はS地のカルピをやって貰わにやらんから。

大助は立ち上り様、両手を伸ばして大きなアクビを一つした。そ

うして、ことごと右手の寢室へ入って行った。

#### 四、懐郷

大助が故郷を飛び出してから二十八年になる。時折、指を屈しながら

—四十八か。俺も爺になったもんだ。親父らはどうしているかな？

親父が、そうだ、八十を過ぎた。お母が七十八か。兄貴が五十七と、相変らずの貧乏暮しだろうな。……丸長大工のお米さん、初恋の娘、……俺とは三つ下の十七だったが、あれも白髪の婆さんで、今は何処のかかあに、いや、何処の祖母さんになっていることやら。小学校の級友等も皆年は寄ったろうが、大した成功した者はあるまい。やっぱり俺が横綱格かな？

大助は近々に所謂、錦を着て故郷へ帰ろうという予定をもっていた。でこの頃は、よくこのような思い出にじっと耽っていることがある。

今日も快い晴天である。カマラーダ達が畑へ出たあとで、庭の樹蔭に午前の涼風を受けて、うとうととしていた。

—洋服も靴もシャペウも、この町の飛切り上等を作らせた。あれで日本へ行くんだ。船は三等でよいが、横浜からの汽車は二等にせにやなるまい。故郷の奴等驚ろこうな。

金子の三男坊が成功して帰って来た。ブラジルでは三百七十町歩の地主様だそう。……ああ、気持ちのええことだ。

何んぼ植民地の奴等が人非人と罵しろうと、やつぱり金の世の中だ。

『金なくてなんの己が桜かな』か。俺がこの不景気に帰国して、年老いた親御を欣ばすことができるのも、辛棒のお蔭さ。……馬鹿野郎奴が。

人情々々いうたところで、親孝行もできねえ人情が何になる。俺あ爪糞程も悪いことをした覚えはねえ。俺の踏んで来た道はみんな正しいんだ。

支払いをできるだけ延ばしたことはあるが、いつ引懸けたことがあった。植民地の奴等はどうだ、人情のありそうな面をして、町の山本の店を借り倒したのは誰なんだ一体。……なに、腕のねえ人間は羨しがっていい加減な蔭口をたたくんだ。奴等は二口目にや運だ運だとほざくが、腕のねえことを棚に上げて、よく白々しく言われたもんだ。

草分けの苦心をみる、俺の家を見ろ！　これが百五十アルケール、カフェー十六万本を持つ大地主様の邸宅か。伊達や運じゃ金は残らねえ。

一体植民地の奴あ、胴慾の鬼の何んと悪口をいう癖に、俺の前じゃ頭を土につけるようなオベツカをいう。日本人会の会長だつてそうだ。今年で五年続けたが、何も俺が好きでやっているんじゃない。選挙となると、みんな俺に押しつけていて、いや』会

長を金子が独占する』のなんのと、あきれた話だ。

彼は半世の苦心と現在の植民地のあらぬ風評とを交々顧みて、不平でならなかった。

彼の想い出すところでは、半世の行路は決してありふれた行路ではなかった。行っても行っても峻嶮な岐路と苦悩の山路だった。けれども、それをどうにか踏み越えて、目標の成功というゴールに飛び込んだ彼である。

そこには、当然観衆の喝采が起らねばならぬ。それなのに、近頃の冷い植民地の風評を耳にすると、彼は自然と昂奮してくるのだった。

「貴方、そんな処で何を考えているんです？」

裏山から空弁当の包をからから音を立てながら帰って来た妻が、何時になく考えこんだような大助に言葉をかけた。

「うん、国のことを考えてるところよ」

大助は一寸微笑を浮べたが、すぐ真面目な顔付きで続けた。

「お前も大分老けたなあ。随分と苦勞を続けてきたからなあ。成功も半分はお前のお蔭さ。似た者夫婦というが、俺達程、体も心もよう合うた夫婦はなからう。」

貧乏で首の廻りの鈍い奴が、やれ新しい着物だ、御馳走だ、新築だと騒ぐにさ、お前はここの俺に、このようなつぎはぎだらけのカミーザを着せる偉ら物だ。

だが、それにしても正坊にや困つたもんだな。十六の働き盛りが、勉強のどうのとサンパウロへ飛び出してしまったが、あんな

バガブンドが学問してどうするか。お父っさんを見ろ、農学士だの専門学校出を顎一つで使うんだ。学問して使われる人間になるよりや、使う人間になれというて聞かしたら逃げてしまいやがった。

長男でも、彼奴にや後継はできねえ。信坊は十一だが、あれだけにや気をつけてバガブンドにやすまいぜ」

呟きながら立ち上った。

## 五、兇 変

いよいよ帰郷の日が近づいた。今日は最後のカフェー園巡視の日である。

五軒からの長いこの耕地は、その間の谷々に四つのコロニアがあり、二十四家族からの四年契約者やコロノがいる。

馱馬に跨って高みへ上っては下り、又登って行く馬上の大助の姿は心やかであった。

よく繁茂したカフェーの樹が午後の陽に輝いて、遠く波うねりのように見える。

心なしか大助は、ぐつと胸をそらして手綱を握りしめ、満足そうに瞳が輝いていた。

三つ目の高みへ差しかかった。大助は去年そこで、イタリアーノのコロノがフアツカを引き抜いて追いかけた時のことを思い出した。いまいまいげに舌打ちしながら

—あの時はまったく危なかった。カルピのことで一寸 厳しう怒ったら、目をむいて唸り出し、ピカッとずるものを見たと思つたら、もうフアツカを引き抜いてかかりよつた。

俺は背を丸うして逃げたつけ。幸い近くに馬が置いてあつて、飛乗りざま一目散に逃げたので助かつたようなものの、どうも毛唐はあれだから虫が好かん。何かといえは刃物三昧に及ぶ。ジャポネースはその心配はないが、小理屈の多いのには参る。まあ、バイアーノ当りが一番よからう。危険もあるが、騙して使うにはもつてこいだ。今度帰つたら、コロノはバイアーノばかりにしてやろう。などと考えながら、カフェーの樹の隙間を洩れる微風に汗ばんだ体を涼めながら、点在するコロノの家を訪れて、一応の帰国の知らせをして廻つた。四年契約者の原田には、くれぐれもよく後事を委託して帰つた。

× × ×

いよいよ出発の日が来た。日本人会長の帰郷というので、会の幹部が十人ばかりと、それにコロノなどが続々と顔を出し、賑やかな送別であつた。

大助にとっては、かつてない楽しみの日であつた。新調の洋服で、人々にピングを振舞い、自らも豪快に笑いつつ過した。

今夜は町に泊り、明朝一番汽車で出聖するというので、夕方近く独り乗馬で家を出た。

彼としては、こうして独りの道々を色々な連想に耽る方がさつした談話を交えるよりも遥かに愉悦を感じた。それで見送りの

人々を、こと更に断つてしまった。

微酔の熱した頬に軟風を受けて、ともすると霧れそうにぐつと込み上げてくる幸福感を危うくかみしめていた。

町に程近くなつて、山暗い繁みにさしかかった。路端の草叢ががさがさと騒いだ。と見ると、そこに現われた男、瞳が射るよう  
に大助にそそがれている。

大助の群がった記憶の中から、稲妻のように光ったものがあつた。

「ああつ！あの……………」

後の叫びを打ち消して、手にしたピストルがパンパンと薄闇に響いた。

「うつ、うつうつ……………」

大助はかすかに唸りながら、もんどりうつて馬から落ちた。

鮮血にまみれた錦の帰国者が、路上に足先をかすかに震わせていたが、程なく迫った夕闇は一切を包んで夜の幕を下した。

× × ×

数日後である。

町から程遠くない墓地に、新しい一個の十字架が建つて

『K植民地草分者 金子大助ここに眠る』と鮮やかな日本文字が見出された。

(終)

## 西岡国雄『ある開拓者の死』について

これは、一九三二年にサンパウロの伯刺西爾時報社が行なった「植民文芸短篇小説懸賞募集」第一回における第二席入選作品である。第一席は、当誌第二号に再録済みの園部武夫作『賭博農時代』である。

この作品は、一九三二年五月九日より六月三〇日に至るまで六回に亘って『伯刺西爾時報』に連載された。四百字詰め原稿用紙二七枚。仮名使い、漢字などを現代風に読みやすく改めたことを附記する。

次に『伯刺西爾時報』一九三二年五月一九日号に載った作者の言葉をも再録しておこう。〔編集部〕

### \* 作者の言葉 \*

私は日本の小学校を終えただけの青年百姓です。

ペンなどほとんど握った事のなかった私が始めて書いた小説、それが思いがけなくも入選して、私の喜びは非常なものでした。

作の動機？ 何人も青年時代に通るであろう、悩むであろうところの、この世を如何にして生きて行くべきか？ この問題をあれやこれやと思ひ巡らした時、『ある開拓者の死』は生まれたのでした。

## 私の終戦

日本が敗れてから二〇年、ブラジルに住む日本人が、祖国の敗戦をどう受けとったか。それは私たちだけが知る特殊な心情なのである。これは、コロニアの精神史のうえでも重要なもので、綴り残すに足ると思う。本誌は、この特集を毎号継続し、後には、一本にまとめてみたいと考えている。会員はどしどし投稿して頂きたい。

また、同様の特集として『私のコロノ時代』をも広く募集する。思い出を語って頂きたい。

### 執筆者

- \*当時の憶い出 浅見哲之助
- \*激昂・混乱の中で 安良田 済
- \*失われた友情 清水 卜齋
- \*悲憤と反発 小清水礼子
- \*私と終戦前後 佐藤 忠雄

## 当時の憶い出

浅見哲之助

“終戦”なんかと、ごまかし言葉を使用するのは、私は嫌いなんです。負け犬の負けおしみに似ていてみっともない限りです。敗戦が事実なら「敗戦」という言葉をハッキリ使用してよいのではないかと思っています。

敗戦が日本自体の形而上下に、大変換をもたらし、今日に至ったことは、皆さまも先刻御承知の通りで、説明におよびますまい。

私自身には、思想転換の契機となり、視野がひろめられ、人生観に大変化、それが家族の者や周囲の多くの人たちに、大小の影響を与えたことは事実です。

運命とは “自力開拓”と、うぬぼれの強かった私に、その壁があまりにも固く、到底、自分の非力では、太刀打ちできないことを悟らされ、うぬぼれ心に鉄槌がくだされたことであります。

若い日、“運命開拓”のパイオニア気取りで、单身海を渡った私は、夢で固まったような男、日本をこよなく愛し、信じ、日本人であることを人一倍に誇りと思っていました。

“山田長政の轍を再びブラジルで繰り返すな”が、私の戦前思想の全部。当時“和魂伯才” “伯魂和才”が、コロニア各層の論議の中心でありましたが、勿論、前説に全幅の共感を抱く私は、日語教授をしていた沢山の子供たちや、家族の者たちのブラジル人である当国生まれの日系人にまで、日本人であれと矛盾で偏狭

なナシヨナリズム教育、それが自分の使命であるとさえ信念づけられていました。

○

敗戦の前夜（八月十四日の夜）私は市内サン・ベント街を一人で歩いていました。授業を打ち切ったらしい夜学生たちが伯国旗を打ち振り”戦争は終わった。戦争は終わった”と絶叫行進の一群にぶつかりました。日本必勝を信じきっていた私には”高周波電波”とか ”引き寄せ作戦”とか ”英米艦隊全滅” などなどの、臣道連盟が流していた子供だましのデマでしたが、溺れるものがワラでも掴む一抹の希望がありましたので、近くの新聞バンクに駆けこみ、あるだけの幾種類の新聞を手にして家まで飛んで帰らしめました。

だがどの新聞のトップ記事にも ”忍びがたきを忍び”の、あの血涙くだる天皇詔勅が大きな活字となって埋まっているだけで、信じられない事です。私には信じられなかったことなのです。一字も粗にせず、日語に翻訳して何度も読み返しましたが、敗戦が歴然となるだけ、私は思わず号泣しました。「日本が負けたんでお先真っ暗だ」と、その夜は夫婦相擁して泣き明かしました。市内の目貫き通りを埋めた戦勝を祝っての紙吹雪は、私には針の山を踏まされるほど、辛い、悲しいせつないものでした。

その後の数日は虚脱状態が続きました。

敗戦を信ぜず” 神国不敗” の悪質デマに踊らされている多くの同胞たちに、敗戦の真実を伝え、再興祖国を共に計ることが急務であり、それが自分の義務であるとさえ感じました私は、どうか謄写刷機一台を手にすることに成功しました。

日語を使用しただけで投獄されたほど取り締まりの厳しかった当時、(私も一回投獄された)刷り物配布なんかもつての外の危い仕事なので人の寝静まるを待ち、女房の手伝いを借り、深夜作業で ” 忍びがたきを忍び” の詔勅を刷り、沢山の人に配布しました。

戦前の私の思想、行動を識っている方や友人のあるものから” 裏切り者 ” ” 売国奴 ” の讒罵の嵐、絶交状をたたきつける者さえ現われましたが共感してくれる極少の人に力づけられ、あとになつて、蜂谷専一さんやコチア産組がパンフレットを発行、肩替りしてくれるまで、米国、アルゼンチン、ハワイから取り寄せた日語紙より資料を得、週刊でしたが二八号まで、毎号二、三頁のパンフレットを四〇〇枚、自費無料配布を続けました。

敗戦を認めた、所謂、認識組の幾多の名士を暗殺した臣道連盟特攻隊に私は狙われるようになり、危い綱渡りの仕事のうえに、非合法的な秘密出版ですから、官憲の取り締まりの目をごまかさねばならないので、前門に狼、後門に虎、といった薄氷をふむような危険な日々でした。

いまになって考えると、独り相撲のこの仕事は、余りお役にたたなかつたように考えられますが、死を賭してのこの仕事(少し

言葉がオーバーしますが）は、止むに止まれぬ私の気性が、それをさせたもので、あんな緊張の日々は、自分の生涯にはかつて無かったことですし、今後もおそらくありますまい。

でも、ことの成否は別として、あの時ほど、生き甲斐と使命感に生きたことはありません。想い出として忘れることができませ

○

敗戦を契機に、私は頑なにして偏狭な日本人意識の既成概念を拭去することができ、一個の人間として自分をみることもできるようになりました。

人間本来の善意と誠意を忘れなかつたら、心と心と触れあうことができ、皮膚とか民族の差、人間が制定した国境とか、利害関係で隣人を憎んだり、殺しあうような現世界の紛擾を批判的に視るようになりました。

月世界が征服されようとするのに山田長政論をひっぱり出す偏狭な島国根生や、“和魂伯才”だ、“伯魂和才”だなんて、ケツの穴の小さい議論の愚かさ加減がうなずけるまで私の思想を大人に成長さしてくれました。

ブラジルに住むことを宿命づけられた私共の子孫が、一個の人間として素直に伸びてくれ、できたら人類発展に何か貢献してくれる素晴らしい奴でも飛びだしてくれたら、国籍なんか問題でないではないか、と飛躍した考えになれたのも敗戦が契機と思って

おります。

○

一昨年の訪日の旅、京都で、この憶い出の深い八月一五日の敗戦記念日にめぐりあいました。ラジオは回顧プログラムを編成、敗戦詔勅の玉音をながしていました。

敗戦の苦盃をしない新しい世代の日本の若者たちは、屈託ない表情でこれを聴いていましたが、私は、自分の思想革命、人生甦生、再出発の日として、この記念報道に、襟を正し厳粛な気持ちで、それをききました。

(一九六七年二月二日)

## 激昂・混乱の中で

安良田 済

私はあの当時、ノロエステ線のカフェランジア市で、兄と弟と私との三人で反物店を経営していた。

私の兄は、開戦半年ぐらい前につまり国際情勢が戦争へ向ってかなり逼迫していた頃、日本のラジオ・ニュースを直接に聞かために性能高度のラジオを買った。そしてニュースを速記しては、

それを謄写版で刷って店のフレゲース等にサービスしていた。ところが、遂に来るものが来るべく日米開戦とはなった。

そして多くの日本人は日本語の書物やラジオを警察に没収されてしまった。兄も買ったばかりのを没収されそのラジオは後に兄の手に戻るまでは署長室の中で署長に使われていた。

たまに所用があつて署長室に入つてゆくと、よくラジオをほめてくれたそうである。他の人々のラジオは警察署に働いている連中が家に持つて帰つて使用しているという話であつた。

戦争も枢軸側にだんだん不利になり、先ず第一にイタリアが降伏し、つづいてドイツも降伏するところとなり、日本の降伏ももう時間の問題だと新聞が書き立てていた頃、警察署からラジオを受けとりに来るようとの通知があつた。但し、日本のラジオ・ニュースを聞いてはならないという条件のもとに、各所有者に返還された。しかし手元に戻つてくると警察のお達しではあるけれど、日本のニュースを聞かぬというわけにはいかなかった。そこで、音が外にもれないために、兄は補聴器の線を私と弟の各部屋に引いてくれた。私は寝過ぎないために、補聴器を耳に突こんだまま眠ることにしていた。その頃のラジオ・ニュースは午前〇時半、三時半、六時半であつたと思う。

それが必然的結果だとは予想していても、刻々のラジオ・ニュースの伝える断末魔の姿は我々を暗澹とせしめた。あの天皇のポーツダム宣言受諾の放送は、だから我々の苦痛、悲歎、苦悩というものを、かえつて払拭してしまい虚脱の中に陥れたので

あつた。

あれはたしか日曜日の朝だったと思う。「ポーツダム宣言受諾」の放送を聞くと、夜の明けるのを待ってO氏の家に通知に行った。O氏もすでにニュースをきいていて呆然としていた。O氏の通知で間もなくMがやってきた。Mは私の顔をみると「ほんとか？」といった。私がかうなずくと、彼はウウ・・と泣きだした。

号泣とか男泣きとかの言葉はあるがその文字どおりに泣く男の姿を私はみたことはなかった。それ程印象的であつた。嵐が過ぎ去ると、虚脱状態の中でお互になぐさめあつていた四、五日が過ぎた。ところが土曜日の夕刻まことに奇怪なニュースがマリリア方面から流れてきた。Mは満面に喜びをたたえて、私達にその怪ニュースを伝えにきてくれた。しかし、私達兄弟は日本のラジオを毎日きいていたので、そのニュースが如何に荒唐無稽であるかを説明してやると、彼は納得して帰るのだった。

然し、あくる日にはまた怪ニュースをもつてき、私達が間違つてゐるのだといつて、もつともらしい戦勝理論を展開するのだった。私達は又そのニュースの矛盾をいちいちあげてやらねばならなかつた。そしてそういうことが数十回もくりかえされた。然し一カ月二カ月もすると、戦勝論はかなり具体的理論をでっちあげ、もう認識論者の言葉はてんで耳に入らないまでに至つてしまった。そしてその数は日に日に増えてゆき、だんだんと組織的集合となつていった。私達兄弟はフレゲースと敗戦問題でしばしば口論をした。私達はそうした錯誤を正してやらねばならない義務と責

任を感じていた。しかし、そのために日本人のフレゲースはだんだんと減るといふことになり、焼眉の生活問題を派生せしめた。そこで、兄弟三人は以来バルコンで敗戦問題の話は一切しないことを申し合わせた。ところが、それを実行することは決して容易ではなかった。認識者のような顔をして事務局問題に誘導する者が多くなり、果てはきまつて激論ということになった。

われわれ兄弟はすぐ後悔しながらそういうことを繰り返えしていた。

そうした外にも内にも逼迫した空気が漂っていた頃のある朝、店の戸を開けようとかがんだ時に、ぐるぐる巻いた紙が投げ入れてあった。それを何気なく開いてみて驚いた。その紙は巾四十センチ、長さ一メートル半位の色紙であった。そしてその紙には

「安良田兄弟に忠告す 日本必勝の信念にかえれ！ 然からざれば天誅降らん！」

と書いてあった。(その紙片は今でも兄の所に保存されている筈である)私達兄弟もこう直接的にヒ首を喉もとに突きつけられてみると、命が惜しいとか惜しくないとかは別として、こういう狂人等と議論する馬鹿らしさと虚しさがいやというほど身にしみて、もう店では絶対に事務局問題にはふれなくなった。

その当時、私は四人で短歌会を毎月一回やっていた。その歌会の指導的立場にあった中山稠子氏は戦勝論者であったが、思想は思想友情は友情とわけきって私と交際していた。氏は町に買物にきて、私と文学論を戦わすことが唯一のたのしみで、買物を手

早く片付けては文学論をして満ち足りたように帰られるのが常であつた。私とは二十五、六才も年上ではあつたが、妙に話はずむのだつた。ところが、中山氏は教養があるということから、臣道連盟（その頃は既に結成されていた）の青年指導委員に任命されていた。したがつて、その指導者たるものが敗戦組の安良田と交際することは怪しからん。安良田と絶交するか臣道連盟を退会するか、二者択一を迫られた。中山氏はこれには流石に進退極まった形で、私のところへ来られ「今のところ色色の事情で臣道連盟から退くわけにはゆかないところに至っている。したがつて、私としては甚だ不本意で残念だが君等との交際は情勢が少し軟化するまで絶たねばならない。どうか諒解してもらいたい」と涙を浮かべて別れて行かれた。それは個の意志がある社会機構の前には如何にも小さい存在であるかを徴象していた。

先きに書いた、敗戦の報に号泣したMは私のもう一人の兄の親友であつた。彼は戦前、邦人唯一のボクサーとして時々新聞のニュースにもなつたあのMボクサーの弟である。又彼等の兄は日本の石井漠舞踊団にいて、かなり名を知られていた。そしてこれは余談であるが、戦後日本から芸能団がしばしばブラジルにやってきた頃、Mの兄も舞踊団を組織してブラジルに來た。そしてMは兄のマネージャーとして奥地を一緒に廻つたそうである。このMは開戦当時サンパウロで働いていたが、働いていた会社がつぶれたので、私の兄を頼つて、着のみ着ままで乳飲子と妻君をつれて私達の家にころがりこんだのであつた。兄は親友として彼等一

家に職業と住居と世帯道具などを調べてやった。そして兄弟のよ  
うな交際をしていたのであった。ところが、この勝敗問題は我々  
の間を完全に二つに割いてしまった。勝敗問題はMのみならず、  
親族一同を私達から離反せしめた。私達のたった一人の叔母は当  
時植民地に住んでいたが、親族のうちではたった一人私達兄弟の  
言を信じ、日本の戦敗を信じていた。それだけに家族や植民地の  
一同が私達兄弟を国賊とののしる言葉に、無言でたえねばならな  
かった。それだけにMが私達から絶交したことも自然のなりゆき  
でもあった。Mは街中で顔が合っても、顔をそむけてさけるよう  
に通り返るのが常であった。その頃は彼は既に青年指導委員部  
長となり、臣道連盟長が経営する雑貨店の支配人として、公私多  
忙をきわめていたようであった。たしかその頃であった、開戦直  
前に日本に帰ったボクサーの兄から手紙が来、悲惨な日本の現状  
を伝えていた。しかし彼は兄の筆蹟は認めたらしいが、それは米  
国から何かのカラクリによって作成されたものであると、てんで  
問題にしなかった。それはあまりに不可解な、不思議な話である  
が、当時の戦勝組の心理とはそういうものであった。そこにはほ  
どこすべき方法は存在しなかった。たった一つの解決は時間を待  
つということだった。

もうコロニアの社会も完全に二つにわかれ、その中間的存在が  
なくなった、ある日の朝であった。私と話のうまが合う今井老人  
が、いつものように郵便局から私の店に寄り、世間話をしている  
ときであった。多分あれは朝の八時十五分頃だったと思う。今井

老人と朝の挨拶が終るか終わらないときに、街中が異様なざわめきを起した。そして誰かが「楠さんが殺された！」と叫んだ。人群が流れるように動いた。私達は一瞬、身の裡に冷いものが貫ぬいたのを感じた。と、まもなく「今井のデンチスタもやられた！」と誰かが叫んだ。街は一瞬のうちに混沌となった。

「つかまえろ、逃がすな！」

「リンチしてしまえ！」

そんな叫びが群集の中からひびいた。群集は楠氏の家の方向へとなだれていった。今井デンチスタもやられたという声をきいた時、今井老人の顔が一瞬硬直した。しかしすぐ「おかしいな、たった今出かけるときまで何も異状はなかったんだが……とにかく帰ってみる」とあわただしく帰って行かれた。

これがコロニアで特攻隊の暗殺事件の第一号が行なわれた時の瞬間であった。

楠氏が暗殺された理由は「〇〇〇〇がマック・アーサーの妾になった」というブラジル人のピアーダを受け売りして話したということであった。

今井氏は二世で進歩的思想をもったデンチスタであった。当時のフォーリヤ・デ・マニャン紙に臣道連盟事件のことにふれ、その取締りに適当な処置をとるべきであるというような投書をしたことが暗殺の理由となった。

朝の八時直前に二人の青年がやってきた。一人は頬にレンソをかぶり、如何にも痛そうに顔をゆがめていた。

そして早急の治療を頼んだ。今井夫人は何か予感がしたので、治療室の掃除を粧って様子をうかがっていた。

患者がカデイラにかけ治療をしようとする今井氏の後にもう一人が立っていた。夫人はその後にいた。今井氏が患者に口を開くようにといった時、突然隠しもつていた短刀で今井氏の下腹を貫いた。夫人は箒で二人をめった打ちにしながら助けを求めた。今井氏は引出しからピストルをとり出すと、玄関まで追って出て二発ぶつ放したが命中しなかった。そしてぐったりとたおれた。今井氏は幸い死には至らなかつたが三カ月位の治療の重態であつた。それから五年位して亡くなられたが、治療医師の診断ではあの時の傷が死因の一つになっているとの見解であつた。今井氏は二世でありながらも独学で日本語も相当に達者になっていた。文学論、哲学論ではよく話に花を咲かせたものだった。私に碁の手ほどきをしてくれたのも彼であつた。

あのテロ事件第一号の日には他にもう三人殺されることになっていた。

その三人とは、竹内氏、服部氏と藤沢氏であつた。

竹内氏はあの日はマット・グロツソの方面に行つていて留守だったので難を逃がれた。

服部氏は、特攻隊員が客をよそおつて氏の家を訪問する三十分前に耕地に出かけていたので同じく難をのがれたのであつた。

藤沢氏は丁度その時間まだねていた。氏の邸宅は表門と裏門の区別が一寸まごつくような形にあるので、特攻隊員はそこで一寸

ばかり時間をつぶしたらしい。それで予定時間を超過したのでいらいらしていた。それに玄関口に現われたのは娘さんでねている父を起こしてまで訪問者を家に招じるといふことはしないブラジル流で、一向にらちがあかず、むなしくひきあげたのであった。実に危機一ぱつのところで生命をとりとめたという、後で思い出しでもヒヤリとする話であった。

あの混乱と興奮と激怒と悲痛の一日が暮れると市街は墓場のような静かさに化した。臣道連盟派の連中は市民のランチを恐れて、誰一人家から出ず、相談事など皆小さい子供をもつて連絡していた。彼等をランチにせよという市民の激怒の反響は彼等も全然予想していなかったことらしい。

楠氏の葬式もすみ、市民の興奮も少しおさまったので、認識組は今後の対策について会合をした。結局、夜警団を組織して、彼等の行動を監視するという事になった。夜警団は夜の九時頃から午前二時頃まで、臣道連盟の中心人物の家を遠くから監視し、不穏な動きがあれば直ちに警察に通知することになっていた。

そういうことが二カ月ばかり続き、何事も起こりそうな気配もなくなったので一応解散することになった。

後から知ったところによると、私達兄弟の名は第二次計画のリストに記入されていたそうである。しかし市民の激怒と認識組の急足な結束が彼等の行動をかなり束縛したらしく遂に第二次決行には至らなかった。

何時殺されるかわからない私達兄弟三人は、ピストル携帯特別許

可を貰って、ピストルを腰にぶちこんでバルコンで働いていた。しかし商売がら、婦人客を多く相手にするので、腰にもものしくピストルをさげているという格好は、どうみてもよくはなかった。それに、もし不意に刺客が現われたとしたら、いくらピストルの名手だとしても、シネマの西部劇にあるようにはいかないだろう。

その上、私は生まれて以来、ピストルをまだ撃ったことがないのだ。また全然興味がなかったし、私の主義からいっても、そういうものを手にするのは不本意だった。しかし、現実には私が殺さるべき理由はないし、好きとか嫌いとかの問題の彼方にあつた。それで、ある日曜日、市街から十五キロばかり行った所の川べりに、ピストルの試射をしに行った。私は五、六メートルばかりの距離の二十センチ位の直径の立木を的にして、生まれて初めて引金をひいた。弾はどこを飛んだが判らなかつたが、六発とも的一メートルばかり外れてとんだような気がした。私には発砲した瞬間、あの衝撃が手元にかえってくる不快さに耐えられなかつた。そして六発以上を試みようとはしなかつた。刺客が現われた場合このなりゆきに委せよう。それ以外の苦労も計画も何か空しく無駄であるような気がして、私は腰からピストルをはずして働くことにした。

あれから既に二十年以上の才月が流れた。今、カフェランジアは何事もなかつたような生活をつづけている。しかし、一瞬にして親族や友人の間を相剋と殺人の両極端に分離した臣道連盟事件

が歴史のなかに解消してしまうには、二十年の才月が必要であったのである。

## 失われた友情

清水 卜齋

裏山に尾を引い啼く梟の声。

その場の空気に何か不安な暗示でも与えているかのようである。夜は更けていた。

台ランプに対座する三つの影、壁にその大寫しを投げかけている。

ここはチエテ移住地第三管区のP区である。チエテ河を渡って、ペレイラバレット市が表玄関なら、サンジヨゼー河に添うこの位置は移住地の裏口ともいえよう。その一区劃での最後の開拓地帯である。三十区域に二十五世帯は、一九三七年の入植より一九四〇年で満植となった。私は家内の姉一家と共に一九四〇年渡伯、従って最後の入植者である。ところがこの二十五家族のその出身地が、西は九州鎮西より蝦夷北海道に至る日本全土の縮図版、言語の疎通など欠く場合も往々やある。更にその肩書に至っては、高邁不屈各々一言大居士ばかりで、なかなか以て派手なものであ

る。曰く、小学校長、郵便局長、郡全議員、銀行頭取、新聞記者、本願寺住職、測量師、曰く何々でいずれも一騎当千の猛者の巢窟とでもいえようが。談論風発、常に紛糾の絶間なく、たあいなき問題にもならぬ事を問題化し、肝要の開拓面などはほったらかしの如くである。今日、想起するなら、まったくバカバカしい時代のようなのであるが、亦懐かしい揺籃時であった。当時としてはそれ等に真剣そのもので、それはいうまでもなく問題点の主流は戦況であった。

そうしたことも戦況の深まるに従って、当国の敵国人扱いは日々加わってきた。集会旅行などの許可制は亦当然とも思われる。然し、地方警察権の代行として、カマラーダ風情にも等しい者の権力執行を楯に、その暴虐ぶりには堪えられるものではない。司法の正規正道を以て律するということには無縁なもので、無智な彼等の私利私慾に絡む野獣性の現われ以外になく、野蛮的行為は日本人を何かの名称で、本署へ引き立てれば、いくばくかの恩賞が得られる。

その恩賞稼ぎの生贄である。猛獣の檻に投げ込まれた小兎の如し。彼の区誰々が家宅搜索をされ、日本語教科書を捜し出され、狂暴の限りを身に受けた家長は、肋骨数本傷めつけられた。隣区の彼は、勲何等を米櫃より取上げられ、歩行の出来ぬまで打ち据えられた。何区の海軍出の彼は、いささか反抗的であったがため生涯廃人ともなるような暴虐の極みを加え連行された。こうした凄惨事が、妻や子供等の前で打つ蹴る殴るリンチの極みである。血

みどろに齒をくいしばり、のたうつ姿、これに過ぐる地獄が他にあるうか。こうした彼等鬼畜が、日本人に加えるリンチは後を絶たなかった。戦場の惨劇とはいえ、それは原則的通の闘争であつて、個人も身心の限りを尽くし、討ち戦つた結果なれば悔はなからう。ここは地球の隅、原始林取囲む中に、せんなき一命を没したとて、それを誰が心に留めるものがあるう。

枯木のパスプレットが啼くくらいなものである。権力の前には神というものも仏というものも隠遁してしまふものであるう。一方が鬼畜と化し仔羊がその齒牙に身を曝すのも権力。

現実がいかに科学といえども、その核爆発物すら所詮は権力の単なる使徒に過ぎない。

○

その日、朝隣区の通達で早馬のもたらしたのが「終戦」報告書である。何度読み返しても間違いない。一刻の放心状態は桶の箍が抜けたようなものであつた。亦何か大任でも果たした後のような安らぎのような、私は自分にいい聞かせる如く呟いた。これ为好いのだ。

来るべきものが来たのだ。そしていつものように「要急」として回状を区内に発しておいたが、何か躓いたような気もちが心を捉らえ、思い悩んだ。

想像通り区員の重立つた者が、夕景より辺りをはばかりるように集まつてきた。それは今までに嘗て見たこともない緊張感をみなぎらした顔ばかりであつた。元氣好く火酒など提げる者、バナナ

の葉に包んだ鶏の丸焼きを取り出す者、今日一日河で頑張ったと  
いって生魚を持参する者、亦砂糖の空袋に「祝戦勝」筆太に書き  
なぐったのを壁に打ちつける者、私はつとめていたが心は重た  
かった。ひそかに斯くなるなれば…と思うものの心の底には暗い  
ものがあつた。

夜は更けて、最高の気焔で皆は帰って行つた。八月の月は西に  
傾き遙かに啼く野鹿の声も哀れである。彼等を送り出して私は再  
び元の座に戻つた。家内や子供等はすでに寝についていた。しば  
らく何を考えともなく、ぼんやり空間を見詰めていたが、おの  
ずと壁に打ちつけた「祝戦勝」に視線を移した。私は常に、卑怯  
という言葉辞を大に卑しんで来た筈なのに、今その卑怯という文字  
が、己れの見つからぬ心の隅にひそんでおるような気がして、今  
後の己は一人おきざりにされたような孤独感がひしひしと迫つて  
来る。その時、扉口に荒々しい足音がして来た。それはMとNで  
あつて、彼等はすでに酔色はなかつた。が何か二人の間に険悪な  
空気が漂うておるかのようである。夜は更けるにつれてまだ冬の  
名残りをとどめ、犬の遠吠えにも薄らさむさを肌を感じる。二人  
は私と対座した。

「実にケンカラン…これ程ケンカランことはない。我が区にこんな  
違背者が在つたかと思うだけでもなさけない。実に慙愧の至りで  
ある。我々が、イヤ、在伯三十万同胞が待ちに待つた、この光輝  
あまねき暁鐘に、何んたる不遜極まる…不忠者…国賊…涙をふ  
り払い私に云うより、彼の感慨になつてしまった。Mの激情はと

めどなく、これに反してNはいささか冷靜的で俯き加減に目を伏せている。Mは四十代、Nは三十代、彼等は常に友情厚き無二の親友とでも云うような間柄であった。これを迎えるように、私も彼等と何が合うのか、三人は特に親しい仲であった。

日頃この三人はたがいに云いたいことを云い合つて、それが親しさを増していたのであった。それが今夜はいかにしたものか、二人はご機嫌で帰つていったようだが、途中でNの一言が何か生一本なMの感情に触れたのであろう。一ときは取っ組み合いにもなりかねまじき事態がうかがわれる。その尻を私のところに持つて来たのである。今夜は、気炎万丈で皆が唄つた。その時Nの唄つたその唄い文句が、私には特に印象的に感じられた。

姉はつゝじで 妹さつき

どれをとろうか もらおうか

唄い終つたとき、Nは目頭を熱くして、しばらく何も云わな

んだ。

今その時の彼の心情が私には何か察しられるようである。

前年、Nと私はスパイ嫌疑でGに拘引される噂を、街へ出向いた区の青年が急報して呉れた。市街地に住むGは、カマラーダの親分で、山伐りなどは彼に請負わせたり、カマラーダの要る場合は彼に斡旋させていた。それは私ばかりではないが、それに依つて彼の生活は成り立っていた。それが権力の紐がついて、日頃の交際情宜などを顧みるような彼ではなかった。彼の気ままなカマラーダ賃稼ぎに売込まれたと思うと、その憤り実に念懣耐えざる

ものである同じ災害としても、これがまだブラジル政府の逮捕令状とでもあるなら亦思いようで、それも時として致し方なき身の不徳として諦めもつくがこんな土民共に、スパイのスの字も解せぬ者にスパイ喚ばりなど全く滑稽ではあるが、狙われたのは毒蛇に噛まれたよりまだ不運である。

その日は夕方、そこから日に一回P市へ往復するバスの戻りを待つてそのバスで私等を連行する用意をして、バスの戻りを待つていた彼に、肉屋のFが事情を聞いてそれに口を入れた。すると「オッセはジャポネースに荷担するのか！」というかいわずにFに拳銃をあびせた。事態は急変、Gはその場より姿をくらましてしまった。寸前の危き難をFの義侠に依つて免がれたが、Fの霊前に突揚げてくる感情は抑えきれなかった。——その事件の夜訪れて来たNの豪胆さにくらべ、今夜の彼の心情がうかがわれる。更に、Nがこの終戦に疑問を抱いていたとしたらそれは何処にあったのであろうか。彼の弟は入植と同時に農を嫌って外人商社に勤めていた。

その方面よりニュースを吸収していたのであろうか。いきまぐMに私は追詰められたような形である。

「…まあ聞いて呉れ…私は今貴公達がこうして訪れてくれなくとも、一度君達二人には私の真情を談したいと思つていた。それに依つて今までの交友のきずなが絶たれるとは思いたくない。二人の前に今偽りのない、私の心だ……」

「「?! ……」」

「……」

彼がこの戦況にいささか疑念を挟むようになったのは、種々な状況推断にも依るが、就中、特に感じたのは千葉の艦砲射撃からといえよう。彼がブラジル移住、つまり逃避の決心に立至ったのは、時の軍制威圧に堪え得られなかったことは否むべきでない。当時彼は名古屋第三師団司令部直轄、地方防火毒斑長として、司令部に吹き込まれ叩き込まれたその暗示には艦砲射撃を受けるとか、爆撃機の上陸などということは、我が日本帝国に絶対ありうるべからざることであった。千葉の艦砲射撃のニュースに彼は何か悪夢に曝されているような日々であった。それが続いて房総半島よりB29の襲撃、彼は自覚が崩れていつてしまった。そして夢遊病者のように仕事などは手につかなかった。亦これを裏書きする次々のニュースには終に彼は捨鉢的となり、果ては “ 勝手にしろ ” というところに逢着してしまったのである。彼が司令部に吹き込まれたその機密の暗示というからっぽなものは今更らしくもないが、端的にその一つを掲げるなら、即ち日本の制空権及深海の如何なる機動と雖、司令一つでその機能は即座に解体する機密の厳秘が保持されておることになっていた。これに依って、敵国にいかなる科学的新兵器の装備があろうとも、絶対恐れるに足らぬ偉力が日本帝国にあったのである、というようなことは、今日にして架空的空想論にしかすぎず、こうしたお伽噺を軍閥関係に依って、もつともらしく国民に強いだしたのは昭和五年以後

からであった。

退役佐官級の要員が、自発的の如き名称で巡回公演を繰り返えし、国民にその喚起を盛り重ねてきたものであったが、これが昭和十年を越してより強圧的全体主義に変貌し、更にやがては憲兵政治が個人の各家庭にまで滲透してきた。大義名分の前には、国民総てこれに抗すすべもなく個人の意思は封じ込められ、五感覚まで剥奪されていた。唯無機物と化し、戦争という呪わしき歯車的一片にしかなかった。

「こんな散漫的な云い方では、能く解してくれぬかもしれぬが、私の今偽りのない心底はここにいったのだ。

この終戦がどう考えても、日本の絶対勝利とは感じられない……」

それ以来、Mは集会とか人寄の場合は、従来と何等変りなかったが、私一人の場合は別人の如く禁じてものを云わず寄りつかなくなった。Nに対しても同様であった。そのMが、私やNの心情を他には堅く口を緘じていたことには、流石彼であると思った。そうした彼と袂を分ちいる寂莫感はどうしようもなきことであった。その年十一月私はその区を去った。

Nも程なく去って行った。その後Mは隣区の知人の宅でしたたか飲み過ぎし帰途に向って、その知人の宅を去る百メートル辺りで落馬し、終に敢えなく不帰の客となった。

# 悲憤と反発

小清水 礼子

邦人の街として広く知られておりかつ、当時、勝敗組決戦のテロ事件などで一躍有名になった人口一五万の高台市マリリア。その市から北方三〇kmばかりの奥、フアゼンダ・ノーヴオという日本人集団植民地がある。その植民地のアラヤマ時代、わたしたち四〇家族ほどは、仮小屋を建てて入植。原始林の開拓にいそしんだ。そして一年、収穫第一回を終え、経済の面も多少とも楽になると常日頃心にかかっていた不安の塊りあの大東亜戦争の真相がひどく気になってきた。

私たちは、当時昼の疲れもいとわず、夜ともなれば、何処からともなく伝わってくるラジオ・ニュースに五人、十人と寄り集まって、祖国の安否を気づかって夜を語り更かしていた。

運命のその日は、長女が産まれて丁度二一日目であった。私の家のすぐ隣りにYさんという人が住んでいた。同県というよしみもあり、また私達夫婦とは親子ほども年がちがっていた為か、若い私達を非常にかわいがってくれた。

そのYさんが、その日に限って難しい顔をしてはいってきた。赤ん坊に乳をふくませていた私のそばに近寄り、あの重大な敗戦の模様を抑揚のない口調で語りきかせた。私は、地図にみる干鱈に似た形で赤一色の日本領土を、心の中でじつと視つづけた。

「日本が負けた」「無条件降伏」「米軍進駐」というような断片的な

言葉が、私の耳朶にガンガンひびき外のことは聞こえなかった。「ああ日本人は死に絶えたのが」「誰もいない日本になったのか」「神国が負けたのか」「私の祖国はもうないのか」「じつと日本を視つめながら私は叫んでいた。

私は、日本に日本人が一人でも生き残っている限り絶対に降服はあり得ないと信じ切っていた。熱い涙がにじみ出て、無心に乳をのんでいる赤ん坊の小さな額にポトポトしたたりおちていた。

（かわいそうな久美ちゃん。お前は生まれてきたばかりなのに死ななくちゃならないのよ。久美ちゃんどこで死のう）

Yさんは言うだけのことを言うと私のそばに棒立ちしていた。そのYさんのことも忘れて、私は「敗戦すなわち死」ということだけに心を集中していた。

「奥さん、そ、そんなに嘆かんでもよろしいがな。今更泣いたってどうなることでもなし……」

Yさんのなぐさめの言葉も、うつろな心には何のひびきも与えてくれなかった。

「奥さんよ、こんなことは余り大きな声じゃいえんけど、これだな、今年の棉が助かるんよ。ぐんと値が張りあがるからみてなさい」

そしてYさんは、日本が負けたからとて、ブラジルにいる私達が死ぬことはないということ話を話してくれた。

「あら、敵国にいる私達死ななくていいのかしら、そうなの……」

私は拍子抜けのした感じがした。と同時に解放感に似たものを受

けとつたことは否めない。にもかかわらずその半面、Yさんの言葉に対して強い反撥を覚えたのも事実である。悲嘆にくれる私を慰めるつもりでつい口走ったのであろう。「棉の値が張るとは何ごとだ。こんなこと重大な折に…」あの時、Yさんのことばを聞かなかつたら、私はその後幾年間かを勝ち組となつて迷うことなく素直に日本の敗戦を信じたのではないかと思う。これは自己弁護めくけれど…。この時を境として、Yさん一家と私とは互いに相容れない隣人となつた。それまで教養人として尊敬し信頼もしていたYさんに対しその人間性を疑い、その言行に対して批判的な別の目を向けるようになったことは確かである。

終戦から七カ月がすぎた。日本敗戦と聞いたそのとつさに「我が手にかけて殺さねば」と思つた長女久美子は、たつた一夜を病んであつけなく黄泉へと旅立つた。これがきつかけとなつて、あの日以来往来を断つていたYさん一家ともまた交際の道がついた。しかし、こと勝敗に関する限り、犬猿もただならぬ口論の応酬がつづいた。

同じ植民地には私の実家があり、そこから祖国大勝利の情報が次々にはいつてきて私を無性によるこぼせた。その度に、私は隣家Yさんの息子をとらえ一々報告した。そして私はYさんを罵つた。

「おばさんたら馬鹿だねえ。まだそんなデマ信じてんの。うちの親父が認識不足にも程があるつてさ」

「何いってんのTちゃん、あんたんとこの親父さんのこと、みんな

なが何ていつてるか知ってるの。売国奴、非国民、守銭奴、ユダヤ人を買われたんだってね、もつぱらの評判よ」

このような問答を私とTちゃんとは何十回くりかえしたことか。そして結局は「もうよしましよ、こんな話」と、どちらからともなく打ち切りにし、外に話題をそらしていくのが常であった。

私がT少年と限りもなく口論をくりかえしていたその頃マリリア市では、大事件が突発し大騒動が起きていた。トツパンの山奥にひそんでいた臣道連盟の一隊が押しよせ、敗戦認識者の誰れ彼れを襲撃して暗殺しはじめた。また戦勝派のK氏が警察に連行され、ひどい拷問をうけ、血だるまになるほど打たれて獄舎につながれたとも聞いた。また、戦勝派の誰れかれの位牌が街路に並べられ蝋そく、線香があげられてあった、などなど同胞相剋の事件が次々と起こった。

こうした事件があつてから、私とYさんとの間はいよいよ険悪になり口もきかなかつたが、息子のT少年とは口論しながらも親しんでいた。

その後、私はそこから五kmほど離れた所に移転したが、T少年は日曜ごとに馬を飛ばして遊びに来ていた。

こうして私の終戦は、戦勝論竜頭蛇尾の幕切れとなつたのであった。

# 私と終戦前後

佐藤 忠雄

昭和十七年一日、ブラジルが日本との国交を断絶しましてから、アマゾン辺境の地に在住する日本人にも、政治的な圧迫やいろいろないやがらせが加えられつつありましたが、間もなくトメアスー(旧アカラ)植民地が、枢軸国人に対する軟禁所に指定され、枢軸国人の誰もがトメアスー植民地に軟禁される運命を負わされました。

先にドイツ人とイタリー人が送られてきました。その後しばらくして、ベレン市在住の商社関係の日本人が送られて来まして、その人達は道路修理に辛酸を舐められたのでした。

日伯国交が断絶しますと、トメアスー植民地残存の移住者三十数家族に対しても、物心両面の圧迫が日に日に重さを加え、三人以上集会すること、日本語で話すことなどを禁止されました。それでも家族が食事の時に話す日本語まではと軽く考えておりましたが、之まで難癖をつけられたのには閉口しました。そういうことをよく心得ているカマラーダが警兵とグルになって、私等の貧弱な生活物資を波状徴収するという手段は、敵ながらあっぱれなものでした。

単語を並べるようなポ語で抗弁する術は知っていても、結局は却ってこちらの損失が多く不利な状態が重なりますので、彼らの云い分を通して終うような毎日の繰り返し返えしでした。

同年八月、ベレン沖で、ブラジル商船が独潜水艦に沈められてからの枢軸側に対する一般住民の悪感情が爆発しまして、ベレン近郊に住いする、又は島々で百姓を営んでいる日本人住宅の焼打ちという不祥事が勃発しまして、殆んど日本人が着のみ着のままの惨澹たる姿で、トメアスーに送られてきました。

その頃の私は貧乏の底を突いておりましたが、それでも衣食住だけは何とかなりましたので、最大限のお見舞をと思いましたが、貧者の一燈しか出来ませんでした。

その後思わしくない状態が長く続き、トメアスー軟禁組も焼け出され組も残存組も、心身共に疲れ果てて終い、一時はどうなることかと懸念されたこともありましたが、丁度その頃、トメアスー軟禁所もC E T Aと名を変えまして、総支配人として軍人（大尉）さんが乗り込んで来ました。この人が幸い親日家（コンデ・コマ氏の柔道の教え子）でありました為に、我々の窮状に非常を同情と理解を持ち、いろいろ便宜も与えられて、百姓の仕事も充分出来るようになり、貧しかった生活もいくらか楽になって来ました。その頃から警兵による物資の徴発もなく大いに助かりました。

これより先、伯人有力者の被護の下にベレン市にかくれ住んでおりましたTさんから、週に一回、毎日の戦況ニュースをまとめて送ってくれるようになりましたので、今までの噂による、大本営発表も段々怪しくなつて来ておりました折柄、昭和二十年五月八日ドイツの敗戦を知りました。軟禁中のドイツ人などは、日本

の敗戦も時間の問題だなどと云いふらしましたが、その頃でもまだ私等は日本の神風を信じたい気持ちで一杯でした。が戦況は日に日に不利になるばかり、遂に同年八月十五日悲しき終戦の報に接したのであります。

一応戦争のケリがつき、多少落ち着きを取り戻しますと、まずドイツ人、イタリー人などが去り、次に元商社関係の日本人も退去しまして百姓だけが残りましたが、その内でも移動条件のよい人々は、ベレン市近郊及び鉄道沿線に移っていきました。

結局以上のようにして残ったものは、どうにも動きのとれない者ばかり、これからの自分をなんとか処理せねばならない同じ立場に追い込まれまして、より一致団結、いろいろな問題と真剣に取り組むようになりました。それが又、胡椒栽培に踏み切った最大の動機となったのであります。

(終)

# 文化

## ブラジル文化と文学

井園 讓治

(「移民文庫」注・目次では ” 井園 ” になっている)



「ハジメニ、コトバアリキ」。文化の発祥には、ことばがあつた。それは、うたになり、はなしになり、文学へと発達した。どこの国でも、かくして文学は早くから生成した。

ブラジルでは、ポルトガルのもっていた高度な西欧文化と、未開な土着文化と、それにアフリカから移入された文字の記録をもたない大陸文化とが、混然として、新しい文化を形成した。それは、やがて文学の地盤となり、他の文化活動に先がけて開花した。いま、ブラジルは、文学の国であるなどといえ、いかにもこの国では、文学がけん然と栄え、りっぱな作品が実のついているようにとられぬでもない。そういった意味ではなく、ブラジルにお

いては、偉大な思想とか、感覚とかの発露は、往々にして、文学的表現となって現われたということをお願いしたのである。

たとえば、アレンカールや、マツシヤード・デ・アシスや、近くはグラシリアーノ・ラーモスや、ジョルジエ・アマードなどの作品に見られる思想や感受性、更に、ゴンサルベス・ディアスやカストロ・アルベス、それに近代のマリオ・アンドラーデなどの詩に盛られた発想や、自己表出は、かれらが、ブラジル文学の大きな二つのモメントである浪漫主義と近代主義の二大思潮の中に生きた作家や詩人であるというだけでなく、それぞれの時代の苦悩や相剋や解放を、作品の中に投射し、ブラジル国民の思想を代表したものとして、大きな価値をもつものである。しかし、いまあげたこれらの作家は、文学者であるがために、文学作品の中にその志向を確かめえたとしても特に不思議はないといえる。

だが、これが、ジョアキン・ナブーコの「帝政時代における一政治家」とか、エウクリデス・ダ・クンニヤの「セルトンエス」また、ジルベルト・フレイレの「カーザ・グランデ・エ・センザーラ」などの歴史的叙述や、社会学的労作などに、文学作品とでもいえるような形となって現われたことにおいて、ブラジルは、文学の国である、というにふさわしい。このことは、ブラジル当代文学研究の第一人者であるアントニオ・カンジドの言をかりると、

「他の国と異なつて、ブラジルでは、哲学や人文科学以上に、文学が精神活動の中心となつた。」

ためであるというが、事実文学は、一九世紀の初頭には、意識的

な国民思想をもっていたにかかわらず、たとえば、哲学思想などは、ようやく、一九世紀後半になって、ブラジルのインテリ層を揺ぶったといえよう。

その主流は、コントの実証主義、スペンサーの進化主義、ダーウキンの進化論などであったが、専ら西欧への順応と模倣であったことは否めない。社会学的な関心は、一九世紀の末期前後であることは、シルビオ・ロメロあたりの著作をみるとうなずけるが、その研究が発表され、一般に読まれるようになったのは、今世紀に入ってからであろう。

また、エウクリーデスやフレイレ以前は、社会学的な発表は、一つの「見解」として扱われ、独立した学問とはならなかったようである。もともと、この国では、文学の魅力は社会学的な著作の中に浸透したばかりでなく、歴史、経済、哲学、芸術などと同居した形となって特有な研究や発見となって現われたといえるであろう。

シルビオ・ロメーロのブラジル文学史、エウクリーデスの「セルトンエス」、オリベイラ・ヴィアナの「ブラジル南部の住民」、ジルベルト・フレイレの前記の著作や、「ソプラードス・エ・モカンボ」、ブアルケ・デ・オランダの「ブラジルの種源」などに、このような傾向は顕著なものがあるといえるのではないか。

この文学的想像力と鋭敏な科学的な観察、科学と芸術が織りなして、一体となるという研究労作は、どうやらブラジル特殊な方法であるらしい。そこでは、しばしば純科学的な研究が、文学的

創造と同体となつて、一つの新しい手法を生み出したようである。

アントニオ・カンジドに言わせると、つい最近までのブラジルにおける文学の優位性には、主として、二つの要因をあげることができる。一つは、ブラジルが、西欧文化に影響され、西欧との間断ない交流のために人文学を尊び、科学精神の移入にたちおくれたことにあり、二つには、ブラジルの精神風土が、古典の偉力に幻惑され、いつまでも、これを温存したため、科学に対しては冷めたかつたことによるものであるというが、その一半の責は、現在まで残っている教育普及の緩慢さによつたものであるという。たしかに、うなづけるものがある。更に彼のいうことをきくならば、文学は、これらの風土に、よく適応した、もともと、ラテン系民族は、古代ローマ時代から修辭的であり、詩的説諭や主觀的叙述や比喩などに長けており、これらは、論理的解明や、科学的叙述、あるいは、実在の認識などに先んじていた。この文学的手法が研究者や技術者や、哲学者などの表現手段を助けていたものであるという。これは、いつか読んだ日本の、波多野見治のレトリックに関する小論中に「科学は普遍的な真理をつかむ作業であるから、文をかざる技法や、その場かぎりのはつたりの言語利用は「科学」になりえる筈はない」という引用をおもい出したが、大体前述の意見を裏づけしているようである。

一九世紀初頭ポルトガル王室が、ブラジルに遷都してからは、ブラジルにおける学問は急速に伸びた。とはいえるものの、もともと、「法律」の学問が、他の学問に優先したようである。そして、

この学問は、文学的要素を多く含んでいた。また、植民地時代の知的表現が主として演説や説教であったことをおもいあわすと、文化伝承の中で、文学的表現は、思想伝達の媒体となったことは、容易に想像できよう。それは、しばしば文学意識過剰なまま国民意識の形成と、国民生活に結びついたが、他面科学精神と技術育成には妨害となったであろう。

あのエウクリーデスの名著「セルトンエス」では、特に、第一章の「人」において、ブラジル民族の社会学的考察がなされているが、これが文学的文体と重なって、貴重な学術資料を提供しているが、ここではまだ文学の比重が強い。

そこへ、第一次世界大戦前後を境として、近代主義運動が起こった。

この運動は、文学、芸術だけでなく、広く社会、経済、政治にまで浸潤したが、その重要さは、その大きな抱擁力にあったということができる。

それまで胎動していた社会学、人種学、民俗学、教育論、政治論などに、開眼の力を与え、知的活動を推進した。知的作業が分化し、科学的活動も活発になったとはいふものの、文学はまだその基辺に残っていた。フレイレのカーザ・グランデや、ソブラードス・エ・モカンボ、またブアルケ・デ・オランダなどの著作は、門外漢の口幅ったさが許されるならば、まじめな社会学研究であるにもかかわらず、その思想展開においても、叙述においても、文学的なおもしろさがある。そして、これらと対蹠的に、三〇年代

に出た文学作品の多くは、社会性を帯びた、また社会学的な素材を含んだものであったといえるが、他面政治的な視野にも富んでいた。

近代主義運動は、幾多の迂余曲折を経て、第二次世界大戦にまたがったが、その間一つの文化革命、思想革命を押し進めていった。各文化層に大きな影響をもたらしたことは、いまさらながら驚くものがある。それと同時に、知識人があらためて、社会大衆の存在を見なおしたばかりでなく、その大衆によびかけ、大衆との交流をはかり、大衆とともに民族学や、文学や社会学を発展させる契機となった。

文学についていえば、これは、いろいろな試練と挑発に耐えつつ象徴派、精神派、国民派などの風潮をくぐって、さまざまに抵抗や反抗の中で、自己のいきかたを主張した。当初のどんらんな食いちらしからやがて、延びきった肢体の中で、近代主義は冷静な思索をとりもどした。それはまたいろいろな文学傾向を生む母胎となり、あるいは一見逆行とみえる運動を起こすことにもなった。

今日では、文学者は、文学の仕事を社会・文化はそれぞれの領域において分化された作業として、進められている。

かつて、ある思想家が、アメリカ諸国の哲学にふれて、「われわれの哲学は思索そのものの哲学ではない。

応用のきく哲学、社会、政治、宗教、倫理などに応用できる哲学

のみが研究の対象となるであろう。それは、大きな実在としての人民の生活法則とか、運動、思想や進歩などを探究し、定着させるものであって、単なる抽象化や形而上学は、アメリカ大陸では根をおろさない。」といったことは、どうやら、ブラジルにも当てはまるようである。そうだとすれば、そうした思弁を根底にもつた社会から、今後どんな文学が、どんな形で現われるか、大きな興味なしではおられない。

(一九六七・二月)

## 美 術



芸 術 と は 何 か ？

高岡 由也

これにはいろいろな方面からの解釈があつてむずかしい問題である。

例えば映画をさして一般に第七芸術と云っているが、これを知

らないでいる人も多い。

これは実に観念的ではあるが、時代順に見て一応うなずける説である。

原始人がその主な食料としていたけものを狩る時、これを追うのに叫んだり又ものをたたいたりして音を出すことから、まず「音楽」が生まれたものと考えられ、それでこれが第一とされ、次に宗教的な原因などで音に合わせて体をうごかしおどるといふことから「舞踊」がおこったものと考えられ、これが第二とされる。器や道具をつくる必要さ、物の形を（立体的に）つくる必要から「彫刻」が生まれたものと考えられ、これが第三とされる。

原始人が物の形をやや平面的なものの上ですじ彫り、浮き彫りなどで表現できるようになったのは、紀元前約四万年とされていて、色彩でこれができるようになったのは、一万年ぐらいといわれているが、ともかくこうして第四芸術に当る「絵画」が生まれ、これをより単純化し記号化していったのが、文学になった。

表意文字といい、表音文字といい、これは絵画とは違い、物の形を記録するものではなく、コトバを記録するものであって、これによってコトバは体系づけられ、ますますふえ、そこから第五芸術とされる「文学」が生まれたと、また考えられている。

かなり後になって、それまでの五つの芸術の要素を総合して「演劇」が生まれ、これが第六芸術とされた。

そこで「映画」をさして第七芸術というわけになる。これが現代人の常識であるが、この分けかたには異説もあって「建築」を

加える人、「絵画」ではデゼンニヨを別なものにする人、「彫刻」ではモデラジエン（塑像）を別にする人、「文学」では詩を独立させる人もある。「写真」を加えたい人さえいて区々だが、いずれにしてもこれでは、何と何が芸術であると観念的な定義にすぎなく、芸術とは何か、と云うことにはならないと思う。

一 昨年サンパウロのビエナールに多く出品されたあの「ポップアート」は芸術なのだろうかと私はよく聞かれるが、その度に「では絵画そのものも芸術といえるでしょうか？ また彫刻にしろ、音楽にしろ、舞踊にしろ、文学にしろ、そのものそのまま芸術と云えるでしょうか？ というのもこれらには、どうひいき目に見ても芸術だと云えそうもないのが沢山あるからです。」と問いかえすことにしている。そして次のように、あの時の印象を説明する。「どんな仕事でも、これが芸術であるといいきれるほどのものに、水準を高めることができます。この意味ではあそこに出品されていたものは、例外はありますが、総じて私にはあまり有がたくいただけませんでした。何しろ、あれはごく最近におこった試みで無理もないこと、でも今後どうなるか、この水準までに高まるか、商店の陳列でさえ、芸術の高さにひき上げられることが往々あるのですから、これにもその可能性はあるでしょう。永い目で見ていけば、どんなものでも、本当にいいものなら必ず残るはずですよ」と。

一九六一年のビエナールの時だったと思うが、イタリヤからフオンタナという作家がカンバスを剃刀か何かで切りさいたものを、

これに出品したことがあった。当時かなり問題をひきおこしたものである。

ついては、一画家として狭まい角度からの見解ではあるが、ここで私が問題にしたい。ま、カンバスを剃刀などで切りさいたということよりも、その限られた面のどことどこを、どの位どの深さに切ったかということである。(あれにはカンバスの裏から真黒いきれをはって、一つ一つの切口の深さが違うように工夫されていた)ここに構図の味がでてくる。

それにより芸術性が生まれると思う。その点から見て、フオントナのあの試みは大成功とは云えないとしても、決して失敗ではなかったと思う。あれを単に思いつきと批評するのは、少し早計ではなからうか。私には彼が考えに考えぬいた上にした試みと見えるのだが。

もう二十年の前のこと、日本のポケットブックか何かで、ある美術批評家が、浮世絵は芸術ではないと云っているものを読んだことがあつた。なるほど、短い期間に発達し町人という限られた世界に育った浮世絵では、伝統的な狩野派その他に較べて、それほど多くはいいものをだしてはいないだろうが、といってこうきめるのもどうかと思う。浮世絵でも、これが芸術であると云い切れるほどの高さに(主観的ではなく後世の批判において)達した作品も少なくないし、いい作家も相当でているのに、なぜあの批評家がこれをきめつけたのか、私には納得できないのである。

さて、芸術とは何か、いろいろな解釈、見解、云い分があつて

議論されているが、まずその主観的なものを拾えば、「感激の表現である」という人、「人間から人間に話かけるコトバである」という人、「内にこもっているものを外へたたきつけること、さらけ出すことである。」などと烈しい言葉で云い表わす人、道徳と結びつけて「自己完成に」と解釈する人、なお宗教的になると「永遠に生きんがために」などと夢をもつ人、「芸術とは創造である」とか「二つの新しい世界を創り出すことである」という人、「創造の喜びである」という人もいる、但しこれは抽象画家々の云い分だが「いや、発見の喜びである」というのが具象画家たち。

次に客観的なものを拾えば、「芸術とは社会の、国なら国で、この芸術家が生きている社会の、余剰価値である」という説がある。これは社会学からみたもので、長谷川如是閑氏もこの説を支持している。「これは芸術家の生きているその社会の凡る現象の反映である」という考えもある。実に広い目で物を見ている。これが精神分析学々者なら「これも性欲の一つの表われにすぎない」と簡単に片づけるかもしれない。

ポルトガル語で書いておくが、昔、ローマに次のような見解があった。

“ A A r t e e m t e m p o d e p a z e  
l u x o  
e m t e m p o d e t u m u l l o e r e f u  
g i o ”

また「芸術は一種の娯楽である」という極端な説もある。「娯楽」

とはフランス語のアミューザマンの直訳。一九二四年ごろの見解だが今日でもある意味では通じる。

これらのほかにまだいろいろな解釈があり、それぞれ一理あるから、どれも否定できないが、その中から昔も今も私が主としてとっているのは例の「芸術とは人間から人間に話かけるコトバである」という考え方である。

コトバほど人間どうしの約束(コンベンション)によつて出来たものはほかにはない。またコトバほど抽象的なものも少ない。

例えば「はと」と云つても書いても、そこには実体がないのだから抽象である。所がこれを聞き、又は読んだ人は、その瞬間に鳩の姿を連想する、と云うのもこれには日本語を話す人間どうしの約束があつたからである。

そこで、芸術を一つのコトバと解している画家は、自然界に在る物の形や色などを、世界中どこにも通じるように約束された単語として受けとり、それをよく綴り合わして自分自身のコトバ(話し方)をつくり、それによつて自分の思っていること、感じたことなどを他に伝えよう、話かけようとするのである。

これが大体、具象、写実主義を奉じる私の狭い角度から見た解釈なのだが、これでは芸術とは何かという極め手にはならない。所でこういうこともいえると思う。

人間には文学のほかに、まだいわゆるコトバでは表現できない世界があり、それを芸術というコトバで表現するのである、と。

日本語でいう「芸術」とはアールテの翻訳で、西洋では元来はこの意味ではなかったのである。広義には、人間のする仕事一切をさしたものであったが、だんだんこの意味に、特に美術をさして、考えられるようになったのである。ついてはエミル・ゾラがおもしろいことをいつている、これもポルトガル語で紹介しよう。

“ A Arte a Natureza  
vista através de um  
temperamento ”

アールテとは何かという問題では、こんな所に落ちつくのも悪くはないだろうが、何しろこうして多くの意見があり、それぞれ一理あるのだから結局こうだと極めることはできないと思う。また極める必要もないと思う。各人思いのままに解釈してよく、芸術そのものが自由であるように、この問題も自由であつていいのではなからうか。

だが、これについてただ一つ断言できることがある。

「抽象は必ずしも芸術にはならないが凡る芸術は抽象である」と。

追記・ここで一例をあげる必要に迫まれて、これを付け加えることにした。

コップをいかに写實的に描いたとしても、もうそれはコップではなく、ある面の上に置かれた線と色にすぎない。コトバの例で

いえばそれを連想させる話題（アセント）なのであって、実体ではないから抽象である。

美術を抽象と具象に別けたのは、説明や批評をしやすくするためにされたもので、変な云い廻わしたなるが具象もまた抽象なのである。

これにつき今私は小論文を試みているのだが、いつか機を見て発表したいと思う。

(終)

コロニア文学



「移民」への肉迫

「板小屋の来歴」の主題と思想

玉井 礼一郎

「コロニア文学」第三号に掲載された薮崎正寿さんの作品「板小屋の来歴」は、多少の欠点をはらみ乍らも従来のコロニア文学の概念をハミだし、これからのコロニア文学が志向すべき方向の一

つ、それも最も重要だと思われる方向を指示する作品として、私は高い評価を与えられるべきだと思うものである。

この作品の主人公は、その題名の由来した板小屋の住人たる浮浪者の男女ではなく、風呂敷包の男や女言葉の男、バナナ売りやポロンの老人、仕事探しの女、そしてそうした存在感の稀薄な人間を余りに多く永く見てきたための倦怠のなかにある古本屋の主人 “彼”たち。それぞれ夢想家であるという点で共通しているネガチイヴな移民のすがた — そのいわば “落伍者” という余韻をもつて典型化された “移民” 自体が主人公といえる。

選后感の中で前山隆氏が「情熱をもって〈移民というもの〉へ肉迫しようとしていることが、その主題と作品の出来栄えによってここに瞭らかに打ち出されてきた」といつていることに私は同感である。

私の知る限りでは従来のコロナ文学には個々の移民像というようなものを捉えようとした作品がほとんどで、典型化された普遍化されたいわゆる〈移民というもの〉に肉迫した作品は皆無にひとしいと思う。それはいつか、誰かの手によって真正面からとり上げられなければならないコロナ文学最重要のテーマである筈なのだが、不思議にもこのテーマはコロナ作家から対決を迫られないで今日に至っている。私はいつもこのことを齒痒く思っていたが、藪崎さんの作品を読んで、少なくともこの大きなテーマに挑む突破口は開かれた、という感があった。

適確な描写力に危なげがなく、緻密な文体にはユーモアさえも漂よつていて椎名麟三の世界を思わせるものがある。私は通読癖を破つて、何度もこの作品を読みかえすことに退屈を覚えなかつたが、この作品を支えている柱は何よりもまず「移民」というものに対する作者の考え方であり思想である。

「移民」というものは哀れなものであり、遣りきれないもの、淋しいもの——である、という徹底した否定的な思想で貫ぬかれており、風呂敷包みの男、女言葉の男、仕事探しの女の口を通して語られるわけである。

「その一」 「あなたはこれまでに“祖国”の意味について考えてみられたことがおありですか。(中略)わたくしはこの“祖国”の意味を、ふかいふかあいその意味を移民の身になって初めて知りましたです。(後略)」

「その二」 「(前略)そんな彼らの上にはつきりしているのは“可能性”がないということ、可能性はあるとしても、それを掴みとる自由を通してではなく、与えられるのを待つ、かたちに於てでしかないこと(後略)」

「その三」 「日本にいきえすれば、貧乏なら貧乏なりお互い気心は知れてますからね。何が足りないといったって結構融通もつきます。けれどこちらではまるで砂漠の中にでも迷い込んだみたいに見えるんですよ。」

「たくさんの人間の中において、それで一向に人間の中にいる感じが無いんですよ(後略)」

移住事業団あたりに見せたら苦い顔をするに違いないくんだり、戦前ならばさしずめ“危険思想”の持ち主として国外追放されかねないところだ。今までにこれほどハッキリと移民否定の立場を明らかにした小説ないし文章はコロニアには見当らなかつた。その点から、すなわち社会的にもこの作品の発表された意義は重大である。

私は必ずしも移民肯定論的な立場を無視するものではないが、あまりにも上すべりな移民肯定論だけがまかり通っていることは反撥を感じる。私たちの先輩が、文字通り血と汗と涙で築きあげた半世紀を超える実績には深い敬意を表するが、だからといって「移住は是である」という簡単な割り切り方にはついて行けない。

〈移住〉という問題、〈移民というもの〉に対する是非の論議は、これを強くおし進めて行くとき、われわれ移民者自体の精神的恥部に手をかけないわけには行かなくなる。しかるにわれわれは既に移住した者であつてみれば、〈移民〉を否定し去ることは、われわれ自身の存在を根底からくつがえすことにもなる。しかし、敢えて移民否定論を主張しようとするならば、異端者ないしは落伍者としての扱いを受けなければならぬがゆえの敬遠、沈黙――

にはもう我慢がならない。「裸の王様」の寓話のように、大きな声で「王様は裸である!!!」「移民というものは本当はこんな

にもみじめなもんなんです！！」と叫ばなければならない時点にコロナ文学もようやくやくさしかかってきたのではないかという気がする。

そうした真実の叫びの中にこそ移民問題に対する解決のカギがあり、移民社会すなわちコロナ、また個々の移民の前進の地固めに資するものがあるのではなからうか。背伸びすることばかりが能ではない。まずわれわれの足もとからしっかりと見つけて行こう——とこの作品は呼びかけているようだ。

### 〈移民という根無し草〉

作者はこのテーマを浮彫りするためにであろう、一對の浮浪者の男女（これは移民ではなく、おそらくは土着の人間であり、少なくとも生活の具体性においては移民よりもすぐれた”生活者”たちである）を背景に見えかくれさせて、立体的な効果を出すことに一応成功しているが、この一見移民とは何のかかわりもない浮浪者と移民をつなぐ”橋”としての古本屋の主人である”彼”の描き方が力足らずであるのは惜しい。

短篇という制約もあるうが、単なる傍観者としての”彼”であるよりも、自らも傷つき、そして叫ぶ”彼”であって欲しかった。

最後の章で、”彼”は劇場の廊下から消えた浮浪者の男女が、空地に小屋をかけて共同生活をはじめているのを発見、感動というかショックを受ける。それはまさしく”生活者”のすがたであり、それにくらべて移民たちは「少なくとも生活の具体性に於て

及ばず、存在感が遙かに稀薄である」という”彼”の自省と慨嘆は、この作品のヤマらしきところであり、更に追い打ちをかけて「そうした姿勢の人間を余りに多く、余りに永く見てきたための倦怠だと決めている自分の規定の中に一層大きな誤りがあるように思われた」と”彼”をかりて作者の移民観と人生観が表白されたところでとめて欲しかった。

ところがその次に反転して「生活というものがほんとうに大儀な遣り切れないものだ、という彼の久しい所信は所信のままに、“生活”への一步を踏み出すにはもう全く若くなさすぎるという年令への反省は反省のままに：」とペシミズムの煙幕を張って逃げられたのには「ちよつと約束が違ひはしませんか」といいたくなってくる。この”彼”ペシミズム的、逃避的な所信の中には、到底、浮浪者たちの”生活”から受けた感動の入りこむ余地は無さそうで、「自分の規定の中に誤りがあった」という自己批判が”矛盾”となつてひっかかってくる。作者には、そういうハシにも棒にもかからない不条理な人間というものゝをこの矛盾の間に追いつめてみたい意図があつたのかも知れないが、それは〈移民〉以前に処理されるべき問題で、〈移民というもの〉に肉迫するためには、しかも短篇ではちよつと足手まといになるのではなからうか。そうした問題点を整理して作者が執拗にそして大胆にいわばムキになつてこのテーマを追いつづけて、「移民」というものはこういうものなんだ」と解剖学的に丹念に〈移民というもの〉の正体をつかみ出してくれる日を刮目して待とう。

そして、この作者が掲げた、楽観的移民論に対する反旗の下に  
私自身も集うものであり、そうした謀叛者たち、異端者たちの叫  
びがやがてはコロニアに、少なくともコロニア文学に一つの革命  
の波動を呼び起すことを信じるものである。

(一九六七・四・七)

## 詩

曇り日

永田泰三

草花が点々と織込まれた緑の野原を  
白いもやが徐ろにのみこんでいく  
たのしい舞踏の広場を失った微風は  
大地にひそみ息を殺している

彼方の平原を圧して連なっていた山脈は  
いつの間にかもやに強奪されて消え失せ  
整列した兵士の集団のようなユーカリの林は

無気味な煙幕に消されてしまった

狂人の喚きのような騒音の中で

病菌のすくうひよろひよろした都会の建物は

かすみをかぶり亡霊のように固まりあっている

太陽は無辺の成層圏の深みにしずみ

空には原子雲が原子雲の上に重苦しくかぶさっている

宇宙の部分品の地球はまだ廻転しているが

そこには戦いのなまぐさい血のあとがついた

覆面の科学者たちは白衣をまとい沈黙を守りながら

このこわれかけた部分品を足場にして

自ら掘った墓穴の恐ろしさから逃れようと

最後の空しいあがきを試みているのだ

だが終末が近づいた地球の片隅で

真赤な二つの花が燃え立つ青春のすべてを賭け

花びらを寄せあつて一瞬間の地上の喜びによっている

傍の川は涙をいっぱい浮かべ声をひそませて行く

少女よ模様を綴れ

狩海 亘

ゆきずりの者だけが美しい

ぼくはオルフェのように振返える

少女は石像に化さず

電柱のこげた肌に

かすかな汗の甘美をまつわらせ

さつそうと行きすぎる

ぼくの背中目は

すこしの憎しみさえこめて

夢の中まで追って行く

混血の少女よ

端正な西欧の目鼻

大昔北の氷原を越えてきた

モンゴリアンの面影

おまえの若駒の足首に

凝縮された弾力が

白い征服者への反逆であることを

だがその脹は鶴の首のように

被虐の陶醉を秘めている

少女よ

海辺の歩道に

黒や白の小石をたんねんに埋めて  
愛憎の模様を綴れ

## 女 達 の 大 笑 い

貴族の女に緋の衣を着せ

刑場へ引立てる

昔エルサレムでしたように

棘の冠もかぶせよう

うつぶせの股間に火が触れるとき

ギロチンが落ち

娘達が太陽を流産する

それら不妊となった者達を集め

男は喪服の祝宴を主催する

なんて馬鹿なことを

こらえようとしてあふれてしまう

女達のしのび笑い

グラスの海が震える

男は膳の下にもぐりこみ

それでもいたたまれず

思わず勢よく立ちあがる

頭上から悲劇は転覆する

真昼の砂浜にとび散った不具者達の大笑い

サラダのトマト

指輪 串刺しの心臓など

岸边にたゆたい

男は止むをえず大声で叫ぶ

乾盃！ 乾盃！ 乾盃！

応じる者などいる筈がない

スザノ 風物詩 宇宙の中心

横田 恭平

落日の

さんらんを見ている

やゝ悔いのいろある

移民の辛苦が

舗石に沁んでいる町

平坦で

低い貞淑な家並が

碁盤の目に割られている

その幅広い一条の真向うへ陥ちこむ

さんらんを見ている

街幅いっぱいに散り敷く

疲労に黄ばんだ光線

人は記憶のながいかげりを曳いて

ゆつくりと歴史へ傾く時間を横切る

この邦で、いくたびの

思わせぶりの離別か

落日など見倦きた男だが

心して見ている

今日という日の

そのさんらん

考える

おのれの立っているあたりが

宇宙の中心だろうと

昼は はだしで

昼は

はだしで土を踏み

夜は、疲れた体を

土の上に横たえる

おのれの手で積みかさねた

低い煉瓦の壁

そのどこかの隅に巢喰う

こおろぎのいい声を聞いている

枕元にちいさいランプをともし

書きかけの詩稿や 読みさしの詩集が

雑然とちらばっている

私の怠惰の場所に

だれも触れてくれるな

乱雑、なげやり

そして未解決

なんとという親しみぶかい私の「時」の堆積

悔いも恥もなく

古い埃りの中に沈んでねむるのだ

よわ音

可児三平

夜中にめざめて起き

ぬぎすてた靴をけとばす

家が揺れるような大きな音

ハツと見る 並んだカーマは

コルシヤが白く延びて平らか

妻は子等とサントス

たまにはいゝなと思ひ乍ら

別居たつた一日

欠点もほゝえましく

愛の深まり

日々

小石茂行

激しい流れに押し流されて

漂流が初まった

色あせた昔日の残像

一本の葦を掴むさえ力つき

やせさらばいて動く触手

沈みつゝある者の哀れな姿

あせりにあせれども

流砂の中にうづもれて

叫ぶとも声は蒸発 —

ひからびた声帯が

空ろな風音となる

母

由井幸男

泣き寝入った子を

見詰める母の

淋しい横顔

その瞳の哀しさ

今、母の顔には  
強い叱責や怒り  
容赦ない厳しさの影もない

— やがて、この子が生長して  
ある日、ふと……

母の真意を知り  
胸迫る懐しさの中に  
自分を責めるだろう

## 花の中に

長谷 春子

花をじつとみつめていると  
どこか遠い  
不思議な不思議な世界に  
ひきこまれるような気がします

宇宙につながる  
神秘あふれる世界に

そして感じるのです

宇宙の、そして生命の神秘は

一輪一輪の花にも

一本一本の草にも

ひそんでいるのだと

## 短歌

円かなる声

小笠原富枝

流れいるを風と思わず刻おきてはじける栗の音みたしつゝ

耳たばに円かなる声ふるゝ如黄蝶の影のまつわり過ぎき

隔たればひと色にネオン見えながら虚し人を臆測するは

遅ましき子の翳吾を被いたる瞬時にがりの様な滴り

絶えず視野に雲ありて支えられ居るか過ぎたる日々のまな裏に韻  
く

日中花の氣息（いき）の如淋しわずかなる庭充しゆく昼の光りは  
流動感眩めくばかり頭ちながら杳きひとりの声捉え得ず

アカシヤの花明り身に染みおれば垂直なり吾に吾が周辺に  
人おらぬ砂場に人を想わしめ転べる石の一樣ならず

（一九六七年三月）

## 無花果の枝

川原比露思

夜の空に雲は満ちつつ底ふかき亀裂を覗くごとし切れ間は  
自らの限界ひそかに想う夜の心に充ちて言うこえひびく

鬱屈の心を空に爆ぜさせて花火は星の位置よりひくし

あらがいの弱かりし日にわが裡を発つ羽搏きのひとつ鋭し

一瞬の機影が地表を掠めゆき衝動のごと思惟が鮮らし

不安なるものの具象にありありと無花果の枝張りし夜の露地  
身に触れて幽けく落葉鳴る刻も蜘蛛はしきりに巣を張り急ぐ

(一九六七年二月)

## 廃屋出でて

陣内 しのぶ

廃屋にたゆとう風の吹き抜くるときありなしの過去を韻かす

廃屋に淀む微光を反射して壁に残れる青き絵煉瓦

崩れたる瓦礫に佇ちて吹かれいる軀も廃屋の貌に似通う

人語より脱れて入りし廃屋の冷たさに居て只淋し日ぞ

死に通う廃屋出でて灰色に変ぜし青き鳥は放たむ

身を締むる廃屋出でて息づける眼に幻惑のアラマンダ咲く

# 古き鐘

佐藤博三

はる桜一輪咲きて熱き風ながるれば古き鐘鳴りいづる

陽が山に入るは故郷の彩に似て闇ふかくなりしことも寂しく

ふつふつとピニョン煮られいる鍋の血の池に凍れるわが魂沈む

一本のゴムの若木が伸びていて涸れ井戸にくろき影をさしいる

落雷にうたれし幹がくろぐろと空洞をだきて立てる野に來し

裡ふかく充たすものなき密集の木葡萄の実に雨ふりそそぐ

# 空中溺死

木村 正和

詩の骸かぎりもあらぬ氷原に書く鮮紅の吾の五線譜

海の低音（バス）響らざる夜も回遊の吾が魚が聴く黒人霊歌

月明の海の和絃と交響の楽築きゆく蒼き雷雲

深海の雪降り積む闇にはじめなくおわりなき吾が海底風化

ボヘミヤン吾が網膜が記憶する多肉観葉植物の空中溺死

(一九六七年三月)

白がねすすき

南条由喜夫

必然の形象ならん熱帯魚こころおごりもなく見ており

いのちある者の泳ぐを見るあわれ水中にして光る魚群

枝黒く苑に影曳くフイゲーラ樹幾世紀耐えなお生きつぐか

穂絮散らす白銀すすき聖週に入る憂き風は膨みて吹く

修正のなり日々にして積乱雲目に痛きまで立つ空仰ぐ

微かなる蚯蚓なく声盛りすぎし白銀すすき穂絮散りいて

(一九六七年三月)

## 遠 蛙

森重 扶美

サルビアの朱の色失せし花殻を鳴らし過ぐ風かがやきもたず

遠蛙鳴き立つる夜のまどろみに踵つ幻影の誰かは知らず

鳳凰樹翳ふかくしてわがめぐり禁断の域のごとき風あり

鷹揚に道を横切る駝鳥らは擲揄するごとく羽根ゆすり去る

## 風 化 の 岩

小笠原 正好

海に對う風化の岩の白々といつより罪をしらされて来し

イスカリオテのユダを或る時愛したり決してイエスを売るには非  
らず

埋葬を終え足はやに出で来れば低き屋根より反す鈍光

断絶を埋めつなぎて来しごとく色ガラスより光り身に受く

力こめて  
河原 奈美

たわやすく 屈従しているにはあらず力をこめて胸かき抱く

## 俳句

終 着 駅

長 谷 川 清 水

カメリアの硬き全辨伏目がち

青蠟螂死の祈りとは思われず

青嶺たどりて頂を見極めず

終着駅霧へ降りしは一人きり

霧薄きところ白鷺抜けて翔つ

寺の蟬

小笠原 夕虹

全身の線に抵抗ある極暑

夏草の穂孕むあたり噛む獣

寺の蟬人間騒には啼き止まず

わが秘密守宮に守られ居て不安

ジプシーのテントの端の子燕ら

近詠

目黒 はるえ

目つむりて哺乳の牛に初茜

去年今年なく俎にも刻む

初鏡開拓日焼まだ残り

一棚のインカの壺や夏探し

アトリエ涼し二千色てふ赤の色

香水やサンジョン街の灯に歩む

避暑人に島のオリーブまだ固し

鳳凰花赤し旅愁のビール飲む

山荘の吊床に栗鼠葉を降らす

草深く沈み群れ飛ぶしじみ蝶

王冠樹

間島稻花水

スイナンや地に口ひらく奴隷牢

白亜紀の水滾々とパイネーラ

ジャカラランダ背に一片の疲労感

暁の肚の声あり鳳凰樹

王冠樹吃りて生命噴くごとし

青桃や日雇黒奴学を欲り

百姓の一語棒なすジュアの花

センフィンや出水一橋うち沈む

稲咲くや雨季のリベイラ弓なりに

カノア呼ぶ月の角笛湧くごとし

優曇華や声なき発狂移民の死

おのれはげます火雫たれてバロン飛ぶ

バロン飛ぶ背にごうごうと樹海音

珈琲熟るるコロニア太き煙吐き

椰子壁の生涯貧し卵酒

生別が死別の便り膺啼ける

鷹仰ぐシガナ檻樓の喉仏

馬死すと冬のウルブー地平より

短いサイア 佐藤文六

梅雨地獄行商韓婦の物語

韓婦夏痩せ愛憎強く生きて来し

梅雨寒き行商宿を乞う韓婦

サイア短く春愁の線切り捨てし

晩夏プラッサ短衣マネキン氾濫す

「すきな俳句」

石川 芳園

\*最近の「火焰樹」より少し抽出してみました。

○ 水川 浩

枯野馳せインジオ邑の足音豚

焚かんとし枯木のかろさ悲しめり

○ 殿岡 萩花

薰風に無色移民の枢沈む

青マンガてらてらあせる中年期

○ 前房 風知

独立祭白鳥天に向いて鳴く

掃台や物いう杓の水流る

○ 遠山 颯子

火を創り珈琲採りの手をはげます

野焼きあと墓の白壁どつと老ゆ

○ 折笠あきら

拭けばガラスの向うは朝の霞です

泉汲む径八方に開拓地

○ 松見いはほ

風邪薬搦んで生きる裸木と僕

ひらひらと白紙のページバラの素顔

○ 池田 童夢

花マンガ他郷になごみやすきポ語

花コーヒー枳目正しき地方都市

○ 林 越南

朝から赤い日が出て一目野火に酔う

枯野なり死へ飛ぶウルブ真つ逆さま

○ 浦畑 艶子

善人の墓碑に初蝶光る翅

バラの香を吸いてロマンの瞳を閉じる

○ 右田 春雪

春光の幹に傷つけ姓刻む

地虫鳴く並ぶ墓穴に豪雨跡

○ 清水 一角

秋高し農夫詩人が諸掘り出す  
どくだみの花散る革命成立す

○

西村 明蟬

百姓の掌もて食うよ草の餅  
種蒔くや器用に動く四角な指

○

鈴木 光威

瓶が哭くしぶとき街にマンガ吸う  
プール出て水と若さをふりこぼす

\*この中には二世、準二世がおり、将来たのもしいと思っております。

## 川柳

郷愁

芳賀 裸人

郷愁も愛しく一輪さくら咲き

柿食えば郷愁甘く舌に浸み

郷愁をなだめつさくらともみぢ植え

郷愁をいたわり白く餅を搗き

人間への郷愁たそがれの道遠し

愛 憎 安藤 魔門

虎の威を借りても狐コンと鳴き

倒産続出河は濁ったまま流れ

明暗を写し心の影となる

天を憎み地を憎み銭を愛す歌

愛憎の極限に居て夫婦なり

明日を生きる顔今日を生きる顔

星の下酔えば茶碗もたたきたし

文化の陰にかくれている安易

空ッ風街をすり抜け懐を慌てさす

左の頬を出せば右の頬を打たれ

ク  
リ  
ス  
マ  
ス

堀田 栄光花

言い切った後のむなしさ抱いて寝る

老人の夢見たくなし詩を作り

クリスマス貧しき子等は指を噛み

鉄砲は男人形は女の子クリスマス

クリスマス奇蹟も無くて食えぬ群

高物価善政などと何故云える

人の智恵降る日照る日に負けられず

一生に一人を愛し澄む瞳

神などと云われたくなし糞をする

落葉掃くその静ごころ詩が生まれ

## 随筆

### 水郷の旅

まやあきら

絶えまなく続く自動車の列が捲きおこす砂塵の彼方に、教会堂の高い二塔の鐘楼が、遥かにキリスト像の山を背景にして見えてきた。クリチーバを発つて五時間、バスはリベイラ河口の渡舟場に着いた。八月の大祭で、道傍や空地は、カミニヨン、バス、乗用車で埋めつくされて、おびただしい人々がひしめき合っている。一度に三台の大型車を運ぶフェリーボート二隻が昼夜兼行で、二百六十米の河巾を往復している。

祭日五日目の今日迄、すでに五千台の車を運び、十万人の人出との推定であった。今朝は冬仕度で寒さを感じたのに、イグアツペという語源の浮草が、悠々と流れている南聖の水郷は、流石に暑かった。

官庁や学校、市場など、最近の建物がなくてもないが、三百三十余年の歴史をもつこの町は、黒くおしひしがれた様な町並で、大型のカミニオンが軒すれずれに通る狭い路地の両側に、小さな穴の様な戸窓をつけた軒の低い家々が、同じ位の高さで建ち並んでいる。

でこぼこの泥壁の前面だけは、真白に石灰を塗りつけてあるが、裏側は、黒く潮風にさびついた荒れ果てた感じである。

今は空家になっているが、その昔、諸国の領事館などもあって、この地方最高の社交機関であったという、帝政時代のカーザグランデをみる様な建築様式の、旧コレイオの二階建家屋や、舟着場の付いたマンジューバ加工場の巨大な廃墟やかつては豪華な遊覧船であっただろう赤錆びたランシヤや、漁船の鉄骨だけの残骸が、葦の間にひきあげられていたりして、かつては南聖の玄関であり、地方物資の集散地として、外国の海洋船までが出入した、繁栄の歴史をしのばせる。

一千二百戸、人口六千五百の、忘れ去られた霊地イグアツペの町も、年一回の大祭週日というので、中心街はすべて露天商人に占められ、お祭にちなんだサント類を初め、土産物、装身具、衣料品、履物、日用品、食料品一切のバラツカが立ち並び、口々に客を呼ぶ声もかまびすしく、その中には、日系商人の顔も多数見られる。広場という広場は、シルコ、シヨウ、斗牛、はてはアマゾン産の大蛇や怪魚の見せ物などの天幕で蔽われてその間を右往左往する人々の波で充満されるのである。ホテルは超満員で、そ

の週間だけ、土地の人々は住宅の一、二室を空けて、貸室に出すのであるが、十万という人々がさばける筈もなく、裏町や町外れは自動車の置場と化し、多くの人々は野営の用意を整えて、寝具、鍋釜、食

料を持込み、生きた豚の仔や鶏の脚が自動車の輪に繋いであったりする。この週間、他処者に町をのつとられた形の土地の人々は、為すこともなく、善良そうなく、しかし途方にくれた顔にカシンボなどを銜えて、終日、裸足で戸口に佇ったり、うずくまったりして、街往く人々を眺めて暮すのである。それでも子供達は、僅かばかりのバナナを軒先に並べたり、靴磨きなどして小遣銭を稼いでいる。

この雑沓をよそに、草が生え、苔むした丸瓦の屋根の上では、四五羽のウルブーが、ひっそりと羽毛をつくろっていたり、葦の生えた泥沼の様な入江には、藺を茹りに出る丸木舟が繋がれていたり、うらさびた感じで、祭がすんだあとのこの町に、どんな生活があるものであろうかと、考えさせられたことであつた。

港には、当地の二大産業を表徴する様に、エンジンエーニヨ・ノーボ（精米）とペスカ・ウニカ工場（マンジュエーバ加工）の二大工場が並んでおり、そこからプライア行きの小舟が出る。内湾を横切って、コンプリーダ島に渡るのであるが、その間に、葦に以た藺が生えた島々がひっそりと浮び、一隻のカノアが音もなく、風いだ海面に白い水泡の線を書いて進み、一羽の白さが、ゆっさりとその上を翔んでいる風景は、今、あの喧騒を抜け出してきた

頭に、夢の様な静けさであった。島の湿地や、ピタンガやガビローバなどの灌木地帯を、うねうねと続く要路の三料をカミニオンで走ると、海水浴場に出る。そこは、見渡す限り一直線の海岸に、白浪がどうどうと打ちくだけて、磯の香が鼻をつく。それは又、遊子には郷愁の匂いでもあった。島影一つない茫洋たる大西洋の制限もない広さに圧倒される思いがする。五六軒の海の家とレストランが建っている外、荒寥とした眺めで、牛の群が砂浜に、いつまでも潮風に吹かれて、身動きもせず立ちつくしていた。

靈驗あらたかといわれる、セニョール・ボン・ジエズス・デ・イグアツペに参詣するのが例年の旅の目的である。

ポルトガル帝国からペルナンブコへ航海の途中、海賊船に襲われて遭難した帆船に積まれてあつた御神体が、一六四七年、この近くのシユレア海岸に漂流し、二人の漁夫によつて発見されたのが、サンタ・イマージエン・ド・セニョール・ボン・ジエズスであるといわれている。以来、ノツサ・セニョーラ・ダス・ネーベス教会にお祀りして、漁師達の守護神となり、又、幾多の奇蹟をあらわされたので、ジオゴ・ロドリゲス神父時代に、サンツアリオが起工され、多くの敬虔な住民達が、大きな石を肩で運び、魚油で積み重ね、七十年の歳月を費して、一八五六年八月六日に、現在のバジーリカが完成されたもので、この日に因んで、毎年大祭が催されるのである。

会堂の内部は、広く高層をドームや壁には、ふんだんに金泥の用いられた壁画が、極彩色で画かれており、きらびやかなシャン

デリヤがきらめき、壮巖を極める。家人に助けられた老人や赤子を抱いた若い女、沢山の子供を連れた淳朴な近村の人々などで、ミサ開始一時間前すでに、会堂は立錐の余地もなく、善男善女は御堂の外にあふれている。ガンジーをしのばせる容貌の、サントス教区のドン・イジリオ司教が臨席され、サセルドツテ外七人の神父によって、巖かにミサが開始される。儀式の意義を説明する役僧の巧みな進行ぶり、場外にあふれた人々にも、各所に据付けられた拡声機によって、ミサの様子が詳細に知らされる。奉献祈祷にかゝると、祭壇の聖杯が金色にきらめき、中二階の聖歌隊の斉唱が響き渡り、聖体の秘蹟が行われる頃、儀式は最高潮に達し、満堂せきとした静粛の中に、感涙に鼻をすする音のみが、あちこちに聞えてくる。

ミサが終ると、バジリカ広場の警兵音楽隊の、タイムリーな演奏によって、祭典気分はいやが上にも盛り上げられていく。厚さ一米半もある石壁の高い鐘楼の鐘が鳴り出して、人々に捧げられたサンタ・イマージュンがしずしずと現われると、狭い街路の巾一杯に、礼拝行列の人の波が洪水の様に続く。それぞれの祈願をこめて、手に蠟燭をともし人、裸足の人、上半身裸体の人、頭上に石をささえた人、白い羽毛を背につけたアンジョ達が、お祈祷を唱え、聖歌を歌い乍ら、町中の鐘が鳴り渡る中を、しずしずと行進するのである。この移しい人々の一人一人が、人生の苦悩の十字架を背負い、罪を悔い、救いを求めて、禱りを捧げているのであるか。

狭い町内を一週するのに一時間を費して、再び御堂にもどると、そこには告解や洗礼をうける人々がごったがえし、本堂奥の院に祀られてある御本尊の御足にふれて祈願する人々が、終日、長蛇の列をなして、バジリカをとり巻いている。

右側の鐘楼を登った二階には奇蹟の室があり、靈驗な奇蹟によって、病気や怪我から救われた人々の、無数の写真や松葉杖などが、感謝をこめて掲げられている。不治の宣告をうけた後遺症を病む娘セイ子の写真を、いつの日か、こゝに掲げることができるであろうか。

これらの人々は、この地方の人々よりも、遠い他州の信心深い人が多く、数日を徒歩で巡礼してくる熱心な信者も沢山いるのである。

帰路は、パラナグア地方の二百人程の団体参詣者の借切り船、ソロカバナ鉄道会社所属のパウリスターノ号に便乗できた。それは、船船もデツキも、布団や鍋釜を担ぎ込んだ人人で、足の踏場もなく、女子供は、板の間に足を投げ出して横たわっているのです。男子組は舷側の手摺に寄りかかって立ん坊であった。延長七十四料の、文字通りのコンプリーダ島と、大陸に狭まれた内海は鏡の様な静けさで、船は迂る様な快速である。振り返ると、いつまでも、いつまでも、山上のキリスト像とバジリカの鐘楼が、白く夕陽に映えていた。小島が現れ、小島が消えていった。島の一軒屋に横着けになって、二三の人を降ろした。未知の乗合い同士なのに、いつまでも手を振って別れを惜しみ乍ら、船は航海を続けて

行く。大陸側に海岸山脈が高く迫り、白い断崖になり、又、広い入江に出る。四五羽のガルサが、その純白の羽毛で、澄みきった紺碧の水際に佇んでいた。浜辺に二三のカノアが引上げられ、バナナの葉陰に人家の屋根が見え、砂浜には沢山の子供達が、しきりに手を振って船を迎えていた。サバウーナ港である。

檣鐘を鳴らし乍ら坐礁させ、厚板を渡して、沢山の荷物を抱え、危なげな足どりで、二三の人が降りた。浜におり立った女が、荷物の中から、安物の大きな人形を取出して、その娘らしい出迎えの幼女に、それを渡している。人形を抱き取った幼女の、世にも嬉し相な笑顔に、船上の人力は皆、微笑まずにおられなかった。それは人間の持ち得る限りの最高の表情であった。

カナネイアの山が見え出して、海の反射光が、夕暮の空に映えていた。町並が白く見えてから十分間程で、船はサンパウロ州最古の港町、四百三十余年令のカナネイア港に着いた。

一五三二年、ドン・ジョアン三世の親任をうけたマルチン・アフォンソ・デ・ソーザが、この対岸のカルドーズ島に上陸したのが、この町の始まりである。イグアツペを発つて四時間半、八ノツト位の速力であつたらうか。一瞬碇泊して、明朝六時出帆とのことであつた。

こんな町にも日系人のホテルがあつて、同船の若い漁夫君と合宿ではあつたが部屋がとれた。有名な貝塚は、カルドーズ島に六ヶ所もあるのだが、舟で渡つて尚、大分歩かねばならないというので、割愛して街を歩く。ノツサ・セニョーラ・ダ・ナベガソ

ン教会は、古い航海の守護神として有名であるが、破損をおそれて、外側を塗り直してしまったことは僧しいことであつた。鶏卵大から鶉卵大の小石を、たんねんに貝殻石灰で積み重ねた、厚さ五十糎もある石壁のくずれた民屋の廢墟が、苔むしていて、うらさびた感じであつたが、この町にも、徐々に、新しい家屋が建ちつつあつた。気候温暖で、地味は肥沃、農産物は豊富であり、金銀、鉄、大理石などの鉱産物もあり、海老、牡蛎などの海産物にも恵まれ乍ら、立地条件の不利のため、文明社会からおきざりにされた形で、歴史の町という感じが深い。

電力不足とかで、夜半から節電された暗闇の中を、蠟燭の灯で宿を送り出されて、船に急ぐ。定刻、朝陽に輝く銀色のさざ波が、きらきらと光る内海に、一線の白い水泡をひき乍ら、船は港を離れた。無数の木の葉が、見事な曲線を書いて、一列に長く並んで浮いていた。ポンタ・デ・マレージャで、自然の作り為す芸術品であつた。

クバトン湾に入つて視界が開ける。動きのない画面に、岩の小島がひっそりと浮んで、白い漁舟が一つもやっている。

全く静止した世界に、銀色の腹をひるがえして、巨魚が飛躍する。ボラを追うボットという魚である。やがて霧の様な雨が音もなく降りだして、遠い山々が色を失い、墨絵の様にぼけてくる。茶色の砂洲に、牡蛎よせの垣が結ばれていて、その側に、白いガルサと真黒なメルグリオンとが、共に四五羽ずつ、じつと、そぼ濡れて佇っていた。

枝々の寄生木が、白い藤の花房の様な細根を無数に下げたカンダプーバの林が、島々を蔽って、その黒い根に、真白な牡蛎が数知れず付着していた。カンダプーバの樹皮からはタンニンをとり、木質部は良質な薪炭として伐り出され、鉛筆の材料であるカシツエタ材や鉄道の枕木や、人々が讚嘆の声をあげて羨望する牡蛎の山など、この地方の特産物が、板を二三枚並べただけの舟着場に、山と積まれている。ペンキ塗りの板壁に、ガラス入りの窓をつけた住宅は、この辺の住民の豊かな生活を想わせるが、どこも子沢山らしい家庭で、通学の便もないこの地に、どんな生活が在るのであろうか。

やがて雨が歇んで、肌寒い南風が吹きはじめる。カナネイアから二時間、カルドーズ島の山麓の町マルジヤに碇泊する。

こゝには電気もあるらしく、街路には電柱が立っている。こゝでも、お祭りの二三人の人々が降り、新しく四五人が乗り込んできた。水夫と島の人々の間に、声高な冗談が、船が出てからも暫くやりとりされていた。

船の旅人達の親近感、他の乗物の客同士と違って、家庭の内輪話まで出し合って、旅が終る頃には、十年の知己の様に親しくなるものである。昨日まで見も知らなかった同士が、偶然に同船したというだけで、たといそれが、人生途上のほんの一瞬の間にしても、心と心を温め合い、好意をわかち合えたということ、生きていることの倖せを、しみじみ感じさせられたことであつた。

船は依然として、大陸と島の内海を航行した。所々にボラ

を獲るセルコが細木で結ばれていた。カナネイアから三時間二十分で、サンパウロとパラナの州境の町アララピーラに着く。パラナ州側の家々の壁には、古い選挙のビラがはつてあつた。船は、荒地を堀割った十五米巾の運河に入り、退屈な一時間十五分を航行して、初めて、広々としたパラナグア湾に出た。セーラ・ネグラの奇山が、遠く近く聳え、ペッサ島、コチンガ島、蛇島、蜜島などの間を航行する時は、瀬戸内海をみる様な心楽しい眺めである。パラナグアの建物がきらきらと、白く光って見え乍ら、船は迂廻して、容易にそこに着き相もなく、旅の最後の時間を、この墨絵の山水画でもみる様な絶景を、心ゆくまで堪能することができたのであつた。

## 奥。パラナの旅

増田 恒河

サンパウロから、ロンドリーナ、マリンガーと飛石づたいに飛んで、ウムアラーマに着いたのは、午前十一時を少し廻っていた。降り立った飛行場は、青芝の滑走路と小さい木造の格納庫があるばかりで、吹流が折柄の和風を孕んで静かに動いていた。

同じ飛行機で来た年輩の日本人に「およろしければ、町まで一緒に！」と誘われ、その人の息子さんらしい若者が運転するジープに乗せて貰った。

町までの道程は、それほど遠いものではなかった。山焼の跡に、黒々と焦げた立木が残っている開墾地の中を通るのであったが、道は轍が深く、穴が多く、ジープは上下左右に大きく揺れた。小高い峠（エスピゴン）にさしかゝつたとき、屋根瓦の真新しい町が眼前に展開した。はつらつとした新開地の眺めは、都会から来て、インテリオールの空気を吸ったばかりの私に強烈な印象を与えた。

三十三年前に、初めてロンドリーナの地を踏んだときの、あの素晴らしい原始林の容姿と、ニュー・フロンティアの生々とした雰囲気を思出させるに充分であった。だが、土質はいわゆるテラ・ロシヤではなく、沖積土なのであろうか、砂混りの黄味を帯びた赤土である。

間もなく、市街地の広々としたアベニードを走り抜けて、この町のオニブス発着所に私を降してくれた。親切な親子は、ウムアラーマの人ではなかったのか。「これからまだ一と走りしなければ！とつぶやきながら、手を振って別れて行った。

ジープはたちまち砂埃に包まれ、一瞬にして見えなくなってしまうた。

この町に住む日本人は、かなりの数に上るが、ほとんどが商業で、郡部にも日本人農家は極く少ないとのこと。サンパウロ州でも、パラナ州でも、奥地の町が栄えたのは、多くの場合、日系農家が集団する地域をセンターランドとした模様であるが、ウムアラーマの形成には異った形をとったということになる。

時計を見ると十二時であった。背の高い赤ら顔の男が通りかゝったので、「近くにレストランはないだろうか」と訊ねたところ、「あの坂を登ったところに、日本人のレストランがありま

す。この町では一番繁昌していますよ。貴方はきつと満足するでしょう」との紹介であった。街を往来する人々は、欧州系が多く、黒人はあまり目にとまらなかった。

北欧系の移民も多いのではなからうかと思ったりしているうちに、レストランに着いていた。

紹介ほどではなかったが、食堂は客で一ぱいであった。料理はありきたりのもので、味も特徴のない平凡なもの。居並ぶ客は、カミノンの運転手か、ビヤジャンテ型の異人ばかりであった。給仕人は日系の娘さんで、てきぱき働いていたが、お店繁昌の看板娘かも知れない。

腹ごしらえが出来たので、オニブス発着所まで行って、様子をつかがうことにした。オニブスは狭い上に、乗客が多くて、座席をとることがむずかしいと聞いていたので、早目に出かけてみたのであった。

暦の上では、春酩酊の候であるべきだが、直射日光は強い。

舗装されていないアベニードは、自動車が通る度に、黄塵が舞上って、一層暑苦しい感じを与えるのであった。路傍に、カルド・デ・カンナ（ガラツパともいう甘蔗の搾汁）を売る屋台車があつて、その場で甘蔗を搾っていたのはのんびりとした珍しい光景であつた。到るところにみるソルベツテ売の手押車はまだ進出して

いなかったようだ。

坂を降りて、オニブス発着所に着いてみると、老若男女が日蔭をもとめて犇き合っていた。土埃と汗の異様な臭が漂っている。私の首筋には汗が流れ、背中に触れるシャツはべっとり濡れて、頬は砂埃でざらざらになっている。額をひと拭したハンカチは土埃の色に染まってしまった。

人混みの中の男たちは、ほとんどと言ってよいほど、シャペウ・デ・パリーヤ（麦藁帽子）を被っているのに気づいた。

日除け、埃除けの帽子に違いない。私は、売店に行つて、細い黒リボンのついた帽子を買つた。久振りに帽子というものを頭に乘せた私は、その昔、こんな帽子を被つて、鍬を使った時代を思い出した。土地の人々と同じ帽子を被つて、仲間入りしたためか、なんとなく気持が落ち付いた。

群衆の中には、日本人の顔がいくつかあつた。土に汚れたシャツを着た年輩の人々が、とくに私の目をひいたが、長いブラジル生活の苦勞を刻んだ顔であつた。話し合っている言葉は、ブラジル語七分、日本語三分というほどの割合で、話題は、この付近のシチオの売買についてのことらしかつた。

オニブスが着くと、一つしかない昇降口へ、人波がわつと押し寄せるので、「降りる人を先に！」と、車掌は大声を張り上げて、整理に狂奔しなければならなかつた。着く車も着く車も、同じことを繰り返し、満員になつた車が、それぞれの行き先に向かつて、自らが巻き揚げた土煙の中に消えてゆくのであつた。

午後三時。奥地にしては珍しく、ポルト・デ・グワイーラ行き  
の車が、時間表通りに発着所に迂り込んで来た。車内はたちまち  
乗客で一ぱいになった。文字通り立錐の余地もない。

車内の通路も乗客でぎっしり詰まっているのである。発車した後も、  
車内の通風がなく、人いきれで頭が痛くなった。帽子の内側は汗  
がにじみ、一筋二筋と汗が項をつたうのであった。

オニブスは前後左右に揺れた。道の凹凸がひどいためである。  
オニブスが止る度に、後から熱い砂煙が、オニブスに襲いかかっ  
て来るのであった。しかも、このオニブスは、一定の場所で停車  
するのではなく、乗る客、降りる客の合図次第で止るのであるか  
ら、発車、停車を頻繁に繰返し、その度に、砂煙が窓から吹き込  
んで来た。

ウムアラーマを離れてからの道の両側は、一面の珈琲園である。  
が、珈琲園と言っても、フアゼンダの構えではなく、数千本が一  
万本程度のシチオの連続である。樹齡はいずれも若く、大部分が  
霜害を受けて、緑をうしなってしまうていた。

この一帯は、面積が六千平方キロメートルもあったクルゼイロ・  
ドエステ郡に属していた穀類の一大生産地であったが、珈琲の好  
況に乗って、珈琲地帯に変貌したものらしい。パラナ州には、コー  
ヒー・ラインが想定されていて、その線以南に珈琲を栽培するこ  
とは、降霜の被害を免れ得ないと、危険信号が出されているので  
あるが、農家は常に作物の景気不景気に左右され、立地条件を無

視した栽培を行なう傾向が強い。

この年の霜は、十数年来の大霜で、ジエアーダ・プレッタ（黒霜  
Ⅱ寒波による被害）であったから、標高は問題にならなかった。オ  
ニブスの窓から見える風景は、見るも無惨なもので、茶褐色に乾  
き切った珈琲の樹海が、もはや起死回生の見込みもなく、悄然と  
横たわっていた。火が入って猛烈な炎を噴き上げているところも  
あった。

オニブスの乗客は、これらの枯死した珈琲園と何かのつながり  
がありそうな人々ばかりである。男たちの話題は、霜害の珈琲園  
をどうするか。何を植えたらよかろうか。種子はどうして手に入  
れるかというようなことで、持ち切っていた。

オニブスは一人、二人と客を降して行つたので、車内の通路も次  
第に空いてきた。ウムアラーマを発つて、四時間ほど経つたころ、  
私はようやく自分の座席に戻つた。というのは、初めに苦勞をし  
て占めた座席は、三人の子持ちの婦人に譲っていたからであった。  
オニブスが超満員となつたとき、私の横に五才と三才位の姉妹が  
押しつぶされそうになって泣いていたが、母なるひとは、乳呑児  
を抱いていて、泣く子たちの方には見向きもしなかつた。可哀想  
でもあるし、泣声を聞くのがつらくもなつて、席を立つたので  
あつた。目的地に着いたとき、この女は子供の手を引つ張つて、  
さつさと下車して行つた。彼女の服装は、布地の模様もさだかだ  
ない粗末なもので、自らも子供たちも裸足であつた。パラグワイ

女のようにでもあった。

オニブスは乗客が減ったので、軽くなつたためか、奔馬の如く駆け始めた。行けども行けども連続している霜に焼けた珈琲園は、残照をとどめて輝き、焼け残つた立木は、鬼の乱舞のようなシルエットを夕焼空に描いていた。乗客は誰もが疲れ、居眠っている者も多い。

通路を距てた私の隣席には、ウムアラーマから乗つた若い女が、うかぬ顔をして、膝に赤ちゃんを乗せている。女が色白である割り合いに赤ちゃんの肌は頗る黒い。その女の隣に顔だちのよく似た娘が坐っているが、妹なのであろう。二人はおしゃべりを続けている。オニブスの騒音で、とぎれ勝ちな言葉から想像すると、二人とも奥地の女ではなく、どこかの都会育ちで、妹の方がことをわけて、いろいろと励しているところから判断すると、赤ちゃんの父なる人に会いに行くところらしい。服装の着こなしや言葉づかいから、賤しい職業の女ではなさそうであるが、教育のある女とも思えなかつた。やがて、或るシチオの立札がある前に車が止つたとき、出迎えらしいモレーノの若者が手伝つて、二人の女を降した。

シヤレットが待っていた。子を抱いた女の不安気な面持が、しばらく私の臉から消えなかつた。

オニブスの客は、中年夫婦と一人の少年、それにビヤジャンテ風の色の黒い五十がらみの男と私だけになつてしまつた。

日はとつぷり暮れてしまつて、いたましい霜害の跡が、無気味な

黒い海と見えるばかりである。夕食の時間が来ているのであるが、食堂のある町がなかなか現われない。パトリモニオ（小邑）に停車しても、五分間ほどの休憩で、まずいカフェーを呑むのが精一ぱいであった。ピンガらしいピンガにもありつけなかった。

眠りこけていた少年を揺り起こして、中年の夫婦は私に会釈をして下車してしまったので、グワイーラまで行く客は、色黒の男と私の二人だけになってしまった。

オニブスは悪路を突走る。車掌はこくりこくりと居眠りを始めた。運転手はハンドルにしがみついて、思いきりアクセルを踏む。オニブスは埒に帰る鳥のように、グワイーラ目指して一目散に走っているのである。空になっている胃腸がよじれたのではあるまいかと思うほど痛む。全く裸馬に乗っているようなものだ。

午後九時。ようやくピキリ河畔に着いた。二人の乗客は、車を下りて、バルサに乗らねばならなかった。運転を誤って、オニブスが河中に転落する事件が往々にあるためか、乗客の安全を慮って、強制下車を命ぜられるのである。生温い河風が頬を撫で、岸辺の原始林からは夜鳥の奇声と動物の吠哮が聞こえ、足元から虫のシンホニーが湧く。蛙が調子外れの低音バスを奏でる。

朧夜の静寂を破って、バルサが動き出した。河の面には、水蒸気がたちのぼり、流の緩急ははっきり見えない。十六世紀の中頃、ジエズイット僧らイスパニヤ人と四万家族にも上るインジオが平和な集団地をつくって栄えていたが、バンデイランテスの襲撃に遭い、全滅の憂目にあったのはこの下流、パラナ河との合流点で

あつた。

バルサが対岸に着いて、二人の乗客は再びオニブスに乗った。『疲れたですね』『全く！』溜息をつく二人の眼に、グワイーラの町の光ぼうが飛び込んで来た。そのとき、私の時計の針はちょうど十時を指していた。

(完)

## ブエノスの夜

水本すみ子

私たちの一行は、日本より歌劇団を引きつれて来られたR氏と通訳兼世話係りのブエノス在住の森さん、それにサンパウロからR氏応援に来た夫と、弁護士N氏、そして、お相伴の私とN夫人である。

空港に出迎えてくださったR氏は、N氏と夫とをさらうように、大使館での会合に連れて行ってしまった。歌劇公演について、興行主との話しあいが紛糾しているのである。N夫人と私とは、出迎への森さん、西本さんのお二人に、ホテルへ案内して頂いた。

空港から市内まで、五、六キロもあろうか沿道は一面に深いみどりの芝におおわれ、程よく間隔をおいて、枝ぶりのよい樹木が植えてある。さながら広い公園の中を行くようで、入国第一歩、私は、まずさわやかな亜国の春を鮮やかに感じた。

ホテルの部屋におちつくと、サンパウロから空路わずか二時間半、さまで疲れてもいないので、N夫人を誘って、散歩がてら外に出てみた。

街行く人々の服装は、みな一様に洗練されていて、おちついた感じである。皮革製品のボルサ、靴、それに家庭用品のデザインなど、仲々高尚なものが目についた。

その夜、ホテルに、夫とN氏が帰って来たのは十二時近くであつた。

「どうもどうも、奥様方、申しわけありません。」

と、R氏がおっしゃったが、私たちも、覚悟の上であり、むしろ男の世界のきびしさに身のひきしまるのを覚えた。

「さあ、これから食事にまいりましょう。」

と、みんなでブエノス・アイレスの夜の街へ出ていった。

室内では、温いのに、一步出ると、清冽な早春のブエノスの夜の空気が刺すように冷たい。先に出られたR氏が、「あつ、いい空気だ、ブエノスの空気だなこれが……」続くN氏が「そう、そう、その“空気”ですよ。ブエノス・アイレスというのは、“よい空気”という意味。」といわれる。

ブエノスの夕食時間は午後十時からとのこと。もう十二時過ぎだというのに、まだ宵の口のように人が多い。

夜更けではあるし、車の通らない繁華街なので、道の真中を歩く。

前に行くN氏が立ち止まって、この辺では珍しい日本人夫妻と

話しこんでいる。近づいた夫やR氏も「やあやあ今日は、どうも……」と挨拶している。大使館のK書記官だと紹介された。今、久しぶりで日本映画を見ての帰りとのこと。このお二人もお誘いして、一しよにレストランテに行く。

食堂は、夜中だというのに、ほとんど満員である。それでも珍客とみたのか、ボーイが寄ってきて、中央に場所を作ってくれた。「さて、今日は、みなさんお揃いだから、何か変わったものを注文しますか」というR氏の提言で、しばらくすると、みんなの前に、それぞれ炭火の入った小さなコンロが運ばれてきた。その上で、何やら香ばしいおいを漂わせながら、よく見ると、臓物らしいもの、腸詰とおぼしきものなどが、ピチピチかすかに油をはねながら焼けている。

時間を超過しすぎた胃の腑は、もうすっかり食欲を失っていたが、何はともあれ、と食べはじめた。細長いもの、丸いもの、四角に切ったもの、白いこりこりしたものなど、一通り口に入れてみたが、判別できたものは、年の心臓、舌、尻尾、脳みそくらいのところ、中には、さっぱり見当のつかないものもあった。ただ、食後のアイスクリームが、すばらしくおいしかった。

総勢八人の食事は、話もはずみ、大変賑やかなものだった。R氏は、

「ああ、今夜は久しぶりで、食事がうまかった。男性ばかりだと、どうしても、話が仕事の方に片寄ってしまうけど、今夜は御婦人が一緒なので、気分がのびのびした」とおっしゃる。

帰りがけ、出入口のところで、大きな炭火をかつかと熾して、大ぶりの肉片を太い金串につきさして焼いている。こうした光景は、サンパウロのシユラスカリアでもよく見る場面で、めずらしくはない。その右側のジエラデイラの中に、白くて、大型の卵のようなものがいっぱいつまっていて珍しく思った。

「何でしょう。あの丸いもの？」

と、傍の森さんにおききすると、こともなげに、

「ああ、あれですか、あれは、こうがんです。牛の……」

「ええっ！」

私は、あわてて唇をおさえた。

（まあ、ひどい、そんなものを、私たちに……）と、驚きのさめない頭の中で、いまたべたものを思い浮かべてみた。そして（いやいや、あんな形のは、私は絶対たべなかつたと信じて、やつと胸をなでおろした。

さて、N夫人は、と振りかえってみると、彼女は、新婚さながら、ぴったり夫君によりそって、にこやかに、こちらへやってくる。

（ああ、この事だけは彼女に言いますまい、決して……）と、私には心に誓い、そつとドアをおして、ことさら夜気の浸みる戸外へ出ていった。

（終）

三島由紀夫

について

要旨と補遺

水野 林

（三島由紀夫の諸作品は、私のような無我夢中な読者にとっては、聖書のように尊厳なものであるが、例えば新訳聖書にはそれに先立つ旧訳聖書の時代があつたように、文学史には三島由紀夫の生誕に向つて流れる一つの流れがありました。我我読者は、三島由紀夫をはぐくんだ背景に深く興味を覚えます。なかならずレイモン・ラデイゲについては、三島由紀夫を語る前に、少し詮索しないわけにはいかないのです。）

そこで、まず最初にフランス。時は一九一八年のある日。

当時ジャン・コクトーは若く、二十九才であつた。そのころコクトーは母の家に住んでいたが、女中が取次をして、「ステッキをついた子供」の来訪を告げた。それがレイモン・ラデイゲだつた。ときにラデイゲ十五才であつた。

コクトーはそのときのラデイゲについて次のように書いている。

レイモン・ラデイゲと会つたとき、すぐに彼の才能を見ぬいたと私は云うことができる。なにによつてそれを見ぬいたか、私

はそれを心に問うてみるのである。

彼は小柄で、蒼い顔をして、近眼であった。

不揃いに刈られた髪の毛が襟もとまで垂れていて、頬鬚のように見えた。彼はまぶしそうに、しかめ面をしていた。跳び上るようにして歩くので、まるで歩道にゴムでも敷いてあるような具合だった。

彼はポケットから、まるめて突っこんであったノートの小さい紙片をとり出した。彼は手の平でその雛をのばし、手巻きのシガレットを持ちにくそうにして、非常に短い詩を一つ読もうとした。彼はその詩を目にくつつけるようにしていた。……彼はほとんど口を利かなかった。

絵を見たり、本を読んだりしたときには、ポケットから割れた眼鏡の玉をとり出した。彼はそれを片眼鏡のようにして使っていた。

このように、十五才のラデイゲはコクトーによって描かれている。

ラデイゲ十六か七の頃になると、詩人のブレーズ・サンドラールによれば、「娘のような下ぶくれの顔をした、内気な若い大きな男」となっている。

ラデイゲとはどんな人だったのだろうか。

この、「ドルヂエル伯の舞踏会」の作者の貴重な生き姿のうつっている映画がある。一九二〇年代の、もちろん無声の、ニュース

映画の断片として、それは「狂った年輪」という記録映画に収められている。

三島由紀夫は、つい先年、ある編集者にさそわれてその映画を見にゆき、「たった一、二秒のワン・カットだけのレイモン・ラディゲの生ける姿を胸をワクワクさせて見つめた」のであった。私もまた、期待を持ってその映画を同じような時期に見た結果、神々しきレイモン・ラディゲの姿はいにく何の変哲もないもので、今から見ては古めかしい冬ものの背広を着た、堅い表情のフランスの一青年が、少しピンボケぎみにうつっているに過ぎなかった。

レイモン・ラディゲは一九〇三年（明治三十六年）六月十八日にパリ郊外マルヌ川沿いの小都市で生れた。ラディゲは日本の作家でいえば久保田万太郎、室生犀星なぜと同年だそうである。父親はモーリス・ラディゲという漫画家で、モーリスは週刊誌などに定期的に漫画を書いていた少しは名の知られた人物であった。

レイモン・ラディゲは小学校時代を優秀な成績で過ごした。高等中学時代になると成績は芳しくなくなり、文学書を耽読した。高川に浮かべた父親のボートの中に寝ころんで、ラファイエット夫人作「クレヴの奥方」などを愛読した。こんな場面は、最初のつましい傑作「肉体の悪魔」の中にあるが、私にとってのそれは、どうしても堀口大学氏の訳でなくてはならない。」と三島由紀夫は言っている。そして、”堀口氏の創った日本語の芸術作品としての”つまり「堀口ドルヂェル」が実にラディゲと三島由紀夫

との仲立ちになったのである。

堀口大学について簡単に記してみよう。その半生は世界を遍歴し、波乱に富んだものである。

詩人である青年堀口大学は、明治四十二年に一高法科の入試に失敗する。翌年一高入試再失敗。

九月慶応予科文科に佐藤春夫と共に入学。次の年には慶大退学、メキシコに向いながら船中で略血。

ハワイのワイキキにて二カ月静養後、静養丸にてメキシコ着。以後フランス語学習に専念し、かたわら「スバル」「三田文学」に詩を寄せた。大正二年帰国。この年八月シベリア經由ベルギーに行く。

これら外遊はすべて外交官である父君に従ったもので、以後スイスのサナトリウム、パリ、マドリッドを経て帰国。帰国の翌年大正七年には詩集を自費出版し、八月にはブラジルに向い、十月三十日にリオに着いた。一九一七年より一九二三年(大正十二年)までを主にリオ、ペトロポリスの日本公使館に過ごした。この間七冊の詩集、歌集訳詩集を日本で出版した。

日本に帰国した翌年一月には再びパリに在り、ポール・モーラン、アンドレ・サルモン、ガストン・ガリマール、マリー・ローランサンその他の詩人、文人、画家と会っている。

このうちのアンドレ・サルモンは、ラディゲが十五才のころ、「ラントランシジャン」という新聞に父親の漫画を届けにいったとき、それに目を通す係であった。サルモンの回想によると、短

い半ズボンをはいた面白そうな十五才ばかりの少年が、彼に向つて詩を書いていることを打ちあけ、その少年は R A J K I という署名の詩をいくつか見せて読んでくれるようにたのんだのであった。「その詩はそうとうに私を感心させたので、私はその少年に向つて、詩人は R A J K I というような不マジメな名をつけるものではないと、きびしく注意してやった。するとその少年は非常に素直にレイモン・ラデイゲに再び戻った。」とサルモンは述べている。

そのような、ラデイゲの親しい知人アンドレ・サルモンに堀口大学が会ったのは一九二三年の初めで、そのときはまだ「ドルヂエル伯」は書かれていず、そしてこの年の末にその傑作は完成されてそれと共にラデイゲも世を去つたのであった。

しばらく後に堀口大学が「ドルヂエル伯」の訳業を完成させると、一九三一年に白水社から出版された。

次の年には谷崎潤一郎がそれを早速とり上げて激賞する文章を書いた。時代にずれがあるにしても、平岡公威少年（三島由紀夫）にはいうまでもなく谷崎潤一郎を耽読した時期があり、雑誌「文芸」の座談会の中で、その時期には荷風を読まずもっぱら「潤一郎一辺倒」だったことを告白している。

実は谷崎潤一郎のその文章がいつごろ三島由紀夫の目にとまったかは、大いに興味のあるところである。何故なら、少し長くなるが、それはこんな文章であった。

近頃読んだ翻訳物ではラデイゲの「ドルヂエル伯の舞踏会」(堀口大学氏訳)と云うものに私は一番敬服した。ラデイゲ自身のノオトを以て説明すると、

この小説の中では、心理がロマネスクなんだ。

空想(イマジナション)の努力は専らこの点に集中される。即ち外面的な事件に対してではなしに感情の分析に集中されるのだ。つつましい恋愛の小説でありながら、同時にまた、如何なる好色本より猥な小説にする。

文章は、下手なような文章を用いる。例えば真の粋が地味なものであるように。

### 「社交的」方面

或る種の感情の開展に役立つ雰囲気を作り出す為であつて、社交界を描出しようとするのではない。この点がプルストと異るところだ。背景は重要ならず。

とある。

これは此の本の序文ではない。二十才で死んだ此の作者の遺物の中から発見された覚え書きの文句だそうだが、出来上つたものを読んでみると、成る程その通りに書けている。

私が第一に感心するのは、この作者の意図が遺憾なく作品に実現されている一事である。誰しも「こんな風なものを書いてみたい」と思ったり腹案だけは素晴らしいものを考えついたりするけれども、さてそのプランがその通りに書き上げられれば問題はないので、それが相当経験のある作家に取っても中々そうはいかな

いのである。ところが二十才のラディゲはこれを見事に成し遂げている。第二に感心するのは、此の覚え書きの趣意、即ちプランそのものが既に甚だ尋常でないことである。日本で二十才と云えば生嚙りの文学理論なんかを受け売りして怪気焰を上げるたわいのない年頃であるのに、こんな卓抜な見識を持つていたというこゝと自体が実に凡庸でない。第三には、此の小説は正しく心理のロマネスクであり、作者の努力が「外面的な事件に対してではなしに感情の分析に集中され」ており「或る種の感情の開展に役立つ雰囲気を作り出す為」にのみ、社交界が描かれているに過ぎないけれども、それでいて、篇中の人物の心理が織り出す波瀾を透して、外界の物の有様が――たとえば顔つきや、声音や、服装や、人柄や、四辺の情況等が――眼に見えるように浮んで来ることである。これは尚以て容易な業でない。即ち此の作品は覚え書きの意図以上の出来栄を示しているといふべきである。

二十才の若さでこんな物を遺す程だから、余程早熟だったのである。ところが、それにしても、こういう異常な少年作家を生み出す国は矢張り仏蘭画以外にはあるまい。一葉女史や紅葉山人もかなり早熟の方ではあるが、此の作者の早熟さは神業に近いものがあり、誠に現代の奇蹟と云つても過言ではあるまい。もし日本の文壇にこんな少年が現われたとしたら、われわれはどんなに薄気味の悪い思いをすることであろう。が、斯かる天才児が生れるのは、畢竟その社会の文学の常識が余程進んでいる証拠であつて、それだけの準備のない、水準の低い文壇に、偶発的にこういう作家が飛

び出すことは先ず有り得ないといっている。以下云々。

”先づあり得ないと云っているいい”と観察し、文豪谷崎は”薄気味の悪い思ひ”をせずにすむことをあたかも安堵するかのようである。

しかし我々は、東京の一隅に於て、この一文の意味を噛みしめていた神業に近い早熟さをもつ一人の少年を想像してもよさそうである。

その少年は、ラディゲへの盲目的信仰の長い時期に、白水社版「ドルヂエル伯」のさまざまな個所に無数の傍線を引いた。やがて二十才前にこのような傑作を書こうと彼は企てる。だれしも、そのような時期にその作品を読めば、一度はそんな傑作を書き上げることを夢みるだろう。そして、それは単に夢想到に終るのが常である。傑作は書かれぬばかりか、その不手際な長篇は完結するこゝとさえないだろう。

ここにあつて三島由紀夫はその企てをほぼ実現し、長篇「盗賊」を書いた。

この作品は単に若書きの記録達成の面から評価されるべきではなく、作品の完成度の観点から重要な作品と云えるが、それにもかかわらず読者には、作者のラディゲとの年令競争の側面の興味がやはり優先するものである。

三島由紀夫は大正十四年一月十四日生れで、大正十五年つまり昭和元年に満一才をむかえるところから、この作家は昭和年号と共に歩む作家だといふことができる。

「盗賊」は昭和二十一年に執筆にかかり、この年ついに中絶された。ラディゲとの比較ではすでに年令超過である、この作品は昭和二十三年作者二十三才のときに完成された。悲しむべし。大谷崎の予言のごとく、日本では二十才の傑作は「先づあり得ない」のであった。作者はこの作品を、「無慙な結果」と呼ぶ。それは年令に執着しての言なのであるが、作品の上ではこれは二十三才にしてすでにその年令をはるかに越えた作品で、若書き日本文学の見事な結実であり、決して無慙な結果などでありはしない。

三島由紀夫は、自身の作家的形成にあたってのレイモン・ラディゲの役割についてかなり多くのことを語っているが、その反面、もう一つの、長い間続いた谷崎潤一郎の文学との共鳴関係については、あまりこの作家によって語られてはいないようである。

谷崎潤一郎の作家活動のパターンと、三島由紀夫の作家活動のパターンは、非常に多くの共通性を持っている。

この二人の作家は、国文学の造詣の点で、不思議な同質性をもっている。歌舞伎、音玉、浄瑠璃趣味ではどちらも負けず劣らずの熱烈さである。

金ピカ好みの点では、両者ともその文学が「絢爛豪華」などと評されるのが他の作家よりもはるかに多い。劇壇人としても重きをなし、小説家であるのと同じ程度に重要な劇作家としての反面を持つていることでは瓜ふたつであるが、そのほかに映画人としても且那芸を發揮する。横浜好みであり、谷崎の本牧ものに対応



職業的洗練ということに邁進したが、それでも官吏時代に、文書課に居て大臣の演説の草稿を書かされてたいへん難儀をしたそうである。そのとき、草稿としてごく文学的な講演の原稿を書いたが、それはいたく大臣の威信を傷つけるものであったらしく、課長は、三島由紀夫の文章を下手だと云い、上役の事務官に根本的に改訂された。するとその文章は三島由紀夫が感心するほどの名文になった。「それは口語文でありながら、なおかつ紋切り型の表現の効果が輝いており、すべてが感情や個性的なものから離れ、一定の地位にある人間が不特定多数の人々に話す独特の文体に綴られていたのであった。」

やがて三島由紀夫は官吏生活に見きりをつけ、というよりも自己の作家的使命に目ざめ、わずか八カ月余の官僚生活に終止符を打った。

やはり戦後の混乱したその時期に、三島由紀夫は太宰治にわざわざ会いに行った事があるそうである。それはうなぎ屋の二階のようなところだった。

それは「斜陽」が発表されてすぐのことで、それまでに「虚構の彷徨」や「ダス・ゲマイネ」を古本屋で求めて読んでいたが、太宰治の「稀有の才能は認めるが、最初からこれほど私に生理的反発を感じさせた作家もめずらしい」と三島由紀夫は断じ、「斜陽」にも早速目をとおすが、第一章でつまずいてしまう。作中の貴族の娘が台所のことを「お勝手」などと云ったり、その他いろいろあって、ともかく気に喰わない。「何でも敬語さえつけなければいいと

思つて、自分にも敬語をつけ、『かず子や、お母さまがいま何をなさっているかあててごらん』などと云う。

それがしかも庭で立ち小便をしているのである」とて憤激する。ともかく三島由紀夫の太宰ぎらいは徹底していて、ふだんのこの作家に似合わず鷹揚に相手にせず、といったところがない。

さてそこで、友人に連れて行つてもらつたのがうなぎ屋の二階であつた。そこには太宰治の崇拜者たちが大勢居て「太宰的な」あたかも「斜陽」の中の宴会の場のような雰囲気だつたらしい。三島由紀夫は太宰治の前に請ぜられて盃をもらつた。

ここで、太宰治の面前で辛辣な太宰文学批判が思うさまなされていたら、我々後世の読者にとつてこの上なく興味ある場面になつたにちがいないのだが、三島由紀夫はニヤニヤしながら不得要領に、

「僕は太宰さんの文学はきらいなんです」

と云い、太宰治がそれに対して酒席にまぎれた茶化した応得をしただけで終つた。

その後三島由紀夫自らが、こういう文学上の刺客に時折会うようになった。

例えば鷗外、漱石とか、荷風、潤一郎というように各時代の文学の双壁というものがあるとすれば、戦後の日本文学の双壁は太宰治、三島由紀夫の両家と考えられる。惜しむらくは両者の活動の時期がわずか一時代をへだてて一致していないことである。

三島由紀夫の文体には太宰治のような諧謔性や狎れ狎れしさや

柔和さや、作家の内側から湧き出る強い体臭又は香氣というものが無い。

ただ三島由紀夫にあつては文体はもつぱら磨きぬかれた銀器のように明快無比である。そして時間と空間の遠路をもともせず、に飛翔する作家の悪魔的繁忙によつてかき集められた珍珠佳肴が、壮大な饗宴となつて文体に盛り上げられるのである。

そこでこの作家は、太宰治のように自分の内なるもののみによつて饗応し、人々のそれを悦ぶ様を見ては、いかにも不審の念を禁じることができない。そんなものより自分の日ごろの力業の方がはるかに手間ひまがかかつているのである。

三島由紀夫の文学は力業の文学である。それもおそろしいデモーニッシュな力業である。こんなわけで、トーマス・マンの文学も三島由紀夫の理想の文学となるのである。

この作家は、今日あまりにも巨大である。現在では、均質性を持ったおびただしい作品を産み出しつづける、一種異様な、例えば文学マシーンとでも云える作家となつている。

「潮騒」を書いたころの三島由紀夫は、二十才前に傑作を書き、二十才前に死ねたら、というような条件に近い夭折の天才の理想が最終的に打ち砕かれ、三十才までにあと一息という状況にあつた。

しかも、少年時代から二十五、六才のころまでの蒼白い弱々しさは消えて、自身はますます健康となり、今後際限もなく生きつ

づけるだろうとの予想が出てきて、仕方なしに百五十才までも生きてやろうかというようなことを考えはじめていた。

もはや若死のできる見通しは全くなくなった。

そして今後何十年も生き、何十冊もの本を書いてゆくものならば、「ドルジェル伯」のような究極小説、純粹に抽象的、方法的要素のみで成り立っているような潔癖な小説を書いて純粹な生を終える夢は、これを打ち捨てなければならなくなってきたのである。

そして、生き続け 書き続けるとなれば、今までの理想と反対の理想、つまり人並みすぐれた健康の維持こそが、今度は若死に代る理想となってきた。これらの考えは二十六才での最初の世界旅行の途次に兆しており、ギリシヤは三島由紀夫の自己嫌悪と孤独を癒やし、ニイチエ流の「健康への意志」を呼びさました。

ここで近年来始めていたボディビルブームの成果はようやくいじりらしく作家の筋肉の上に実りはじめ、ギリシヤの美の理想はあたかも背中一面のくりからもんもんの様に我が身から引きはがすことが出来なくなった。

昔の細いころの腕とちがって、太くなった腕は立っているだけで闊背筋とふれ合い、押し合うのを感じるようになった。階段を降りるとき、重くなった大胸筋は女の乳房のようにたふたと動くようになる。おまけに以前の洋服は全部身体に合わなくなつて、下着に至るまで新調しなければならなくなった。

こうしてその肉体が重厚な存在感を得てくると同時に、その精神も変容を余儀なくされるのだった。

「潮騒」は、こういう一つの転機の時代に書かれた。これを書くとき、作者はこれまでの自分の気質と全く反対なものを書こうとし、以後人生上でも、自分と反対のものに自分自身を転換させてしまおうと欲するようになる。それはもともと自分の中にかくれていた半面を引き出す作業でもあり、このあたりからこの作家の今日ある姿の開花がなされたのである。

文章とは、はた織りのように、一本一本の糸を丹念に織っていつて、そうして織りものの模様を全体を作り上げてゆく、そういうのはた織りの仕事のように文章というものを考えているのではないか、というのが三島由紀夫の作品を読むときのいつもの感想だが、同じことを作者自身もある文の中で言っている。

次に、割合近作の「午後の曳航」からこのような場合の例を出してみよう。

これは横浜港の出帆の光景である。

「房子と登は、タグボートに曳かれた洛陽丸が船尾のほうから、少しずつ岸壁を離れるのを見た。

岸壁と船との間のかがやく水幅は、扇なりにひろがって、――みるみる洛陽丸は向きを変えて岸壁とほぼ直角になった。」

ここまでは一応、これから織ろうとする織りもの下絵、見取り図のようである。そして「角度が一瞬々々に変るにつれ、船は変幻ただならぬ姿を示した」という一行で、船の角度の変ってゆくことの指示と、それにつれて変化してゆく船の姿の予告を行な

う。

「これほど長い岸壁を占めていた船の全長は、タグボートに曳かれてゆく船尾が遠ざかると共に次第に屏風のように折り畳まれて、甲板のあらゆる建造物は、重複し、緊密に押し重なり、しかもあらゆる凸凹に夕日の光線を丹念に彫り込んで、中世の城のような賑やかな重層感を以て聳え立った。」

ここまでを、一つ一つの語句に含まれた作者の指示に従って読めば、巨きな船の全容の動きも、その時間的経過も、読者の頭脳の中に確実に再現される。つまり作者の意図した絵の一場面が織り上げられるのだ。

ところで、これはあくまで作者の作った情景なのであって、この洛陽丸というのはせいぜい七、八千トンのしかない貨物船なのである。そこで客船ならともかく、このうすよごれた貨物船が、現実には中世の城のようであったりはしないだろうと思われるが、一応作品の中では、読者のイメージは作者の指示どおりに組み立てられてしまう。

作者はしばしば現実を無視してまで自己の美意識の方を優先させる。そういえば、もともと現実を認識させるために作品があるのではない。それくらいなら実際に船を見に行った方がよいのだ。

また、読者とは一つのオーケストラであり、そこに指揮者が立たなければ、それは単なる記憶や雑多な経験や感情の集合体であるに過ぎない。指揮者の指示がなければ音符ひとつ満足には弾け

ないのである。指揮者の懇切な、囁んでふくめるような指示のもとに、はじめて音符は鳴り、精神は刺激されて、楽曲は自然に流れ出し、虚無の場所に作品世界が構築されてゆくのである。このとき作者は読者の側にある現実に足をとられたりしてはならない。美と芸術に向けて読者をひっぱって行くには、敢て専横も辞さないのである。

三島由紀夫の作品を読むうちに感じることの一つは、古語の使用法が実に巧みだということだ。

これは一見術学的な文章作法のようであるが、効果の上では必然性を感じられる場合の方が多い。

「潮騒」の中から一例を引いてみると、

「その道は実に崎嶇としていて、馴れない人は昼でもつまづくだろうが、若者の足は目をつぶっていても松の根や岩を踏みわけて行くことが出来た」というところがある。

この「崎嶇」という語は、険阻な山道のいく重にも折れ曲ったさまを簡潔に要約していて効果的なのだが、古語の活用の仕方が巧妙なので、文の前後のようすから、たとえ初めてこの言葉にぶつかってもたやすく語の意味が酌みとれるほどだ。

こういうような古語の活用の最上の例を見ることが、この作家の作品のたのしみの一つなのである。

こんなことから我々はいやでも古語の価値を再認識させられるし、ひいては日本の古い文化と、我々の祖先に対する敬愛の念が、いつのまにか芽ばえているのを感じるようになるのである。

だから三島由紀夫は、他のいかなる作家よりも日本文化に対する熱愛の作家だということが感じられてもくる。その数々の作品は、まさに最上の日本語作品の一つである。

日本人と、日本語と、日本文化の持っているすべての意義に対する深い認識、そしてこれらのものを産んだ日本民族のなかの賢い人々に対する愛情の燃えあがりをも三島由紀夫の諸作品は感じさせるのである。

作家三島由紀夫氏は一カ月に大体一〇〇枚、一日約三枚のペー  
スで書く。一カ月一六〇枚位書く月もあるが、ともかく強固に一  
〇〇枚のペースを下げない。

収入もかなり高いが、しかし作家所得番付ベストテンに顔を出すほどではない。自家用車に乗らず、外出のときはもっぱら電車に乗る。いわく落語家がフロ屋に行かなくなるとつまらなくなる  
そう、電車の中で人を観察するのも作中人物のイメージを固めるためである。

月曜、木曜ボディービル、土曜日の剣道もきまっている。自作の芝居けいこ立合い、その切符の売りさばき、ボクシング選手、科  
学小説家などと会って作品に必要なネタを仕入れること、羽田に  
人の見送り、座談会出席、洋服の仮縫い、ホテル・オークラの床  
屋に行くこと、税金関係その他の帳簿を自分で付けること、取材  
旅行、人との会食、裁判沙汰、その他の日程をこなしたのちに、夜  
中の十二時ごろから書きはじめる。従って銀座のバーをまわった

り、文士劇に出たり、文壇ゴルフをやったりというヒマはほとんどない。テレビはぜんぜん見ない。有名なビクトリア王朝風の悪趣味な家に住み、家に居るときは日光浴をし、ジーンパンツにはだしでいることが多い。書斎のドアは大きな一枚の鏡になっており、そこに姿を映しながら、スチールデスクの上をとりちらかしたまま原稿用紙に向う。締切り期日にはおくれることがない。原稿の字は一字々々はつきりと、美しく書く。

三島由紀夫はブラジルに約一カ月滞在したことがある。リオでは子供たちの行列に立ちまじって小さな映画館に入り古い活劇を観た。リオのヨットクラブのカルナバルのバイレに行つて踊った。サンパウロでは紅燈街を見学した。リンスのタラマ農園に五日間滞在し、のちに「白蟻の巣」という戯曲を得た。

そしてヨーロッパをまわつて帰国したが、パリでは街頭のドル買いにだまされて、有金全部巻き上げられたこともある。そのパリではシルク・メドラーノを見物した。メドラーノ曲馬団は、レイモン・ラデイゲの「ドルジェル伯の舞踏会」の初めの場面に出てくるパリ一流のサーカスで、作中のこの場面でドルジェル伯夫人マオと、フランソワ・ド・セリューズが最初の出合いをしたのである。

終りに、最近の雑誌『群像』の「荒野より」という作品に触れてみよう。

これは私小説風の作品で、ある朝三島由紀夫は熱狂的な読者の

青年によって自宅の窓ガラスをたたき割られ、家宅不法侵入を受ける。三島由紀夫は朝の六時まで徹夜の仕事をし、いつものようにそれから午後まで寝ようとしてベッドに横になったときに起った事件である。警官が来て青年はとらえられる。

その青年は、荒野の中から歩んで来たのである。

作家の頭脳の中は広大で、一つの都市が型づくられているが、その都市は作家が自分の荒野であったところへ辛苦の果に自らの手で建てたところのものである。ところがその青年はまだこのように型づくられない荒野を背負っており、また荒野は作家の頭脳の辺縁にもなお存在しているのであるが、青年はそのような荒野から歩んで来たのであった。

その事件は、この作家の社会的な受けとられ方の極端な例をも示していて、それは単に通俗的興味にとどまらず、三島由紀夫という大作家の一種の神格化現象の兆候をも感じさせるものであった。

三島由紀夫は根気強い肉体のボディビルダーであるが、その努力にふさわしい骨格を天はさずけてはいなかった。

ところが精神の領域に於ては事情は異なり、優れた先天的素質の上にたゆまぬ訓練をほどこした結果が今日の偉大を招いたわけだ、一寸きざみの努力の積み上げであるボディビルの原理にいちはやく着目し、それを完全に精神の上に応用した作家であるといえる。

(おわり)

「恋文」―「板小屋の来歴」から「CASTIGO」（懲罰）まで

妹尾 三郎

過日、藪崎さんは、「コロニア文学第三号」合評会の席上で、コロニアで文学するものの、「なりふりかまわず」のあり方の難しさを、述懐していたけれども、それは、文学をするものの基本的な姿勢であって、外的な環境に差配されるものでなく、あくまで作者自身の内部に属するものである。藪崎さんの懼れは、虚構のなかに真実を表現する可能性をそのあまりの、潔癖さによって是認出来ない故であろうか。

その創作態度は、「生活の破綻」を避けえなかった、私小説作家のそれを連想させる。しかしながら作品の上で、緻密な配慮をおくことの出来る作者にとっては、それは一つの危懼に過ぎないものであって、憤思に物事をいさめようとする誠実さを示すものである。

それにひき較べて、いまだに銜のない文章すら書けず、作品の上でも、生活の中でも、「なりふりかまう」ことに馴染んでしまっている私などは恥かしくてしょうがない。

○

作者は、何れの作品のなかに於ても、ブラジルに生活する日本

人の姿を、飽くことのない熱意を傾けて書こうとする。

「恋文」では、ぼくの位置から、コロニアの一つの醸成物であるぼくを、主として心象をもととして捉えようとし、「板小屋の来歴」に於ては、「私」を彼の位置におきかえて、客観的な立場から、コロニアに生活する典型の人像を数多く登場させ、抽象的とも云える一組の浮浪者の生活と対応させることによって、コロニア人としての作者の生き方を確かめようとしているようである。

「CASTIGO」になると、「私」は州農務局秘書三課に一級公務員たる「私」と、三人称の古本屋の主人に内部分裂し、自問自答ともいえる形をもつて、あますところなく移民の姿を描きとめようとする。

これら三つの作品の発表された期間の短かさにおいて、その変り身の激しさは、作法上の試みというよりか、作者の危惧の幅の姿とも言えるものがある。

作者は既に、コロニアの日本人観、移民観を彼なりに自身の中に確立して居り、その危惧は、やはり、「なりふりかまわず」に書けるかどうかという点であろう。

「恋文」に於て、作者は、精一杯赤裸々な姿勢で己れ自身を捉えようとして、その弱さ故に果さなかった。

虚無は格好の逃避の場所であったのである。

「恋文」の中のぼくは、下降の底に生きることの真実を見極めようとする……求道者に似た真撃さがあるようだが、そこにはそれ程の傷痕もないのである。

何故か、体質的な弱さ、逃避的な虚無感がつきまとうのだ。

事象の対立の壁の中に、効果を期待した制作態度は、「板小屋の来歴」に至って、顕著な形をもっている。

自分の売物にも署名せずには安心出来ない新移民の物売り。

為態の知れない、女ことばをつかう中年男のうがった移民論。

勲章のない勲記を売ろうとする藤井老人。

子供のころ、親について移民して来たというバナナ売りの沖田の、これまで何一ついいことのあるためしが無いと言う可能性のない人生。

田舎の生活に見切りをつけて、自分ひとり住込でも働き、ここで生きる手懸りをつかもうとする中年の女。

作者は捉えられる範囲の、数多くの移民の姿にスポットをあて、それによって、移民としての人生観を開陳し彼自身の中に確信づけようとしている。

「板小屋の来歴」を評して、《作者は、作中の人物に愛情が薄い》と言った人があった。その発言は多くの人によって忽ちに否定せられたけれども、私自身、読後、何となく居心地の悪い情味の乏しさを感じるのは如何したことであろうか。

多くの人物が登場するが、それ等は単なる典型の配置に過ぎない。作者自身の位置である「彼」は、器の中からそれらの一つ一つを選び出す感情のないピンセットの働きをする存在だけのものである。

作者は何故、「板小屋の来歴」に於て、「私」を棄てて冷淡な「彼」

の位置から、ものを書こうとしたのだろうか。

「恋文」で、自己の中に、「なりふりかまわず」の限界を早計に見極めた作者は、傷つくことなく、「なりふりかまわず」書くことの出来る位置を見出そうとしたに違いない。

確かに、「板小屋の来歴」には、「恋文」に見られた難解さは姿を消し、消化された作者の人生観の片鱗が巧みに捉えられている。

しかし、あの、「恋文」の中の、弱さのうちにも、それなりに、ひとつのものに迫ろうとする生命の働きは、この作品では安易な是認に移行してしまった。

私は、何故、この作品を、第一人称の、「ぼく」を使って書き続けなかったかと思う。

そうすることによって、この作品は、より成功したものとなり、「なりふりかまわず」に書く機会を持つことが出来たのではないかと思う。

C A S T I G O 《懲罰》は、行きがかり上前二作と比較することになってしまったが、この作品は、藪崎さんにとって、支流の作品だと思う。

「小説とは言えないかもしれないか……」

と、自身でも言っていたようだが、正直なところ、私にとって前二作よりこの方がずっと面白かった。移民論の切り下げの深さが、移民の私に小気味よい共感を与えるからであろうか。少なくとも、私をふくめた我々にとっては立派に、文学作品であることは間違いない。

この作品は、コロニア人たる作者の、その移民観を整理する意味に就て、いつかは書かねばならない句読点のようなものであったのだろう。

ただ作品そのものについていえば、最後の「私」が腹癒せに、義弟の税吏に、古本屋の主人を告訴しようとするところ、これが、C A S T I G O 《懲罰》の作品の主眼であって、正論を越えた感情の機微を書こうとしたのであろうが、いささか、道化すぎた感じを持った。

結論として、私は、藪崎さんは、私小説作家の系統に属する質の人だと思う。「私」の位置から作品を書くときこそ、その稟質が光を放ち、優れた文学を創造することが出来るのではないだろうか。

どうも、不本意な批評の仕方になってしまったが、既に、十二分に文学を辨え、これ等、三つの作品も、はるかにコロニアの水準を越えたものであり、より期待をもつが故の意とするものであることを理解して戴きたい。

# 随筆

栗（くり）

山本 峰雄

ジングルベルが客を呼ぶ妙にざわついた、ベレン商店街の雑踏は気候、風土人種こそ異れ、人情は何処も同じで、郷里の歳末買出風景を連想さす。其の人混みの肩越しに露を含んだ様なリンゴやブドウと共に、山盛りされた丹波栗を街角の露店に認めたとき、私は吾にもなく魅かれるものを感じた。最近、リンゴやブドウ等の露店売は見飽きた日常風景であるが、栗の敲き売りは見馴れなかったからである。最も私は、迂闊にも今日迄栗は、味噌、醬油、豆腐、揚、或は柿や桃等と同様、日本人特有のもののように観念的に思つて居た。

従つて、トメアスーの如き日本人集団地には、正月用品の一つとして例年入荷して居り、別にそれを不思議とも思わなかったが、ベレン市で一般的に市販されているのを視ると、珍しい人にもでも逢つた様な親しさと懐しさの如きものを感じ、同時に家族の珍しがり悦ぶ映像が脳裡をかすめ、半ば無意識に私の足を店頭に止めた。

一K、二、四〇〇CR\$也。ハترون紙の袋に納められたそれを小脇にして、再び人の流れに戻つた私は、人々に揉まれ押されながらも内心家族の誰彼の笑顔に胸温まり、足もとも軽やいでバ

ス停留所に急いだ。何時かハトロン紙が破けて、切角の栗の一粒がこぼれ、歩道に弾んで転げていったのを流し眼で見送りながら。……

漸くバスの座席に落着いた私は、騒音と雑踏に揉まれた疲労感が急に出て、車の揺れに身を委ねつつ気抜けした眼で、吾が膝に抱いた栗袋の、そして、其の袋の裂目から覗いて居る焦茶色の鈍い艶を持った栗肌を、見るともなく観て居た。私の放心した様な脳裡には、遠い霧の彼方の思い出の様に、栗にまつわる童謡や童話、或は腕白盛りの頃の想い出が、断片的に水泡の様に浮遊する。その水泡の一つが急にふくらんで来て、今は亡き弟礼三郎の幼き頃の倂を鮮かに映し出した。

あれは多分私が小学二年、弟が幼稚園位の頃であつたと思う。深々と澄んだ秋天に、町内、町内の各々特徴ある大鼓や鐘の祭囃子が早暁から競う様に、呼び合う様に、遠きは一抹の哀愁を持った余韻を持ち、近きは勇壮に心を掻き立てる如く、日の昇るにっれいやが上にも祭り気分を盛り上げていた。

その日は、珍しく、母が私共を連れて祭見物に行つて呉れた。母のお供は少々窮屈ではあるが、其のかわり私共の希望の物は大体買つて貰える余得があるので、我慢する事にして居る。

このとき、先ず最初を買つて貰つたのは甘栗だ。厚手の紙袋に、木版で赤く大きく「甘栗」と印刷した石焼栗は、私共の好物で、当時一袋五銭であつたと思う。この甘栗屋の露店が出て居ると、遠くからでも甘いこうばしい、調度カフェーを妙つて居る匂いの

もうちよつと強い匂いが、私共の臭覚や唾線を刺戟して食欲をそそる。妙釜の中では、溶けた砂糖で黒耀石の様に黒光りした小石と艶を持った栗が、薄紫の煙とたまらない匂いを辺りへ散らせて炒られて居る。

そうだ、あの頃の若かった母の瞳も、あの小石の様にまつ黒で艶を持って居た。平素は潤んだ様に優しく、ふとあるときはこわくておののく程強く光る事もあった。其の頃の母は、私の知る誰よりも美しかった。だからこうして偶に連立って歩くのも、多分誇らしい気持もあつた様に思う。

私は買って貰つた甘栗の袋から四、五粒掴みとると、後はさつさと懐にねじこんだ。斯様なものを何時迄も母の目につく様によら提げて居ると、後がねだりにくいからである。目標はまだ沢山ある。弟の奴は馬鹿だから御生大事に袋を提げて居る。いくら目で合図をしても通じない。困つた奴だ。まだ柿や綿菓子も欲しい。鉄砲や赤鞘の大きな刀も欲しいのに。

其の内、大鼓台や山車の囃の音も段々近くなつて来た。所々に立つた八幡社の大幟が、玲瓏と澄んだ秋空に鮮かにはためき、家々の祭提灯の三ツ巴の赤い大紋や軒から軒へ張られた紅白の煙幕の色も華かで、町全体がお祭り気分ではちきれ様だ。

往きかう人も急に増えて来た。あの顔もこの人も皆着飾つて、ニコニコ楽しそうだ。その内の幾人もの人々が、母と親しく言葉をかわしたり、私達の頭をなでたり、中にはお小遣いを握らせて呉れた人もあつた。

だが、母とよその小母さんとの立話は閉口だ。だらだらと長い。或る小母さんはお辞儀だけでも始に三回、別れるとき又、三回と六回もして居た。私達はいらいらして、実にやり切れない。

もう太鼓台も余程近づいて来た。

一番に見えて来たのは、町内でも最も立派で、でっかい中通町の奴だ。

こ奴の大鼓は、大人が二人抱きついても手のとどかない程大きい、揃いの衣装で着飾った子供が四人、手に手にバットの様な ちで一せいに敲くのだ。音は大砲のようにドドン…ドドン…ドドン、と轟く。附近の戸や障子がビリビリいう。続いて、新通町の子供大鼓が来て居る様だ。こ奴は身軽だから何処へでも割り込んで来る。おや母は又違う小母さんにつかまったようだ。そのときだ、今迄母のそばできよろきよろして居た弟が、急に余所の小母さんの横をすり抜けて、あつと云う間に人波に吞まれてしまったのは。私もやったなあ、と思うともうじつとしては居られない。彼の後を追って人混みの間へ割り込んで行ったが、もうその辺には彼の姿は見えない。うしろから母のなにか言った声が聞えた様だが、ふり向きもしなかった。

そして私が前へ前へ四、五十米も人々の間を潜り抜けて行ったとき、弟が顔半分血だらけにして大人の人に抱かれて来るのに出合ったのだ。

私は、最初、弟だとは思わなかったが、彼の特徴ある大限玉がじつと私の方を見て居るので「ハッ」とし、咄嗟にこれは大変だと思

い、何が何だか判らんが其の大人の人を引っぱって母の方へ戻って来た。

大人達の話しでは、弟は大勢の大人を潜り抜けて大鼓台がみえる一番前に出たときに、折り悪しく大鼓台が横迂りに練って来て人波のあふりを喰い、かたえの電柱に押しつけられ

たそうだ。弟の右おでこには、小指の先ほどの穴があいて居るとのことで、傷口を押えた真白いハンカチに滲んだ真紅の血が、まぶしい秋陽の下で私の目に痛い程突きささった。

弟の紺飛白の晴着も血だらけだ。

別の人を持って来て呉れた白い小倉鼻緒の下駄にも血が飛んで居る。それでも弟は、甘栗の赤い袋はやっぱり左手にしっかり持って居た。

このときの母の青白んだ悽愴な顔色は、未だに忘れられない。弟は泣きじやくっては居たが、泣声は出さなかった。只泪をたたえた強い眼で、母の顔ばかり上目づかに睨み上げて居た。最もこの弟は、平素から滅多に泣声を出さない。喧嘩等で余程のときでも、泪の一パイ溜った眼で相手を睨みつけて居る奴だ。

このときの私も、何故か無性に腹が立って、母や弟や連れて来て呉れた人々を、睨みまわして居た様に思う。

私達の周囲には、人の環が黒々と忽ちふくれて行った。

母は弟を抱きとると、礼言もそこそこに私を促がして近くの医者へ駆け込んだ。

このときの弟の傷は、大人になっても残って居た、幸い他には

別常はなかったが。

お陰で私はこの日のお祭は棒に振ってしまった。母がどうしても独りで出して呉れなかったのだ。全く大変な被害だ。

この弟には、矢張りこの頃に粟でもう一度ひどい目に遇つて居る。

元々私達は町家育ちで、実は栗の木などは見た事もなかった。だから、私には毯栗は非常に珍しいものであったが、或る時母がこの毯栗のついた枝を生花の材料にして居た。私はそれが本当に貴重なものの様に思われ、欲しくて欲しくて堪らず、とうとう母にねだつて貰い受け教材標本の様に大切にし、学友達にも自慢にして居た。

其の毯の中には、芝栗が三粒仲の良い兄弟が抱き合う様にして、毯の裂目から半身を覗かせて居た。鋭い刺の密生した硬い皮に護られて、三粒の栗が隙間もなく抱き合う様に納つて居る様は、何か貴い神秘的な工芸品の様に私には思われた。

処である。事もあるうに、其の毯の中の栗の大きい一粒を、弟の奴が私の知らぬ間に喰つてしまったのである。なんと云う事か。私しさえ口に唾の湧くのを我慢して舐ても見なかったのに。全く言語道断……はらわたが頭のとっぺんから噴火する程腹が立つて腹が立つて堪え性もなく、このときは相当に荒れてやった。勿論弟の頭も二つ三つ引っぱたいた様に思う。

このときも弟は、あの特徴のある目玉に泪を溜めて私のなすままになって居た。そして、結局母が別に茹栗を沢山買って呉れた

のであるが、然しその買って呉れた栗の中にも、其の毯の中にぴったり落着く栗は遂になかった。

この様に、この弟とは喧嘩もしたが仲も良かった。この下にもう一人弟が生れたが、これと私とは五つ違いで、歳の開いたせいか余り喧嘩をした記憶はない。

兎に角、私達男兄弟三人は仲は良かった様で、何時も金魚の糞の様に連なって通学したり遊んだりして居た。中の一人が誰かにいじめられたりすると、皆で待伏せて仇討をした事もある。学童間では山本の三兄弟と言つて可成悪名も高かった様だし、口の悪いのは山本のお鏡餅とも言つて居た。何時も三人ひつついて居ると、実は長兄の私の背丈が一番小さく下へ行くほど大きかった為だ。

心外に堪えぬが……………

この仲の良かった三人兄弟も時期が来て毯が弾けて栗が飛び散る様に夫々社会にころがり出て世帯を持ってからは、段々疎遠になつて行つた。

殊に中の弟礼三郎は惜しいかな終戦直前、ソ満国境で戦死した。

この弟は、若くして大人の風格の様なものを備えて居た。早く死ぬ奴は、どこか異つて居る様だ。小学校、中学校通じて五番から下つた事はなかったし、県立丸亀中学では三年生から剣道部正選手となり、四年生、五年生では主将をして居た。三年生のとき剣道一級になり、それからは何を考え、てか昇段試験を受けなかつたが、五年卒業を前にして確か十七歳の暮昇段試験に出、初

段を飛ばして一気に二段に合格した。当時年少であるのと二段飛びである為県武徳会では、この允許に多少悶着があった様だが、結局実力を認める事になった。三段昇格は確か昭和十一年、私が二十四歳彼は二十二歳で同時に仲良く昇段した。そしてこの年か、翌十二年であったかに、京都武徳殿に於ける天皇陛下代理、伏見宮殿下台臨の全国選抜武道大会に私は県下警察官代表として、彼は県下青年代表で、兄弟が選抜され出場した。此の試合では私は負け彼は勝った。

当時彼は県内野田興農KKに勤めて居たが、其の後間もなく伯父の手引きで渡満し、満鉄に就職した。あのととき、駅のプラットホームでなんでもなく手を振り合つて別れたのが永遠の別れになるうとは。こぼれる程涙をたたえ、脹れあがった黒い瞳をしつかり見開いて、何時迄も手を振って居た母の姿が印象に残って居る。そして彼は、終戦の年関東東軍に現地召集され、直に国境に配備され、やがて怒濤の如きソ連軍の侵撃を迎え、最も激戦地域と言われた黒龍江と豆満江の合流三角地帯で遂に帰えらぬ人となった。薄暮の軒先に乱舞する蚊柱の如き敵機の跳梁下、砂塵を卷いて殺到する戦車の大集団、蝟壺の中からぐつと睨んだ彼の特徴のあるあの眼底を、瞬間去来したものは母の顔か、妻の姿か。…それでも彼は恐らく一步も退こうとは思わなかっただろう。…私はそう信じて居る。

彼は弟のくせに私より三寸位上脊もあり、すらりとした中肉で、女にも持てた奴だ。遺された家内は恋女房であったが子はなかつ

た。

この嫁も満州から夫の死も知らずに苦心して引揚げ、その後十年余り後家を通し、私の渡伯後再縁したと聞くが、どうか幸福でありますように。

九段の靖国神社は今頃寒かろう。

偶には誰か詣でて呉れて居るだろうか。…………

一つの毯から抱き合つて生れた三つの栗の内一つが欠けた。そしてこの栗に替る栗は何処を尋ねても遂にない。今となつては幼いあのときの争いが古い傷跡の如くうずくと共に、懐しい思い出とも繋る。

稔栗の三粒の栗の内、末弟栗は健在で大阪府下堺市で土建業をして、中老の良き親父となつて居る。

長兄栗の私は、毯からどう弾き飛ばされたのか、「アマゾン」くんだりまで転がって来て、街角の栗に柄にもなく郷愁を搔き立てられて居る。

早く帰えつて手製の位牌ではあるがこの栗を彼や母の仏前に供えてやろうと。…………

# 生きていた諺

添田 香積

三十代より四十代、それより五十代と年令の度合が深まって来るに従って、諺と云うものに感嘆の度合も深まって来るのは、ひとり私のみではあるまいと思う。

僅か一片の諺に感嘆を深うし、教えられ胸を突かれる思いをするのは、お互に身を以てそれに似た経験をくり返して来た証しの様なものである。諺に耳にしたり、又ひとり静かに反芻する時など、全く昔の人はうまいことを表現したものだと言を巻くことが再々である。

「穴へも入りたし」と云う諺は、誰でも知っている諺であるが、これなども、全く真を穿った心にくいばかりに、人生の機微にふれた諺である。

つい最近のことである。K女史が日語教員講習から戻られて、武本さんからあなた宛のお金を預かって参りましたが、と私の前にお金を差し出された。私は何のことやら分らず、狐につままれた様な面持ちでいると、それが何時ぞやの「コロニア文学」に投稿した随筆とも何ともつかない恥しいものが温情掲載とも見られるかっこうで発表された、その稿料であるというK女史の説明をきいて、「あっ」と思わず声を呑んでしまったのである。

私はK女史の差し出された化がしかの金の前を、右に左に果ては横向きやら後向きまでしたかも知れない程の恥しさに取りつか

れ、かつかつと顔面のほてり来るのを押さえ切れなかった。

僅か原稿用紙一、二枚の恥しいものを投稿しておいて、稿料等とは現実にも夢にも考えても見なかったことだけに、文字通り周章狼狽「穴にも入りたい」、という諺を地でゆく、恥しいうろたえ振りだった。

古くは天照大神が、世が乱るるは己の人心収攬の才足らざることと深く恥ぢ、且つ欺き苦しまれて、天の岩戸深く姿をお隠しになられたのではないかと、私流に解釈しているのだが、そうすると「穴にも入りたし」という諺を地で行った第一号は天照大神であつたという推理も成り立つわけで、遠く神代の時代から人類生活の中に、現代人の感覚と少しも変らぬ羞恥心とか責任観念とかが存在していたわけで、誠に興味尽きざるものがある。

「穴にも入りたし」という僅か一片の諺のもつ観念が、遠く神代の時代から今日まで、少しも変らず生きつづけているということは、人間生来善なりという通り、その善根が生きつづけているからではあるまいか。

「コロニア文学」から稿料をいただいて直に感じた「穴にも入りたし」という諺ほど、この頃怠け癖のついた私の胸を揺さぶつたものはなかった。

諺は確かに生きていたのだ。そして今後も生きつづけて、時々私の胸を揺さぶり驚かすことであろう。

# 展望

コロニア短歌の郷愁性と郷土性

酒井 繁一

コロニア短歌の将来を考える時作者は第一に「異邦人」の立場から離れることが大事である。

## 1 郷愁性

移住地の短歌には「郷愁」を抒じたものが多い。これは一先ず当然であろう。ところがコロニア短歌に対して最も批判の対照となるものにその「郷愁」がある。単的に言えばこれはコロニア短歌になっていないというのである。郷愁は現実逃避の一面をもつものであるから、どうしても現地から足が浮き易い、そこを指適される場合が多い。

郷愁は故郷を離れた者には、何か特別の事情がない限り一般にわく感情である。

従ってそれが文字に現わされる場合、表面だけに流れると、類型的になりがちである。とくに定型である短歌にはその傾向が多い。読むものに「またか」とい感を与える。

しかし、郷愁は短歌として価値の低いものかという点、決してそうではない。短歌は言うまでもなく人間の最も昇じた感情の把

握であるが、郷愁は人間にとって最も強い感情の一つであるから、当然短歌として好素材であり、また秀れた短歌の生まるべき素材である。

ところがコロナの郷愁短歌を見ると人の胸を打つものがめつたにない。この一番の原因は作者の作歌態度にあると思われる。文芸作品はそれがいかなるジャンルのものであれ、生きるものの抵抗が基本になる。単なる感傷は逃避性を帯びるものであつて抵抗性を持たない。それゆえに文学性が極めて薄い。ことに作者の感動をしばって表現すべき短歌の場合は、感傷で観念的であるものにならない。現在コロナにおいて発表されている郷愁短歌には、この観念短歌が多い。

故里に過しし日々を想いおり故郷の便りを受取りし日は

柿食して想うふるさと菊みれば想うふるさと故郷の秋

これは昨年の全伯短歌大会の応募歌の中から、手当りに引出した作品であるが、読む者の胸を打つものはどこにもない。故郷というものに頼りすぎて観念の文字を並べているに過ぎないからである。

軟らかに柳青める北上の岸辺眼に見ゆ泣けとごとくに

(啄木)

故郷の男鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきており

(牧水)

これらは郷愁短歌として世に通っているのであるが、それにしても「郷愁」の裏面が取扱われていて、抵抗を持つ作品とは言えな

い。

故郷の信濃の国の山河は心にしみてとわに思わむ（菊治）

この一首にしても同じことである。

日本あたりからのブラジル短歌に対する要求は「現地を詠め、日本の延長短歌にするな」ということである。そしてブラジルの特異な風物詠などが比較的大事に取扱われる。従って現地の作者もそうした線に目を向けて詠み、いわゆる「輸出向き短歌」と称されている。

「現地を詠め」というのは正しい。

然し、現地詠というのは異国の風物を詠むことではない。風物詠というのは、桜をイツペに変へ、四季を常夏に変えても成りたち、鳩をサビヤに変えても成りたつもので、極めて表面的な一面を持ち得る。これらは一つの興味とはなっても、本質的には「現地詠」とはなり得ない。

現地詠になり得る基盤は、現地における作者の生活態度である。自分の存在を土台にして、その他の民族、社会、政治等にいかに立ち向っているか、それらの表現は極めて大事なことであり、風物詠といえどもそうした把握の中で取扱ってこそ、本当の現地詠が出来ると思う。郷愁の基盤となるものには、そうした事柄が潜在していると思う。

郷愁短歌は郷愁短歌であるほど、作者が現地に足場を置いてかからないと成功が難しい。

コチニアに読者の胸を打つ郷愁短歌が生れるのは、今後を待つ

ほかはない。

## 2 郷土性

コロニア短歌の郷愁性と共に、我々は既にその「郷土性」をも考えなければならぬ。

ブラジルにおける邦人の移住史も既に六十年に近づいている。我々の短歌も既に「郷土性」を持ってよいと思う。

短歌はもともと作者が身边を歌いあげたものであるから、その出発において郷土性を持っている。

「郷土性」を持っていることは、自身の位置の確かさを持つことにつながる。従って郷土性を持つことは、さきに述べた己れの生活する土地の民族、社会、政治等に密着を持つことであり、風物もまた己れの生活に密着して把握されることである。

私は邦人の植民地を思うのであるが、植民地はその建設と共に、日本流の運動会があり、芝居があり、宗教があり、学校があり、会合がある。

これらはその初めにおいてまさしく「郷愁」の産物であったと言えるが、一面において「郷土建設」の意志がひそんでいたとも言われよう。

日本の民族史、ことに農村史に目を通してみると、労働の中に娯楽が例外なしに取入れられている。しかも集団的に取入れられている。彼らにとっては労働と共に村芝居や、神楽が生活であつ

た。彼らにとつては働くと共に楽しむことが生活であつた。ブラジルに建設されている邦人の植民地にはこの「郷土性」が濃厚にある。私が言う「植民地」というのは決して農村だけを指しているのではなく、濃薄の差はあつても都市に集団している邦人間にもこの「郷土性」はある。

我々が植民地に建設した郷土はこのように民族のしきたりを多分に持っているが、この郷土は間違ひもなくブラジルという国家の枠の中にあるものであるから、ブラジルと共に呼吸するものであることもまた当然で、そこに我々の短歌の特質がある。

コロニア短歌の将来を考へるとき、作者は第一に「異邦人」の立場から離れることが大事である。「生れ故郷」はその人に沁込んでいるのであるから、捨去ることは出来ないが、人間には「第二の故郷」もあり得る（故郷を出て十年なり二十年なりを一定の地に居住すると、一般にそれを第二の故郷といつている。我々にとつてブラジルは第二の故郷である。

我々はこの第二の故郷を「郷土」として作歌したい。生れ故郷への郷愁はもとより可であるが、それを表現する場合、現地逃避の形をとらず、あくまで現地を基点として作歌したい。

天の原ふりさけ見れば春日がなる

三笠の山に出でし月かも （阿倍仲麻呂）

このような発想で作る郷愁短歌はいつまでたつても現地逃避の短歌である。

## コロニア詩壇の行方

米沢 幹夫

時代は何時も新人を求めてやまない。これは法則であり、新陳代謝である。すべからず指導層の冬眠を破ることが急務である。

最近、コロニアで詩を書いたり、或いは、詩に関心を示したりする人が非常に少なくなってきた。どうした訳だろうか。抽象性を帯びてきた現代詩は、難解というレッテルを貼られ、大衆性を失いつつあるのだろうか。どこを覗いて見ても、幾人かの限られた人の他は、すっかり鳴りをひそめてしまい、詩の畑は既に不毛の地にひとしい状態である。この沈滞ぶりは、われら詩の愛好者にとつて、ある種の不安と焦燥をとまなう由々しき大事であると言わねばなるまい。

コロニア詩壇の古い経路はしばらくおくとしても、過去において、かなり爛熟した開花期をむかえているにも拘らず、一向にその結実を見なかつたのはどうしたことか、わたしは、こうした点にスポットを当ててみたい。詩壇の盛衰を簡単な言葉できめつけることはできないが、近頃のこの逼塞ぶりの原因として、最初に作品発表の場の狭隘さをあげねばなるまい。つまり、いつも他力本願的な依存主義で、仲間としての機関誌すらもたないことである。

コロニアに於ける詩運動の殆どが、新聞紙上の投稿欄で果たさ

れてきたのであり、この投稿欄を出発点として巣立った人たちが、如何に多いことか、その事実を否定することはできない。新聞側としては単なる読者を対照とした迎合ではなく、文化的な仕事の一環としての意義をもつものであるうが、詩壇に果たしてくれたその役割は甚大であると言わねばなるまい。だが、此処を出発点として何処へ行くかと言えば問題である。

出発の場ならず発展の場とは限らないからである。

わたしは日頃、かなりの新聞雑誌に目を通してしているが、他のジャンルに比して詩のあつかわれかたの粗雑に驚いている。一般の関心が遠のいたといわれればそれまでだが、どこで摘心されてしまったのか、以前あった新聞の詩欄すらお目にかかれなくなつた。せつかくの萌芽も、何らの刺戟なくしては育つはずがないのである。短歌や俳句に比してスペースを多く必要とする詩などは、あまり歓迎したくないのは解るが、文化を擁護する意味からも、是非詩欄だけは復活していただきたいものである。

次にあげたいのは、指導性の貧弱と、横のつながりの不備についてである。詩運動に対する啓蒙と推進機関の缺除、つまり、初心者を育てる母系的なもの皆無である。とは言うものの、コロナに人物なしとするのではない。周辺をふり返って見ただけでも、指導的立場に立てる人は幾人も指摘できるのであり、これら既成の人たちが、中枢的な活躍をつづけてくれていれば、現在のような沈滞現象は起こる筈がなかったのであるが、あまりにも、自己の城郭のみにこもりがちであったから、と言えば叱られるだろう

か。

そもそも、人間の存在意識は孤独につながると言われている。而して孤独の本質は自由であるとされており、詩人とは、たえずこの孤独と自由を求めて熄まないものなのかも知れない。一般への普遍化を希うことより、自己の使命に忠実のあまり、無限な空間と、孤高の精神の在り方に重点が傾きすぎるのではあるまいか。時代はいつも新人を求めてやまない。これは法則であり、新陳代謝である。だが、真の新人とは偶然に生れてくるものではない。須らく指導層の冬眠を破ることが急務であると思う。

詩壇をつなぐ横の連絡機関として、戦前、詩話会なるものが誕生した。

この詩話会は当時の詩壇興隆に大きな役割を果たし、やがて、全伯的なものへの呼びかけとなり、総合的な歩調をととのえようとしたのであるが、戦争勃発と共に中絶の憂目にあってしまった。戦前のそれは回覧的な存在ではあったけれど、グループは学究的な真撃さと、創造的な意欲に満ち、質的な収穫は少なかったとしても、お互いに情熱を傾倒しあい、詩を書くことによって人生を意義づけようとする、多分に芸術至上主義を中心とした色彩ゆたかな集りであったように思う。戦後における復活ぶりを見ても、それは戦前の延長としてではなく、サンパウロ詩話会と改称され、造型的な新味をおびたものであり、毎月、各自の作品と意見を持ちあい、忌憚のない検討の場として育っていったのであるが、いっつとしまもなく立消えとなり、永続性をもたなかった憾みを残すに

至ったのである。

仄聞するところによると、最近、スザノ詩話会が誕生したと聞いている。非常に結構なことであり、わたしは双手をあげて賛同の意と、拍手をおくるのに吝かでない。こうした企てが、一地方のみにとどまらず、いずれは全伯的なものへと成長することを期待してやまない。

次に、コロニア詩壇の欠陥として、批評や論争の不活発さをあげることができる。批評や論争の刺戟物が無いと言うことは、徒らに安価な自己満足に陥いらしめるだけである。抵抗のないところに向上発展は望めない。お互いに、研鑽、琢磨しあうところにこそ、輝かしい成果が期待されるものだと思う。詩壇復活の第一歩は、まずこうした周辺から視野をひろげるべきであろう。

コロニアは古いと言うことをよく聞く。訪伯者は口をそろえて、ブラジル日系人は日本に居る日本人よりも、より日本的であると言う。おかしな話ではあるが、コロニアには明治が活きていると言うのである。

この言葉はあらゆる分野にあてはめられているようである。詩の分野に於いても、明治に興った新体詩運動の理念をそのまま現在に踏襲している人もなしとはしないであろう。自己の殻にのみこもり、星や月に涙し、雲や小鳥に情を托す感傷の甘さに溺れ、ノスタルジアによせた抒情の脆さをわたしは衝こうとするのではない。

現代芸術は、絵画にしる、音楽にしる、抽象性を帯び、前衛的

なもの移行しつつあると言われている。

時代思潮そのものの傾向かも知れないが、詩も芸術の公共的形式の一つである以上、こうした時流に背反することは許されるべき筈がない。

わたしは、コロニア詩の行き方に二つの方途があると思う。その一つは、飽くまでも現代日本の詩調に追従することであり、他の一つは、六十年の経験を活かした移民文学独自の創造である。そのどちらを選ぶかの是非は次の課題にゆずるとして、詩があらゆる文学の基調をなすものである限り、詩人の使命また大なりと言わねばなるまい。わたしはあまりにも観念的な言辞を弄しすぎたようであるが、次代を背負う新人群の擡頭を心から期待してやまないのである。

## コロニア川柳の現状と批判

安村 玉泉

栄光花、魔門両氏の作品を通して見たコロニア川柳の現傾向とその将来への影響は興味ある今後の課題である。

編集部から与へられたテーマは、“コロニア川柳に関する評論”となっていて、どう見ても私はその適任者ではないのだが、折

角与えられた機会なので、勇を鼓して今日迄コロニア柳人の誰れもが試みなかった方法で”コロニア川柳の現状”を探ぐつて見ることにする。

コロニア川柳は現在、約四十年の歴史を有すと云われているが、これに関しては本誌第二号所載の「コロニア川柳私観」で未完子氏が大体述べられたから、重複をさける意味からもここではその事にはふれず、又コロニア唯一の「ブラジル川柳」誌創刊以前の作品にも触れず『川柳誌』創刊を起点として小論を試みることにする。

こう云つた設定は或いは当を得たものではないかも知れないが……然し機関誌を持たなかつたコロニア川柳界が、川柳誌発行と共にその混沌たる状態から脱して、一応統一されたのであるから私の設定もあながち妥当でない事もあるまい。

さて、ブラジル川柳誌の発刊が一九五〇年であり、従つて今年で満十六年の歳月を閲したわけであるが、その間のコロニア川柳の歩みとその動向を検討することはコロニア川柳の現状を理解する上に不可欠の事と思われるが、然し、だからと云つて、過去、現在を通じて作句活動をした、又はしている多くの柳人の作品を粗乗せることは到底この小論のなし得ない難事なので、論の煩雑と混乱をさける意味からも、現コロニア川柳界の先輩であり、指導者としても著名な栄光花、魔門両氏の作句傾向を検討しつつこの小論を進めて見たいと思う。

なぜ私が二氏を小論の対照にしたかと云うと、指導者としての

地位にある二氏の作風は常に賛否両論を以って迎えられるにしても、それ故にかえって多分にもコロニア川柳に大きく、深く影響し合い、いつの間にかコロニア川柳と云う或る一つの層を型成しつつあるかの観を呈しているからであつて、二氏の過去―現在の作句傾向はコロニア川柳の『層』の中でバック・ボーン的作用を果しているからで、両氏の作句傾向を知ることとは、そのままコロニア川柳の現状を知ることであると云つても過言ではないからである。

○

◎作品Ⅱ（一）、A

- (1) はりつけの日からキリスト神となり
- (2) 差し出せば差し出す手と手みんな持ち
- (3) だまされている大衆へ赤い舌
- (4) 終点へ着く乗り合いの人わずか
- (5) 人の世へ凡愚の踊り果しなく

◎作品Ⅱ（二）、B

- (1) 夢あれば素足熱砂を踏んで行き
- (2) 手風琴泣けと弾かねど胸にしみ
- (3) また泣かす桜咲いたと云う便り
- (4) あなどつた後輩砂をかけてさり
- (5) わが胸の中の小鳥は殺すまい

◎作品Ⅱ（一）C

- （1）俺の窓に俺だけの絵を画いて見る

○

◎作品Ⅱ（二）A

- （1）神聖な汗とは別な市場価値  
（2）墓一つ守る術なく転耕す  
（3）飛び下りて見れば此処にも生きる道  
（4）一銭を算えて未だ死に切れず  
（5）我が影の地上にあれば愛しかり

◎作品Ⅱ（二）B

- （1）残照に赫く燃え立つ影法師  
（2）どちらに曲つても風は正面に吹きつける  
（3）火の色となり言葉は不要  
（4）アスファルト一直線に伸び不毛の沃野  
（5）尾燈赤く夜の感傷を墮胎する

○

作品（一）は栄光花氏のもので、"A"は一九五〇年頃の作、"B"は一九六六年川柳誌に発表した作、"C"は一九六六年、日本の川柳人語四百十二号所載の作品である。

作品（二）は魔門氏のものであり、"A"は一九五〇年頃の作、"B"は一九六六年川柳誌に発表した作品である。

一九五〇年を起点として、一九五〇年対、一九六六年と両端の作品を提示し対比することに依って、十六年の歳月の流れに乗った両氏の作品がどのような傾向を辿りつつあるかを検討してみることにする。

先づ作品（一）であるが、“A”を起点とするとき、作者は十六年と云う永い年月をかけて“B”に辿り着いたわけで、A—B間には十六年の精進の姿があるわけで、“B”には何らかの型でも時代の流れと作者の句作精進の成果が反映していなければならぬのだが、果してどうであろうか、残念ながら正直に言ってしまうには作品（一）のA—B間に十六年の歳月の流れを汲み取ることは出来ない。

なぜならA—B両端の作句傾向は全く同一であり、極言すれば静止した作者の想念の上を歳月がただ通過したに過ぎないとか見られない程、A—B両点の作品は素材の掴み方、表現技法、抒情性共に酷似しており、かりにAとBを置きかえて見ても少しも奇異に感じないからである。

次に作品（二）であるが、これはAとBとはかなり違った傾向を示していて、作品（一）に見られるようにAとBを混同することとは出来ない。作品（二）に於けるAはAであって、作者の通つて来た一時代の所産であり、“B”は一九六六年—現在の氏の作句傾向を示していてA—B作品間には時代の流れを汲み取ることが出来る。

例へば“B”には“A”では見られなかった破調や非詩川柳

的な乾いた抒情が目につくのがそれである。

このように両氏の作風がやや同一地点(作品一)Aと作品二(A)から出発したにも拘らず現在では両者間に一線を区す程のかなり異なった作品傾向を示しているのは興味あることで、こう云った両者間の相異は川柳に立ち向う体度の差から来ていると思われるので、二氏の川柳観を覗いて見ることにする。

コロエア川柳界唯一人の剣花坊の直門として常に川柳の革新を叫ぶ栄光氏は、『現在のコロニア川柳はあまり容易に作句されているように思われる。

一見して死語があまりにも多い。言葉が生きていなければ読者に迫るものが少ない。一語よく心臓を突くと云われるほどの選ばれた言葉、新鮮な言葉、そうした字句に留意されて作句したならば、作品はたちまち生彩をおび澁刺と立ち上って来るのではないか。

詩人が常に心にとめておかなければならないのは先人未踏の境地であり、まづ新しい言葉の創作、新しいものの発見でなければならぬ。

略―昔も今も同じような川柳を飽きもせず繰り返して作つていても仕方がない。』(川柳誌二十五号地響集選後感より)

栄光花氏は柳人に対する作句心得として、新しい言葉の創作、新しいものの発見を強調している。

さて次に魔門氏であるが、

『川柳は人間詩であると共に社会詩である。吾々は社会人として

連帯責任を感ずるが故に、常によりよき社会の建設に邁進している。従つて生活戦線を離れ、社会から逃避して作句する人があるなら、よしその作品が如何に優れていても、社会史的に無価値であると云わねばならない。

このことは作者に確固たる人生観、社会観の確立なくして、言い換えれば思想の基盤なくして川柳は創れないと言うことである』  
(川柳誌二十五号巻頭言より)

魔門氏は柳論でも栄光花氏とは甚だ対照的で、栄光花氏が『言葉』と云う表現面を強調しているのに対し、魔門氏は『思想』と云う表現以前の問題を強調している。

私はここに両氏の川柳に対する根本的な相異点を見出す。

言葉のあやを重視して作句する栄光花氏がどうどう巡りを操り返し乍らだんだん通俗化の傾向を辿るのは当然のような気がするし、思想を重視する魔門氏の作品が、段々難解めいて来るのもむべなるかなと思われる。

無論、川柳は言語芸術であるから、言葉を見捨てては成立しないが、然し、それが芸術であればあるほど、『思想』に依つて統御されない言葉での表現であつては、如何に美辞麗句を使用しても、いや、かへつて表現を粉飾すればするほど芸術作品としては価値の低いものとなる恐れがある。

芸術上に於ける“新しい言葉の発見” “先人未踏” 開拓等々は確固たる思想なくしては出来得ない事ではなからうか。

殊に川柳は諷刺、批判と云う要素が重要視されている短詩だけ

に“思想の確立”は川柳作家(ここで云う川柳は短詩文芸としての川柳で通俗川柳にあらず)にとって不可欠の条件であらねばならないと思う。

だから作句上、思想を云々しない、無視しているわけではないが、魔門氏ほど表面に押し出していかない栄光花氏は、理論としては新しい言葉の発見を強調し乍らも実作の上では氏自身作品群(二)のA、Bに見るように『昔も今も同じような川柳を飽きもせず繰り返え』しているわけであるし、思想を強調する魔門氏は限られた短詩と云う枠の中に如何にして思想、つまり自己の叫びを盛るかに苦心しているわけで、氏としては作品群(二)のB的傾向を辿らずにいられたのであろう。

以上のように、両氏の作句傾向を検討し乍ら不思議でならないのは、剣花坊直門として古くから川柳革新を唱導する栄光花氏が、実作の上では十年一日の如き平板な、否、通俗的な作風に安住しているのに反し、正統な師を持たない魔門氏が、常に川柳革新の体勢を崩さないと云う事である。

こう云った二氏二様の歩み方は、前掲のように両氏の依存する川柳観の相異から来ていることは大体わかったが、では両氏の川柳観の相異はどこから来ているかを考えて見るに、それは両氏における人生観、社会観と云った思想体系の相異や、その強弱度、或いはその有無等々に起因していることは確かであるが、こう云った思想の相異は、両氏の生い立ちや、生活環境等による事物認識の度合いとか感受性等々によって形成されている感情体系―即ち

性格に由来していると思われるが、そう云った両氏の性格の相異が、抒情となつて作品を性格づけていると受け取れるので、両氏の抒情に就いて少し検討して見ることにする。

さて民謡詩人でもある栄光花氏の抒情はロマン的な面よりもセンチメンタル的傾向が強いようである。

例えば作品(一)、Bの2 “手風琴泣けと弾かねど胸にしみ” や3の “また泣かす桜咲いたと云う便り” などその最も顕著な例であり、こう云つた抒情が氏の作品の大半を占めていて、世に栄光花調と云われている。

然し氏の作品にも川柳としての諷刺、批判の眼は光っている。作品(一)、1の “はりつけの日からキリスト神となり” や、3 “だまされている大衆へ赤い舌” 等がそれであるが、これとても作品の底を流れるセンチメンタルで柔軟な抒情はかくすことが出来ない。

兎に角氏の作品はいづれも美しく、洗練された作風で、快よいリズムを持つが、諷刺、批判を根底とする川柳として見るとき、キビシサに乏しく、柔軟で甘くそして感傷的であるのは物足りない。この点、魔門氏の抒情はレアリズム的で、時としては冷たく、大體に於いて硬質のものである。作品(二)のA群はそれ程でもないが、B群になるとそれがかなり鮮明に観取出来る。

ここでは柔軟な抒情は影をひそめ、現実在即した批判の眼を通して対象に迫まろうとする冷厳な体度が顕著で、非詩川柳にひかれ

(3) 受精して蘭花あつけなくしぼみ

と云ったように(2)の句に見られる抒情はかなり深い自己凝視より発したもので、栄光花氏の作には見られない繊細さがあるし、定型一辺倒の無哲坊氏の作品にしても、

(1) 鬪争の歴史どこまで積み上げる

(2) 神許す梅も世間は許さない

と栄光花氏よりかなり批判的であるばかりでなく、抒情も乾いたものとなっている。

外、定型派としての主だった柳人を挙げると、白頭、白舟、義信、珠子、天拝、碧村、北海坊、枯堂、太公望の諸氏があるが、自由律派を支持する柳人はごく少数で、先づ丙坊氏を挙げねばならないが、氏の作風は現在相当飛躍していて、

(1) 握られた挙花束萎れ墓穴広がる

(2) 枯木を切る全く過去のない時刻

(3) 握れば洩れる砂、政治の腸と云ったように魔門氏のそれを上廻る非詩的川柳で、シニカルな迄に批判に重点を置いている。故南風氏も自由律派に興味を引かれていたが自分のものを掴め得ないで長逝したのは惜しい。外、破戒、蛙人、田吾作の三氏も自由律派にぞくするし、鴻村、不知火の二氏も近い将来に自由律的作風になるのではないかと思われる。

然し何んと云っても現在コロナ川柳人口の九十%は定型派に属し、自由律派はせいぜい十%程度に過ぎない。この点、コロナ

ア川柳は定型派が主力をなしているわけである。

なぜこう云う結果になったかと云えば、定型派の川柳は歴史も古く、初心者にもすぐ作れる程の割に簡単な作風であるだけに、苦勞せずに川柳を楽しもうとする大多数の柳人の支持を受けているわけで、言葉をかえて言えばコロニア柳人の九十%は川柳を一つの楽しみみとして、大人のレクレーションとしているのであって、川柳を短詩文芸として真剣に作っているのではないと云うことである。

ひるがえって、自由律派がなぜ少ないかと云うと、こう云う傾向の川柳は先ず思想と柳論を一応身につけないと作ることも理解することも出来ないのです、つまり短詩文芸として川柳を見た場合、批判詩、人間詩、生活詩となる川柳が、本質的に要求する、作者の人生観、社会観、つまり思想の確立が問題となつて来るのでよほどの柳人でないと自由律的川柳は作れないと云うことになるのである。

だから自由律派に属する柳人は少ないわけだが、表面上主力をなしている宣型派に対し、『活』を入れると云つたように精神面に大きく作用

(084. 欠)

さてこのように、定型派は舗装されたドライブ・エイを自動車で乗り廻すような、勞少なく至つて快適を作句道であるだけに支持柳人も多く、自由律派はリユーク・サックを背負つて谷を渡り、

峻嶮を攀じ、道なき道を一歩一歩頂上に近づこうとする登山者の如き多難な作句道だけに支持柳人も極く少数であるが、今後この二つの流れがどのように変化して行くかは、コロニア川柳を価値付ける意味からもなおざりに出来ない問題である。

ところで、いつも云う事だが、川柳は諷刺、批判が根底となっているだけに、作者は絶えずヒューマニズムと云う社会人類共通、共感の広場に立って作句しなければならぬと云う事である。その事は剣花坊の言葉として栄光花氏が引用した左の文でもわかる。『川柳が単なるくすぐりや、うがちや、笑いや、皮肉ではなく、常に息して生きている人間の真実の叫びとして、血となり肉となつてその魂をゆり動かすものでなければならぬ』(川柳誌創刊号、巻頭言より。)

つまり川柳が『生きている人間の真実の叫びとして血となり肉となる』為には人類共感の作品でなければならぬし、人類に共鳴、共感を与えるにはヒューマニズムの広場で作句しなければならぬであろう。

そうであつてこそ、川柳が短詩文芸の一ジャンルとしての水準を確保する事が出来るのであつて、もしも、それと反対に川柳を以つて対個人感情爆発の具となし、相手を嘲笑し、皮肉ると云つた方向に作句するのであつたなら、それこそ、短詩文芸どころか自他を傷つける凶刃と化さないとも限らないと云う事に気がつかねばならない。

然るに、作品(一)、Bの四”あなどつた後輩砂をかけて去り”

に見える作句意図はどうであろうか”後輩をあなどる”などと云った思い上った優越感、師表に立つ者の、殊に芸術に生きる者の夢にだに拘いてはならない悪感情である筈なのに、憶する色もなく、先輩らしからぬ感情を剥き出しにした川柳を、然かも川柳誌上に発表するに至っては、氏の作句精神が奈辺にあるかを疑問とする者である。

この句のどこに短詩文芸としての香りと人類共感の詩としての高さがあるだろうか。この句に見えるものは、背き去った後輩を憤る余り、その行為を嘲笑し皮肉ると云った至って卑劣な感情だけではないか、このように川柳で私憤を晴らすと云った式のひいては自己欺瞞的な作句体度こそ川柳人が、いや、短詩文芸としての香りある作品を目指す川柳人が断じて身につけてはならない川柳の邪道である。

この句は実に人類共感の『詩』として高い境地にあるべき川柳が、道をあやまつた為、に我執の奈落へと転落し、自他を傷ける凶刃と化した好適例で、これが然かも、剣花坊直門であり、コロニア川柳界にその人ありと知られた栄光花氏の作品である処に、私は川柳人の一人として、コロニア川柳の前途に大きな不安を感じないではいられないのである。

ところで作品(一)の”C”(1) ”俺の窓に俺だけの絵を画いて見る”はどうだろう。これはA、B群と同一作者とは思えぬ程、異質な作品である。

ここでは栄光花氏の持つ甘い抒情は姿を消して乾いたものとなり、

かなりキビシイ作品となっていて、魔門氏の作風に近いものとなっている。

この作品に関する限り、期せずして二氏の作風がやや同一地点に合流したかの感をさえ与える。

この突然異変とも云うべき栄光花氏の作品を見ると、従来の栄光花調に満足し追従して来ている多くの柳人達は何を感じ、何を学び取り、今後の作句の指針とするであろうか、又、栄光花氏自身、この一句をこれで終らせるか、或いは次段階への飛躍の踏台となすかどうか、今後の氏に於ける実作体度は、ひいてはコロニア川柳今後の動向に大きく影響することだけに興味ある課題である。

# 地方文学界短信

ロンドリーナに於ける文学活動の素描

森谷 風 男

かつて、パラナ・ペンクラブの名称で北芭一円の文芸人を組合し、当たるべからざる熱意を示した時代もあつたが、総合的にみて、今はそれ程の賑やかさはない。然し、短歌、俳句等にはそれぞれ伝統的な根強い結社があり、月々の例会でたゆまない研究がなされている。

ロンドリーナ六六年度の文学活動を振り返つて特筆すべき事柄としては、やはり高須きみ子の小説「潮」が、農協文学賞候補として、同誌に掲載されたことと、久米光春の御題応募歌が佳作に入選したことだろう。高須きみ子は多忙な主婦業のかたわら、熱心に創作と取組んで居り、今度のパウリスタ文学賞にも短篇「師走」を応募、尾関選者だったかのいたく推すところとなり、群雄に伍して予選通過までは漕ぎつけている。散文面では将にピンチヒッターの欲しいところ。

歌壇の方は大場時夫が相変らず張切つて居り、今度、歌集「岩霧草」は林間業書として発刊されたが、着荷を待つて発刊祝をやるとか。

ロンドリーナ歌会の主なメンバーは、坂本、井ノ盛、久米、有

田、森田、高須、毎熊、南崎等約廿名で、これは現在伯国林間歌会と称してもいい程、大半のものが月々林間誌にその作品を投じている。

又邦人唯一のパラナ新聞歌壇（大場時夫選）は毎号、まるまる一頁を割いて居り、地元歌人の他拾数名の作品が間歇的に掲載されている様だ。

俳壇の方は比較的に静かな様に見える、「平和という名の停滞」という言葉があるが、それ程ではなく、風早南瓜などは母国の一流俳誌「芹」（高野素十主宰）の好遇を受け、その存在を誇示して居り、中川いさむ千恵子夫妻はやはり「木蔭」誌の一流クラスを以て任じている。然しかつて三拾―四拾名の会員を以つて支えていた、新松子吟社（石塚雀禾幹事）も現在せいぜい十七、八名とか言う量的にはまあまあというところ、ちなみに主な顔ぶれは、雀水、南瓜、いさむ、千恵子、扶美子、窓月、ルイス、紫水、暁星、あづま、蛙声といったところ。

俳句の方でサンパウロ新聞俳壇の選者間島稻花水も、ロンドリーナ市のどこかにいるのだが当市の文芸広場にはほとんど顔を見せない。

ロンドリーナ市の短歌、俳句活動の歴史は古く、曲折はあつてもなんとか継続されて来たが、どうした訳か川柳の結社だけは育たない、というより生れなかったが、ここにたった一人何年かこつこつとやっている柳人がいか、栄光花門の瀬古義信である。同氏は母国柳壇ともたえず交流し、ゆるぎない地歩を占めているだけ

でなく、短歌の方につきあい、或る時は紙上に文章を投じたりする間口をもっている。結社はもたないが、ロンドリーナには川柳活動も存在するということになるうか。

以上かいつまんでロンドリーナの文学活動を綴ってみたが、簡単過ぎて要を得ないかも知れない。

## バストス地方の文学界短信

森 重 扶 美

バストスは、入植者の約七割までが、日系人の集団地でありますが、「詩を作るより田を作れ」式の諺に災いされて他を顧る、というようなことで、文学、文芸方面に積極的な関心を持つ者となりませんと、指で数える程しか無い微々たるものであります。

創作部門では、かつて春日健次郎、阪東啓二等がパウリスタ文学賞を得ましたが、他地方に転出後は後に続く者が居りません。詩の方も同様、山本一男が佳作を発表していた時代もありましたが、移転後は名を挙げる者もありません。

現在まで続いている文学グループとしては、俳句の「仙人掌吟社」と、短歌の「椰子樹短歌会」の二つだけであります。ホトトギス系の仙人掌吟社は、織田系音を中心に毎月一回例会を開き、宮崎北眠、マリア夫妻、佐々木南天子等の戦前かちのベテラーノの他、日語教師の柳屋すわ等の若い二世の女流も加わり十数名の会員が活躍して居ります。

東野暁風、森重羊鈴等の奔走に依って発会された短歌会は、現在、森重羊鈴、宮武勝甫を中心として小数の会員が、発会以来十七年間欠かさず月例会を持って精進を続けて居りりす。

川柳方面では現在集まりを持つ程の活動はなく、かつて全伯的に名を知られた人々も他地方に移り、往時の同人も鳴りをひそめている現状であります。最近文化協会の有力間に「吾々は今まで政治や経済のことに忙しく、かつて心のほぐれるような文芸性というものを知らなかったが、これから一つ政治経済を抜きにした会合を持つのではないか。手始めに俳句から。」というような声が挙り、近日、その第一回の会合が持たれる運びになりました。

尚一部の同好者の間に、創作、詩、短文、俳句、短歌、川柳、すべてを網羅した機関誌を年に一、二回発行したい希望があり、その実現の日も遠くはないようです。

かくて、ようやくバストスの文学界も「これから」という気運に乗って来たようで、たのしい期待が持たれています。

# リンスに於ける文学的動静

小石 茂行

只今はリンスに於ける文学的動静と云いますと、俳句を挙げるより致し方ありません。只今リンス俳句会は、会員数二十二名を以て、毎月、二回の例会を催し其の草稿を念腹氏に送って、採点して貰って居ますが、私は此の頃はほとんど顔を出して居ません。作句しない会員もあつても良いのではないかと自ら慰めて居ます。最近は新しく入った人達で賑わって居ます。私達の時代は、いわば神代時代とも云うべき時代でして、終戦後間もなく、リンスの同好が集まつて始めたのが、現在に続いて居るのであります。

其の時代の者は、或は他界し、或は移転して現在は服部一川と青木隅居位なものと云います。

丁度其の頃と前後してリンスにも短歌会が発足して、椰子樹短歌会と銘打って、リンス市と、カフエランジャ市の同好が隔月に集まつて、時には聖市よりの歌稿又、地方からの歌稿を、送って貰い批評し会つたものでした。それも一九五四年の十月を期して、卅一回歌会を以て、歌友達の移転と共に、立ち消えの状態となつたのでした。かてて加えてカ市の秋永君が沈黙を続け出したので、永く其の俛の状態に立ち至つたのでした。又、最近になつて、秋永君が、活動し出したのに刺戟されて、当地でも歌会を始めてはと、よりより相談中なのですが、未だ、動静うんぬんと云う所まで行つて居ませんので、甚だ残念です。

## 地方文学会の短信を募る

「コロニア文学」は、コロニア総合文芸誌として、現在、全伯に六〇〇名の会員を持っており、入会希望者は後を絶たず増加し続けている。

本誌を読めば、コロニア全体の文学消息を知ることができ、各地方の文学消長をはかることができる、というふうでありたい。そこで、各地方の文学界（創作、短歌、俳句、川柳、詩など）の主宰者、または代表者の方は、是非、その動静を通信していただきたい。

○ ◎ ○

1 原稿用紙（20×20） 五枚以内

2 投稿〆切 随時（三ヶ月に一度くらい）

3 宛名 Colonia Bungaku Kai

Rua Saõ Joaquim, 381

Saõ Paulo

コロニア文学・第四号  
けいさい作品の選后感

選考委員

清谷 益次

藪崎 正寿

妹尾 三郎

読后感

清谷 益次

移植 川原奈美

「コロニア文学」の中で、今もつとも期待之関心を寄せられているのは「移植」であろう。未完の作品を、編集部が敢て掲載に踏切ったのは、達者な筆致と読ます力（田端三郎）があつたからであらう。編集部としては一つの冒険であつたと思う。読者もまた、ひとりの女の社会の中での漂いと感情の展開に興味を抱いてこの作品のなりゆきを注目しているのである。

第三回目の原稿を読んでの感想を一、二記してみると、私はやや唐突に思ったのは、「私」のシルバーノに対する気持の傾斜ぶりであった。

これまでこの作品の中で、読者は「私」のシルバーノに対するしんその感情というものは知らされてはいなかった(或いは予告というべきかも知れない)。第二章で、傷ついたシルバーノの繃帯の間からの眼差しに孤独のかげをみ、同情のような気持を抱いたことはわかったが、第三章で出て来る、シルバーノの正妻の死に對して流罪の思いを持つほどの必然性は知らされてはいなかったと思うのだ。正妻のミサの場で、シルバーノの後ろ姿をみつめながらその妻の靈に語りかける言葉でシルバーノへの愛がはつきり出て来るのだが、その意外な強さに少々不意を突かれた思いがあった。読者としては、やはりそこまで至る「私」の心の歩みが、もっと納得いくように描いて欲しいところなのではないだろうか。

折角ここまで気力をこめて書いて来た作である。この辺でもう一奮発締めてかからないと、この作品は流れてしまうおそれがありはしないか。

三章は、一、二章に比べてやや緊密度が不足のような感じがするのだが。母の手紙の長いのも気にかかった。

神のあくびと人間と 高山東作

作者はもっと、自分が書こうと意図するものを追いつめるべき

ではないか。これだけの”材料”も、押し合いへし合い提出されてはどうもまとまりがなく読む者は作品の焦点が合わないのだ。

啄木鳥 蓼科冨智雄

亡母の記憶につながる啄木鳥を剥製でみてたまらなく欲しくなって射ちに行くあたりまでは納得できるのだが、二羽目は撃てなくなるというあたりの少年の出来すぎている感じ——不自然さ——で失望した。そつなく書いてはいるのだが。母を思い出すのがの啄木鳥の無残な死にざまをみた衝撃から、やさしさを少年が取り戻すという設定だったらどうだろうか、と甚だ勝手なことを思ってみた。

日照雨 川原奈美

”日照雨の日に生れた者は日照雨の日に死ぬ”と思いきめている老女の一生が巧みに描かれている。そしてその死のま際の混沌とした意識の中で、日照雨が降り出すまで（つまり死）に秘して来た罪を告白しようと懸命になっているあたり、あわれ深い。終末の、出棺の折の日照雨の描写も美しい。ただ途中の”物語”が少々退屈である。

玉葱 伊那 宏

窓越しに見るだけの男に恋心を抱くようになってゆく、という筋は面白いと思ったが、とても安手なものに終わっている。淡いも

のなら淡いなり、もつと心の綾は語られなくてははならないだろう。話し言葉で綴ることによって、文の破綻はまぬがれているが何分にも弱い。

カスチーゴ 藪崎正寿

作者は、二世の一つのタイプを描こうとしたものであろう。それに対する一世（古本屋）の批判、ということがこの作品の骨子である、と思う。だが、この二世のいろんな問題に対しての浅い割り切り方にこの作品の欠陥が指摘できそうだ。例えば同化の問題にしても、一つの遇然の例（この作品の場合、異民族同士の結婚がうまくいっている、ということや、便利だというようなこと）が、さも同化の主要課題めかしく語られている。もつとも、作者はエウをして、少々調子に乗り過ぎた、といわしめてはいるが、この安易な、二世の割り切り方は気にかかる。二世の一つのタイプとして何ともウステの感はまぬがれない。ここに出て来るのは……移民は移民の条件（出自と位置）にこだわり過ぎる。そこから “移民意識” が過剰になっている……という批判の言葉も出るなどの二世なのだが、二世自身としての心理的なもの或いは心事というようなものは殆ど触れられていない。古本商の饒舌に真実性があるのに対してこの二世がそらぞらしいのだ。そのために、古本商の言葉の真実性は空転のまままで終る。空転するところが作のねらいなら、二世は別の型が求められるのではないだろうか。

また卑劣な古本商への憤りから、セン・ノータで本を売ってい

ること(包み紙に計算して代金を受取る描写が何度も伏線を張つてある)を材料に復讐を思い立つのだが、ここまで書く必要があったかどうか、私には疑問だ。而もこれが作品の題になっている。

鷹 堀江一声

未完とあるから、まだとやかく言うべきではないかも知れないが、作者は自己の作品には推敲を加え字にも文章にももつと注意を払ってから投稿して欲しいという感想を持った。

これはこの作品だけに限ったことではないが。異邦人Ⅱ清水ト斉 についてもここで取りあげて言うことはない。聖者(翻訳)Ⅱ松井太郎 も同様である。

つめたい雨 星野良江

施療病院の女患者たちと、そこに働く尋常ではない女達のひとりひとりの性情がかなりよくうき彫りにされている。陰微でありながらまた極めてあけすけなエゴイズムが、ひとりの口荒らなバイヤ女の介在でどこかでつながり合っている世界を描き得たのは、作者に、溺れないで冷静に客観する態度があったからであろう。細かく言えばほかに慾も出るが、ただ終りの、「私」の反省と思い入れは除いた方が締ると思う。……自重して養生しよう……から後の方は。

## 移民が抵抗を失った時

山里アウグスト

大学では哲学をやっていたエリート青年が大望空しくカボクロの生活に陥ちて行く話だが、移民の現実に対する失望と苦しみ重度合が描写不足に終わっていて、作品の手応えはうすい。陥ちて行くことへの事柄だけがここにはあり、抵抗の心理プロセスまで分け入り得なかった点にこの作品の弱さがある。この作品が取り上げたような素材と、この「正攻法」的な描き方はもつともつとコロニア文学では現われていいと思うのだが。

## 感想

藪崎 正寿

「私は近頃、職業作家の作品に飽き足りなくなっている。彼らがその出発点の“素人”に立ち戻る気構えにならなければ、新鮮な世界はひらけないと思う」。

これは日本のある批評家が、かなり前ある雑誌に書いている言葉です。

例外なく、一様に素人であるコロニアの物書きには、ちよつと嬉しくなるような素人礼讃ですが、嬉しがる前にも一つ、やはり同じ頃のある作家の意見を紹介したい。この作家は、まえの批評家の言葉に『初恋を忘れない心構』という注釈付で同意しているのです。

作家は更に言葉をつづけ、アマチュアがデイレットアントに転化し易い点を挙げ、くれぐれも峻別する必要があることを強調するのです。この作家によれば、アマチュアとは、寧ろ主観的な心構えのことで、ですから、そのためにアマチュアが殊更下手であらねばならぬ理由はなく、まして、下手であること、未熟であることとの言い訳にするような甘ったれた考え方は一切赦されないというのです。その意味でアマチュアは、何よりも自己に厳しくあらねばならぬ、と規定します。アマチュアであることを、甘えや逃げ口上のタネに使うとき、それはデイレットアントへの転化に他ならぬ、と警告をするのです。

そして、また、デイレットアンティズムは小銭人のバラ銭だけで賭をする人間の姿勢であり、決して有り金をあげて勝負に挑むことはない、勝つにしろ負けるにしろ、デイレットアントは「勝負」本来の緊迫感とは程遠い安全地帯に身を置くものだとして規定します。これに反し、アマチュアは、そのアマチュアということから、屢々無鉄砲に危険へ身を晒すのです。

成程、このように考えてくると、一見相似のこの二つの言葉は、実は全く異なる概念であるということになります。デイレットアントが「あそびの心」を基調とするのに引き替え、アマチュアは、ともすれば、むきに、懸命に、全的になる。(語義学的興味はないので、ここでは専ら作家のおこなった分類を前提とします)私は、コロニアの物書きを、さきに例外なく一様に素人、と書いたが、どうも、こうなると無修正のままというわけにはいかなくなりまし

た。

私たちは、アマチュアなのだろうか、デイレットタントなのだろうか。

それは、しかし簡単に色分け出来ません。というのは、同じひとりの人の作品に就いていっても、その二つの異なる型が何の関連もなく出没するのを、現に見るからです。とすると、未だ、私たちコロナアの物書きは、アマチュアとデイレットタントとの混然とした未分の程度、つまり、それ以前の、つまり素人以前の、ところ辺なのでしょうか。どうもヒドイことになってきました。が、また、そうであるのなら未だ、“出直し不能”なほど道中してしまつたわけでもないわけで、それなら私は、この日本の作家にならつて、みなさんに、デイレットタントであるよりアマチュアであれ、と忠告します。

このことは、二つの型、二つの姿勢、二つの方法の優劣をいうのではなく、コロナアで日本語で物を書こうとする私たち、というものの条件を踏まえた上での私見です。

デイレットタンテイズムには、もつと恰好な消閑の分野があるはずで、おそらく小説づくりほど、その意味で不適なものはないといつていいでしょう。それから、これも私見ですが、デイレットタントとは一応の才能人ということではないかと思ひます。

全く才能ゼロのデイレットタントなんて、ナンセンスでおよそ不様なものにちがいないし、第一、そういう人をデイレットタントとは呼ばないでしょう。

素人、となるとちがいます。これは本来的に経験浅く、才能だつて有りや無シヤ未発堀の状態です。ですから、ひよつとしたら単なる下手の横好き、白痴の一念以上でないかも知れない悲惨と滑稽とを十分に合せ持つ存在です。

ありがたいことに、小説というものが芸術の領域の鬼っ子といふか、そのような素人の素人つぽさ、ヤボくささ、白痴の一念めいたものを必らずしも否定しません。否定しないばかりか、むしろ、その線上で評価さえおこなう天ん邪鬼ぶりを備えています。この点こそ、私などが小説づくりに浮き身を窶す抛り所でもあるのですが、おそらく、小説を相手とする基本的姿勢は、その“素人”の条件に徹するところこそ、最も正統性があるのではないのか、と考えます。

さて、本号に投稿された箇々の作品に就いての感想ですが、

### 川原奈美 『移植』 (三)

さきの分類法でいえばアマチュアの範疇に入る作品で、これまでも同様好感を以って読みました。唯、文体の問題として作中の女主人公の心理を語る箇処で『ではないでしょうか』『ではありますまいか』式の語法がしきりに出てくるのですが、一人称作品であるだけに気にならなくもありません。この語法の問題性は今年の群像二月号の合評座談会で武田泰淳が取り上げています。一読してください。

## 川原奈美 『日照雨』

この作品の作者が前者と同じ人だとは、なかなか信じ難いことでした。

誇張ではなく、一度作者名を逐次的に照し合せてみたくらいです。たぶん旧作に手を入れられた程度のものではないかと判定しました。これは「移植」とはちがって客観描写の手法をとっているのですが、それにしても、このように二、三枚毎に視点の変わるめまぐるしさには作者の怠惰を感じました。ドン・キホーテが出てくるが、その出てくる箇所が、実はそれほど意味を持たず、また、ブラジルに來た動機が院代さんを独占するためだったというお美輪婆さんの述懐は少しも怪しからなくないが、その肝腎の院代さんが全然描けていないのは、ケシカラナイ事だと思いました。範疇的にはデイレクタンテイズムとみました。

## 伊那宏 『玉葱』

この作品をみた限りでいうと、作者は太宰治の心酔者だろうと想像します。第一、登場するのが母娘家庭ですし、そこには何やら斜陽的雰囲気もみえ、そして娘の名が、かずこであるに到っては連想しないで置くことの方が困難です。何よりも文体が最も正直に告白しています。しかし、私は作者に云いたいのですが、一人の作家に心酔するということと、模倣するということとは別だということとです。それに、太宰という作家は、おそらく最も模倣したい誘惑をそそりながら、常に悉くそれらの模倣者を失敗に終ら

しめるタイプなので、作者のこの作に於ける傾向は、もう打ち切りにした方がいいでしょう。

今回掲載することに決定をみたのも、ここらで、この傾向から脱却して貫うための、袂別の契機……そんな考えを含めてのことでした。

### 蓼科冨智雄 『啄木鳥』

これは移民の子としての孤独と、継母との関係下に於ける孤独と、二重の疎外意識を描こうとしたもののようです。しかし、作者自身の思考力まで、幼い少年の感傷性のなかで溺れてしまっっては、ありふれた継子物語以上になりにくいでしょう。それから、これは要らぬお世話かも知れませんが、ペンネームをどぎつく色どつている自嘲癖は却って嫌味です。

愚かなら愚かなりに、そのような自分自身であることを受け留めて、そうして、兎も角遺つつ行こうとしているのが私たち仲間の態度なのではないですか。しかし、この作品は範疇的には私の好きなアマチュア型。

「注・その後作者から来信あり、ペンネームを「蓼科冨智雄」と改める旨、申し入れがあったので改名して、発表しました。（編集部）」

### 堀江一声 『鷹』

未完の作品、未完というより、兎も角、一部分を呈出することに

扱って編集者の讃辞を期待している御様子。

私にも昔、今度の貴方と同じような態度をとったことがあります。でも、こうした態度は謙虚のようできて謙虚でなく、やはり一種の傲慢に通じるものではないでしょうか。

面白そうなのです、いや、面白くなって行きそうなのです。でも、このような断片だけでは、いかに想像力を働かせても、予測不能の部分が大きすぎます。お仕上げになったうえで改めて見せて下さい。

### 清水ト齊 『異邦人』

題名の異邦人は作者のことかと思いつながら読んで行ったら、そうではなく、作者はむしろブラジルに落着きよく根付いているらしいのは一つの意外性でした。高令の方のようですが、この作者にはもつと随筆風の経験談など聴きたいものです。

### 松井太郎 『聖者』 翻訳

原作に全く不案内なので、他の選衡委員の意見を傾聴するほかありませんでした。唯、この作者の、この種の作品に対して示す関心の持ち方には好感を覚えます。

### 高山東作 『神のあくびと人間と』

私が最近愛読した、いいだ・ももの「神の鼻の黒い穴」とちよつ

と似通った題名なので楽しみにして読んでみたら、似ても似つかぬものでした。

と言つて、愛読の正反対の感想を持ったわけでもないので仲々に楽しい作品であつたことは事実です。それに題名をみただけでも予感されるように、この作者のセンスは端倪すべからざるものがあります。新来の青年と、その青年が配属された先の旧移民との利害関係、しかも旧移民たち同志にもそれぞれの対立があつて、更に須山という怪人物が登場するなど、作者のストーリーテラーとしての腕はほぼ遺憾なく發揮されています。しかし、この作品は未だ未だ刈込み可能の箇所が残されてあると思うのです。兎も角、私たちの百頁ほどの雑誌の立場からいつて、四百字詰原稿用紙百枚という分量はかなりなプレッソンであり、貴重な紙面の配分を考えた場合、途端に慎重な銀行の貸付課長のような気構えになるのは避け難いことでした。

### 星野良江 『つめたい雨』

この作品の原稿が届けられたのは、一応〃感想〃をまとめて編集部に渡したあとのことでした。それで、これは〃感想〃追加(1)ということになります。・・・前半の施療院風俗の条りはよいと思ひました。こうした閉された世界のエゴイズムは既に書き尽されていようである、そうでないのを感じました。これは作者の手柄です。唯「たんちゃん」が登場するあたりから作品の据りが悪くなります。作者としてはこのあたり、わけても「藤川」は最

も書きたい章なのでしょうが、ここのロマンティズムを盛り上げて行くためには、前の条りに重心がかかりすぎています。また、終りの方で「私」に三人の子の母としての自覚を呼び覚まさせていますが、これは「藤川」の章の誤算を上塗りするだけでなく、折角の「自覚」もとって付けた感じに変えます。この作品は全編治療院で貫く方がよかったのではないかと考えるのですが、これは批評の常とする、無いものねだり、というものなのかも知れません。

## 選後評

妹尾三郎

### 高山東作『神のあくびと人間と』

多作出来るということは、一つの才能ではあるが、作品の中の饒舌は、短篇小説として致命的である場合が多い。

文章の省略と、通りをよくすることを心掛ければ、良い作品を書きうる力倆をもった作者だと思う。

### 川原奈美『続・移植』 《手紙》

作者は既に文学を掌のうちにしている。

このことは、「移植」以前の、その作品に接して来た人達には驚

異の事実だったらしい。「移植」の受けた評価が、作者にとって正鵠のものであるならば、いまはただ、ひたすらにこの道を進むべきである。

その意味に於て私は、無条件にこの作品を推すことにした。

### 川原奈美 『日照雨』

「移植」の作者と同一のものと思われない駄作。「移植」に感銘を受けただけに、敢てこの作品を無視したい。

この作品が、「移植」以前のものであるならば、「移植」を契機とした作者の進境を祝福したいと思う。

### 伊那宏 『玉葱』

表現のことばは一つだけのものでない筈で、その選択は作者の個性による。

個性のないことばで綴られた文章は、感銘を与えるところが少ない。

作者が、作者自身の中に文学をつくり上げたとき、同じ主題でもちがた作品を書くに違いないだろう。

### 松井太郎 『オ・サント』

誠実な翻訳のあとが僥ばれるが、原作品がそんなものなのか、読後、感興の薄いものだった。

### 愚頭愁人 『きつつき』

部分的な不自然さと構成の不備が目立つ作品でありながら、この度の応募作品の中では、私にとっては最も魅かれる作品であった。

荒い筆致ながら、秀でたものが随所に光を放っているように思われた。

折角なものを半端なまままで投出してしまったのは惜しいことだ。

『註』作者は、後にペンネームを蓼科冴智雄と改名。(編集部)』

#### 清水ト齊 『異邦人』

日常生活のなかの点景から、生活理念を捉えようとするところは、作者の得意とするところであろうが、生のままで押しつけたのでは、小説の領域外のものになってしまう。

#### 堀江一声 『鷹』

雄大な、ドラマの展開が期待されるが、作者自身の未消化が作品を粗雑なものにしている。文章の整理と、主題の統一を計れば面白い作品になるのだが――。

#### 枝盛梅子 『無題』

作品の構成が浅く展がりすぎたために、とりとめようのないものになつてしまった。

作者の訴えようとするものが何であるのか、私は終に見つけ出すことが出来なかった。余りにもき馴れ過ぎて、筆が這った感じ。

## 米沢亨 『砂埃』

主人公、真澄の「カフェー経営論」が面白かったといえ、作品を侮辱することになるかもしれないが、私は作者の前作、「歪んだ先鞭」の、巧拙を越えた、温い皮膚感に好感をもっていただけに、この作品の空々しい扱い方に、期待を裏切られた思いだった。

## 星野良江 『つめたい雨』

どうも歯切れの悪さが気になる文章だが、独得の雰囲気盛りあげていく力倆は確かである。施療院患者や、そこに生活をする人達の心理の陰翳を巧みに捉えている。主題が横すべりして冗慢さを感じさすところがある。

作者のよさは物語りの筋運びのうまさにあるのではなく、作者の眼の飾り気のない正直さにあるのだろう。

## 山里アウゲスト

### 『移民が抵抗をうしなつた時』

ストーリーの面白さが最後までひき込むものをもっているが、文章を流すところがあつて気になる。

コロナの作品には、主題を見失したようなものが多いが、作者は、問題性を捉える優れた力倆をもっているので、肉づけにいまひとつ親切さがあれば、魅力的な作品になったと思う。

## 読後感を募る

本会では、中央委員中、毎回二名ずつ交替で選考に当たり、通過作品だけを、本誌に掲載しています。

毎号各選者の感想を掲げておりますが、各会員の感想をも求めたく、左記によつて、読後感をお寄せくださるようお願いします。

○ ○

- 一、前号作品（小説、韻文、評論）の感想あるいは研究。
- 二、枚数と使用紙Ⅱ原稿用紙、特に16×20のもの使用歓迎。十五枚以内。
- 三、×切りⅡ八月十五日まで。
- 四、宛名Ⅱコロニア文学会。

お知らせと、お願い

一、お知らせ

◆日本文化センター内に在りながら、これまで、本会事務所の在り場がはつきりしませんでした。

本年四月より、聖美会教室の一隅に本拠をすえ、武本編集部員

が毎日午後二時より五時半まで

事務処理と来訪者の応待に当たっています。地方より御出聖の折、会員の来訪を歓迎します。

◆本会調製の原稿用紙は、特に、文学作品執筆便宜を考慮して製作したもので、会員に分頒し好評を待っています。紙質上等優美格安の為、大いに利用されています。現価、百枚綴一冊、二新クルゼイロ、送料一冊につき十センチターボを添え、御注文あれば直ちにお送りいたします。

◆地方の文学界の振興を計るためグループ単位で、懇談会、座談会を開催される場合、本会に御通達あれば、応援の意味で、できるだけ、中央委員の出張を実現させるべく考慮いたします。

## 一、お願い

◆地方文学界の短信を希望します。

文学懇話会、俳句会、短歌会などが催された時、その日時、場所、出席者数、作品、責任者名など。

◆文学会（韻文をも含む）、青年会日本人会、二世クラブなどの機関誌、パンフレット、その他が刊行された時は、是非一部を本会に御恵送頂きたいと思えます。

コロナ文化研究資料として嚴重に保管いたします。

◆地方会員中、慶事、凶事のあった場合、もよりの会員の方に、

本部への通報方をお願い致したく存じます。

◆本年（一九六七年）会費は、年額一五新クルゼイロです。未納入の会員は、なるべく早く御納入くださるようお願いいたします。

（二回に分納も可）

◆一度や二度の落選にひるむことなく、どしどし作品をお寄せください。また、友人知己の間に本誌をひろめ、新入会員を御紹介くださるようお願いいたします。

## 「コロニア文学」

### 作品募集

「コロニア文学」第五号、第六号掲載作品を、左により会員より募集します。

（投稿希望の方は御入会下さい）

### 募 集 作 品

一小説 ①一〇〇枚内外

②三〇枚内外

③翻訳物、三〇枚内外

二評論 （文学・美術・文化・社会）

三〇枚内外

三随筆 紀行文、二〇枚内外

四韻文、①詩（訳詩）一人二篇以内、

②短歌一〇首以内、③俳句一〇句以内、④川柳一〇句以

内

五短文（生活文、地方通信）五枚以内

六特別募集 ①『私の終戦』（終戦当時の身の状況）二〇枚以内

②『コロノ時代の思い出』二〇枚以内

### 応募規定

一原稿はすべて未発表作品に限る。

二必ず原稿用紙（20×20）を使用すること。

（本会調整の特製原稿用紙があります。一綴（二〇〇枚）を二新クルゼイロスで分頒しております。送料一綴に対し一〇センターポを添えて御注文あれば直ちにお送りします）

三応募者は一人一篇とする。

四誌上筆名はさしつかえないが、原稿末尾に本名、略歴、連絡先を明記すること。

五掲載作品は返還しない。掲載しなかった作品は、作者の希望によつて返還する。

六作品の採否は、本会審査委員会に一任。

七第五号作品審査員 尾関興之助、梅崎嘉明 弘中千賀子

八原稿〆切 一九六七年

第五号 七月末日

第六号 九月末日

九投稿宛名、サンパウロ市サンジョアキン街三八一番 日本文化センター内「コロニア文学会」

コロニア文学会

会 員 募 集

コロニア六〇年の歴史を刻んで、はじめて誕生した「コロニア文学会」Grêmio Literário "Colônia" は、一九六五年二月結成以来、今日約五〇〇名の会員を擁し、六六年五月、その機関誌「コロニア文学」Colônia Bulletin 第一号を発行して、今回、第四号を送り出しました。こうして日系コロニア社会を構成する、私たちの、たくましい生活と心の斗いを主題としたなまなましい文学作品が生み出され、ぞくぞく発表されつつあります。

この文学活動は、ただに、ブラジルの風土に根ざす生活精神の探究を日本語によって行なうことに限るのではなく、二世、三世のブラジル語による人間追究をもあわせ浸透させようとするものです。

日本語による、あらゆる文学分野の進展をはかるはもとより、ブラジル語による文学研究を進め、コロニア独特の境地を開拓したいというのが、私たちの念願とするところです。

文学愛好者は言わずもがな、コロニアの精神発掘と、その展開

に関心ある方々、コロニアの精神風土にこよなき愛着を抱く方々の積極的な参加を希望します。

## 要項

一会名 「コロニア文学会」

G r e m i o L i t e r a r i o " C o l o n i a "

二目的 文学誌発行、文学研究会開催、文学賞設定、その他あらゆる活動を通して、文学運動を推進する。

三会員 入会を希望し、会費を納入したものを会員とする。その資格については何らの制限もない。

会員は作品を応募することができる。

「コロニア文学」誌の無料配布をうける。

四会費 年間一五新クルゼイロス。

(二回に分納も可)

## 五事業

A 文学誌「コロニア文学」を年四回発行する。

B 毎月一回(第二金曜日午後七時より、文化センター内、聖美会教室にて)文学研究会を主催する。

C 会の充実をまっけて文学賞を設置する。

D 文学愛好者、地方文学団体との連絡を密にし、親睦、奨励につとめ、一切の文学運動をおこなう。

六募集作品 小説、コント、詩歌、文学研究、社会・文化関係評論、随筆、紀行文、翻訳、その他。

※ただし、未発表作品に限る。

また作品の採否は審査委員会によって決定される。

七入会申込み宛名 サンパウロ市サンジョアキン街三八一番、文化センター内「コロニア文学会」

コロニア文学会

委員長 鈴木悌一

## 第12回パウリスタ文学賞

### 作品募集

コロニアには、まだまだ隠れたる文学才能は多いと信じております。

ベテラン、新人を問わず、ふるって応募されますよう期待します。

○ ○

一、短篇小说（四百字詰原稿用紙、三〇枚以内。原稿用紙は手製でもよい。）

一、筆名は自由です。だが、別に、本名、住所、作者の詳しい経歴などを明記しておいてください。

一、×切りは、一九六七年八月末日（厳守）

一、選者Ⅱ古野菊生、尾関興之助、武本由夫、木村義臣。  
一、賞Ⅱ追って発表。

一、発表Ⅱ一九六七年度、パウリスタ年鑑、(版權は本社に属します。)

一、宛名Ⅱパウリスタ新聞社、編集部。

パウリスタ新聞社

「コロニア文学会」

新入会員名簿 (ABC順)

§一九六七年一月一日〜五月三十一日§

一九六五年末、八〇名内外の会員を以て発足した本会は、本年五月、会員約五百名に達した。これは、全会員の真剣なコロニア文学追究の熱意と、コロニアそのものが内蔵する文化的創造へのエネルギーによるもので、まことに頼もしい限りである。

○

A 阿部一郎 浅山竜男 新垣精一

B 別府二郎

E 江越弁一

F 古田和男 藤田芳朗 古川深山

G 後藤綾子

H 百武テイコ 橋本俊次 橋本梧郎 橋元嘉典 林貞逸 原田孝

I 伊藤直 石川信夫 猪瀬次朗 井上蒼崖

K 河村正 笠原妙子 梶川文子 栢木昌子 桐生涼萍 加藤三郎

唐沢正徳 小瀬真澄 小西貞一 木村欣吉 黒川正己 小池勲

木原 暢

M 松前享 まや・あきら 松下きみ子 真木衿子 森普平 三瀬

喜代志

N 仲村卓二 野村静枝 西山みさお 中島千里子

O 尾山万馬 落合四三 大竹文二 小笠原勉 小野秀夫 大友司

朗 尾形明光

S 菅沼東洋司 桜井陽 笹谷新市 砂田武 佐藤普 菅野興子

瀬崎 涛声

T 田中玖枝 田辺垂之 高岡由也 玉井礼一郎 田代寅五郎 田

草川 兵馬

U 植村かず 上杉几由

W 和田久美 脇田勅 若松孝司 渡辺金木

Y 山本峯雄 山本辰雄 矢部六郎 山路正義 山本勝造 山下日

彬

後記 ◇五月、皇太子御夫妻の来訪で印刷がおくれました。おわ  
びします。次からは、速めたいと思います。

◇それにしても、作品の集まりが悪くては不可能です。是非、張

り込んで書いてください。

◇会員五百、ふえています。多い程本誌を充実させることができます。

会員増加に御協力ください。

◇本号の山里作品は一昨年「農業と協同」文学賞応募、未掲載のものです。発表の価値ありとの本会選考委員の意向により、同誌と作者の許可を得て、掲載しました。

◇プ・プルデンテ市在住会員（作歌者）東野福寿氏は、五月二一日逝去されました。謹んで哀悼申しあげます。

◇本会では、四百字（20×20）原稿紙と共に、今度、本誌専用紙として、三百二十字（16×20）原稿紙をも調製しました。御一報あれば、会員におわけいたします。

◇本誌後援の意味で広告をお寄せくださる各有名商社の皆様にお礼を申しあげます。

（武本生）

コロニア文学第四号

発行 一九六七年五月

(会員へ無料配布)

編集人 コロニア文学会編集委員会

代表 鈴木 悌一

発行所 サンパウロ市 サン・ジョアキン街三八一番

日本文化センター内コロニア文学会

G r e m i o L i t e r a r i o " C o l o n i a "

R u a S a o J o a q u i m , 3 8 1 . S . P a u l o

T e l . 3 6 — 5 2 1 2

印刷所 パウリスタ印刷株式会社

オスカル・シントラ・ゴルジーニョ街四六番